

転生したら兄が死亡フラグ過ぎてつらい

由月

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

目を開けたらそこに居たのは我らが兄貴、ジン。で、俺はその実弟？ どういうことなの（白目）え？ 転生？ それとも憑依ですか？ 教えて偉い人!!

という軽いノリで書きました。

思い付きです。深く考えていません。コメディです。キャラ崩壊かもしれません。

稀に黒の組織らしく、殺伐とすることがあるかもしれません。と言ってもこの作者なので大したことないレベルです。

ゆる〜く読んでくださると嬉しいですよ。

追記：※現在感想への返信は基本的には停止中です。申し訳ありません。稀に返信が必要そうなものだけ返信させていただいております（作者のミスへの指摘や補足が必要そうなモノ等々……）

作者の現在の精神的HPがガス欠気味な為本編更新を優先した結果です。我儘をお許しください。勿論、皆様のコメントには目を通して、創作の糧とさせていただきます。

追記2：タグ少し編集。一応本編軸のヒロインはシェリーさんなので。あと必要なタグはありますか？—— 恋愛一色には致しませんのであしからず。これからもこのシリーズ殺伐コメディをよろしくお願いいたします（なおシリアスはそう強くはない模様）。

目次

番外編

小話：未来IF トウルーエンドの後日談 | 1

原作前（三年前）

人生、なにがあるか分からないものだ。	11
知らなくてもいい事実は人生には溢れているのさ	21
蓋を閉めても、見えてしまうものがあるものだ	29
どうせなら良い方にとった方がいいだろう？	38
心の中なんて見えやしないのさ	48
先送りした問題は後々主張してくるものだ	56
見える世界が全てなものか	71
どんな人間にも意外な一面があるものさ	86
名前をつけない関係もあるのさ	98
不意打ちで縁が繋がる事もあるのだ	109
交わらない視点だってあるさ	121
運命の悪戯か、神の思惑を疑うか	133
表側があるなら裏側もあるだろうよ	155
束の間の平穏だと誰が言ったか	175
足元の危うさを不意に思い知るもんさ	189
助けるのに理由が要る、臆病者も居るものさ	210
答えのない問なんていくらでもあるのさ	223
模範解答なんて期待をするだけ無駄だ	251
小話 : 愚かしさすらも眩い、その感情の名を	285
泣き言は全て終えてから言うものだ	300
張りぼての見栄は大人の必需品だ	329

誰かを救いたければ、偽善だと蔑まれても自己満足に嘔え

368

その舞台裏に救いはあるか

386

親愛を知らぬ獣が絆されるものか

408

原作前（二年前）

意図しない救済に意義はあるか

421

意図の不明な救いの手に慈悲を期待するな

451

番外編

小話：未来IF トウルーエンドの後日談

どうしてこうなった。

長い銀色の髪をかきむしりたい衝動にかられ、男は舌打ちした。かつてのトレードマークだった頭の先からつま先までの黒一色のファッションはそこにはなく、白のセーターと黒のスラックスというごく普通の格好をしていた。白銀の髪だつて一度はバツサリと短く切ったせいか、今は肩甲骨ぐらいの長さしかない。銀色の髪と深緑の瞳、というこの国では少し目立つ容姿をしているから、多少目立つがかつての不審者スタイルとはお別れしていた。男、ジンはもう犯罪者ではないのだ。

米花町のとある一軒家、周りは閑静な住宅地となっており、平日のこの昼間にさしたる騒音はない。あるのは時折通り過ぎる車のエンジン音やつけっぱなしにしているテレビのバラエティ番組のタレントの大きなくらいのリアクションくらいだ。

日当たりのいいリビングのソファに腰掛け、ジンは直面したことのない問題に、内心頭を抱えていた。外に出れば、秋晴れの心地よい天気の中歩けるだろう。くっそくだらないな、とジンの苛立ちが募る。

「おじいー」

「……………」

ジンの腰にとん、と軽い衝撃の後に紡がれる幼いソプラノ。甘やかな幼児特有の声に、ジンの眉間に皺がよる。かつてどんな相手も震え上がらせた鋭い睨みも、彼奴には効かない。きよとん、と無垢な眼差しが返ってくるのみだ。…………頭が痛い。

「おじいっ……………ぽんぽん、たいたいの？」

「あ……………なに言っていやがる。それよりも『おじい』はやめろ。ジイじゃねえんだぞ、俺は」

「むー」

ジンを見上げる無垢な瞳は純粹な心配を映している。が、ジンに幼

兎言葉が理解出来るはずがない。何を言っているか、皆目検討もつかずにジンの口から出るのは脅し口調に近い低音だ。戯れに、腰に懐いている柔らかかなソレの頬を軽く引っ張ってやる。すねたような呻きが直ぐに上がり、ジンは喉でクツクツと笑った。……かつての組織の仲間が見たら、この世の終わりなのではと恐怖に慄いたことだろう。それくらいジンはらしくない、穏やかな笑みを浮かべていた。

「やー、のーおじじ、メツだよー！」

「ククツ、なんだそりゃ」

頬をふくらませながらぷりぷりと怒るその姿にジンは目尻を下げた。呼び方に拘るのが馬鹿らしくなるほどに愛らしい。舌つ足らずの言葉はジンには理解できないが、流石に怒られていることは分かる。が、そこに迫力があるか、と問われれば否。逆に可愛い上に、全てがどうでもよくなる威力だった。怒っているのにかかわらず、そのもみじみしたいな小さな手は未だにジンの服を掴んだまま、甘えたを発揮している。かわいい、なんて柄にも無いことを思ってしまうのも無理はないだろう。

目の前にいる幼子は、三歳になったばかりの女兒だ。サラサラの銀色の髪は肩ほどまでの長さで、こちらを無垢に見つめる瞳は深緑色をしている。ぱっちりとした瞳は、子供らしくキラキラと希望を映していた。白い肌は傷一つなくて、この子どもが愛情いっぱい育てられているかを窺わせる。十人中十人が美少女、と形容するほどに、整った顔立ちをしていて、今から将来が楽しみのような未恐ろしいような子だった。母親より父親の面影が強い、その娘はジンにとっては懐かしいような、複雑な気持ちだ。変なのに好かれなければいいんだが……。

そう、父親。この子どもの父親はジンにとってよく知る人物。どうか、母親のことだってそれなりに知っている上に、その関係性は少々複雑だ。母親からしてみれば、かつてその命を狙われていた、宿敵、仇、そんな印象だろうか。

そもそも、なんでこんな麗らかな昼下がりに子守りなんてする羽目になっているのか。あの時、ああすればよかったのか、なんて後悔が

ジンの脳裏を掠めた。が、それをため息一つで流す。

「どーん。おじじ、ご本!!」

「は?」

ぼんやりしていたジンからいつの間にか離れていた子どもがその手に何かを持って、戻ってくる。ジンの足に軽くタツクルして、手に持っているものを掲げた。それを見てジンは間拔けた声を上げる。その声には、え?理解できない、という気持ちがありありと出ていた。につこにこの笑みを浮かべて、絵本を頭の上に掲げる子どもは、大人が読み聞かせてくれると信じて疑わない。そんな信頼の眼差しを一身に受け、ジンはうめいた。分かった、読む読む、なんて渋々返せば、更に満面の笑みが返ってきた。笑顔って眩しいなあ、なんてキラ崩壊もいい感想がジンの心に浮かんだ。なんなんだ、この眩しい生き物は。

それにしても。

「……シンデレラ?」

「うん!」

正気か?なんて茶化すことをさえ許されない、満面の笑みを見てジンはため息を吐いて朗読の最初の一節を読み始める。ひらがなで読みやすいよう、大きく書かれたその文字は随分馴染みのないものだ。そも、絵本なんて読むのは初めてかもしれない。ジンはふと思いついた。

今のこの姿をかつての組織の人間が見たら、別人説を唱えるだろうし、ベルモットあたりは愉快に笑うだろう。ウオツカは卒倒してしまうかもしれないし、バーボンやライなんて考えたくもない。

どうしてこうなった、と冒頭の言葉を繰り返しても、浮かぶのは数週間前の出来事だった。

※※

組織のボスが警察組織に逮捕され、組織もほぼ壊滅したのは今から

十年ほど前の話だ。組織の幹部は軒並み捕まり、その中にジンはいた。当時、このまま死刑か、悪ければ存在の記録を抹消され、拷問され続けるとか、かと思えば想像ばかりが浮かんだ。だが、それも全て受け入れる気持ちだった。色々あり過ぎた上に、こちらは惨めな敗残兵。生き恥を晒すのは耐え難いことだった。

ジエネヴァが裏切ったのはほぼ予想していた。シエリーやあの眼鏡の子ども——工藤新一——が危機に瀕するとそつと助け舟を出していたからだ。ジン以外は気づかないほどに巧妙に隠れて、手助けをしていたから、時折忠告と脅迫をしていた程だった。結局は痛い目を見たのはジンの方で。まあ、それでも最後の最後で真つ向から立ち向かい、戦い、勝利したのだからジンに文句は言えない。敗者が何を言っても、無様でしかない。

かつて、ジエネヴァに忠告をしたことがある。お前の手は罪で染まったまま、その上に何色を塗ろうとも、決して黒から脱することは出来ない。今更正義の味方をしたところで、お前は犯罪者。その背の十字架を見逃すほど奴らは優しくない。分かっているのか？と。返答は頷き一つ。分かっている、と。呆れたジンは好きにしろ、と投げやりだ。以降、ジエネヴァへの脅迫はしなくなった。無駄だと分かっていた。バカは死んでも治らない、とは真実の格言だとさえ思っていた。

まあ、馬鹿だったのはジンだった。ソレだけの話だし、ソレについての後悔はジンはしていない。ここらへんを詳しく話すと後三時間はかかるので割愛しよう。

全てが終わった。それでおしまい、正義が勝ったハッピーエンドで幕が閉じたのだ。

それが、どうしたのか。司法取引、なんて言葉でジンは首輪をされ、条件付きで社会生活を営めるほどまでになった。他人のため、正義のため、という虫唾が走る大義を掲げ、働くなんてジンには死刑よりも厳しい現実だった。従うのは従うが。

拠点はアメリカ合衆国。そこで囷として、組織の残党をおびき寄せ、叩く。それが大まかな今のジンの仕事の内容だ。

十年目ともなれば、慣れたもので、多少の危ない橋を渡ろうとも鼻歌を歌っていられるほどだった。そもそも、ジンは命のやり取りを日常としていた男だ。

今日もそんな荒事半分の仕事を終え、酒で気分を紛らわす算段だった。歩き煙草の危険性を知っているものの、ジンは構わず煙草をくわえこの人混みを闊歩する。人々の賑いは、ここが都会だからか、夕方を過ぎようとするこの時刻ですら、さらなる賑わいを見せようとしている。否、これは喧騒に近いか。もう少し夜も深まるとこの辺りは少しばかり治安が悪くなる。

酔っぱらいに絡まれる前に、馴染みの店に着いた方がいいかもしれない、そんなジンの思考は過ぎ去る人々の喧騒に混じった眩きで止まる。若い女達が騒ぐのは、やれあの人が格好いいだの、美形だのという浮き立つ黄色い声だ。そのざわめきはそこかしこで聞こえる。どうやら随分な色男がいるらしい。ジンは思わず失笑を浮かべる。

どんな優男がいるのやら、なんて呆れで視線を巡らせばかち合う視線。

そこに居たのは、かつてジンと同じ組織に与していた男。元は少年だったその面影がその端正な美貌に窺える。すらりと伸びた手足と釣り合いの取れた引き締まった身体。美形の無表情は冷たく映るらしい、どこか近づきがたい雰囲気でもたれかかっていた。……待ち合わせだったのだろうか。しかし、ジンと視線が合うとカツカツとこちらに近づいてくる。

「……久しぶり。兄さん」

「……………ああ」

穏やかな顔で再会の言葉を紡ぐ弟にジンは動揺のあまり手に持っていた煙草を取り落とす。……失態だ、と舌打ちしたい気持ちで一杯だ。幸か不幸か、弟はジンの動揺を見なかつた事にしてくれるらしい。

弟、ジエネヴァに直接会うのは十年前ぶりだった。手紙でのやり取りをどうにか続けていたぐらいの交流しか無い。ジエネヴァ。否、今は宮野 静、だったか。五年ほど前にシエリー、宮野 志保と結婚し

てそうなったと伝え聞く。婿入り、とは予想できなかつた。

「……いつ、ハッパッ」

「ああ、三日前にね。海外出張、ってやつかな。ほら、俺見た目がこうだろ？」

言葉少なに尋ねたジンに静は冗談交じりに返す。見た目がこう、と髪をひと束いじり、外国人に見えるだろと暗喩してきた。ジンはそれに肩をすくめる。

会話は予想していたよりも和やかな雰囲気だ。銀髪に深緑の瞳。かつての容姿と重なる点が多い。けれど、ジンの記憶の彼とは決定的に違う点が一つ。目に宿る光、その瞳に穏やかな光が宿っている。かつてのどんよりと光の通さない瞳とは雲泥の差だ。

だから、だろうか。ジンは思わず口を滑らせてしまった。

「なるほど。——なあ、これから時間があるか」

「うん？まあ、あるけど」

「なら、付き合え」

「は？」

言葉が少ないジンの誘いに、静は話がついていけない、と目を丸くした。だが、まあ十年ぶりの久々の兄弟の再会だ。多少の羽目くらい外しても文句は言われまい。

大人になった弟と酒を飲みかわす。それはまるで息子の成長を喜ぶ親父のような気分だった。年の離れた兄弟で、幼い頃からの成長過程を知っている身だ、あながち外れてはいないかもしれない。ジンの脳裏にくだらない推測が浮かんだ。

メインストリートから外れ、路地裏を少し進むとその店はある。外観は少しばかりボロい、築十数年は経ってそうな雑居ビル。その二階に店がある。入り組んだ場所にあるからか、あまり客はいない。老年のマスターが趣味でやっている店だ。稼ぎは維持費ぐらいでいいのだらう。常連客ぐらいしか通わないその店は静かに酒が飲めるので、ジンのお気に入りだった。

店に入り、カウンター席の奥に座る。この隅の席はもはやジンの指定席に近い。

注文を済ませ、舌を酒で湿らせた頃。ジンは右手のグラスを弄びつつ、口を開いた。

「……デカくなったよな、お前」

「そう……？」

感慨深いジンの呟きに静は小首を傾げる。その仕草は、十年前のソレと変わらない。ジンは変わっていない部分に密かな安堵を抱き、そつと息を吐いた。本当に大きくなった。

「それでも俺の背を抜かすまでにはいかなかったか」

「地味に気にしていることを……。というか、あの頃の俺にしてみれば充分及第点だよ」

「そうか？」

笑みを含んだ声で揶揄すれば、返ってくるのは呻きに近いぼやきだ。ジンは喉で笑う。静はグツと眉を顰めたが、やがて諦めたように頭をゆるく振った。

「兄さんは最近どうなの？手紙、というかメッセージカードじゃ分からないんだけど」

「フン、別に。書くほどの事はないだけの話だ。猟犬共に紛れるのも慣れてきたからな」

「またそういう……」

メッセージカード。一言書き込めば済むソレに、何か目についた物をつけて送る。ここ十年で習慣づいてしまった行動に苦情を言われ、ジンは苦く思う。そういう静だって、人の事は言えないだろう、とジンは反論したいのを堪える。近況報告の事務的な文章がジンの脳裏にちらついた。

ジンのそつけない言葉に静は呆れ顔だ。度数の高い、ジンと同じ酒を三杯飲んでもその顔色に変化はない。……意外とイケる口なのだろうか、とジンはカウンターに肘をつけて推測する。

「お前の方はどうなんだ。あのシエリーと結婚したんだろ？」

「シエリー」って……。うちの奥さん、それ怒るんだけど。——う

ん、まあ幸せだよ?」

ジンの口から出たコードネームに静は更に呆れる。が、それを黙殺すれば、静は照れ臭そうに微笑んだ。幸せそうなその笑みに、ジンは目を細める。ああ、よかった、なんて思う資格もないけれど。

「……そうか」

「うん。可愛い嫁さんに可愛い娘も居るからね、幸せじゃないはずがないさ」

「惚気けるな」

「ははは」

「……? むすめ、だど?」

しみりしていたジンの気持ちを吹き飛ばす静の堂々とした惚気に、些か辟易する。こんな奴だったか?なんて疑問は、直ぐに浮かんだ他の疑問で消え去った。むすめ?娘と言ったか、コイツ。信じられない気持ちでジンが静を見れば、ああ、と思い至った頷きが返ってきた。

「あれ?そういえば、兄さんに言つてなかったっけ?——三歳になる娘がいるんだよ」

「は?」

「嫁さんに似れば良かったんだけど、見た目が俺似でさ」

「は?」

「まあ、可愛いんだけどね」

「は?」

「さつきから大丈夫?兄さん」

同じ事しか言えてないよ、と静は眉を下げる。大丈夫じゃない、とジンは回らない頭の中で返す。いや、まあ幸せそうで何よりである。それにしてもえらい見た目詐欺になっているな、と目の前の弟をジンは眺め見る。衰えぬ美貌はとも一児の父には見えない。これはシエリーも苦労するだろう、どつかズレた感想さえ浮かんだ。それほどに混乱は大きい。

「信じられない、みたいな顔しているけれど。——それなら、会いに来る?」

うちの愛娘に、と軽い調子で首を傾げられた。ジンは混乱のまま、頷きを返してしまった。ハツとすぐさま我に返ったが、嬉しそうなほのかな微笑みを前に撤回出来るはずがなかった。何せ記憶にあるのは、精々が負の感情を浮かべる弟の乏しい表情な訳で。

己に人並みの罪悪感があるなんて、なんてジンはらしくもなく打ちひしがれるのだった。

※※

それで今に至るわけだ。あれからアメリカから日本に渡り、彼らの住処である米花町の家に来てしまった。あれよあれよ、とすんなりと事が進みすぎていつそ不気味である。おかしい、いつもだったら空港あたりで爆弾騒ぎとか銃声とか聞こえるはずなのに。ここ十年の暮らしの安全度の低さには嗤いしかでない。

シエリー、宮野志保とも挨拶を交わし、ここに滞在して早二日目。シエリーのあの警戒度の高さは清々しいほどだ。苦笑する静に渋々納得したが、今日急遽ジんに愛娘を任せないといけない、となった時の鬼のような気迫が暫く忘れられそうにない。母は強し、と言ったところか。

それにしても、夫婦共働きのあのワーカーホリックぶりはジンが同情するくらいである。まあ二人揃って不在となるのは珍しい上につきもは阿笠博士、という近所の爺さんのところに預けたりしていたらしい。静がジんに子守りを、なんてトチ狂わなければ今回もそうだっただろうに。

絵本を幾度も読み聞かせすれば、うとうと船を漕ぎ出した子どもはジンの膝を枕に眠りだしてしまった。随分、肝の太い子どもである。むにゆむにゆと口元をもごつかせ、眠るその姿はジンの知らない平和そのものだ。恐る恐る、といったぎこちない動きでジンはその小さな温もりの髪を撫でてやる。そろり、そろり。慎重な手つきに、子どもの口元がへにやり、と綻ぶ。

ああ。ジンは目を思わず細めた。

「……なる程な。奴が変わるわけだ」

平和、平穩そのものを形作るような陽だまりの温度だ。それはかつての孤独の子どもが望んで得られなかった温もりであり、憧憬だ。

クサイ、気障ったらしい言葉で例えるならば。

愛を与えられ、愛を知り、愛を与えることを知る。子へ親が与え、教えることをきつと今の家族に教えてもらったのだろう。

それは奇跡だ。きつと、他の他人からすれば陳腐な例えだろうが、ジンからすればどんな奇跡よりも奇跡らしく思える。愛情、というのは簡単なように見えて複雑だ。世界の争いの半分の理由を占めるかもしれない、理由だ。

ジンは久しく感じていなかった眠気を感じ、まどろみに任せ、目を閉じる。

今だったら、あの虫唾の走る大義の為に、と働く気持ちも分かるよ
うな、そんな気がした。陳腐な言い方をすれば、隣にあるような温も
りを失いたくないだけの話なのだ。

なお、目を覚ましたジンを信じられない、といった目で見たシエ
リーこと宮野志保にどう対処したものか、静が来るまでジンは悩む羽
目になった。

原作前（三年前）

人生、なにがあるか分からないものだ。

俺は何か神に嫌われることでもしたのだろうか。

「——ヴァ。ジエネヴァ。おい、聞いてんのか、テメエ」

目を開けたら殺人級の眼光がこちらを射抜いていた。その男は長めの銀髪に、これまた暑苦しそうな黒ずくめの服装をしていた。人を何人も殺してきたような目つきの悪さに、煙草を慣れたようにふかすその姿。とつても見覚えのあるその姿に俺は内心動揺した。

「へ？」

「チツ。仕方ねえ。いいか、あの方の命令でこれからお前は仕事だ。標的以下、詳しい情報は前に話した通りだ。しくじるなよ」

「あ、ああ……」

忌々しそうに吐き捨てる言葉はとても身内にかけるものとは思えない温度だ。冷えきりすぎて凍えそうな程、視線も声も冷たい。

どうやら移動中のようだ。彼の愛車のポルシェを運転するのは彼の右腕ウオツカで、俺の隣、後部座席にふんぞり返るこの男こそ、我らが兄貴のジンである。

何故組織の大幹部であるジンが俺の隣に座っているのか。それは簡単な話、俺ことジエネヴァの実の兄がジンであるからだ。

ジエネヴァ。もちろんこれは本名ではない。見た目は子供頭脳は大人な名探偵でお馴染みの黒の組織のコードネームだ。まあ貰ったのは最近で、今日はコードネームを貰ってから初のお役目だ。だからわざわざジエネヴァにジンが付き添っている訳である。

あの冷徹なジンにしては随分過保護な話だと思うだろう。だろうな、と俺は膝に抱えるライフルバックに手を滑らせる。見た目はただのギターケースだった。

「どうした？今日は随分落ち着きがないじゃないか。今更怖気づきで

もしたか？」

「兄さん。……もし、そうだと言ったら？」

「ハッ。だとしたら、俺の弟が今日から居なくなるだけだな。ただの餓鬼に存在価値なんざねえからな」

「……そう。まあ俺には関係のない話だね。怖気づいてないし、始末する奴の情報を頭の中で確認してただけだよ」

静かに兄であるジンに答える。俺の言葉にジンは鼻を鳴らすと、つまらなそうに俺から視線を外した。

「着きましたぜ、兄貴」

運転席から聞こえたウォツカの声に俺は無言で支度を始めた。ジンはそんな俺の様子を静かに一瞥しただけだった。どうやら一人で始末できるか見守るつもりらしい。

どうやらこの人のいないビルの屋上から標的のいるホテルへとスナイプする。それが今日のお仕事らしい。夜、ということもあり暗視スコープでやる。

距離はおよそ600ヤードといった所か、まあ普通に当てられる距離だ。あとは獲物がかかるのを待つのみである。

俺、コードネーム〈ジェネヴァ〉は十三歳である。……兄とは大分年の差があり、一応唯一の肉親である。

ジェネヴァ、という人物はなんともまあ波乱万丈な人生を歩んでいるようだった。物心ついた頃には既に両親の姿はなく、唯一の血縁であるジンとはあまり交流がない。黒の組織の英才教育を受けた彼は驚く程に才能に溢れた子供だった。すぐに物事を吸収する彼は組織に言われるがまま技術、知識を吸収していった。

その割に感情の面に問題があり、何においても無感動、無感情。まあこれは育った環境が環境だし仕方のない事なのかもしれない。

兄であるジンとの関係は良好とは言い難く、嫌われているに近い状態だ。とても胃が痛いわ。

前世を思い出したのは先ほどの車中で、心の内が全然漏れない鉄仮面仕様でほんによかったと思う次第だ。内心では叫びたかった。切実に。

仕事が終わわり、組織に与えられた自室にそそくさと戻った俺は洗面台の鏡の前で項垂れていた。

鏡の前では儂げ美人(男)が俯いている。そう、今世の俺の姿だ。何故俺で、しかも女じゃないのか、と拳を握る程の顔が整っている。兄譲りの真っ直ぐな銀髪が肩口をくすぐる。出来れば遠くで眺めたい美形だ(現実逃避)。

日記を自室に戻り次第確認した。そこで朗報、どうやら原作前らしい。組織の人間を指折り確認したら、コードネームにスコッチの名がある事を思い出したのだ。やったね！ジェネヴァちゃん、ワンチャンあるで！

まあチャンスも何も存在自体が俺の死亡フラグな兄がいるのでどうしようもないんですけどねー。ハハッ。

ほんとどうしようね。ジェネヴァちゃん白目むいちゃうわ。

しかもあまり今世の過去の事も思い出せないという詰み仕様。なんか思い出そうとすると吐き気がするんだよな。頭痛とセットでくるのでめげてしまいそうだ。断片的には過去を思い出せるのだが。

悩んでも解決してはくれないので、もう今日は寝よう。明日の事は明日の俺がなんとかしてくれるだろう。皆は真似しちやだめだぞ！

おやすみ三秒。すやあ。

一晩寝て思ったんだけど、俺原作に影も形も出てないよね？

俺の存在自体、前世で見たことのある転生的なアレコレでイレギュラーなのか。それとも原作でも一応存在はあって原作が始まる前ま

事の側面が強いで危険が一杯なのだ。俺は当然ながら事務職ではないので、前線というか肉体労働しかないのだけど。

「あ、呼び方どうしよう……」

俺の途方に暮れた眩きは一人暮らしには広いこのマンションの一室に寂しく消えた。とりあえず朝食食べてそれからだな。

今日はオフだぜヤッホーと外に出てしまったのが悪かったのか。俺は猛烈に後悔していた。もちろんこの鉄仮面な無表情は崩れていないだろうけど。

時刻はお昼時、丁度十二時半といった所だ。オシャレなカフェで俺は冷や汗を掻きながら、対面に座るその人をじっと見つめた。

「ん？どうかしましたか？」

にっこりと笑うその人、バーボンこと安室透がそこにいた。

ここまでの経緯は簡単だ。いい加減気がめいつてしまった俺は気分転換に携帯と財布を持ち、街へと外食しに行った。徒歩でそこそこ賑わっている街へと歩き出した。で、十分やそこらで買物袋を抱えるこの人とバツタリ会って「あれ？君、見た事のある顔ですね」とイケメンスマイルでゴリ押しされた結果です。今考えてもじやあ近くのカフェでも行きませんか？とか言えるこの人のコミュ力の高さが訳分からんわ。

「別に……」

「そうですか？それよりも他に何か頼みませんか？ここは洋食屋も兼ねているんですよ。おすすめはオムライス辺りでしょうか。デザートにケーキもいいですよ、ここは俺が奢ります」

そうにこやかに続けるその姿は人のいいお兄さんと言った様子だ。バーボンとしての彼とはまた違った印象を受ける。俺がまだ子供だからだろうか、そんなどうでもいい事を考えつつ俺はバーボンに首を横に振る。

「要らない。俺、このコーヒー飲んだら帰るし」

「え」

「ああ、自己紹介がまだだったね。お兄さん。俺は『ジエネヴァ』」
コードネームを口に出した途端、バーボンの瞳に剣呑な光が宿る。
うーむ、せつかくの美味しいコーヒーが不味くなりそうだ。確か情報
屋なんだっけか、探り屋？まあどうでもいい。俺は割と脳筋な所があ
るから、腹の探り合いは嫌いだ。

「……最近そうなったから、そう警戒しなくてもいいよ。俺なんて
下っ端と思ってくれていいから」

「へえ……。そうかい」

「うん。まあ俺は実行係だから、お兄さんと組む事があるかもね。
……その時はよろしく」

実行係とか我ながらマイルドに表したな。俺は警戒が揺るがない
バーボンに右手を差し出す。一瞬意表を突かれた顔をしていたけど、
すぐに微笑みを装備し差し出した手を握り返してくれた。

「ああ、その時はよろしく頼むよ。——ところで、ジエネヴァ君は普段
学校とかは行かないのですか？」

「呼び捨てで構わないよ。こっちも仕事の際はそうするから。……
で、学校？」

「ああ、君くらいの年の子は俺の国では学校に行っていましたから」
「なる程」

頷きながら俺はさもありなん、と納得する。ところで微妙にこっち
の生活を探っているな。いかにも人の良いにこやかさに全て話した
くなるのは彼の得意技か。

「基本組織で教育受けていたから」
ポツリとこぼして俺は最後の一口を飲みきる。そして立ち上がっ
て、

「ご馳走様。またね、お兄さん」

とバーボンの返事を挟む間もなく店を出た。

「——あれが最近組織で話題の子供か」

去り際のバーボンさんの眩きなんて拾ってないんだからな！俺の

組織内での立ち位置をもう一度確認した方がいいかもしれない。なんか時間が経過していくごとに死亡フラグが色濃く見えるようになって大変つらいです。

ピンポーン。軽やかな機械音が室内に響く。2LDKという一人暮らしには豪華なマンションに俺はくつろいでいた。勿論チャイムが聞こえない訳がなく、億劫に思いながらも俺はドアを開けた。

「遅い」

どこの暴君かな？俺はドアを開けたことに後悔しながらも来訪者を見上げる。まあそこには黒ずくめの銀髪長髪野郎、いや俺の兄さんが立っていた。

「…………なに？」

「今日ここに泊まってく」

「はあ？」

家主の了承なんぞ知ったことかと言わんばかりにジンは勝手に靴を脱ぎ入って行った。これは噂に聞く、押しかけ女房ならぬ兄貴かな？と心中で現実逃避してしまった。

「おい、いつまでそこに居やがる」

なんか知らんけど、めっちゃ不機嫌なジンの様子に俺はため息を吐いた。ドアに鍵をかけ、玄関からリビングに歩く。心なしかさつきよりも俺の足が重い。

「チツ。……には酒もねーのか」

あるわけねーだろ。俺は心の中でツツコミを入れる。未成年の一人暮らしの冷蔵庫にそんなん入っていたら問題だろ、逆に。

「まあいい。おい、なんか作れ。腹が減った」

「…………」

ジンはそう言いながら、リビングのソファでくつろいでいる。早い。というより俺の心のイラつきがやばいわ。思い出せる範囲内で

の今世の記憶ではジンはこちらに関心がなかったのに。無関心もいところだ。それが今更突然。意味わからん。

俺はやれやれと肩を竦め、食事の準備をすることにした。今日の夕飯だ。幸い食器は二人分ならなんとかあるし、食材に関しても大丈夫だ。

ちなみに今日の夕飯はオムライスにした。ジンの方に可愛らしいくまの絵をケチャップで描いたら、無言でスプーンで崩された。なんてひどい。ちなみに俺の分はヒヨコの絵である。ジンのもの言いたげな視線がやばかった。バーボンのおすすめで食べられなかったからってそんな八つ当たりはしてないぞ。ただ俺が食べたかっただけだ。

これが所謂むしやくしやしてやった後悔はしていないってやつだな。

ところで中学生の弟に大の大人の兄が料理を作ってもらうとか普通逆じゃね？なんか腑に落ちないというか納得がいかないというか。まあいいけど。

途中でやれ灰皿がないだの、酒を買ってこいだのいういざこざはあったものあとは寝るだけとなった。着替えが、と言い出した時は殴ってやろうかと思った。うるせえ、お泊りセット持ってこいや。声に出さないがイラツとした。もうお前なんなの？仕方ないから下着は使っていない新品があったのでそれを出し、大きめのシャツと適当なズボンを与え風呂場に押し込む。洗濯はやっておくから、と声をかけリビングに放置してあった黒いコートを持ち上げる。ハンガーにかけてあげたが、あの重量感。絶対武器仕込んでいるわ。

過去のジエネヴァが築いた「冷徹な兄」というイメージ像がガラガラと崩れた。木っ端微塵、どころか灰燼と化したわ。爆発四散！

ガチャ、と風呂場からでてくるジンの姿に俺は笑いそうになった。やっぱり体格差ってあるよね。丈の足りないズボンと裾の少し短いシャツ姿にいつもより愛嬌があるように見える。いや、でも体格差から考えると奇跡的に着れてよかったね！と言うべきところだろう。いやー正直この「ジェネヴァ」にはちよつと大きすぎる洋服だったからな。

と、そこまで考えて俺は冷静になった。愛嬌も何もないわと。

まあ後は寝るだけだからお休みーと俺は心の中でジンに言っただけで自室に戻る。ああ、やつと解放されると俺は達成感で一杯になっていた。

ベットに潜りこみ、うとうとと瞼を重くする睡魔に逆らう事なく俺は眠りに落ちる。

——ガチャリとドアの開閉音が聞こえる。しかしそれは俺の意識を覚醒はさせてもこの目を開ける程には至らなかった。

ひたひたとこちらに歩み寄るその足音にようやく俺はこれを見の足音だと認識したくらいだ。ぶつちやけ半分意識は夢の中だった。

ぎしりとベットのスプリングが音をたてる。ふかふかなマットレスが少し沈み、足音の主がベットに腰かけたのを俺に教えていた。

さらりと頭をそつと撫でる感覚。俺の中途半端な長さの銀髪に指を少しからめ、その感触を楽しんでいるようだった。——え？何この状況と俺は冷や汗がダラダラだ。

「寝てるのか」

頭を撫でる大きな手の優しい手付きとは裏腹に声は絶対零度を保ったままで俺の胃を的確に締め上げる。精神的な負担が半端ないのだ、察してくれ。

「……」

少しの沈黙。俺は、そろそろ退くだろうと思っていた。

「——死んでねーのか、お前」

ぼそり、と静かに呟かれた言葉に俺は死ぬほど驚いた。え、何俺兄さんの中では死んだ扱いされてたの?! と内心では絶叫の嵐だ。

ジンはスツと立ち上がりすんなりと部屋から出ていった。パタリ

と静かに閉じられたドアの音が妙に俺の不安を煽った。

朝起きたら、既に兄の姿がなかった。ハンガーにかけたあの黒いコートもなく、少しの煙草の残り香があああの暴君の存在を俺に突きつける。

この後滅茶苦茶お部屋に優しい某消臭スプレーをかけまくった。

知らなくてもいい事実は人生には溢れているのさ

——主人公side——

お部屋に優しい某消臭スプレーをかけまくってちよつと平常心が帰ってきた。

兄の心理が分からないのは前からだし。いや意味合いは大分違うんだけど、と俺は朝から頭を抱える羽目になった。

悩んでも仕方ないので、昨日中途半端になっていた俺の中身の整理だ。俺、正確にはこの『ジエネヴァ』のだ。

いや考えれば考える程出てくる出てくる、不穏な知識と出来るであろう技術達が。格闘術に、サバイバル知識ここまではいい。けれど、何？尋問拷問についてとか、人体の急所、精神崩壊までの手順とか、拳句の果てには心理学の応用の人間の操り方？無理無理、この中身が一般市民の小心者の俺には荷が重い。

俺は早々に音をあげた。あ、でも役に立ちそうな技術もあつた。好きな声が出せる変声術やら、このクソ高い身体能力とか。あと格闘術(暗殺編)も護身術として役に立つ。

いやあ、このジエネヴァ君やたら物騒だね！めげちやいそうだぜ。一体組織はこの子に何やらせるつもりなのだろうか。とても怖い。

この鉄仮面仕様さえもはや救いの一因になっているとか、現状の酷さが分かるうものだ。

だからまあ兄のとち狂った行動に悩んでいる暇なんてない。今日の予定は、という組織の施設でちよつと訓練した後、組織のパトロンの要人のお子さんの護衛とかやる為の打ち合わせか。ああ、サボりたい。まあそうしたら俺はお払い箱ついでにこの世からさよならバイするんだけどね、ハハツ。つらいわ。

まずはトーストを焼いて朝ご飯食べるか。ちなみに俺は朝はパンとご飯半々といった感じだ。どっちも美味しいよね。

あとは盗聴器とか所持品に発信機がないかチェックも怠れない。身内すら信じられないとか悲しいお知らせだ。なんで眼鏡の少年探

偵アニメの盗聴器の出現率があんなに高いのか。おかげで俺はすぐに思いついたんだけどね！ありがたんだけども。

結果としてはまあ盗聴器も発信機もなくて俺は肩透かしをくらった。

午前中の組織の訓練も何事もなくこなした。教官？いない、らしい。過去には沢山居たらしいけれど、このジェネヴァ君の徐々に発揮される物騒さから人が離れた結果らしい。マジかよ、こんな子供が何をやらかしたのやら。肝心なところは相変わらず思い出せないの俺は内心泣きそうだった。

それはともかくとして。俺は午後にある打ち合わせまでに時間があつたので、ブラブラと組織内の施設の廊下を歩いていた。お昼は食べた、こつちに来るまでに買ったサンドイッチで美味しかった。

とそこで俺はこちらに向かつてくるとある人の姿を見て、ゲツと内心呻く。勿論この完璧な無表情には漏れていなかったけれど。

黒のニット帽に、黒の長髪、黒ずくめの服装。加えて黒髪から覗く緑の鋭い瞳はゾツとする程冷酷だ。そう、FBIの捜査官赤井秀一、偽名は諸星大。黒の組織でのコードネームはライ。——今はライとしての姿だし、ライと呼ぼう。

まあ冷酷さ具合でいうと家の兄程じゃないけども。

俺は構わず通り過ぎようとした。だつて面識ないし、したがって恨まれたり絡まれたりする心配はない筈だ。

「——何故、こんなところに子供が」

「あ？？」

通り過ぎようとする寸前に腕を掴まれ、ライに止められた。俺は咄嗟に低い声が出た。こう、喧嘩を売るチンピラ的な声だ。実際はもつと冷たい声だったんだけど。習慣って恐ろしいね、このジェネヴァ君喧嘩は買うタイプのようだ。流れるようにあの低い声が出たし。

もう後には引けないので俺は鋭くライに睨む。おや、とライは意外

そうに目を少し見開いた。

「お兄さん、言っておくけれど俺部外者じゃないから」

「ほお……。じゃあ、なんだって言うんだ？」

なおも腕を離さないライに俺はイラツとした。うるせー、餓鬼捕まえて面白そうにすんじゃねえや。

「コードネーム、ジエネヴァ。最近なつたばかりの下つ端だから聞いてないかもしれないけどね」

「ああ、お前がああ噂の。——それはすまなかつたな。この業界じゃ疑わしい者をあつさりと通したんじゃ信用を失くすんでね」

納得し、あつさりと腕を離れたライに俺は少しため息を吐いた。

「——いいよ。それに信用を失くすだけじゃなくて下手すると命に係わる生業だつて知っているし」

「噂とは違うんだな」

「噂?」

俺の呆れた声にライは意外そうに呟いた。俺は思わず聞き返す。昨日のバーボンといい、今日のライといい絶対ロクな噂じゃないだろう。

「聞いた事がないのか? まあこういう噂は当人を素通りするものか。

——冷酷無慈悲の殺戮人形。噂だと口も利けない程人間らしさに欠けるそうだが?」

本人を目の前にずけずけと噂をいうライに俺はひくりと口の端がひきつりそうになった。この鉄仮面は残念ながら応じてはくれなかったが。

「——で、実物に会ったご感想は?」

「思ったよりも人間らしいな」

だろうな。俺は口に出さずに思う。そりや中身が違うもの。

「へえ。俺もお兄さんの噂を知っているよ」

「ほー。どんなだ」

面白そうな、余裕を崩さないライに俺は仕返しをする。というか、余裕ぶりやがってこのイケメンめ滅びろ。

「お兄さん、ライっていうんでしょう? なら、組織に入る時恋人を仲介

して入ったんでしょ？」

「ああ。それが？」

「——二人の出会いが車の当り屋的なアレって本当？」

「?! グツッほっほ」

読者の特権、原作知識を発動！効果はばつぐんだ！咳き込むライに俺は内心ニヤニヤする。やられっぱなしは性に合わないんでね。

「その様子だと本当みたいだね。お兄さん、やるねえ」

「げほっ。——おい、その話どこから聞いた？今すぐ話せ、さもないと」

「殴っちゃうぞって？嫌だなーこれだから大人は。それにこの噂は根も葉もない噂で誰も信じちゃいないって」

多少苦しさを潤むライのその睨みに俺は飄々と返す。というか、口調が軽くても鉄仮面とかシニールじゃね？」

「……………そうだな。噂は信用性に欠けると今実感したからな」

「よかったね」

「いい性格をしているな、坊主」

そりやどうも。俺は無表情で頷く。ライは増々苦々し気に顔をしかめた。

「はあ、まあいい。親切心で忠告をしようじやあないか。組織で生きなければ、そんな舐めた真似はするな。——死ぬぞ」

ため息を吐いた後、ライは忠告を述べた。けれど、最後の一言だけはゾツとするような冷たい声と視線だった。

俺はそれに頷く。

「よく知ってるよ、そんな事」

——赤井Side——

組織のコードネームを持つ子供が去った後ライ——赤井秀一は目

を閉じた。懐から煙草を一本取り出し、火をつける。

煙草で気分を紛らわさないとやっていけない。

ふうつと紫煙を吐き出す。赤井は目を開けた。

随分と目の澱んだ子供だった。あんな目は子供がしてはいけない。軽口を叩くので思わず覗いてしまったのだ。その目の奥を。良く見ればその瞳は緑の虹彩を持っていて、本来ならば美しい輝きを持つのだろう。

一体この子供はどんな地獄を見てきたのだろう。底の見えない暗闇の瞳に、赤井の良心がチクチクと痛みを発する。同じ年頃の妹がいるから余計感じるのだろうか。感傷は、この組織に入る前に置いてきたはずなんだが。

なにせよ、あんな子供がこれ以上犠牲にならないように尽力するだけだ。

赤井に出来るのはそれくらいだ。

それにしても、随分冗談が回る口だったな。赤井は不思議に思いながらも組織の任務をこなすためにその場を離れた。

——主人公 side ——

組織での打ち合わせも済んで、じゃあ明日からねと言う事で解散となった。なんでも護衛をするのは年頃のお嬢さんだそうで、今までの組織の人員だと怯えられるから急遽俺が代打を務める事になったそう。……これだから金持ちとは俺は文句を内心呟きながら頷いた。え？ライに対する態度とは違う？まあそりゃあ、あの人他に話すとも思えないし。いざとなれば俺が白を切れればいい話だしね。逆上されて殺される心配がないって大きいよなと俺は真面目に思っている。この組織物騒すぎるわ。

俺は自分の部屋に早々に退散してぼんやりとくつろいでいた。疲

れた時はこうやってやるのが一番だ。

ピンポーン。この広いリビングにも聞こえる軽快な機械音に俺はデジャヴを覚える。もしや、そんなまさかね。

俺は渋々とドアを開けた。そつと慎重に、を心がけてだ。

「遅い」

そこには何やら荷物をもった兄、ジンがいた。兄貴、その鞆かばんに何が入ってるんですかい？と脳内でウオツカがでしゃばるくらい俺は混乱した。

「ん」

「は？なにこれ」

「——酒。今日も泊まるからな」

「はあ？」

目の前に突き出された鞆を受け取りジンに聞けば、まさかの答えで流石の俺も動揺した。どういう事だつてばよ、と俺は目を丸くする。

勝手にまた部屋の中へ上がるジンに俺は呆然としてしまった。なん、だと……!?! と現実に俺は愕然とした。

慌てて俺は鞆の中身を確認する。鞆と言っても、チャック付きの札束の運搬に使いそうな黒い布製のバックだ。ジツとチャックを開ければ、中にはワイン数本と他の種類の洋酒が入っていて、マジかコイツと俺はドン引きする。

俺が以前（脳内で）言ったのはお泊りセットを持ってこいっていう話なのに酒って、お前とぐるぐると脳内が荒れ狂う。

「おい、またなんか作れ」

リビングで早速くつろぎ始める兄に俺は、あこれは餌付けが成功したパターンですわと考え直す。はいはい、今行きますよつと。

別に俺、餌付けしようとか露程も思っちゃいないんだけどな。

ちなみに今日の夕飯のメニューはカレーライスだ。丁度二人いる事だし、大人の男なのだからまあ作っても食べれるだろう。俺が食べたかったから事前にカレールーがあったのは幸運だった。俺って超

ラッキーじゃね?と自画自賛しながら調理を進めていく。

カレーの中に飾り切りの人参(お花)を入れたらジンにマジかよコイツと無言でドン引きされた。うるせーお前ほど常識知らずじゃねーよ、とチキンな俺は内心だけにツツコミをとどめておく。

もう二度目となれば慣れたもので昨日ほど俺は兄に対してストレスを感じず対応する事が出来た。俺ってなんて大人なんだろう!と自分を褒めておく。

もう今日は夜も遅い。お休み一秒ですやあである。

——ジンスide——

ジンは見下ろす先の子供をジツと見つめる。

手をサラリと抜ける自分と同じ銀の髪。

生きてるみてーだな、と誰に言うでもなく呟く。この年の離れた弟と初めて会った時、ジンはその頃にはもう家を出ていた。何せ裏社会に自ら入るのだから家庭環境はお察しの悪さだったのだ。

だから、死んだ目でこちらを見てくる子供にこれはもう駄目だなとジンは思った。

何せ心が死んでしまっている。経験上、こういう目をする奴はもう二度と復活しない。心は死んだまま、ただ言われるままに生を享受する。クソみたいな生き方だ。

組織に連れ帰ったのはジンの気まぐれだ。使える駒になつてくれればそれでよし。使えなければ始末して終いだ。

それ故に久方ぶりに会って、その死んだ目に一瞬の光を見て少し驚いた。

なんだ、蘇るっていうのか。心が死んだお前が?と。

一応、動向を探る為、心変りがないかをここ二日押しかけてジンは

確認した。

結論としては問題なさそうだ。害意、敵意は存在せず、恐らく裏切りもないだろう。

ふうとジンはため息を吐いた。今夜は無性に煙草と酒に溺れたい夜だ。

蓋を閉めても、見えてしまうものがあるものだ

鏡に映る儂い印象の少年が無表情で見つめていた。これが俺とか、未だに実感が湧かないわ。無表情で更にビスクドールみたいな現実離れた美貌に見えてくるのだから美形って得だなと他人事みたいに思う。

「……………」

俺は無言で両手の人差し指で口端をくいつと持ち上げてみる。無理矢理つくられたその笑みは、逆に笑えてくるくらいいきこちない。手を下ろす。戻った無表情に俺は口元が引きつる思いをする。

「まじか……………」

鏡に映った顔はそれでも変化がなかった。ぐぬぬ、と俺は悔しい思いをする、何か負けたような気持ちだった。

いや待て鏡を見ながらだったらどうか表情筋を意識的に動かして笑みを浮かべる事が出来るんじゃないか。

浮かぶ閃きに俺は勝利を確信する。

いざ挑戦、と俺は鏡と向き合う。

笑みというより、これ嘲笑なんじゃ…………と思われる笑みが鏡に映る。見下される感が半端ない。俺はそつと鏡から目を逸らした。鉄仮面過ぎるだろ、ジエネヴァ君と俺は軽く絶望する。

朝から何やってんだろ、俺は虚しく思いながら朝の支度を急いだ。

ジエネヴァが俺になってもう一週間が過ぎようとしていた。

時が経つのはなんて早いのだろうか。

時刻は既に夜の七時を超えていた。暗闇が完全に支配し始めるこの時間帯はこの仕事着の黒い服装がより不審者染みるつらい時間帯

なのだ。ほら、ジェネヴァ君子供だから移動手段は交通機関を頼るかタクシーかの二択だからね、余計ね。

今日で護衛の任務も終わりだ、やったね！と俺は自分を鼓舞しながら自宅の玄関に上がり、意気揚々とリビングの扉を開けた。

すぐに目にはいる位置に配置されているソファに陣取る、見慣れた長い銀髪に俺の浮かび上がった気分が急降下する。靴あつたつけ？浮かれてて気づかなかつたわ、と俺は自身の失態を悟る。

「……兄さんって暇なの？」

「あ？何ふざけた事言ってるやがる。——忙しいに決まってるだろ、殺すぞ」

「……………」

俺のシリアスを返せ、と喉元まで出かかっている言葉を俺はなんとか嚥下する。くっそ油断したと俺は床に力いっぱい拳をぶつけない気持ちで一杯だ。

この数日、兄から事務的な連絡しかなかった。ので、家でのストレスがないって素晴らしいと俺の心の中で拍手喝采だった。え？仕事？金持ちのお嬢様の護衛の任務？まあ楽勝だった。この傍げ美少年の見た目じゃあお嬢様の怯えも抱かれたいし、彼女の命を狙う不届き者もこのジェネヴァ君のハイスペックな戦闘技術でサクツとお帰り頂けたし。我ながら人間やめているレベルの身体能力で自分に引いたのは秘密だ。

このリビング然り、ジェネヴァくんの住み家であるこの2LDKの空間は広い割にシンプルな内装だった。リビングにはソファと机とテレビくらいしかないし、ダイニングに至っても食事をする為の机と四脚の椅子くらいだ。最も賑やかなのが俺が料理をするキッチンだと言えはそのシンプルさが分かるだろうか。

何が言いたいかというと、ジンの兄貴が居座る程ここは快適素敵空間ではないという事だ。……この襲撃が三度目だとは言え、一週間に来すぎじゃないですか、兄貴と俺のツツコミがスタンバイする。勿論、俺は言うほど命知らずの死にたがりじゃないから我慢するが。

「今日で終わりだろう。次の仕事の話だ、面倒だが直接じゃねえとア

レだからな」

「……そう」

何があればいいのか、俺は疑問に思いながらも一応頷いておく。まああれだもんね、ジエネヴァ君の（組織式）教育もジンの兄貴が今握っているもんね仕方ないねと俺は自分を納得させた。

「——ジエネヴァ」

「うん？」

やけに重々しい兄の声に俺は少し首を傾げる。

「……腹が減った。なんか作れ」

「……………了解」

なんだ、ただの暴君か。俺は内心ため息を吐きながら、了承し、調理をするべくキッチンへと向かう。

餌付け説が段々現実味を帯びてきてとてもつらい。ジンの兄貴の場合、猫とか犬とか可愛いものじゃなくて、獲物を屠る狼や豹といった獰猛さがあるから出来れば遠慮したい全力で。

うーん、今日は何を作ろうか。お米を研ぎながら俺は思案した。冷蔵庫に何があったかなと中身との相談だ。毎日自炊しているから、小まめに食材を買っていたりするのだ。どうせ食べるなら美味しい物を食べた方がいいというジエネヴァ君になる前の俺の食い意地の結果なんだけど。

ちなみに冷蔵庫さんとの相談の結果、夕飯は煮込みハンバーグとなった。ご飯が炊けるまでの時間もあるし、丁度いいだろうと思ったからだ。まあ本格的な奴じゃなく、家庭で簡単に作れるケチャップ使用のソースなのでジンの兄貴の口に合うかは俺はそつと目を逸らすことにする。流石に料理が口に合わないからって銃でバンツと

コロコロしたりしないよね？と俺は兄を信じる事にしたのだ。うん。何よりこうして俺がせつせと作っている間、奴は酒を飲み始めていた（この前持参してきたあのお酒だ）。なので文句を言われる筋合いはないな、と俺は直ぐに立ち直る。

まあ結局は自分で食べたっていうのを作るのが一番、これに限る訳だけど。だって俺主婦じゃないし。愛情？入っている訳ない。

完成した料理に俺がその出来に満足し、至福の時を味わう。我ながらおいしく出来たと思う。これで対面に座る人がこの渋い顔をする悪人面じゃなければいう事なしなのに。

決してあのジンの兄貴に美味いって言われたい訳ではない。言われたら多分鳥肌ものだろう、と俺は思っているから問題なしだ。けれど、その不景気な顔で食べるのはやめてくれないか。不機嫌そうに眉をひそめるジンの兄貴に俺の胃が悲鳴を上げるから切実に。食べる気がしなくなってくる。

「……おい」

「……………なに」

氷点下のジンの声に俺は渋々返す。鉄壁の無表情な上に声にも表れない安心仕様に俺はこの時ばかりは感謝した。

「デメエ、いつこんなのを習得しやがった。組織の教育にそんなくだらねえ項目はなかった筈だが？」

これ実の兄の台詞か？と思わず疑いたくなるのと思わない事への指摘に動揺を俺は瞬時に抑える。これだからこの組織は嫌になる。

「……最近始めた趣味だよ、兄さん。刃物の扱いは分かっているし」「ふうん？それにしちゃ、上手く出来てるようだが」

俺の回答にジンはくだらないと言いたげに食事を再開させる。俺はうん？と首を傾げた。

「上手く？——って事は美味しいの？それ」

「あ？？」

何言ってやがるんだ？的なジンの威圧に俺は自分の好奇心を呪う。やっべ、好奇心は猫を殺すということわざもあるじゃないか、と。

「……………まあ、悪くはない」

「!?」

ぼそつと聞こえた低い声に俺は耳を疑う。え?なん、だと……!?と衝撃は俺の無表情を崩す勢いで襲い掛かる。

思わず呆然と兄の顔を見れば、あの仏頂面が少し居心地悪そうに視線を逸らした。らしくない事は自覚済みらしい。ああ、よかったと俺は胸をなでおろす。もう少しで大丈夫?病院行く?とウオツカへの電話番号をプッシュしそうになった。なんでウオツカか、って?だってあの人ジンの兄貴の為ならタクシー代わりになってくれそうという俺の偏見だ。

「そ、そう。それは良かった」

「ん」

俺の動揺の揺らぎは多少で済み、兄の頷き一つで流された。俺、取り乱さないで良かった。

食後にコーヒを兄にも淹れてやり、のんびりとした空気がこのリビングに流れる。と言ってもテレビも付けないこの沈黙は俺からすれば気まずい事この上ないのだが。というかやっぱりブラックコーヒー派なんですね、兄貴と使われなかった砂糖とクリープを俺は何気なく見ていた。

というか、やっぱりこの人生きてる人間なんだなーと俺はぼんやり思った。ちよつとくらい組織のサイボーグ説も疑っていた為、残念なようなそうでないような複雑な気持ちだ。

その後ジンは仕事の話をした後、これから仕事だからと去って行った。去り際、ぽんぽんと頭を撫でられたのは人生で一番の驚きだったとここに明記しておこう。何あれ怖い。驚きというより今年一番の恐怖体験に違いない。ジェネヴァ君の(あんまり思い出せない)過去も全力で頷いている。

仕事に関してはまあ今と同じくこの幼い見た目で油断させていくスタイルなんだそう。まさかこんな子供が、的。だから組織にとって利用価値のある要人の警護だとか、邪魔な同業者の始末とかが主な仕事だそう。どこぞの暗殺者かな？

つまり俺は返り討ちにされないように祈って仕事をしろって事です。すね分かります。

その為に少し変装術も学ぶ予定を組んでおく、とジンの兄貴から不吉なお達しがされた。なんか嫌な予感がするといつかなんといつか。先生役の人の事も聞けないまま、兄は一方的に告げて去って行ったので俺の不安は計り知れない。

※※※

嫌な予感程当たって何なんだろうね。

周りは色とりどりの洋服が洋服店にも劣らぬ品揃えで並びたてられ、頭だけのマネキンにウィッグが十数個、それと変装用マスクが数点。

俺は全身を映せる姿見の前で立ち尽くしていた。

俺は目の前の鏡に映る銀髪の美少女の姿に項垂れる。

「あら、可愛く出来たわね。貴方、綺麗な見た目をしているから化粧だけでなんとかなるんじゃない？」

「……………」

軽い調子で褒めてくれる妖艶さが滲んでいる声に俺は死んだ目でそちらを見る。

二十代後半か、若さあふれるナイスバディな金髪美女が化粧道具をしまいながら、ふざけた事を言っていた。美貌に裏打ちされた自信がその青い瞳をより魅力的にさせるのだろう、彼女の流し目は正体が分かっているようにもなお、ドキリとさせる威力があった。

ベルモット。組織随一の秘密主義な女性が、今日の俺の先生役だ。

あの兄の不吉なお達しから二日後に、組織の施設のとある部屋で授業をやるとメールで知らされ、いざ向かえばこの金髪美女がお出迎えしてくれたのだ。デスヨネーと俺は元々死んだ目が更に激むのを感じた。

で、簡単な自己紹介の後、時間がないからと怒涛の勢いで授業が進んだ。その結果が今の俺の姿だ。

今の俺の姿は深窓の令嬢と言った感じだ。白のワンピースには裾にレースがあしらわれ、小物を入れる小さな肩掛け鞆が可憐さを演出する。足元の水色のパンプスはリボンが可愛さを主張していた。っらい。

化粧により、もはや違和感がないくらいに俺は美少女の見た目に化けていた。これで相応しい所作と声が揃えば、疑う人は居ないだろうと思える完成度だ。え？見た目は元々そつち美少女寄りだろうって？ハハツ、殺すぞ。

俺は自分の思考に殺意が湧くくらいには地味に精神的に追い詰められていた。俺にだって男のプライドがあるんだと拳を握りたくなる。

「こんな所かしら。これまでで分からない所はある？変装用マスクの作り方も教えたいし、体形の違いの誤魔化し方も大丈夫ね。——あのお方にも困ったものだよ」

ベルモットは確認事項を上げながら、ふとぼやくように呟いた。呟く、と言っても聞こえない程小さな声だった。なる程、俺はそれに納得する。可笑しいと思っていたんだ、この授業。だってベルモット側になんのメリットがないし、十八番な技術を同僚に、後輩に伝える程この組織は親切な作りをしちやいない。

でもボスからの命令じゃあ断れないだろうなと俺はベルモットに同情した。まあこの授業、この一回のみの全部一回だけ教える超詰め込み授業で、習得できるとベルモットが思っていないから実現出来たんだろうが。

残念ながらこのハイスペックなジェネヴァ君は大抵一回で習得できる可愛さのない子供の代表なのでしっかりと吸収してものにし

ちやつている訳だが。

「後は仕草をものにする観察眼と演技力が成功を左右するわ。まあ、そんなところね」

後は頑張つて、と言わんばかりにベルモットは肩を竦める。

「そうですね。ご教授、ありがとうございます」

「あら、驚きね。貴方」

俺の口から出た可憐な声にベルモットの目が丸くなる。その後、苦く笑うように口紅の美しい唇が歪められた。

そう、俺は声だけなら元々ある程度変えられた。役に立つかな？くらいにしか思っていなかったこの技術は早い活躍の場を得られたのだ。

「でも無表情なのが欠点ね」

「……………」

ベルモットの擲揄^{からか}うような声に俺は無言で返す。仕様なんです、と言つても頭おかしいと思われてお終いだ。けど、組織の要求する『無害な少女』に化ける分には大丈夫だ。そしてまあ俺の成長途中の身長だと成人男性は無理だけど、女子供に変装する分には大丈夫だ。それに俺、本番には強いタイプなので、いざとなったらこの職務放棄な表情筋も働いてくれるだろう。

ああ、残念。もう時間ね、とベルモットは呟いてサツと身を翻し、

「ふふふ、でも多少ミステリアスな方が女の子は魅力的よ」

と素敵な笑みでお別れをしてくれた。流星は大女優、その美貌は目に眩しいくらいだった。

「俺、男だけど……」

俺の虚しいツツコミは誰に聞かれるでもなく寂しく消える。あ、涙が。

ところで、ベルモットさん。原作では俺の兄であるジンとの恋人疑惑がある人なんだっけか。マティーニな関係云々のアレだ。あの人が義理の姉になる可能性が俺の脳裏を掠り、思わず頭を横に振る。なんておそろし、いや恐れ多い。無理無理。もしそうになったら兄とは絶

縁させてもらおうしようしよと俺は決意を新たにした。

さつさと着替えてしまおう、と俺は気持ちを切り替え化粧を落とした。そんなもってこういうのはなるべく回避していく方向でいくか。

どうせなら良い方にとった方がいいだろう？

俺はさっさと女装んんつ、変装を解いて帰宅する為にと廊下を歩いていた。

ここら辺は組織の幹部クラスが立ち入る区域だから人が少ない。なるべく人が少ないルートを辿りながら俺はここを出入りするのが習慣だった。たまに絡まれるからね、コードネーム貰ったから尚更。相手が下つ端だったら、こう拳で語る系のお話だつて俺には対処出来るけど。下手にコードネーム持ってたたりすると面倒だ。俺が。

とそこで俺は数メートル先のその人を見つけた。目が合う。

「あ」

「……………」

バーボンとは種類が違う人の良さを感じさせるお兄さん、無精ひげを生やしてなければ更に若く見えるだろう飄々とした雰囲気イケメンさんが居た。こちらをきよとりと瞬きする、その瞳の色は灰色か、ちよつと明るめの色だった。短めの黒髪と、素直に驚きを表す表情に俺は少し安心する。

この人、愛想と愛嬌を両立出来るタイプの人だよな。多分。微笑みを武装して、と言うよりは生来の人の良さで人の心の壁を攻略するタイプと見た。

「君、もしやジエネヴァ君？」

案の定へらつとした笑みで問われ、俺は頷いた。うーん、いい人そう。

「ははっ、まあいきなり知らない人に名前を言われると警戒するよな」俺の無言に頭を掻きながら、軽く笑うその人に俺はじいっと見つめる。俺の視線にたじろぐように一歩下がり、ゴホンと咳を一つ吐く。

「俺は ヽスコッチ」。まあ君の同僚さ。——この前バーボンと話したろう？アイツとはそこそこの付き合いがあつてね。君の事はアイツから聞いたんだ」

「……………」

「——噂の通り、か。君、ちよつとこの後時間はあるかい？」

「？」

スコッチの提案に俺は首を傾げる。時刻はまだ十六時。夕闇が忍び寄る時間に迫る時刻だが、まあこの職業の俺なので特に問題ない。スーパーの特売もない事だし。

「まあ、特に問題はないけど」

「そうか、ならちよつと外で食べに行かないか？ちよつといい店があるんだが、生憎付き合ってくれぬ奴が不在でね」

一人寂しく食事は少し悲しいだろう？とにこにこしながら言われ、俺は少し遠い目をしたくなつた。なんでバーボンといい、このスコッチといいコミュ力が高いのか。

あれよあれよと話は（勝手に）進み、気が付けば俺はスコッチと夕食をとる事となつていた。どうということなの、と俺が白目をむいても現実は変わらない。

俺は今助手席に座らされていた。後部座席よりこつちの方が眺めがいいんだぞ、と親戚のおじさんのような親切さが発揮された結果だ。とてもつらいです。

走行中の沈黙程つらいものはない。が、そこはコミュ力高めこの男、スコッチに抜かりはなかった。耳に気持ちいい、ジャズがこの静かな空間を重苦しいものから穏やかなものへと変化させる。これだよ、こういう気遣いが大切なんだよと俺は今居ない兄へと向けて聞かせてやりたくなつた。何、あの重苦しいの極限空間。ウオツカが汗たらしめただと関係ない事をぼんやりと考える。

「なあ、ジエネヴァ君」

運転をしながら問いかけてくるスコッチに俺は視線だけ向ける。顔は向けないのはアレだ、負けた気がするからだ。

というか。

「お兄さん、俺の事は呼び捨てでいいよ。こつちもそうするし」

「そっか。なら、ジエネヴァ」

「ん？」

親しみやすい軽い口調で重ねてくるスコッチに俺は淡々と言葉を重ねていく。……場合によってはバーボンよりこのスコッチの方が情報を聞きだすの上手そうだなあとぼんやり思う。例えば警察の聞き込みとか善人性を表に出した方が円滑に進む場合だ。まあ場合に よりけりだけど。

「——バーボンから聞いたんだが、君中々会えないそうじゃないか」

「……そう？俺、組織の施設に日参しているから居ないって事はないけど」

「そうかい？バーボンの奴、まるで捕まらないと嘆いていたよ。ぶっふ」

突然ふき出すスコッチに俺は胡乱気な視線を送る。なんだ、一体。

「いやな、バーボンが君の事を『妖精』のようだと言うのを思い出しちゃって」

はあ？と俺は口をぱかりと開ける。人形の次は妖精とかと鼻で嗤ってやりたい気持ちで一杯だ。スコッチはそんな俺の様子を面白そうに一瞥した後、ハンドルにもたれかかった。見れば赤信号で止まっているらしい。

「ははは、そんな顔をしない。——現実味がなくてふわりと消えてしまいそうな見た目で、妖精だそうだよ。ま、もともと、話をしたらそうは思わなくなったらしいけど」

青信号になり、発進させるスコッチに俺は冷めた目で見る。当たり前じゃあボケエと口が悪くなりそうなのをグツと堪えている最中なのだ。

というか、バーボンさんが俺に会えないのは当然なのだ。だって俺、来た時と帰る時両方、忍者みたいに天井に張り付いたりして人目に触れないようにしているから。ついでに隠し通路みたいなのを発見するのがマイブームだったりする。夢はアイエエエ！ニンジャナンデ?! 的なりアクションを貰う事だと俺は密かに拳を握る。

スコッチさんは俺に会えた幸運に感謝すべきだと思っただ。いや

嘘です、そんな調子に乗ってない。せめてもしもの為の避難経路の発掘という俺の涙ぐましい努力なんだ分かってくれ。

スコッチさんおすすめのお店はおしゃれなイタリアンでなく、隠れ家的な日本料理屋だった。大将と言った貫録のおじさんが店を仕切るお店だ。ねじれハチマキをまいたその頭と背中で語るその仕事への実直さが素直に好感が持てる。ああ、これでオシャレなお店だったらちよつと日本警察に向ける目を考え直す所だった。

お店は混んでいないようだった。というか、十八時という早めの時間なのだからかもしれない。

スコッチさんは少し端の隅の方に空いているカウンター席へとついて、手招きする。

座れば大将が注文を聞きに来る。それにスコッチが手慣れたように注文し、俺にお伺いを立てるその内容に俺も承諾する。へえ、美味しそうとじゅるりと俺の唾液が溜まる。こういう所の海鮮丼とか美味しそうだ。

「料理が来るまでちよつと世間話とかしないか」

「——いいけど、俺言える事少ないからお兄さんの話が聞きたいな」

俺の言葉にスコッチが少し言葉を詰まらせる。まあ、探りたいよなーと俺は他人事のように思う。これは推定だけど、俺がジンお気に入りの駒とかいう情報が洩れていそうだし。その真偽を責めて確かめたいといった所か。

「俺の話なんてつまらないよ、いい年こいた大人の話なんてさ」

「そっつー？」

ははと肩を竦めるスコッチに俺は首を傾げる。

「情報の価値は一人で決めるものではない。何気ないその情報が宝に

化ける事もある」

「らしいよ？」と俺はスコッチに視線を投げる。スコッチは参ったな、と頭を掻いた。

「じゃあ、その何気ない話をジエネヴァも語ってくれ」

「え？」

「何が悲しくて、いい年した大人の身の上話を一人話さないといけないのか」

「は？」

「いいか、ジエネヴァ。人生、恥の上塗りだ。後悔先に立たずなんていう言葉もあるけどさ。後悔出来る内が花なんだよ」

真剣に語るスコッチに俺ははあと呆れたため息を吐く。それアンタが言っちゃうんだと。

「——ソレ良く覚えておいた方がいいよ。お兄さん」

後悔できる内が花なんだろう？

※※※

最近、共に潜入捜査官仲間のバーボンこと、降谷の様子が可笑しい。あの男とは、昔からの馴染みでそれなりに知った仲だからだ。

さて、その可笑しなバーボンのその違和感を述べていこうと思う。一つ、やたらと組織のとある施設に赴くようになった（とはいえ、ちゃんと仕事に差し支えないようにするのがなんともらしい）。一つ、ぼーと外を眺めている事が多い（頻度はさして多くはないが）。何よりも極めつけなのは、こうやってスコッチに会うと必ず愚痴をこぼすようになった。

まあそれらはここ一週間程の変化でまだ気のせい範囲かもしれ

ないとスコッチはおおらかに構えていた。

バーボンは一時間ほどここで休憩をとってまた任務という激務を行おうらしい。ご愁傷様な事だ。スコッチとしても明日は我が身なので優しくしてやろうと思ひ当たる。さて、インスタントだけど、コーヒーでいいかとポットからお湯を出し、コーヒーを淹れてやる。

机に突っ伏すように倒れ伏す、金髪に褐色の肌の若者まあバーボンだが、彼の傍にコーヒーを淹れたマグカップを置く。

「聞いてくれよ、スコッチ」

「なんだ、バーボン」

こうしてセーフハウスに居る時でもお互いコードネームで呼び合う。いざという時にボロが出ないように徹底した結果だ。

スコッチはバーボンの対面に座り、コーヒーを啜る。

「また会えなかつたんだよなあ」

「例の『妖精』君に？」

妖精くんとは組織で最近話題の子供の事だ。酒に酔ったバーボンがポツリと零した言葉によって命名された。ちなみにライも知っている。彼にしては爆笑といっても差し支えない笑いつぶりだったか。腹筋が痛いと言日ぼやくライにスコッチは二度見した。まじか、何がそんなにツボったのか。スコッチの永遠の謎だ。それ以来バーボンのライ嫌いが加速したのも補足しよう。

スコッチの妖精という言葉にバーボンが恨めし気に見上げてくる。おいよせ、そんなイケメンの無駄遣いはするな、と内なるスコッチのツッコミが効いたのか。バーボンは倒れ伏していた身体を起こしコーヒーを啜り始める。ぼそりと不味いと言ったのはスコッチでも許せない、がまあいい。

「んで、今度はどうしたんだ？」

「いつも通りです。——今度はと思つたんですけど」

「いやでも待ち伏せしたんだろう？それにその子供もコードネームを持つんだから馬鹿じゃない。きつとこちらの行動がバレているんだろう」

だから手を退かないか、スコッチの言葉にバーボンは無然とした面

持ちになる。

「いえ、あの子供はジンのお気に入りらしいです。直属の部下とか使い勝手のいい駒扱いですよ」

「なる程、許せない訳だな」

「そりゃあ、そうです。……なあスコッチ、あの子の歳を知ってるか？」

熱が入って行くバーボンにスコッチは、どうしようと手をかざしクルダウンを促す。今にも立ち上がりそうな、姿勢をまた椅子に沈めたバーボンにスコッチは苦笑する。

バーボンはいい奴だ。汚い事と綺麗な事両方していてなおそれでも少しでも良い方へ抗う事の出来る性根の綺麗な男である。

「十三だ」

「は？」

「だから、十三歳」

物思いに耽っていたからスコッチの反応は遅れた。あ？なんだって？とスコッチはポカンと阿保面を晒す。

十三歳。なんと言う事だろう。日本で考えれば、法律が悲鳴を上げる事態だ。違法どころか虐待人権無視の鬼畜の所業だ。

流石組織汚いと奥歯を噛みしめるスコッチの様子にバーボンは静かに視線を向ける。そうだな、バーボン。こんなクソみたいな組織、さっさと排除してやりたいなど。

「それにジエネヴァ君は学校、行った事がないそうですよ」

「それ、は」

マグカップを手持ち無沙汰に弄ぶバーボンの言葉にスコッチは息をのむ。スコッチのその様子にバーボンはやるせないような、無理矢理汚濁をのみ込む笑みを浮べる。下がった眉と共に緩められた目尻に涙さえ浮かびそうな、決壊の寸前だ。

「……『組織の教育』を受けている、そう言っていました」

ああ、なんとという事だろうか。スコッチは目を伏せる。そんな子供が、今組織でコードネームを貰い、冷酷無慈悲の殺戮人形というふざけた呼び名を囁かれる。

「そうか。分かった、俺の方でも見かけたら声をかけてみるよ。そんなで、その妖精君の話聞いてみるさ」

「ええ、ですが、くれぐれも気をつけて下さい」

どんなに小さい綻びも許されない。それがこの黒の組織で潜入している捜査官の共通鉄則。

スコッチはバーボンの真剣なその視線に頷き、笑った。

「心配しなさんな、これでも悪運は強い方だ。——最後までしぶとく生き残るさ」

存外その妖精君は早くに見つかった。組織の施設の廊下でバツタリ。勢いに任せてあれよあれよと事を進めて妖精君改めジェネヴァくんにご飯を誘えたのは僥倖という奴だろう。俺の日々の行いが良いとも言くとスコッチは上機嫌に車のハンドルを握った。

車内に流れる音楽は今スコッチのお気に入りの曲だ。古いが、中々に耳に馴染む何処か上等な喫茶店にでも流れてそうなそんな洋楽の一つだ。

それにしても、とスコッチは隣を盗み見る。何処を見ているか分からない、光のない瞳は前を向いていて見えるのはその横顔だ。男の顔の造形には特にこだわりのないスコッチだが、まあ確かに妖精呼ばわりしたバーボンの気持ちも分かる見た目をしていた。静かに座って目を瞑れば、神が拘って作ったと言っても信じてしまいそうな儂い美があった。この子が、ねえとスコッチは少しやりきれない気持ちを堪える。

車中で少し口が滑ってしまった事に関してはバーボンには少しばかり悪い気持ちがあった。が、まあ後で奢ってやればチャラになるだろうと信じる事に決めた。

馴染みの店で注文を済ませ、スコッチは隣の席にいるジェネヴァに

話を振る事に決めた。

「料理が来るまでちよつと世間話とかしないか」

「——いいけど、俺言える事少ないからお兄さんの話が聞きたいな」

サラリと躲かわされ、こちらの話をしると促され、スコッチは言葉が詰まる。これは覚悟していたが、相当警戒が強いと見た方がいい。まあ今日は少しこの子の警戒を解ければいいかと軽い気持ちに切り替えた。組織の他のコードネーム持ちを相手にするよりかはずっとマシというものだ。

「俺の話なんてつまらないよ、いい年こいた大人の話なんてさ」

「そっう？」

首を傾げるジェネヴァにスコッチは少し笑って肩を竦めてみせる。「情報の価値は一人で決めるものではない。何気ないその情報が宝に化ける事もある」

らしいよ？とジェネヴァがスコッチに視線を投げる。無垢な仕草に紛れて見えるのは紛れもなく組織の闇だ。スコッチは参ったな、と頭を掻いた。じゃあ、こうしようとスコッチは気持ちを切り替える。

「じゃあ、その何気ない話をジェネヴァも語ってくれ」

「え？」

「何が悲しくて、いい年した大人の身の上話を一人話さないといけないのか」

「は？」

「いいか、ジェネヴァ。人生、恥の上塗りだ。後悔先に立たずなんていう言葉もあるけどさ。後悔出来る内が花なんだよ」

真剣に語るスコッチにジェネヴァがはあと溜息を吐く。おや、スコッチは少し意外に思った。無感情、無感動を地で貫くと伝え聞いていたからだ。先程の車中でも思ったが、やはり噂は噂。この子にはちゃんと心があるとスコッチは少し安堵した。

「——ソレ良く覚えておいた方がいいよ。お兄さん」

後悔できる内が花なんだろう？とジェネヴァの小さい口から呟かれる。

やけに耳に残る眩きだった。

心の中なんて見えやしないのさ

バーボンさんが妖精（ ）とか言っていた件、絶対許さない。と俺はギリイと歯ぎしりする。全くこれだから大人という奴は。大体このジエネヴァ君、そんな柄じゃないよ？むしろ首を刈り取っていく死神タイプです。凄く物騒だね、と俺は現実に目を逸らしたくなった。実際出来てしまうから厄介なのだ。見た目って重要だなあと俺は死んだ目で、はははと心の中で笑っておく。

けどまあ、今回の接触でスコッチさんが話が出来るタイプの大人だって分かっただけでも収穫だろう。彼は潜入捜査官だからこのジエネヴァ君に敵意か、殺意を抱いていても可笑しくないと思っていたのだ。子供だから、と見逃してくれる程各国の捜査局はお優しくない事はお気楽な俺でも知っている。

後はこの時間関係の確認だけど、これは難しいだろうなと俺は思う。原作前だと言うのは分かる。が、黒の組織のメンバーズの年齢不詳感よ……。バーボンなんてほとんど変わってないんじゃないかね？原作時と。

それだからこそ、スコッチと話してその目に敵意が宿っていないのを知って、俺はホツとしたのだ。それどころかこちらを気遣うような心配の気配もあって逆にこちらが心配になってしまった程だ。

かと言って、信頼が勝ち得たかって言われたら答えは否なんだけど。そこら辺はおいおいやっていくしかないのだろう。そんな猶予があればいいが。

現実逃避もここまでだな、俺はため息を吐いた。

今日も今日とて楽しいくそつたれなお仕事の話である。だいたいスコッチとの出会いの三日ぐらい経った日の事、いつもの如く突然部屋に突撃をかましてくれたジンの兄貴に拉致られるように連れてこられて以下略。

現在の時刻は正午を少し過ぎた頃だ。つまりお腹空いた、俺は空腹

で鳴りそうな腹を撫でて宥めた。拉致られたのがご飯の準備をしようかな、という時だったのだ。少しは恨み節を吐いても許されるだろう。

ポルシエ356A。黒い車体のこのクラシックカーは真上からの太陽の光でキラリと輝く。まあ遠目に見る分にはとてもかっこいいとは俺も思うが、仮にも裏社会を牛耳る組織の後ろ暗い人間が堂々と乗るもんじゃねーとも考えてしまう。めっちゃ目立つじゃん、俺ら目立つっちゃいけないんだよな？

長い沈黙が横たわる車内は息苦しさを感じる程である。俺は視線をぼんやりと外に向けながら出来るだけ隣に座る兄に意識を向けないようにしていた。なんでこの人、助手席に座らないんだろうか。原作やアニメの時の助手席率に戻せよ今すぐに、という俺の切実な内心の叫びもお構いなしである。俺に対する嫌がらせだとしたら効果的だと拍手を送りたいほどだ。

隣に感じる威圧感のせいで俺はぼんやりとしていた。

「おい、お前。——アレ、忘れてねーだろうな」

いきなりの兄の言葉に俺は首を傾げる。はて、アレとは？

俺のそんな様子にジンの兄貴の眉間の皺がぐぐつと寄る。うわあ、ただでさえ致命的な悪人面なのに更に悪化するとか救いようがないんだが。チツと舌打ちの追い打ちに俺の胃がしくしくと痛み始める。ストレスマツハとはこの事か。

「しかしなんのことだろうか。ここ数日、ジンの兄貴に何かを申し付けられるような、用事を頼まれるような事はなかったはずだが。」

「……………呼び方」

ぼそり、と兄の低い呟きに俺はハツと閃く。え？呼び方って、俺が記憶を取り戻した初日で言ってたあれの事か？え？今更？遅くね？と俺は内心困惑する。

あれから「兄さん」呼びをしても今までなんにも言っていなかったから、すっかり無効になったと俺は思っていたのだ。

「——『兄貴』、じゃダメなの？」

少し考えてから俺は言った。ちらりと兄の方を見れば、冷え切った

その視線でこちらを見下ろしていた。怖いわ。

「駄目に決まってるんだろ。——考える頭があるんなら、もう少し考えてから言う事だな」

「ウオツカは良いのに、ね」

その頭は飾りか？という兄の見下しきつた視線も相まって俺はムツとした。そして、つい口答えするような事を言ってしまった。しまった、と後悔しても遅い。前でハンドルを握るウオツカさんがこっちに振るな、と言わんばかりに顔を青ざめさせている。正直すまなかつた。

兄ははあ、とわざとらしく大きなため息を吐いた。そしてガシガシとその銀色の長髪を苛立たし気に掻きむしる。

「……俺がお前の血縁だと知ってるのは、組織でもごく一部だ。俺はテメエの買った恨みを被る気もなければ、面倒事も御免だ。ここまで言えばいくら馬鹿だって分かるだろう？」

ああ、なる程。お互いの為にも他人のフリをしようぜ？というアレですねと俺は頷く。超ポジティブ解釈をすれば、圧倒的に恨みを買っている兄の面倒事に巻き込みたくないとも取れるね。これなんてツンデレかな？と俺は死んだ目で現実逃避をする。

「だからウオツカ。テメエもこいつを特別扱いするな。——こいつはただの使える駒。手駒で充分だ」

「えっ?! い、いやでも——」

「分かったな」

「わ、分かりやした」

兄のめっちゃドライな発言にウオツカは言葉を詰まらせる。ウオツカの躊躇いにジンの兄貴の威圧が止めをさす。冷や汗をたらして了承するウオツカに俺はなるほどこれがパワハラかと戦慄する。一般企業の比じゃねーな黒の組織のブラックさ。

「——で？」

お前は分かったのか？と兄の視線に俺はこくりと頷き一つ。

「つまり、ジンって普通に呼べばいいんでしょ？」

「ああ。——お前、いつもその口調なのか？」

他の幹部にもか？という兄の言外の問いに俺は頷きで肯定する。何を今更。ジエネヴァ君のキャラは昔からこうでしょうに。

俺の肯定に兄は渋い顔をした。なんか不味い物でも食べたかのようなしかめようだ。

「……長生き出来たもんじゃねーな」

ぼそりと付け足された兄の言葉に俺は眉をひそめる。そんな縁起でもない事言わないでくれ。切実に。兄貴に言われると現実になりそうで嫌だ。

このタイミングでこれ言い出したのも、あれだな。組織のお仕事の時のジエネヴァ君は基本単独行動だったから、ジンの兄貴達と会う事もなかったからだな（後俺が意図的に会わないように避けていたものもある）。これから全く会わないって事はないし、一応釘を刺しておくという兄の思惑だろう。多分。

んん？でも待てよ。俺は思い浮かんだ疑問を口にする。

「他の誰が知ってるの？俺と兄さんの事」

組織でもごく一部って大分ぼんやりしてるっていうか、出来ればはつきりさせておきたい。今後の対応も変わるからだ（主に潜入捜査をしていらっしやる人達に対するアレコレだ）。

「ああ、それか。あの方次第だが……。恐らくそうバレル事はねえな」
え、何それ気になる。

「少なくともベルモットは知らねえ筈だが」

「へえ」

ほほう、あのベルモットさんが知らないとかこれ思ったより知られていないんじゃないかね？と俺は少し安心する。この兄が俺の死亡フラグだのなんだの言ってるのはその恨みを買うスタイルのせいでもあるからね。ほらアイリツシユさんの件とかその最たる例じゃないか。

「後、テメエは大人しくしてろ。あんまり目立つようだと——」

へ？と俺は思わず瞬きをした。俺の意外そうな顔にジンの兄貴のしかめっ面が最高潮になる。具体的に言うとうと眼光の鋭さが刃物並になっただけで、こちらが死を覚悟したくなる顔面だ。

俺の困惑が伝わったのか、ジンは苛々いらいらとしたようにまた舌打ちをする。おおう、めつちや不機嫌だと俺は戦々恐々とした気持ちだ。この車内という、閉鎖空間だとしても俺はめげずにそっと兄から距離をとる。いやこれ以上距離の取りようがないんだけど。

「……なんでもねえ。——後、アイツには近づくな」

不機嫌面のまま、忌々しそうに吐き捨てた兄の言葉に俺は更に困惑を強める。アイツ？誰だ、それ。

「……………アイツ？」

「——ライだ。アイツは、我々のような純粋な黒とは違う。差し詰め鼠色の狗、と言った所か」

待っても追加の情報が出来なそうだったので渋々聞いた俺の間にジンはため息交じりに答えた。ねずみ色のいぬって、これ暗にライの事をスパイだって言ってんだよな？バレンの早くね？

「——了解。けど、ライはこっち側にしか見えないけれど……」

な？気のせいだって、と俺は内心の声を抑えながら言う。言外に証拠もないだろ？と呆れた視線も付け加えておく。俺の冷めた無表情はこんな重苦しい空気の中でも鉄壁の強度を誇っていた。ぴくりとも崩れないし完璧だ。

俺の呆れた物言いにも兄は少しも動じない。むしろ、面白そうに口端を吊り上げて冷笑を浮かべていた。俺は横目に見てドン引きした。ジンの兄貴怖いわ。

「気に食わないのもあるが、それ以上に臭におうんだよ」

「……………」

カツと目を見開いて言う台詞とは思えないが、俺はそれ以上言葉にするのを止めた。どんな臭いなんですか兄貴、なんてふざけた日には次の朝日は拝めないに違いない。

「——奴が何処の狗かまでは知らねーが。俺はこの手の勘を外した事がねーからな。まあ奴が尻尾を出すまではこっちからも手が出せねえのもあるんだがな」

「……………そう」

ギリりと鋭い視線を緩めないジンの兄貴に俺はうすら寒い思いを

しながらも頷いた。殺気をしまおうぜ？俺の胃がキリキリ悲鳴を上げるから、切実に。

原作では確かにライこと、赤井秀一さんは古巣であるFBIとして登場していた筈だ。俺原作に詳しくないんだけど、つまり後で組織を抜ける事になるんだよな。それが本人のミスか、それともジンの兄貴の策略かは知らんけど。

後は会話もなく、気まずい沈黙は目的地に着くまで続いた。冷や汗掻きっぱなしのウオツカさんには大変申し訳ない事をしたと思う。

——俺のせいだけではないと断固として主張したいが。

※※※

兄貴のお気に入りであるクラシックカー、ドイツの雨蛙ことポルシェ356Aを運転するのは、もう手慣れたものだがこうも車内の空気が重苦しくなるのはどうしたことか。昼下がりの麗らかな日の光り、車外から見える長閑な街並みのどかがいつもよりも遠く感じる。

後部座席の二人が問題なのだ。ウオツカは密かにため息を吐いた。

ちつとも似ていない兄弟だ、とウオツカは今でも思う。正直、兄貴からそう言われても信じられないくらいには後ろに座る二人に共通点は少ない。

同じ銀色の髪、同じような色味の瞳。年の差があつてか、背も大分差があつてそれがいっそうジエネヴァの体格を華奢に見せている。兄貴の絶対零度の眼差しにもピクリともしない大物さは、案外似ているのかもしれない。

ウオツカがルームミラー越しでそつと確認すれば、ジエネヴァの温度のない深緑の瞳が見えてウオツカの胃の底を冷やす。ジエネヴァの深緑の瞳の温度のなさは兄貴とはまた別種の冷たさがあるようにウオツカには思えた。

「おい、お前。——アレ、忘れてねーだろうな」

「……………」

「……………呼び方」

兄貴の問いに無言のジエネヴァにウオツカは軽く慄く。凄い度胸だ、と傍観者の立場からウオツカは思う。ウオツカだったらこんな真似はとても出来やしない。それともこれも血縁のなせる業なのか。

「——『兄貴』、じゃダメなの?」

ぽつり、と眩かれたジエネヴァの声にウオツカは思わずむせそうになった。完全に傍観者気取りだったので尚更だ。

兄貴はどう反応するのだろうか、とヒヤヒヤするウオツカをよそに兄貴の反応は通常通りのそれだ。ジエネヴァに向ける眼差しは冷え切っており、こちらにも冷気が漂ってきそうな勢いだ。

「駄目に決まってるんだろ。——考える頭があるんなら、もう少し考えてから言う事だな」

「ウオツカは良いのに、ね」

不貞腐れるようなジエネヴァの眩きにウオツカはこの馬鹿野郎!!と叫びたいのをグツと堪える。こちらへと飛び火するような発言は控えて欲しい。ただでさえ、今の兄貴の機嫌はよろしくないと言うのに。

ウオツカはサアツと頭の血が引いていく音を聞きながら、兄貴の様子を伺う。

大きなため息を吐いて兄貴は、苛立たし気に銀色の髪を掻き乱す。トレードマークの黒のハットのスレすら厭わないぐらいの豪快さだ。「……俺がお前の血縁だと知ってるのは、組織でもごく一部だ。俺はテメエの買った恨みを被る気もなければ、面倒事も御免だ。ここまで言えばいくらか馬鹿だつて分かるだろう?」

なる程、と頷くジエネヴァを横目に兄貴の鋭い目線がこちらへと向く。ヒエツと悲鳴が出そうになるのをウオツカは根性で押さえた。

「だからウオツカ。テメエもこいつを特別扱いするな。——こいつはただの使える駒。手駒で充分だ」

「えっ?! い、いやでも——」

先ほどの兄貴の言葉を聞けば、ウオツカは素直に頷きにくい。あの言葉の表面の棘を除いてみれば、ジエネヴァの方の得の方が大きいからだ。まあもつとも、その件で面倒事が起こるのはご免だ、とも取れるが。兄貴の事だから後者の方が可能性が高いか、とウオツカは少し悩む。

「分かったな」

「わ、分かりやした」

ウオツカの悩みでの言いよども兄貴の念の一押しに負けた。

兄貴の冷たい視線はそのままジエネヴァへと向けられた。

「——で?」

「つまり、*ジン* って普通に呼べばいいんでしょう?」

ジエネヴァお前心臓に毛でも生えているんじゃないのか、とウオツカは我が耳を疑った。サラツと呼び捨てにされた兄貴の名に兄貴ですら呆れ顔だ。

「ああ。——お前、いつもその口調なのか?」

兄貴の問いにジエネヴァは頷き一つ。それは肯定だ。ウオツカはもうこの子供ガキに心配とかいららないな、と思う。見た目の儚さに似合わないぬぬ太さだ。

「……長生き出来たもんじゃねーな」

ため息まじりの兄貴の言葉は心なしか身内を心配するかのような響きがあるように聞こえた。少なくともこのウオツカには。

やはり、兄貴と言えどたった一人の身内は大切なのだろうか。ハンドルを握る手に意識を向けなおして、ウオツカは運転に集中する事にした。

先送りした問題は後々主張してくるものだ

——救いが無い話なんて世界には掃いて捨てる程転がっている。

暗がりの中で声がする。とても聞き覚えの、親しみがあるようなその声はこちらへと投げかけるように言葉を連ねていく。

——何にも出来ないでバッドエンドを迎える。それも珍しくない話だろう。

——例えば、物心つく前に命を落としてしまう子どもだとか。

——例えば、事件や事故もしくは何者かによって取り返しのでない傷を負ってしまうとか。

——例えば、飢えを、痛みを、悲しみを、憎悪を、抱えきれない程に持ってしまふだとか。

ああ、そうだな。俺はその声に同意する。頷けたかどうかも怪しいが、幸か不幸か声の主は気にしないようだった。

——だから、これは「運が良い」内だと思ふんだ。

——あんたもそう思うだろう？なあ——。

はて、この声の主は誰だろうか。俺はそんな単純な事に引つ掛かりを覚え、疑問を大きくする。

確認する為に瞼を開けようとして、俺はそこで気づいた。ああ、これは夢だ。だから目を瞑っていたのか、と。

悪あがきで開けた一瞬に、見えたその人物は。白に近い銀色の髪、深緑の瞳に一切の光が宿らない少年。一歩間違えば少女に見えてしまうその美貌は、それこそ俺がこの世界で一番見知っていた。

ジエネヴァ。

彼がほんのり目を細めてこちらを見ていた。

※

ハツとそこで目が覚めた。俺はガバリと身体を起こす。枕元の目覚まし時計を見れば、時間はまだ午前四時を指していた。悪夢によって乱れた呼吸も少しずつ、落ち着いてきた。

ふうと最後に深呼吸をして、俺は起きる事にする。お湯を沸かしてインスタントのコーヒーでも淹れようと思ったのだ。そして気持ちを落ち着かせよう、と。

それにしても、と俺は未だに感覚の残る先程の夢を思う。あれは、なんだったんだろうか。俺の精神状態が宜しくないから見たのか、それとも深層心理にジェネヴァ君が居て彼が顔を出した結果がアレなのか。うーん、判断に迷うなこれ。

アレコレ考えていたら、電気ポットがお湯が沸いたのを知らせる。適当にインスタントの粉をマグカップに入れてコーヒーを淹れる。

ずっと淹れたばかりのコーヒーを啜れば、幾分か頭の動きがマシになってきた。眠気覚ましに砂糖は入れていない。舌が痺れそうなこの苦みは少し苦手だ。

「あつツ……」

舌に伝わる熱さにぼやきつつ、俺は再度物思いに耽った。つーか、あの夢が俺の心理状態の現れだったらヤバくね？と。SAN値の心配をせねばいけないだろうか。いやだな、そんな理由で精神科に通うとか。

ああでも、俺よくよく考えてみたら――。

「あれ、もしかして名前も知らないんじゃないか」

よく考えなくてもその通り。俺は、ジェネヴァ君の本名どころか、使っているであろう偽名も知らない。常々記憶なんとかしないとやばいかな、と思っていたが、予想以上に詰んでいる状況だ。経歴以前の問題である。

その内、このふぎけた状況も元に戻るかと思っていたがそう都合のいい話はないらしい。このジェネヴァ君の、細い身体に違和感を抱かなくなってきた。それだけの月日が経っているのだ。

三カ月。もう、と言うべきかそれともまだなのか。けれど、目を逸らして生きていくのもここらで限界だ。

俺は知らなくてはいけない。少なくとも知る努力をするべきである。

生年月日、名前という基礎情報から、何故組織に入らなくてはいけなかったのか。その理由と彼が辿った過去の足跡を。その欠片でも。

何故なら彼は架空の人間ではなく、少なくともここに生きていた一人の人間だからだ。「俺」とは違う、一人の人間なのだと愚かにも夢を見て思い出したのだ。

「まずは、家の中からかな」

実は俺はそこまでこの家を真剣に探索していなかった。なんとなく、触れてはいけない気がしてジェネヴァ君の日記もさほど読み込んではいなかった。言葉に表すならば、罪悪感に似た感情だった。

けれど俺はその遠慮をもう止める事にした。流石にこのままだと命が危うい気がした。能天気の俺でもそれくらいは分かる。ジンの兄貴の前での失言は物理的な命の危機である、と。

どうでもいいが、俺の座右の銘は「思い立ったら吉日」。つまり、判断がついたら行動は早いのである。

あふ、と俺は欠伸をかみ殺す。窓から注す光の眩しい事か。まだ朝の十時ちよつとだから仕方ないけれども。

組織の施設の廊下をいつも通り歩いている所だった。表向きは普通の一般企業だったりするもんだから怖いよなあと他人事のように考える。

今日の予定は午前中の訓練を消化したのち、解散。そして夕方から

薄暗いお仕事となる。薄暗いと言っても、警察などの公共機関を頼れない脛に傷を持つ人物の護衛——言ってしまうえばいつものお仕事だ。なんでそういう人に限ってお金持ってるのかね、と俺は少し荒んだ気持ちになったのは内緒だ。組織のパトロンなのだから面倒臭い。

毎日のストレスは流石黒の組織、ブラック企業すら目じゃないくらいのアレである。生死に関わるお仕事（物理）とかね。ほんともうねーよと俺の語尾も思わず震えてしまうくらいだ。後、忙しい時とそうじゃない時の落差とかどうにかならなかな、と思う次第である。お昼も食べる暇がない時はうっかり兄貴を恨めし気に睨んでしまって死亡フラグの強化とかいうつらい展開がついこの前あったし。

それは兎も角、先日の衝撃の兄貴呼び禁止事件からもう三日とか月日は早いですね。つらい。あれ以来俺は如何にジンニキを呼ばないようにするかと苦心している。日本語ってホント便利。……最終手は無言のジェスチャーに頼るしかないと俺の胃の限界が試されているような心地だ。この年で胃痛の悩みとかブラックジョークにもならないわ。

懸案事項はあれか、ライの事だろうか。まさかNOCだとばれてるだなんて。まあジンニキも怪しんでいる段階で、言いがかりも甚だしいから実行段階じゃないんだろう。……なんで俺、原作生存キャラの心配をせねばならんのだろう。死亡フラグ的に原作に居ない分、俺の方が心配だわ。

ジンに釘を刺されてしまったのもあるが、ライは俺——ジェネヴァと関わらない方が良い気がする。勘に近い感覚だが、間違いではないだろう。関わるにしてもジンの兄貴の目は今まで以上に気をつけるべきだろう。

じゃないと、原作の大まかな流れすらクラッシュしてしまうような気がする。クラッシュユって言うか大惨事間違いなしだ。

と、そこで俺は前方を歩く金髪の後姿に気づいた。ここは組織の射撃訓練場も近いし、まあ居ても可笑しくはないだろう。それにしても組織の施設ってなんで観葉植物の類が少ないのだろうか、蛍光灯の光を反射する白一色の廊下は清潔感があるが無機質さが一層際立つよ

うな気がした。

あの後姿バーボンだよな、と俺は冷静に思ったがふと先日の妖精さん呼びを思い出した。よっしゃ、ちょっくら復讐してやろう。

「お兄さん」

「うおっ!? って君か、ジエネヴァ。何かありました?」

そつと気配を消して膝カツクンしてやったら、数歩たたらを踏んであっさりと体勢を立て直した。バーボンのハイスpekクさに俺は内心ギリイツと歯噛みしておく。くっそ、イケメンは無様な姿を見せないのか。転んでくれ。

「……お兄さん、随分愉快的な呼び名で俺を呼んでいるらしいね?」

「——呼び名?」

俺のおうおう、随分な仕打ちじゃねーかという言葉に最初怪訝そうにしていたバーボンだったが、やがて合点がいったのだろうかその顔を少し歪めた。おう、思い出せて良かったぜと俺は頷いておく。

「……もしかして、妖精とかそこら辺の事かい?」

大分気まずそうなバーボンの確認に俺はまた頷く。バーボンはがっくりと肩を落とした。お、珍しいなと俺は瞬きする。

「違うんですよ、それ。——違うというか行き違いがあったと言うべきか……。まあ忘れて下さい」

「?……そう。まあもう言わないならそれでいいけど」

げんなりとしたバーボンの呟きに俺は首を傾げながらも譲歩する。もう妖精呼ばわりしないんだったら許してやんよ、と。

「——ありがとうございます。今度お詫びに奢りますね」

「え」

「どこが良いですか?イタリアンとか、フレンチとか。ああ、スコッチが和食に連れて行ったんだったら他がいいですよね?」

こつちの返事もお構いなしに並びたてられるバーボンの言葉に俺は口元が引きつりそうだ。このコミュ力カンスト勢め……。

「……行くなんて一言も言っていないんだけど」

「まあまあ、君に不快な思いもさせてしまった事ですし。少しは挽回させてください」

「——貸し一つにしておく、というのは」

「ははは、この業界に『貸し』にしておく事程怖いものはないよ」

ですよねー。俺のせめてもの抵抗の提案はバーボンの笑顔の言葉にサラリと躲される。まあ明日が命日、って言われても可笑しくない世界だもんな、と俺は頷いた。

「……まあ、分かったよ」

「よかった。それで、何処が良いですか？」

渋々と頷いた俺にバーボンは眩しい笑顔のまま要望を聞いてくる。
……奢るって言われてもなあ、と俺は少し考えた。

バーボンはおそらくは俺から組織の情報やら兄貴の情報やらが欲しいのだろうと思う。何せ俺は現時点で組織の幹部最年少。年齢が低ければ、それだけ難易度が下がると思われても致し方ない。それが俺の立ち位置がこないだの接触では釈然としなかったか。

……言っただけどなあ。と俺は初対面での光景を思い出してちよつと現実逃避したくなった。やっぱり自己申告でのモブ宣言は受理されなかったようだ。モブというか、あまり実力はないよーとマイルドに言っただつもりだったんだけど。

「場所か……。じゃあ——」

繰り返された俺の願いに、目の前の完璧な笑顔は崩れた。ぽかんと崩れたその間抜け面は少し笑えた。

あれよあれよと状況が整えられて、俺はリア充の怖さを知った気がする。なんでそう言えば連絡先知りませんか？からの交換しましようになるのか。余りも流れが自然過ぎて俺はうつかりメアド交換に応じてしまった。まあメールアドレスや携帯の番号なんて所詮変えれば済む話だしね。

結局、明日のお昼を一緒にとる運びになった。俺の気分は不良番長に体育館裏にお呼び出しをくらった哀れな下級生並だ。つらい。ア

レだよな、精神的にボコられるのは覚悟した方がいいよな？

出来れば平穩に終わってくれないかなーという俺のささやかな願いはなんというか意外と叶えられた。てつきりスコッチとタツグを組んでアレコレ根掘り葉掘り聞かれるかと思っただけ、そんな事はなかった。

先の俺の願いというのはテイクアウト系で休憩所とかで食べようぜ、というものだった。

正直、お店で個室系とかだとちよつとした尋問とかになりそうだし、それでもなくてもこの目立つ金髪イケメンとお食事とか俺にとつては罰ゲームもいい所だ。本当はバーボンに何か作ってくれという無茶ぶりもほんの少し考えたがそれは流石に命が惜しいので脳内で却下した。公安の皆さんが待ち伏せとかあり得るじゃないか。逮捕工種はご免である。

だから組織の喫煙所の近くの休憩所という選択をした。俺のささやか過ぎる嫌がらせだ。時間も長引かないだろうし、俺天才じゃね？と自画自賛しておく。

けれどそれが習慣化するだなんて誰が思うだろうか。

組織の施設は結構設備が整っている。当然喫煙室、喫煙スペースが一応設けられている。そこに机と椅子が数個設けられていて、そこが休憩所となっているのだ。まあ組織の人間ってヘビースモーカーが多いので、喫煙スペースとか関係なしに皆スパ吸っているから一応という言い方をした。

このスペースに座ってぼんやりと煙草を吸っていたりする姿も見かけてもいたので休憩所としては一応機能している、そんな場所だった。

「君って意外と欲がないんですね」

ポツリ、とバーボンが呟いた。もふつと彼が咀嚼するのは美味しそ

うな玉子サンドで、そっぴやアニメでこの人美味しいハムサンドとか作っていたなと俺は懐かしく思った。

もうこの奇妙なランチタイムも三回目を数えた所だ。毎日ではなくて、バーボン達と予定が合えばというスタイルなので週に一回あればいい方だ。

なんでこんな事になったのかね、と俺はげんなりしながらも答える。

「……欲？」

「おいおい。いきなりどうした、バーボン」

「いきなりでもないんですけどね、スコッチ。コレの始まった経緯とか思い出したらついで、ね」

「ああ、アレだろ？——休憩所でいいなら、って奴」

「ええ、それですよ」

首を傾げる俺をよそに、友人同士バーボンとスコッチが話し合う。俺は自分で作ってきたおにぎりを齧りながら、居心地悪くて目を逸らした。ちなみにスコッチの手元にはコンビニで買ったような総菜パンが三、四つ置かれていた。コロツケパンが美味しそうではんの少し羨ましい。

口に頬張った米を咀嚼してから俺は頭を横に振る。

「そんな事ないよ」

「そうかい？」

実際、俺は後ろ暗い人間だ。真っ黒なこの組織の人間らしく、自分が生きる為に暗殺すら全うしてしまうそんな人間だ。自分の命と他人の命を天秤にかけて、それでも自分の方をとってしまう、そんな選択を何度か繰り返している。こんな風に五体満足で、美味しくご飯が食べられるだけでも十分欲深いだろう。

そんな俺の自嘲が無表情の下からもれたのだろうか、ボンと俺の頭を大きな手が軽く撫でた。驚いた俺が見上げれば、スコッチが少し困ったように笑った。そのままぐしゃぐしゃと掻き撫でられる。遠慮ないそれに俺の頭はぐわんぐわんと揺られる。

「!?」

「ははは、まあ人生は長いんだ。徐々に見つけなければいいさ」

「スコッチ、止めてあげてください。目を回しているのが分からないんですか?」

「うおっ!? 悪い、大丈夫か? ジェネヴァ」

遠慮なく俺の頭を撫で繰り返しスコッチを止めてくれたバーボンに俺は感謝しつつ頷く。スコッチの悪気はないのだと知っていても、耐性がないジェネヴァ君には別の優しさをお願いしたいところだ。なんの耐性かって? アレだよ、家族とのほのぼのとしたやりとりとかだよ。くっそびつくりしたわ。

「……平気」

「そっか」

乱された髪を手櫛でさっくり整えた俺にスコッチはホッと息を吐いた。とても子供扱いされているような気がする。

「そう言えば聞きましたよ。君、今ジンの下に付いているそうじゃないですか」

サラツと世間話の体でバーボンが俺に話を振ってきた。お、ついに来たかと俺は少し心を落ち着かせる。俺の鉄仮面つぷりはジンの兄貴とのやり取りで保証されているものの、目の前にいるお二人さんは公安警察の精鋭だ。つまり、下手な嘘は効かない。

「まあね」

「大丈夫か、一応アレだろ。危険な任務ばかりだろう?」

いつも通り、淡々と頷く俺にスコッチが心配そうな声で問う。バーボンの方もスコッチに同意するように頷いている。

「別にそうでもないよ。……バーボンには言っただろうけど、俺まだコードネーム持ったばかりだし、下っ端だからね。そう大役を任される訳でもないよ」

「そうかい? まあ、一応我々の方が先輩な訳ですから、困った事があつたら一言相談してもいいんですよ?」

静かに語った俺に微笑みながら優しく助言をするバーボンは原作を知らない者から見れば思わず頼ってしまう程違和感がない。元から人当たりがいいからなのか。これがコミュニケーションの力か、と俺

は内心感心する。

まあ、俺はこのバーボンが原作時にはトリプルフェイスをも使いなす演技力だと知っているから絆されたりはしないけど。いやまあ、いい人だとは思っている。

「そうだぞ、ジェネヴァ。こういう業界だから、伝手は大事だよ。それに、話半分に聞いておけばいいのさ」

「話半分は酷いな」

無言の俺に気を遣ったのだろうか、スコッチの軽口のフォローが柔らかにされる。バーボンは苦笑気味に肩を竦めた。

俺は二人の眼差しにまだ敵意がないのを見て、肩の力を少しだけ抜く。この二人もまだ様子見ぐらいのものだろう。

「ありがとう。——万が一の時は相談させてもらおうかな」

「万が一、か。怖いですね」

「はは、自業自得だな。バーボン」

「違くない」

表面上は和やかな会話に俺はおにぎりの咀嚼を再開させる。表面上、じやなくて普通に仲良しだね、この二人。今日の夕飯は何にしようカーナー。

「ところで、ジェネヴァ。君、今銃を持っていないようですけど普段もそうなんですか？」

「は？」

え、なんでそんな事分かるの、この人。俺の思考の半分は今日の夕飯に占められていたので、反応にちよつと素の部分が出てしまった。

そう、俺は基本的に銃を携帯していない。勿論、物騒な組織のお仕事の際はちよつと組織の武器庫から拝借している。ので、さほど困っていないし、まあいつかと今日まで来てしまっていた。やっぱり、愛用の拳銃とかは買うべきなのか。でもなあ、大抵ジェネヴァ君のこのクソ高い身体能力でなんとかなってしまうし。銃弾、くらいならばある程度は避けられる上に直前に勘で分かる。……ライフルでの狙撃も避けられるなんて地味に凄くね？俺の勘。

食後に缶コーヒをちびちび飲むバーボンの隣でスコッチが右手

で銃のジエスチャーをやりながらしたり顔で頷く。

「まあ、ちよつと分かるけどな。外でバレたら面倒なものなあ」

そりゃあここ銃刀法なんてものがある日本ですし。俺は心の中で同意する。

スコツチの言葉にバーボンは渋い顔をした。

「面倒の一言で命の危険、なんて笑えませんよ。……でもまあ、君くらい優秀なら銃なんて要らないくらいになるのかな？」

「……………」

ねえ、ジエネヴァとバーボンがにこやかな笑みのまま、小首を傾げる。心なしか、お前下つ端なんて嘘やろというバーボンの副音声が聞こえてくるようだ。俺は内心冷や汗が止まらない。あ、これ諦めてないッスわ。と俺は悟って思わず魂を飛ばしそうになった。

思わずスコツチに視線を投げる。黙ってないで助けろ、と。スコツチは少し肩を竦めた。助ける気はないらしい。

大人げない、と俺がため息を吐いても誰も責めないだろう。

「——ただ単にうっかりしてしまっただけだよ」

「うっかり？」

俺が観念して本音を言えば、バーボンは目を見開いて素直に驚いているようだった。思わず俺の言葉を反芻してしまう程度には。おい、イケメン口開いているぞ。

「流石に仕事の現場じゃあ持つていつているよ？」

信じられない、こいつみたいなのが耐えられなくなって、俺は渋々付け足した。ぼそぼそと尻すぼみになる俺の言葉にスコツチの方が呆れたように片手を小さく振る。

「いや、それ当然だろ」

お兄さん、ちよつとソレ心配だわと眉を下げるスコツチにその隣のバーボンが無言で頷く。バーボンの真顔とかレアだな、と俺はどこか空回った思考をする。

「とにかく、君はもう少しちゃんとすべきですね。余計なお節介かもしれません」

「うん、なんかごめん……」

バーボンのため息まじりの真面目なお説教を俺はただ頷くしかなかった。そんな残念な奴を見るような目で見なくてもいいじゃないか。

「ただいま」

一人暮らしをしていると独り言が多くなるのが難点だなと思いつつ、玄関を開ける。現在時刻は午前三時。もう一度言う午後じゃないの？と、午前三時である。こんな時間まで働けとか馬鹿じゃないの？とうっかり口を滑りそうになっても仕方ないと思う。まあそんな生き急ぎ野郎じゃないからしないけど。身長伸びなかったらマジ恨むとは思っている。

まだマシな部類のお仕事だ。そつなくこなせば血を見る事なく片付ける事が出来る。命がけって言うのがちよつと、と思いはしても俺は文句は言えない立場だ。つらい。

シャワーを浴びて、ラフな姿（Tシャツと短パン）に着替える。髪も雑に乾かせば、後は眠るだけとなる。いつもだったらベットにダイブして二秒で夢の住人となる訳だが、今日はもう少し頑張る事にする。

突然であるが、ベッドの下と言われて何を連想するだろうか。ましてや、それが中学生ぐらいの少年のという前振りが付くと俺は一択だと思う。青少年の嬉恥ずかしな欲望の現れだったりする訳だ。

……話が逸れた。それを踏まえて、ジエネヴァ君のベッドの下にあつた物はなんでしょうか？

答えはトランクケースでした。わー、ぱちぱちってなんでやねん!! 俺は脳内でノリツツコミをこなしつつ、つい先日の朝の思い付きでの探索結果を眺めていた。ヤバい疲れでテンションが可笑しな事になっている。かと言って俺は通常の低いテンションでは確かめら

れない小心者だ。

ベットの前に引つ張り出したのは、旅行とかで便利なトランクケースだ。人間一人ぐらいはギリギリ詰められそうな大きさで、ジエネヴァ君の持ち物じゃなければ旅行好きなんかなで話は終わる代物だ。要は怖くて開けられないのである。中身は空じゃなく、ずっしりが入っていたからだ。なにこれ怖い。

気分はそう、禁断の箱を空ける患者の如く。ごくりと生唾をのみ込み、いざと気合を入れて留め金を外せば、トランクケースはパカリと口を開ける。

「こ、これは——」

俺は思わず震える手で、中身を一つ手に取った。ズシリと重い金属特有の重さ。安全装置を外せばいつでも人の命を奪えるソレ。

拳銃が一丁（自動拳銃のガバメント、M1911が正式名称らしいが）、その弾倉が^{マガジン}数個。それとジエネヴァ君の物と思われるパスポートが一つとファイリングされた資料が余りの空間を埋めていた。銃刀法違反じゃないですかー、やだーと可愛い子ぶってみても今更だよなあ……と少し遠い目をしてしまった。

後はパスポートの中身も確認しようと思は手に取ってから表紙をめくる。そこにはジエネヴァ君の写真と名前が記されていた。あー……、と俺はまた天井を仰ぎたくなつた。
「これどう見ても……」

偽名だよなあ？俺はその名前を見て苦笑いを浮かべそうになつた。勿論、この素直じゃない表情筋はピクリとも動いちゃくれなかつたが。

黒野 静。静かと書いて「せい」と読むらしい。少し珍しい名前だな。

それにしても「くろのせい（黒の所為）」とか。

ギャグかな？と当の本人である俺が思っても仕方ないと思わないか？いや、まあこの名前を馬鹿にしている訳でも、嘲笑っている訳で

もないよ？ただ、偽名だったら名付け親出て来いよと複雑な気持ちを抱いても許してほしい。

例えばそれが仮の名前だとしても、一步前進だ。何も分からなかった時よりもマシだ。

とそこでマナーモードにしていた携帯が机の上で震動していた。出なかったら結構まずいので俺は慌てて携帯を手に取り、通話ボタンを押す。

『遅い』

開口一番のブリザードに俺の心が一発重傷になりそうになった。端的に言って挫けそうである。ただでさえ、このクソ遅い時間なのに。時間の概念がないのか、こいつと寛容的な俺でさえ悪態をつきたくなるものだ。

「ごめん……、少し寝てたから」

グツと堪え(偉い俺という心の激励も忘れない)、俺は電話向こうのジンに謝る。

『チツ。まあ、この遅い時間だから仕方ないか。——明日の仕事の話だが』

「え。オフの予定じゃなかったの……。少なくとも、午後からだよね？」

時計を見れば時計の短針は四を指していて、今の時間が夜明けに近い事を知らせていた。それで俺に朝から働けとか鬼畜な事言われたらジエネヴァ君死んじやう、とちよつとひやひやしながらジンに何う。

『はあ……。安心しろ、そんな事は言わねえよ。チビのままでも困るしな』

ため息を吐きながら、暗に俺の身長的事を揶揄うジンの兄貴に俺はグツと言葉を詰まらせた。それが、電話口に伝わったのだろうか。少し間を空けて、クツクツと低く笑う声があった。

『なんだ、気にしてたのか。可愛いところもあるじゃねえか。まだガキだなア、お前』

「なっ」

『心配しなくてももう少しで嫌でも伸びるだろうさ。俺の弟だしな』
まるで子供を宥めるような口調のジンに俺は反論しようとして口を開けた。だが、その反論が形になる前に電話口から柔らかな低音が聞こえた。

正直、誰だお前と言わずにいられないような、家族に、大切な何かに声をかけるような、じんわりと温まるような優しさがそこにはあったような気がした。

『さて、無駄口はここまでだ。ジェネヴァ。——明日の午後からだだが、どうという事はない。いつもの仕事よりは簡単かもしれねえな』

俺が思わず言葉を失っていると、電話口の温度は戻る。寒暖の差がジェットコースター並である。

『助っ人、か。簡潔に言ってしまう。後で詳しい事はメールで送るが、そのメンバーが——』

電話で告げられた仕事仲間の名前に俺の口元が引きつる気がした。

え、マジですか。それ。

見える世界が全てなものか

「知っているか？そもそも、妖精って不吉な意味合いもあるという事を、さ」

「へえ、そいつは知らなかったなあ」

バーボンの言葉にスコッチはわざとらしく肩を竦めた。こいつ、とバーボンは白けた目を向ける。

そもそもの始まりはスコッチの「バラしちゃった、ごめん」とてへぺろと軽い調子で爆弾さながらの発言を落とされた事からだ。潜入捜査中の少ない息抜きも兼ねた情報交換の場だというのに、この旧友は何を考えているのか。バーボンは考えるだけでも頭が痛くなってきたが、起きてしまったのは仕方ない。今は挽回策を考える方が先決だ。

「……有名どころだと悪戯妖精とか、その辺なんですけれどね」

「ああ」

「あの子、組織でも結構異質なんですよ。調べれば調べる程、記録が少なくなっていく」

バーボンの得意とする所は情報収集の技術だ。それ故に組織でも情報に関して、仕事ができるし、ちよつとした伝手も出来てきた。だが、あのジエネヴァという少年は得体が知れない。

組織のトップであるあのお方、そしてN.O. 2であるラムよりかは不透明じゃないが、その出自も不明な上にあのジンに関わりがあるとされる人物だ。更に十三歳という異例の若さでのコードネーム持ちだ。その異質さたるや科学者であるシェリーと同等か、またはそれ以上か。

組織の最年少の幹部。その肩書に添うような実力者なのか。それに、あのジンとはどういう関係性なのか。

「——まあ、気になると言えば気にはなるか」

考えこむバーボンにスコッチは同意するように二度三度頷く。

「ええ、過去になればなる程あの子の記録はなくなる。出自なんて適当なものですよ」

「まあ、こんな組織なんだし、ただの孤児という可能性もあるだろう」

「それはそうだが……。まあ兎も角、スコッチ」

「ん？」

そこで言葉を切ったバーボンにスコッチは首を傾げた。

「あの子に近づく時は気をつけろ。——状況が不穏過ぎる」

「了解。……本人じゃなく、周りがねえ」

「そう言う事です」

警戒には警戒を重ねる。それがし過ぎる程度が丁度良い。じやないといこの手から命はこぼれ落ちていく。それをバーボンは嫌と言うほど知っていた。

まるで幽霊のような、そんな希望のなさを感じさせる少年だとジェネヴァを例えたくはなかったのだ。だから、言葉を誤魔化した。バーボンはやるせなさでグツと唇を噛みしめた。

調べた手元の資料には、ジェネヴァになる前の少年の歩んできた過去の概要が載っていた。とはいえ、あらすじのようにぎつくりしたもので、取りこぼしもあるのだろう。それでもここに書かれている事は事実だ。反吐が出る。

硝煙の臭いが日常だったあの少年はこの先どんな未来を辿るのだろうか。

分かりきった答えでも、割り切れないでいる。何年この仕事を続けても、この葛藤は消える事のないバーボンのジレンマだ。日本という平和を謳う国を守るためにと齒を食いしばる事しか出来ない無力感もまた同じだ。

深入りし過ぎないように気をつけないと、バーボンの微かな自嘲の笑みはスコッチの無言のド突きで消えた。

「馬鹿、何一人で背負っている気であるんだ。仲間だろ？」

「！」

「あんま抱え過ぎんなよ。お前の悪い癖だぞ、ソレ」

しかめっ面のスコッチはバーボンの眉間を人差し指で指し示す。

指摘されて初めてバーボンは己の眉間の皺に気づいた。旧知の仲のスコッチの前で気が緩んだせいか。少し気恥ずかしくなりながらもバーボンはゴホンと咳を一つして空気を誤魔化す。

「まあ気をつけるよ」

「はは、まあ思い出すのは偶にでいいさ」

お前の背中を守る奴が居るって事を。スコッチの言外の願いにバーボンは頷き一つで応えた。

そんなやり取りが数日前。バーボンは出来れば今助けに来てくれないか、スコッチと今この場に居ない友に心の中で助けを求める。無駄なのは分かっているが、それでも悪あがきをするのが人間だ。

「お兄さん」

「うおっ!? って君か、ジエネヴァ。何かありましたか?」

後ろからの膝への衝撃に危うく体勢を崩すところだったバーボンが後ろを振り向けば、そこには先日話題に上がった少年が佇んでいた。その無表情の中にも悪戯を成功させた子どものような無邪気さが滲んだような気がした。

それにしても、一切の気配がなかったのはバーボンとしては空恐ろしさを感じざるを得ない。そういう動揺を心の奥底に沈めて極めて平静を装ってバーボンが件の少年、ジエネヴァに用件を尋ねる。

こてりとジエネヴァが小首を傾げ、

「……お兄さん、随分愉快的な呼び名で俺を呼んでいるらしいね?」

「——呼び名?」

微妙に凄味がある問いをする。バーボンはそんなジエネヴァに少し嫌な予感がした。

「……もしかして、妖精とかそこら辺の事かい？」
嫌な予感をそのままにバーボンが答えれば、ジエネヴァは淡々と頷く。

そしてこの冒頭の心の中のスコッチへの救援を求める独白に繋がる。いや、そもそもこの茶番染みたりりの原因が奴だったと、バーボンが気づきガツクリと肩を落とした。

「違うんですよ、それ。——違うというか行き違いがあつたと言うべきか……。まあ忘れて下さい」

はああああ、とバーボンが肺の中の空気を吐き出しながら後悔の滲む弁解をする。後にも先にもこんな醜態はない。覚えてろ、スコッチと先日てへぺろと謝っていた友をバーボンは恨めしく思った。

「?……そう。まあもう言わないならそれでいいけど」

そんなバーボンの内心の悔やみを知らないジエネヴァは深緑の瞳をきよとりと瞬きをした。珍しい、と無表情の中でも浮かんでいた。

もしかしたら。バーボンの脳裏に閃きが一つ浮かんだ。

「——ありがとうございます。今度お詫びに奢りますね」
「え」

「どこが良いですか? イタリアンとか、フレンチとか。ああ、スコッチが和食に連れて行つたんだったら他がいいですよね?」

につこりと人の良い笑みと共にジエネヴァを誘えば、あの無表情が呆気にとられたように崩れた。

それは刹那の乱れ。直ぐにいつもの無表情に戻る。だからこそ、目の前の少年が感情がある事を雄弁に教えてくれる。

「……行くなんて一言も言っていないんだけど」

「まあまあ、君に不快な思いもさせてしまった事ですし。少しは挽回させてください」

「——貸し一つにしておく、というのは」

「ははは、この業界に『貸し』にしておく事程怖いものはないよ」

にこにこことバーボンが笑顔で押し切れば、澁々と頷かれた。意外と感情豊かなのかもしれないな、なんてジエネヴァの印象を心の中で改

める。

「……まあ、分かったよ」

「よかった。それで、何処が良いですか？」

事が上手く運んだ事に少し気が緩んだのかもしれない。とバーボンは後に回顧する。

笑顔のまま、ジエネヴァに答えを促せば、少し考えた後に口を開いた。

「場所か……。じゃあ——」

ジエネヴァの口から出たその願いにバーボンはぽかんと先程のジエネヴァと同様に表情が崩れた。

それにジエネヴァが心なしか満足そうに目を細めた。

生意気だ、とバーボンは反射的に思うものの、組織の仕事の時のあの凍てついた無表情よりは遥かにマシな表情だった。

まだ黒に染まりきってはいない、得意げな子どもみたいな表情の方が。

結果としてはあの少年が少し心配になってしまった。連絡先を簡単に入手出来てしまったのも、こんな組織のそれも荒事を担う人間なのに銃を持ち歩かないのも、バーボンは本来の立場を忘れお説教染みだ小言を呈してしまったほどだ。

バーボンは誰も居ない、廊下のため息を吐く。この後すぐに次の仕事に取りかからないといけない。仕事の合間の小休憩だ。今丁度昼

時だが、簡易的な物しか摂れそうにない。スコツチにも手伝ってもらっても仕事が減らないのは如何なるものか。裏も表も両方忙しいのがいけないな、とバーボンは更にため息を重ねそうになった。おまけに今表の顔を一個増やしたから尚更か。『安室透』という探偵の顔を。

とそこで、携帯がマナーモードで震えているのに気づいた。さて、着信先は、と見ればそこにはジンの名があつてバーボンの憂鬱さが増した。組織の幹部の中でも、ボスの覚えがめでたいジンは何かと厄介な男だ。野生の勘かと問いたくなるほどに組織の敵を察知する能力が高い。おまけに組織の中で有能な部類だ。

出ない訳にもいかないので、バーボンは通話ボタンを押す。

「はい」

『夕方からの仕事に変更点だ。——ライの野郎がそつちに出れなくなったから代わりの奴をよこす』

要点だけを伝えて、じゃあなと電話を切りそうなジンにバーボンは待ったをかけた。

「ちよつと待ってください。その助っ人、とはどの方を？こちらの顔見知りですか」

『あ？どうだろうな。奴を知ってるかはこちらが知った事じゃないが。——ジェネヴァ。名だけは聞いているだろ？』

「え、ええ。コードネームを持った最年少の子ですよね」

『ああ。それなりに使える奴だ。好きに使い』

それなりに使える、とはジンにしては珍しい評価だ。バーボンは内心驚きながらも少し複雑な気持ちもあつた。まるで道具のような物言いだ、と。けれどジンの性格からしてみれば仕方ないか、と諦めバーボンは頷いた。

「分かりました。では、予定通りに」

『ああ』

ピツと切れた電話、その黒くなった画面をバーボンは睨む。それも数瞬の事で、それを振り払うように頭を軽く振った。

しつかりしろ、降谷零。己に言い聞かせ、次の手筈へと意識を向け

た。まずはもう一人の仕事仲間のスコッチに連絡を入れる事から始めようか。

夜の街並みはいつも通りの平穏さだ。現時刻午後七時。ビルの並び建ち、それぞれが光を持ってまだ人々が起きて日常を消化している事をこちらへと教えてくれる。道路も車のヘッドライトが照らし、完全な暗闇に吞まれることはない。それが都会なのだと言えばそれまでの話だ。

首都から離れ、隣の県の境界を越えた。少しばかり遠出の部類となる。車で二、三時間かかる距離と言えば分かるだろうか。

ハンドルを握り、仕事へと向かう静かな空間の中、バーボンは少し物思いに耽っていた。

さて、今回の仕事の話をしよう。仕事をしくじった別の組織の人間の仕事——尻拭いだ。しかもそれが面倒な事に相手側の警戒を強める結果で終わった仕事だ。なので、慎重に事を進めないといけない。組織の末端の一人がうっかりと、とある薬を暴力団関係者に奪われてしまったらしい。とある薬とは、なんでも毒薬の試作品の一つで人体からその成分が発見されない代物らしい。つまりは証拠の拳がらない、裏の筋から見れば夢のような薬だ。反吐が出る。しかも、まだ動物実験段階の代物だと言うのだから、理解に苦しむ。

そんな物をなんで使おうと思ったのか、バーボンはその組織の人間に悪態を吐きたくなかった。もつとも、しくじってしまった組織の末端の人間はもう既にこの世に居ないのだが。

まだ名前のついていない、その試作品の回収が今回の任務だ。元々、この任務はバーボンの他にスコッチとライの三名によって行う筈だった。だが、別件でライの方に仕事が入ってしまった為人手が足

らなくなった。スコッチと二人で何とかするしかないか、と話を詰めていたところにジンから人手の追加が告げられたのだ。

これから追加人員であるジェネヴァをこれから迎えに行くところだった。現場付近の駅が集合場所となっている。

「確か五錠だっけ？そのヤバい薬の数」

「ええ。まったく、厄介な事をしてくれる」

「はは、まあな」

助手席で今回集めた情報を流し読みしているスコッチが今回の肝の部分の確認をしてくる。バーボンはチラリと視線を投げかけ、頷く。舌打ちしそうなバーボンの苛立ちにスコッチは軽く笑って肯定した。

正直、こんな危険な薬なんて燃やすか、回収して科捜研にでも解析を頼みたい代物だ。だが、誤魔化せるかどうかと言われると答えは腹立たしい事に否と言わざるを得ない。何故ならそこまで組織で信頼を勝ち得ていないからだ。まだ、信頼を得るべく組織に貢献する必要があった。

焦りで全てを水泡に帰すほどバーボンとて愚かではない。

なので、非常に不服ながらこの任務を組織の指示に従うしかない。まだ数はそんなに作られていないという情報が本当なのを祈るしかないのだ。それにこういうのは大元をどうにかしないと解決はしない。

さて、そろそろか。指定された駅の駐車場には足早に移動する乗降客の姿や客待ちをするタクシーの姿が見えた。その内の一人が駅のロータリーの近くで佇んでいた。ジェネヴァは背にギターケースを背負い、黒のパーカーとジーンズという出で立ちだった。背のギターケースがその身体にしては大きく、何も事情を知らない者からすると、背伸びした子どもの装いのように見えるだろう。待ち合わせ故か、その少女めいた顔も晒されていて、少しばかり目立っていた。

と、そこでこちらに気づいたようだ。ジェネヴァはバーボンの運転する車へと手を軽く振った。そしてパーカーのフードを目深に被ってしまう。どうやら人目を惹きつけていたのは、気づいていたよう

だ。

あの子も色々と苦労が多そうだとバーボンはハンドルを回し、ジェネヴァの横に車をつける。スコッチも呆れ顔をしていた。

ガチャリと車のドアを空け、ジェネヴァが後部座席に乗り込む。四人乗りの普通車——組織の所有車で仕事用の車だ。黒塗りの国産車は目立ちたくない任務の時などに使用する事があるのだ。組織の金の払いの良さは謎だとバーボンの密かな疑問だった。

滑らかに発進した車内で、スコッチは後ろを振り向き、ジェネヴァににこやかな笑みを向ける。

「よ、ジェネヴァ。今日は宜しくな」

「……ん。こちらこそ」

「すみませんね。こちらの都合で仕事を増やしてしまつて」

「ううん。そういう時はお互い様でしょ。——で、今日は俺、狙撃手^{スナイパー}をやればいいのか？一応持つてきたけど」

挨拶もそこそこにジェネヴァが本題を切り出す。背に背負っていた、ギターケースを膝の上に抱え直していた。

バーボンはジェネヴァの言葉に頷く。

「ええ。合っていますよ。ライの抜けた穴、なので」

「俺が観測手^{スポッター}を務めるよ、君一人だとちよつと難しい狙撃だから」

バーボンの言葉にスコッチが付け足した。それにジェネヴァが頭を横に振る。

「いや、俺には要らないよ。大丈夫。——スコッチはバーボンの補佐について貰つていいかな。きっと連携も取れやすいだろうし」

「いや、それはツ。……今回は走行中の車への狙撃だ。こちらの車が誘導して追い詰めるから時速は恐らく80から100、いや追い詰められているから100kmオーバーとなるだろう。どうだい、それで君はその小さなスコープ越しで相手のタイヤを撃ち抜けるというのかい？」

ジェネヴァの淡々とした言葉にスコッチが食い下がる。反射的に感情的になりそうなところをグツと堪え、感情論抜き^{感情論抜き}の理屈を述べる。バーボンはそうしたスコッチの言葉を聞きながら、その場を任せ

る事にした。ここはスコッチに任せられた方が利口だ。

今回のジェネヴァの役割は追い詰めた標的の車の足を止めることだ。そのタイヤを撃ち抜き、走行不可能にするのが彼の役目。更に、相手の車のクラッシュする角度の計算も含めて、相手を生存させなくてはいけない高難易度なのだ。もし、タイミングを間違えば、車諸共相手は爆破炎上し、相手から欲しい情報も、試作品の薬の回収も不可能となる。それだと任務遂行としては不十分。プロ失格な上にジン辺りに消されかねない。

そういう懸念込みのスコッチの説得にジェネヴァは表情一つ変えずに頷いた。

「ああ、出来るとも。何故なら、俺はそういう風に出てくるからね」それは頷きでも肯定の意味はなく、強い否定だった。彼が黒の組織最年少幹部、その抜擢理由なのかもしれない。そう確信を抱かせるのに十分な程に揺らぎない響きがそこには含まれていた。

あまりにさりりと告げられたその言葉にスコッチは呆気にとられた。横で聞いているだけのバーボンも思わず耳を疑ったほどだった。

「へ、へえー。随分自信満々ですね」

「そう？俺にはこれしかないからかな。……一応言っておくけど、俺は一人の方が調子出るっていうだけの話だからね？」

引きつく口元を誤魔化しつつ、バーボンがジェネヴァに言えば、平素と変わらぬ声で返された。勘違いしないでよね、と少しぼつの悪そうに後半に付け足されたその言葉はあまりに不器用だった。

スコッチはふはつ、と息をふき出すように笑った。

「わかったわかった。お前さんの思うとおりにすればいいさ。一応、組織の秘蔵っ子な訳だし？お手並み拝見といきましょうかね」

「……一言余計だよ。期待には応えるけども」

むすつとしたジェネヴァのぼやきをスコッチが笑いながら受け流し前を向くように姿勢を直す。

「——決まりました？」

「ああ」

バーボンの確認の言葉にスコッチは頷いた。

ぶおおおん、と車のエンジンの音が響く。時折、急カーブをする時のタイヤのブレーキ音も耳障りに主張していた。辺りは既に住宅地から、まばらな倉庫が立ち並ぶ工場地区の一部へと踏み入っていた。標的の車を執拗に追い回して既に時一時間ほど。標的の男は古巣に帰れない現状をさぞ悔しく思っている事だろう。何故なら、バーボンが事前に調べ上げ、標的の男がそちらへと近づこうとする度に近道を通り、先回りをしていたからだ。スコッチは携帯と手元の地図を見ながら現在の工事状況などを鑑みてのナビゲートをしていた。バーボンはどうせ組織の車だし、といつもよりも八割ほど乱暴に車を運転していたのも標的を追い詰める結果となったかもしれない。隣のスコッチのもの言いたげな視線も無視した。

そろそろか、バーボンはとある地点が近い事を思う。成功してくれよ、ハンドルを握る手の力を強めた。

車のスピードメーターは100kmを超えてた。

川を越えて、現地点から数えておよそ700m——ヤードに直すと765ヤードほど。そのビルの屋上からジエネヴァが狙撃する手筈だった。ただし、川を挟んでいる上に、しかも夜。雲一つない星空だとしても、突風などの悪条件の重なりやすい最悪な仕事に違いなかった。

けれど、当の本人がああも自信満々に言い切ったのだ。ならば、こちらに出来る事は信じる事だけだ。

前を走る標的の車がぎゅおんと更に速度を上げた。バーボンは舌打ち一つ、アクセルを踏み込む。スコッチはマジで？とぎよっと目を見開いた。当然、ここで速度を落としたら怪しまれるし、とバーボンがニヤツと不敵な笑みを浮かべた。

あと五秒で指定地点に標的の車が着く。ここで急ブレーキを掛けられる訳にはいかなかった。隣のスコッチはもうどうにでもなれと言わんばかりに体を後ろに預けていた。覚悟が宜しいようだ。

三、短い刹那のやり取りでもカウントダウンが進む。

二、バーボンはシフトレバーを切り替える。

一、ギキイと車が音をたてる。バーボンは減速とハンドルを切って速度を落とした。直後、パアンとタイヤがパンクする音とギユキイと耳障りなブレーキ音とドンツという衝撃音が作戦成功を知らせてくれる。バーボンの車は傷一つない。車内はハンドルを切った時の遠心力でスコッチが頭を軽く打ったくらいだろうか。

「さ、いきましようか」

「お前なあ……。少しはしやぎ過ぎだろ。普通に痛いわ……」

ぶつけた個所を手で擦りながらばやくスコッチにバーボンは素知らぬ顔をする。知りませんよ、そんなの、と。

さて、と。標的の車は右前のタイヤがパンクした上にその横っ腹を倉庫にめり込ませていた。これでは到底走行は出来ないだろう。そして、オイル漏れもなく、炎上の心配はなさそうだ。期待値以上の仕上がり、ジェネヴァの狙撃の腕は相当上なのだとバーボンの認識が改まった。あの子は、あの年に似合わぬ熟練の腕を持っているのだ、と。それこそ、裏社会の組織に相応しく。

バーボンは懐から拳銃を取り出し、構える。そして標的の車に歩み寄る。後ろに控えるスコッチにも目配せをした。いつでも撃てるように、と。

とそこでバンツと車のドアが開き、飛び出すように若い男が出てきた。彼が、今回の標的だ。

相手の息つく暇もなく、バーボンは距離を詰め、その額に拳銃の銃口を突きつける。

ヒイツと短い悲鳴を上げるその男に構う事なく、冷たい眼差しでバーボンが見下ろす。

「さあ、少しお話をしましょうか。それと、貴方が我々の組織から盗んだ物を返してもらいますよ」

「ッ、まさか……あんたらは」

バーボンの我々、という言葉に男は更に顔を青ざめさせる。どうやら、こちらの正体に気づいたようだ。バーボンはにっこりと笑う事でそれに肯定してやる。ジ・エンドだという事を分かってもらう為に。「分かった。こ、この薬は返す。だからだから見逃してくれよ、なあ！」

男は震える手で懐からピルケースを取り出しこちらに差し出してくる。声も哀れなほどに震え、こちらに縋るような懇願だった。バーボンは無言で男を見下ろす。年の頃は恐らく二十代前半。中肉中背で耳に開けられたピアスの多さや金に雑に染められた頭髪と着崩れた格好とチンピラのお手本のような男だった。

今更命乞いをするならば最初から手を出さなければいいものを。バーボンは苛立ちを抱きながら、スコッチに視線を投げる。回収をと。スコッチは頷き、男の手からピルケースを抜き取った。

下ろされないバーボンの拳銃に男は ははっ、と乾いた笑みを浮かべる。

「くそ、話が違うじゃねーか。誰だよこれが簡単な仕事なんて言ったのは。ちくしょうこうなったらッ」

男の異常な様子にバーボンが視線を戻すと、男がまた懐から物を取り出した。

それは小型のプラスチック爆弾だった。違法のソレは片手で掴める大きさでも、男とバーボンを巻き込んで心中出来るくらいの威力は持っている。しまった、とバーボンが男から一步距離をとったその時。

ドツと鮮血が舞った。バーボンが動いたことで射線に標的の男の頭が出たのだろうか。標的の男の額に風穴があいた。返り血はバーボンまでは届かず、ただ道路を赤黒く染めるのみだ。くたりと力の抜けたその身体に全てが終わった事を悟った。

標的の男が爆弾を取り出してから僅か十秒にも満たない短い時間での出来事だった。命の価値、そういう倫理観を抜きにした評価でものを言えば、見事な判断だったと言わざるを得ない。少なくとも、

バーボンにその判断を責める道理はない。判断が遅ければ恐らく、バーボンは死んでいた。

これはスコッチの仕業ではない。ここから離れた、川を挟んで少しの距離に建つビルの屋上にて狙撃した人物。

ジエネヴァ。

子どもだと思っていた少年の卓越した技術の賜物だった。

けれど、バーボンの胸中は苦い。多分、スコッチも同じはずだ。それは言葉では説明できない類の話だった。

仕方なかった、それで済む話だったらどれだけ良かったか。ここには居ない、ライ辺りなら恐らく仕方なかったで済ます話だろうなとバーボンは苦い笑みを浮べる。ライが気に食わないのは多分こういう部分だったな、とも。

「……戻ろうか、バーボン。ジエネヴァを回収して、それで解散してから酒でも飲もうか」

「——ああ。そうだな。今日は反省点も多いし、酒でも飲まないとやっていけないな」

俺も付き合うぜ、というスコッチの言葉にバーボンは苦い笑みのまま、頷いた。スコッチは無言でわしゃわしゃとバーボンの頭を乱暴に掻き撫ぜた。

「ッ!?!」

「次だ、バーボン。俺らの仕事はまだ終わっちゃいないだろ？次に生かせりゃいいんだよ」

真つ直ぐなスコッチの視線に一片の嘘すらない。バーボンはようやく肩の力を抜いた。ああ、そうだなその通りだ。

「まずはジエネヴァにお礼を言わないといけませんね」

「真面目だねえ、お前も」

緩く気の抜けた疲れた笑みのバーボンにスコッチは肩を竦めた。帰りは、スコッチが運転する事になった。帰りは勿論、安全運転だ。

どうせ急ぐこともない道中だ。一日の終わりにジエネヴァを巻き込んで^{ねぎら}、^{ねぎら}の酒盛りをしてもいいかもしれない。未成年の彼にはオンジジュースがいいだろうか。そんな取り留めもない事をバーボンは車中で今日の残りの時間へと思いを馳せた。

どんな人間にも意外な一面があるものさ

午前四時にかかってきた、ジンの兄貴の非常識な電話から俺は一先ず寝る事にした。寝る子は育つて言うだろう？

そしてちよつと遅めの午前九時に起床して、軽く身体を伸ばしてから朝食をとる。今朝はたくあんとみそ汁と白米が献立だ。準備が面倒な朝もあるのだ。

電話での情報だと、どうやら俺はバーボンとスコッチと組んで仕事をやらないといけないようだ。ライの代わりなんだと。つまりは狙撃手の腕を求められている、と思っ正しいんだよな？多分。

仕事の概要も電話で既に粗方聞いた。組織の下っ端さんの失敗の尻拭い、とな。それで組織が最近開発途中の薬が漏洩したので、それを回収するのを助けてやれ、と。で、ライの代わりをやるのが俺の役目。おい、こら兄貴さんよそののどこがいつもより簡単なお仕事なんですかね？と俺は問い質したかったが、流石に自分の命が惜しいので喉の奥にごつくんと飲み込んでおく。

指定された時間と場所も聞き、兄貴からの電話は終わった。うーん、面倒な事にならないといいけど。俺はなんとなく嫌な予感があった。多分、初めて彼らと仕事をするから緊張しているんだな、俺はそう自身の落ち着かない心を納得させた。

そう言う事にして俺は早速、準備に取り掛かった。

必要なのは拳銃とライフル。そして、その偽装か。ライフルは前に使ったギターケースがあるからソレを持っていけばいい。あと服装も普通にラフな服装でいいだろう。色が黒ならばそう文句も言われまい。

服を黒のパーカーとジーンズという適当スタイルにして、支度を済ませた。それにしても、ジェネヴァ君、こんな格好していても目立ちそうだなと俺は他人事な感想を抱く。でも顔を隠すとバーボンが気づけないだろうし。まあ、集合場所の駅に着くまではこのパーカーのフードを深く被ればいいだろう、うん。

夜の七時頃にバーボン達と合流し、その車中でちよつとしたひと悶着があったものの予定通りに作戦は決行された。今回の役割はライの抜けた穴、つまりは狙撃手としての腕を求められているようだった。そこまでは俺の予想通りだったのだけど、まさかのスコッチが観測手として就くと言われた。その時は本当にどうしようか、と途方に暮れてしまった俺だがなんとか誤魔化せてよかつたと思う。表情筋がニートでよかつたと感謝してしまつたほどだ。

そして現在、俺は指定のポイントにて待機をしていた。ここ一帯の中では背の高い部類の雑居ビル、人の入らなくなったその廃墟の屋上が今回の仕事場だ。川を挟んだ向こう岸の立ち並ぶ倉庫、その一点が作戦の狙撃ポイントとなるであろう場所だった。と言つてもこういう荒事の仕事では作戦通りにいかない事が多々あるので、臨機応変さも求められるのだ。……要求事項、多過ぎやしませんかね？

ライフルを組み立て準備し、俺は双眼鏡タイプの暗視スコープを覗いていた。ここで待機して既に一時間以上。予定ではそろそろ標的の車が来るはずだ。

この辺りは工場地区の一角で、今の時間帯は少し夜の静寂を纏っている。車が通る音や、電車の音が時折耳を掠めるくらいだ。普段住んでいる日本の首都ではこうはいかないな、と思いつながら俺は深く息を吐いた。狙撃前に気持ちを落ち着かせる、要は精神統一のようなものだ。

少し距離が離れた道路から二台の車が疾走してくる。その激しいカーチェイスの様子は乱れるヘッドライトの様子からこちらにも伝わってきた。うわあ、ハリウッド映画のような光景だなアと他人事のように構えるのはここまです。俺は暗視スコープで傍観を続けながらライフルの近くへと移動する。あのまま行くと、予定ポイントからさほどズレないな。

俺は頭の中で現在の風速などを鑑みながら、大体の角度の計算を終える。ジェネヴァ君になつてからというものの、思考の冴えが鋭くなつ

た気がする。特にこういう荒事の際はより一層顕著となる。じゃないとこんな並外れた真似は出来ない。

狙撃ポイントまで標的の車が予測で十秒を切った。アレは時速120kmは出ているなど俺は冷静に観察した。

手に持っていた暗視スコープを下に置き、俺はライフルを構える。ライフルの暗視スコープ越しの緑色の景色は先程よりも範囲が狭く、そして少し鮮明だ。角度、狙撃のタイミングの計算も既に済んでいる。後は機が来るのを引き金に指をかけて少しばかり待っただけだ。

距離はおよそ765ヤードほど。川を挟んだその場所は突風などの悪条件があるものの、出来ない距離じゃない。少なくとも、ジェネヴァにとっては。

残り、三秒を切った。

そして二、一のカウントダウンの一を飛ばして俺は引き金を引いた。スコープ越しで標的を捉えるその前に引き金を引く必要があったのだ。じゃないと、あんなスピードで爆走する車のタイヤを撃ち抜く芸当なんて出来る筈がない。

そして俺の想定通りに標的の車の右前のタイヤがパンクし、バランスを崩したその車体がクラッシュして倉庫の一つに車体をめり込ますのをライフルのスコープ越しに見守った。よしよし、炎上もしていないなど俺はそつと肩の力を抜いた。

さて、バーボン達はとうなったかな、と俺は彼らの様子を確認した。無事な様子の彼らの様子を見て、俺は今回の役目が終わったのが分かった。だが、なんだろうか。俺は自分の第六感に近い勘がまだ終わっていないとざわめくのを感じた。そういう時は勘に従うに限る。必中に近い程よく当たるのだ、こういう時の勘は。

俺はライフルの弾を装填し、また構えた。いつでも撃てるように、と。

そしてスコープ越しで彼らの様子を見守る。どうやらバーボンが標的の男を尋問するところのようだ。スコッチの手には既に目的の薬と思われるピルケースがあった。このまま何事もなく終わればいいのに、という俺のささやかな願いは標的の男の行動によって打ち壊

された。

懐から取り出したのは、小型の爆弾。チラリと垣間見えただけでも、俺にはそれが爆弾だと分かってしまった。威力は恐らく、近くにいるバーボンを巻き込むくらいはありそうだった。直ぐにバーボンの身体に隠れてしまったのが惜しい。俺から見て、バーボンの立ち位置が標的の男の前なのがいけなかった。けれど、俺はそれに文句は言えない。

どうする？と俺の思考は凄まじく早く回転した。男の手を撃ち抜くにもバーボンの身体がその射線上にあるので無理だ。あの爆弾は違法に改造してあるタイプのものですからすぐに爆発出来る上に威力もある、それ故に猶予はない。それならば、俺に取れる手段は一つだ。スコッチやバーボンの反応を待っている時間もない。

そこまでの思考は多分五秒とかからなかった。俺は標的の額に照準を合わせる。風も静かなものだから、万が一にもバーボンに当たるようなことはない。バーボンと標的の男が射線上で僅かしか距離がなくても問題は無い。

俺は引き金を引いた。そこに躊躇や戸惑いなんて類の感情是一片たりともなかった。

スコープ越しで標的の男の額に風穴が開いたのを確認してから俺は漸くライフルから手を離れた。

標的の男が爆弾を取り出してから、七秒。それがこの狙撃に要した時間だ。

俺は目を瞑って、胸中に広がる苦味をやり過ごした。はあ、とため息も思わず零れる。俺の判断が正しい、と言うつもりはない。俺はバーボンと赤の他人の標的の男の命を天秤にかけ、バーボンの方を取ったに過ぎないのだ。勿論あのまま放置していたら標的の男はバーボン諸共木っ端微塵になつていたのを思えば、あの判断に後悔はない。

けれど、俺は思ってしまうのだ。

結局、俺は黒の組織と言われる犯罪者達と大して変わらないのではないか？と。暴力で全てを解決する、その組織のやり方には嫌悪は抱

いている。それなのに最後の最後に頼るのは組織でジエネヴァ君が磨いてきた業だ。

何が正しくて、何が間違っているのか。

普段はあまり考えないようにしていた、こういう矛盾はこうやってふとした時に突きつけられるのだ。きっと俺はその度にこの苦味をのみ込むのだろう。

けれどこの葛藤を、苦味を、忘れたりしてはいけないのだ。それだけはこの俺でも分かっていた。

俺は頭を軽く振って、仄暗い思考を振り切る。そして、俺はライフルやその辺に転がる薬莖を回収して撤収作業を終えた。背にギターケースを装ったライフルバッグを背負い、ビルから降りれば、遠くからバーボン達が乗る車が見える。というか、運転スコッチに代わったんだと俺は少しばかりバーボンの疲労を思う。お疲れかな、まあただでさえ忙しい人だもんなあと。

「お疲れ、ジエネヴァ」

「ん。そつちもお疲れ様。……そつちは怪我、ない？」

車の窓を開け、スコッチが労わりの言葉をかけてくるのに俺は頷く。車の後部座席のドアを開けながら怪我の有無を問えば、スコッチはゆるゆると首を横に振った。

「いいや、大丈夫さ。これもジエネヴァの正確な狙撃のおかげだな。なあ？ バーボン」

「ええ。そうですね。——ジエネヴァ、先程は助かりました」

「え、いや……。別に」

車に乗り込む俺は二人の言葉に戸惑う。まさかそういう言葉を貰えるとは思っていなかった。バーボンに至っては態々こちらに振り向いて、だったから尚更だった。

俺はどことなく据わりが悪い気分になった。別に感謝されるような事をした訳じゃないのに、と。膝の上のギターケースに置いた手に

力が入ったのに、俺は遅れて気づく。無意識の行動だった。

「いえ、ジエネヴァが居なければきつと今頃ここに居られなかったでしょうから」

「文字通り、お前身体が吹っ飛ぶところだったもんな。いやあ、久々にヒヤヒヤしたわ。こりや、命の恩人って言ってもいいんじゃないか？」

「は？」

俺を置いてきぼりにして、前の二人の会話は進む。え？命の恩人？そんな大げさな。

「命の恩人……。スコッチの言う通りですね。——君に借りが出来てしまいましたね」

「ええ……。別にいいよ、そんなの。俺、仕事こなしただけだし」
「へえ？」

柔らかな微笑みを浮かべるバーボンにそんな事言われると俺としては立場がない。感謝される謂れなんてこれっぽちも存在しないのだ。つまり、俺の良心がチクチクするからやめろという気持ちで一杯な小心者の俺だ。

俺の否定の言葉にバーボンの片眉がピクリと跳ね上る。あ、これなんか刺激しちやいけない部分を突いちやった感じだわ、俺は数秒前を後悔する。

スコッチはとうとうすっかり傍観者気取りで滑らかに車を走らせていた。くツ、助け舟を出してくれてもいいのに。

「この僕の『貸し』が欲しいと言ってくれたではありませんか。ねえ？」

「前の話だよね……。それ」

「そうですか？」

奇妙なランチタイムの最初の話を持ち出され、俺はげんなりしながら答える。そうですか？なんてしれっと返され、俺は益々肩を落とす。

「素直に受け取っておけよ、ジエネヴァ。コイツの『借り』なんて滅多に貰えるもんじゃないんだぞ」

「はあ」

「失礼ですね、スコッチ。僕は貸し借り勘定を間違えたことはありませんよ」

「それだけ、出来た奴って言う意味だよ」

「それならいいんですけど……」

スコッチの言葉に俺は頷きともつかない半端な返事を返す。バーボンの不満そうな反論はスコッチの笑いを含んだ弁解に消える。友人に相応しいやり取りだ。

「じゃあ、あれだね。俺が困った時は助けて貰おうかな」

俺が冗談交じりに軽く言えば、バーボンは少し笑った。

「分かりました。その時は必ず」

「……出来れば、でいいからね？」

「聞こえませんか」

満足そうなバーボンの言葉に俺は付け足す。出来れば、なんて俺の消極的な言葉をバーボンがわざとらしく顔を逸らし、却下した。お、大人げねー。

「さ、まずは飯でも食べに行くかあ。いい加減俺、腹減ったよ……」

「そうですね、僕も今日はロクな物を食べてませんし」

今日なんて昼抜きなんだぜーというスコッチの悲痛な嘆きはバーボンの同意の頷きで今後の予定へと決定された。

「え……、それ俺も？」

「当然、付き合ってもらいますよ」

彼らの予定に巻き込まれそうな予感をそのままに俺が問えば、至極当然とバーボンに頷かれた。うぐぐ……、もう夜の九時も近いと言うのに、という俺のぼやきは当然流された。

その後彼らの行きつけの店でライにばったり会った時はもうこれ今日の予定は終わったな、と俺の頭の中で終了のお知らせがアウンスされた。

大人三人がぎゃあぎゃああと騒ぐのに巻き込まれた俺の苦労を思うと自分でも涙が出そうだ。いや、別に物理的に騒がしかった訳じゃないよ？ただなあ、休む暇なくポンポン交わされる会話がなんという

か。やれもつと食べるだのそんなんじや大きくなれないだの……これ以上はやめよう。

解散となったのが夜の午後十一時頃。俺の住むマンションの近くまで、スコッチ達に送ってもらった。心配する彼らに手を振り、俺は長い一日の帰路に着いた。流星の俺でも彼らに住居を知られる度胸は持ち合わせていない。

家に帰ってシャワーを浴びて、俺はすぐに泥のように眠りについた。お休み一秒である。

さらり、と頭を撫でる何かの存在で、俺の意識が浮上する。とはいえ、まだ眠いのでむずがるように布団を被り直し、寝返りを打つ。

「チツ。——おい、起きやがれ」

舌打ちが聞こえ、その後聞こえた低い声に俺は漸く自分以外の存在に気づいた。

次いで、ふうーとため息が上から聞こえた。薄らと目を渋々と開けると同時に下からの衝撃が走る。

ガツシヤンツ、というベッドの悲鳴に俺はふあっ!? という間拔けな声を上げてしまった。こいつ、ベッドを下から蹴り上げやがった、というその時の俺の戦慄が分かるだろうか。

ガバリと身体を起こせば、目の前に眉間の皺の険しいジンの兄貴が居て、俺は今日が命日かと混乱が一周回って冷静になった。

「起きたか。……さっさと顔を洗ってこい」

「……にいさん?」

「お前……」

眉間の皺をそのままに、ジンの右手がこちらへ伸ばされた。すわ、命の危機かと若干ビビる俺をよそに、その手はこの跳ねた銀髪を撫でる。酷い寝ぐせだな、なんてぼそりとジンの口から言われ、俺はまだ

夢でも見てんのかなと遠い目をした。

無言で俺は洗面所に行き、冷水でじゃばじゃば顔を洗う。顔を上げればスッキリと目が覚めた。顔をタオルで拭い、髪も櫛で梳かし整える。肩まで伸びた銀髪は兄と同じ、癖一つないストレートだ。

支度を終え、リビングに出てくると、ダイニングにジンは我が物顔で居た。流石にあの暑苦しい黒の帽子とコートは脱いであった。なんでこの人ここに居るんだろ？という今更ながらの疑問に俺は首を傾げる。

我が家のダイニングに置かれた四人掛けのテーブル、その一脚の椅子にジンは腰かけ、コーヒーを自分で淹れ、啜っていた。その手に握られる青のマグカップが微妙に不釣り合いで俺の混乱に拍車をかける。更にはその対面の椅子の前に一つのマグカップが置かれ、さあ飲め、とその存在を主張していた。その中身を覗き見れば、甘そうなカフェオレが湯気を立てていた。……なんで兄貴はブラックコーヒーで俺にこれなん？という俺の当然の不満はジンの視線に黙殺された。はいはい、黙って飲めと。

その前に、と俺は壁に掛けていたエプロンを手に取り朝食の準備に取り掛かる。そんな手間の要るような物は作らないけど。目玉焼きと一緒にハムを焼き、それをトーストした食パンの上に乗せた。仕上げに塩コショウを少し振りかければ、完成だ。卵の焼き加減も完璧である。あの天空の島を目指して冒険する有名某アニメ映画は名作だよなあとぼんやり思い出した。

自分のついでにジンの兄貴の分も作った。出来たソレをカフェオレのお礼に、とジンの目の前に置けば、もの言いたげな視線が返ってきた。

俺はその視線を無視して、マグカップの置かれた近くの椅子に座る。目の前のジンはあ、とため息一つ吐いてからもそもそと食べ始めた。うむ、諦めが肝心だぞと俺は満足し、目の前の朝食に手をつけた。

それにしても、と俺は目の前の仏頂面に俺は呆れた。いや、俺も人の事言えないけどさ。

「そういえば、今日はどうしたの」

「ごくんと口の中の物を飲み込んで俺は起床してからの疑問をジンにぶつける。他にもどうやって入ったのかも知りたいが、そっちはどうせ合鍵の一つでも持ってたんだろ、と自身で投げやりに納得させた。疑問をぶつけられた当の本人は涼しい顔で最後の一欠片を口に入れた。……食べるの早すぎかよ、と俺は心の中でこそつとツツコミを入れる。

「……お前に俺の代わりに行ってもらいたい所がある。と言つてもただの様子見なんだがな」

コーヒを啜りながら、ジンはさらりと用件を告げる。

「それ、電話じゃ駄目だったの?」

言いながら、俺は今朝のベット蹴り上げ事件の心臓の悪さを思い出した。あの混乱はもう二度と味わいたくない。一瞬死を覚悟したわ。無言。少しの間が空く。

「……お前の監視も兼ねて、だ。——それで様子を見に行ってもらおうのは、組織の科学班の一人だ。ソイツが研究している物があの方の長年の希望を叶える代物だからな」

話を逸らされたのには気づいたが、俺はそれを追求せずジンの説明に相槌の頷きを返す。

「逃げられても面倒だから、俺が定期的に様子を見に行っているんだが……。どうにも怯えられているようだな」

さもありません。こんな威圧感たっぷりの組織の幹部に何度も会いに来られたら、並の精神の持ち主では参ってしまうだろう。俺は、その名の知らぬ研究者に同情した。

「このまま追い詰めて、自殺されても困る。……それで、お前の出番だ」

自殺って、おい兄貴お前その人に何したの?という俺の怪訝な視線にジンは肩を竦めた。

「何もしてねえよ。外に逃げないよう、少しばかり脅しただけだ。——お前もソイツが外に少しでも興味を持ったら折ってやることだな」
うわあと俺は心の中でドン引きする。マジ兄貴容赦ない。

ん?でも待てよ。俺はその境遇に近しい存在を思い出した。俺の中に残っている少ない原作知識の中で。

「……もしかして、その人ってコードネーム持ってる?」

「知ってるのか。——シエリー。その女のコードネームだ。まあその綺麗な薔薇の棘に刺されないよう、気をつける事だな」

「年、幾つなの?」

コードネーム、シエリー。本名、宮野志保。彼女は原作では、主人公であるコナン君と共に組織に立ち向かおうと頑張る人である。科学者としての知識等で相棒さながらサポートする役割でもあった。それに、元凶のアポトキシン4869の研究に関わっている人間でもある。それでもって公式公認の美少女さんでもあるのだ。組織の臭いがする、という野生の勘的なアレで組織の人間を特定する特殊能力持ちでもある。

正直、組織の人間に対する尋常じゃない怯えようはトラウマでも抱えているかのようにだった。実際トラウマなんだろうけれど。

でも原作の彼女、年もちよつと定かじゃないんだよなあ。確か。自称十八歳又は八十のお婆ちゃん。でも原作描写ではお婆ちゃんではなく若々しい美女だったので多分十八歳なんだろう、原作時の年齢は。

「あ?アイツの年?……確か十五か十六かそこら辺だったような気がするが」

「……兄さんってロリコンなの?」

兄貴の答えに俺はうっかり口を滑らせた。原作での兄貴のシエリーに対する執着っぷりを思い出してうっかりしてしまったのだ。

ぴきり、とジンの額に青筋が浮かぶ。うわ、今度こそ俺死んだわと俺が覚悟を決め終わる前に、ジンの右手が伸びてきた。そして俺の左頬をグイッと掴み、ぎりぎり引張る。

「どの口がそんな事言ってるやがんだ、おい。殺すぞクソガキ^{バラ}」

「いひゃい、いひゃい」

遠慮のない力でぎりぎり頬を引っ張られ、俺は堪らず降参する。心なしか涙が滲んできた気がする。それでジンの兄貴、顔が怖いです。俺は二重の意味で泣きたくなかった。

瞳が怒りに燃える、その殺意満点の表情は子どもだったら一発で泣き出してしまう怖さだった。俺でさえ、後ろに般若の面が幻視出来そうな程だ。

パツと手が離され、俺は自由になった頬を手で擦る。絶対片側だけ頬つぺたが赤くなっているわこれ。

「大体、俺は割り切れない女は抱かねえんだよ。面倒だからな」

「……爛ただれている」

「お前……」

「冗談だつて」

兄貴の発言に俺がボソツと本音を漏らせば、兄貴に怒りの波動が蘇よみがえった。俺は慌てて、先程の発言を否定する。流石に頬つぺたが取れてなくなるのはご免である。

兄の淹れてくれたカフェオレの味が甘い味で俺の気持ちに更に微妙なモノとなったのは内緒だ。

名前をつけない関係もあるのさ

朝の衝撃的な事件——兄貴のベッド蹴り上げ事件から少し経った後。ジンが帰ってから、俺は改めて部屋の時計を見直して、ガツクリと肩を落とした。まだ朝の八時で、逆算するとジンの兄貴の乱暴な朝の起こし方をされたのが午前七時頃となる。

こういうこちらの都合を容易く無視するような兄貴の理不尽さには多少の耐性を得ている俺だが、流石にどうかと思う。こんなんだから、人望があんまり宜しくないんだぜ？と俺はため息を吐きたくなった。だってウオツカぐらいじゃないか、兄貴支持派って。

話は逸れた。それで、俺は兄貴のお願いもとい、命令を遂行するべく現在組織の研究施設の一つに訪れていた。ジンの話では十一時頃に先方にアポイントメントをとっているそうで、既に代理に任せると連絡は済んでいるようだった。流石にそういう常識は持ち合わせているか、というその時の俺の感慨は心の隅に置いておく。

約束の十一時に間に合うように、俺はいつもの日常である訓練（身体を動かす系の奴）を消化し、シャワーを浴びて着替えてから訪問、現在に至る訳である。着替えと言っても、いつもの通りのラフな格好で、我ながら裏社会の組織の荒事を担う人間には見えないと思う。黒のジャケットに黒に近い灰色のシャツ、ズボンは適当に白にしておいた。人間って見かけによらないんだなあとジエネヴァ君になってから常々思う俺だ。

だからこの注目度なのかなあと俺は現在の注目度に関して諦め半分で遠い目をしてしまった。分かってる、めっちゃ浮いているもんな、俺。

周りは研究所に相応しく、白衣を着た人間が半数を占めている。忙しなく行き交う彼らスタッフはコードネームを持っていないくとも、世間に認められた、優れた科学者又は学者であつたりするのだ。表向きはこの研究所は製薬会社の看板を背負っているので、さほど違和感はない。近代的な設備も見受けられ、普段俺が通っている施設よりかは暴力の臭いはしない清潔感のある建物だった。観葉植物も飾られ、幾

分か印象が和らいで見える。まあ、その分怪しげな精密機械も多いんだけど。

俺は受付の人に用件を告げ、関係者を示すIDカードを貰う。その首から下げるタイプのホルダーは一般企業のソレと変わりなくて、こういうシステムは組織でも変わりないんだなあと変に感心してしまった。

それを仕方なく首に下げ、俺は施設を受付で聞いた案内に従い、施設内の廊下を歩いていった。それですれ違う人達に視線をめっちゃ注がれて肩身の狭い思いをしている訳だ。

シエリーの居る研究室まではあと少しなので、我慢だ俺と自分への鼓舞も忘れない。

歩いて五分くらいで目的の部屋へと辿り着いた。シエリーはコードネーム持ちなので、一応自分専用の研究室を別に持っているらしい。共同研究室以外での時間のほとんどはそこで過ごしているらしい。随分、受付の人はお喋りな女の人だったなとぼんやりと思いつす。いいのか組織、それで。いやまあ俺のこの見た目だから、か。

部屋のドアを一応ノックして少し待つ。

一分程待っても返答がなかったので仕方なく俺は部屋のドアを開けた。幸いにも施錠はされていないようだ。

部屋は意外とスッキリと片付いていた。推定十畳のその部屋でまず目に入ったのは入口に背を向けて置かれた事務机、それと革張りの椅子。それからその机の上にはパソコンが置かれ、空いたスペースには資料が何十枚と雑に置かれていた。隅に追いやられたプラスチックとピーカーなどの実験器具は綺麗に管理されていた。少なくとも埃は全く被っていない。本棚や、南京錠のかかったガラス張りの棚（中には様々な薬品が入っていた）が少しばかり空間を狭めていた。

そこで俺はどこからか香ってくるコーヒーマグの匂いに気づいた。淹れたばかりの香しさに俺はその匂いの先に視線を向ける。

そこに彼女は居た。どうやら、入り口から見て右側に簡易的な給湯室が設けられていたようだ。そこに佇む茶髪の女性は手にマグカップを持ち、壁に身体を預け、こちらに首を傾げる。

肩までの茶髪に灰色の瞳。こうして実際見ると彼女は可愛いよりも美しい、が似合う美人さんだ。その涼し気なスツキリした印象の目はクールビューティと称えるに値する。

シエリー。組織の誇る才媛だ。

「気が済んだかしら？可愛らしい侵入者さん」

「…………ごめん。失礼します、くらいは言うべきだったよね」

仄かな微笑を浮かべ、余裕の態度の中に微かな敵意を感じる。その証拠にその美貌に浮かぶ微笑、その瞳は冷え切っていた。あっちゃあ、と俺はシエリーの好感度の低さを内心嘆きつつ、頭を下げた。どうせ、この無表情はピクリとも動かないんだろ、知っていると半ば俺はやけくそだ。

「そういう話じゃないのだけれど…………」

「うん？そう？」

俺の論点のズレた謝罪にシエリーは困惑するように言葉の棘がなくなる。戸惑うように消える言葉尻に俺は首を傾げた。

「それよりも、貴方何者なの？…………いつもはジンが来る筈じゃない」
渋い顔をしながら手に持っていたそのコーヒーをシエリーは一旦机の上に置いた。それから俺に向き直り、嫌そうに質問した。滅茶苦茶嫌われているな兄貴と、俺は薄々察していたのを確信に変える。それと、どうやら情報の伝達は上手くいっていなかったらしい。

困ったな、と俺は肩を竦めた。

「聞いてない？今日は俺がその代理。——ジエネヴァ。宜しく」

「…………ジエネ、ヴァ…………？」

「そう。俺のコードネーム」

宜しく、と俺が差し出した握手の右手が宙ぶらりんで放置される。シエリーは予想外な事を言われたように固まっていた。そのままシエリーは目を見開いたまま沈黙し、俺は少し傷心して差し出した手を下げた。

俺はこんな気まずい空気に耐えられず、話題を本題にかえる事にした。

「ま、まあ。そんなに重く考えないでさ、気楽にしてよ。アンタが嫌な

「俺はそのまま帰るしさ」

何なら愚痴とかでも良いんだぜ、特別に相談に乗ってもいいし。俺は誤魔化すように言葉を濁す。流石にこう嫌われちゃあ監視だの物騒な話は出来そうにない。男が女性に嫌がる事をやるとか俺の価値観ではギルテイなのだ。

幸いにもこの研究室に盗聴器等は仕掛けられていなそうだ。ジェネヴァ君の磨かれた第六感がそう告げている。ちなみに仕掛けられていると首筋の後ろ辺りがチリツと痛む気がするのだ。これは俺だけの特例なんだろうけど。

そんな事をぐるぐると俺が考えていると、シエリーがふつと軽く笑う。今度は瞳が冷え切っておらず、本物の笑みだ。俺は肩の力を抜いた。よかった、と。

「ごめんなさい、貴方が嫌な訳じゃないのよ。……ただ、少し驚いただけなの」

「……おどろいた？」

シエリーの言葉に俺は首を傾げる。シエリーは頷きを一つした。

「貴方の噂は少し前に聞いた事があるわ。私とそう年の変わらない子が最近コードネームを持つ事になったって」

「……うん」

「それが、まさか年下だなんて。そう、驚いただけなの」

「ごめんなさい、また小さな声で謝ったシエリーは困ったような笑みを浮かべていた。

これは建前か。俺は直感的にその言葉の嘘を見抜いてしまった。いや正確には三割四割は本当だけど、他に要因があったのだ。きつと。けれど、それを暴く程俺は野暮じゃない。

俺は首を横に緩く振る。

「そっか。それならいいんだ。幾ら俺でも初対面に嫌われちゃ流石に傷つくからね」

「えっ」

「嫌われていないなら、それでいいんだ」

そう言っただけ俺はまた右手をシエリーの前に差し出す。目を見開い

たシエリーは俺の差し出した手を見て益々目を丸くする。

「それなら。よろしく、そう言ってもいいよね？」

「ええ、そうね。こちらこそ、宜しくお願いするわ」

俺の手に重ねられたその白い手は細く、傷一つない綺麗なものだった。俺の手よりも小さなその手はやっぱり女の人の手だなあと俺はちよつと不思議な気持ちだった。

「それで、何かある？なんか相談、でもいいけど」

当初の予定の様子見、その目的を果たそうと俺が尋ねると、シエリーは片手を顎に添えて考える。

そして少しの思案の後、口を開いた。

「それなら、ジンに來ないで欲しいのだけど」

「あー……。分かった、言ってみるだけ言ってみるよ」

私、あの人の雰囲気嫌いなものよ、とぼやくシエリーに俺は同意したいのをグツと堪え一応の形で頷く。確約は残念ながら出来ない。俺にそんな権限はないからだ。

兄貴にド突かれる覚悟を決め、俺が頷くとシエリーは意外そうに瞬きををした。

まあ信用ないよね、と俺はなんとも言えない気持ちになりつつ、今日の所はこれでお暇する事にする。

「じゃあ、俺はここで失礼するよ。——ああ、問題なしで報告するからそれは安心して」

じゃあ、これだと退室する為に俺がドアに手をかけると、グツと後ろに引かれる。見れば、ジャケットの裾をシエリーが掴んだようだ。

俺の怪訝な視線にハッとシエリーが我に返った。咄嗟に引き留めてしまったらしい。もしかして、なんか伝え忘れがある、とか？

直ぐにジャケットの裾を掴んでいた手が離された。俺は万が一の伝え忘れの可能性に、少し待つ事にする。

シエリーは少し逡巡してから、

「また、会えるかしら？」

とぼそぼそと歯切れ悪く言う。俯いてしまった為に表情は分からないものの、その羞恥を訴える赤く染まった耳に俺はうん？と首を傾

げる。

「うん、まあ。そう言ってくれるなら、また会いに来るよ」

「そう……」

俯いたままのシエリーは少し気になるものの、退室の流れだったので俺はそのままその場を辞した。

「またね、シエリー」

「ええ」

退室際に見た、シエリーの表情は悪くないものだったからきつと悪い意味ではないのだ。それだけ分かっていたら、今の俺には充分だった。

その後のジンの兄貴への報告の際にシエリーの監視を俺に任せてもらえないかと頼んだところ、あっさりと許可を貰え俺は驚いた。驚いたというか、拍子抜けの気分だった。

ただその際に、「精々、溺れないよう気をつける事だな」と言われ俺は呆れてしまうやらなんやらで。そういうんじやない、と兄貴に返せば、クツクツと笑われるだけだった。解せぬ。

監視、は月一の頻度で行われるそうだ。俺は彼女の愚痴やらなんやら相談に乗ればいいな、くらいの気持ちだった。今の俺に出来るのはそんなもんだ。

そんな事を思った五日後。俺は再びシエリーの元へ行く事にした。久々の非番、休日だったので、少し手作りクッキーを持参しちよつとした挨拶も兼ねての訪問だった。先日の約束もあることだし。

時間は十時に施設にアポイントメントを電話で取り、その十五分前に着くように出かけた。そして、研究施設の前で声をかけられた。

「ねえ、君。ジエネヴァ君で合っている?」

「え。——そうだけど、そういうお姉さんは?」

背まで伸びた真っ直ぐな黒髪、明るい光そのものの笑み。柔らかな印象を与える可憐な部類の顔立ちを裏切らぬ優し気な雰囲気的女性。

宮野明美。シェリーの姉たるその人が俺の肩を掴み、にこやかな笑みで問うてきたのだ。とはいえ、*「ジエネヴァ」*は知らない情報なので一応彼女の名前を尋ねる。

「よかった。私は宮野明美。志、いやシェリーの姉よ。ね、お姉さんと少しお茶しない?」

にこにこ善意100%の笑みの明美さんの誘いは何故か断れない謎の押しの強さをみせていた。これ、バーボンとどっこいな強引さを感じるぞ、と俺は少ししたじろぐ。

「十分くらいなら……」

「あら、何か用事でもあるの?」

「ん、まあ。約束があるから」

俺の渋々とした条件付きの承諾に明美さんは首を傾げる。その間に俺が答えれば、また微笑ましそうに笑顔になった。ぐっ、調子狂う。

そのまま明美さんに背を押され、研究施設の近場のカフェに入った。その四人掛けのテーブルで紅茶一杯(ここのお店は紅茶が美味しいらしい)、明美さんにご馳走される事となった。

店内は平日の十時少し前という中途半端さで空いていた。趣味の良いレトロな雰囲気のカフェで、店内にかかる古いジャズも相まってノスタルジックな雰囲気にさせてくれるところだった。

「ふふ」

「?」

注文して割とすぐに届いた紅茶を飲むと対面に座る明美さんがクスクスと笑った。俺が不思議に思っただけだと首を傾げると、手を振って否定される。

「違うの。君に、じゃなくて妹の話思い出してつい、ね」

「シェリーの?」

「うん。あの子とさつき会ってきたばかりなんだけど。丁度君の話が出てきたから」

ふふ、ごめんなさいねと軽やかに笑う明美さんに俺は少し呆れる。仮にも荒事を担うコードネーム持ちと会っているのだからもう少し警戒した方がいいのに、と。いや、そう言えばこの人あのライを、大くん”呼びをする猛者だったな”と思い出して俺はその懸念の無駄を悟った。

「……ロクな話じゃなさそうだね」

どうせ強そうじゃなかった、みたいな話だろう。もしくは意外と子どもでびっくりしたわお姉ちゃん、ぐらいか。俺は予測出来た話の内容に、不快さを少し感じる。要はいいもんね、これから大きくなるからと拗ねたのだ。

そんな俺の拗ねた気持ちに気づいたのか、明美さんはきよとりと瞬いて頭を横に振る。

「違うわよ？——でも、私の口からは言えないけどね」

「え。逆に気になるんだけど」

「ふふ。ほんのささやかな事よ。……どうしても知りたかったら本人に聞いてみたらいいのよ」

明美さんの意味深な言葉に俺は食いつく。それに柔らかかに笑って明美さんは事もなさげに当人に聞けと言つてのける。流石、ライと恋人なだけあるなと俺は明美さんの評価を改めた。この人は、意外と強かなところもあるのかもしれない、と。

でも当人に言えたら苦労しない訳で。俺はフィツと視線を逸らした。

「聞ける訳ないよ。……仲良くなってもいないのに」

「これからなればいいのよ。友達にも、なんにでもなれるわ。だってまだ二人とも若いんだもの」

明美さんの声は静かなものだった。口元にはほんのりと微笑みが浮かび、声と同様優しいものだった。

「若さは可能性なのよ？」

知っていたかしら？と悪戯つ子な笑みを浮かべた明美さんに俺は

戸惑った。こうやって真正の優しさを向けられるとどうしていいかわからなくなるのだ。

俺の戸惑いにフツと力の抜けた笑みを浮かべた明美さんは、

「あの子を宜しくね?」

「ふっ」

と爆弾を落とした。着弾した俺は無様にも紅茶を嘔き出した。衣類に被害はなかったものの、俺は気管に紅茶が入り咳き込む。シェリーの身内にそう言われると不意打ち過ぎて、勘弁してもらいたいものだ。

「ああ、大丈夫?」

「げほっ。お姉さん、能天気だね。俺が言うのもなんだけど、もう少し考えてから言った方が良いんじゃない?」

咳き込むのが落ち着いてから、俺はハンカチを差し出す明美さんへ鋭い視線で忠告をする。駄目だ、この人。人が良すぎて逆に心配になるタイプだ。少なくともコードネーム持ちなのを知っている人の台詞じゃない。

「考えてから言っているわよ?……だって、きみ優しそうな子なんだもの」

「ッ!」

ふふ、これでもお姉さん人を見る目だけは自信があるのよ?こと優しい人を見分ける事に関しては。優しい笑みで冗談交じりに言われる明美さんの言葉に俺は咄嗟に言葉を失くす。

「——とんだ節穴なんじゃないの?……それ」

優しい瞳に俺は居心地が悪くて思わず視線を外した。言い返した言葉は自分でも笑えるくらいに掠れてしまった。

「ふふ」

そんな俺の渾身の憎まれ口も明美さんは柔らかに笑うだけだった。なんだこれ、予想以上に恥ずかしいんだけど。

十分経ってから、明美さんと別れ俺は予定通りにシェリーに会いに行った。約束の十時には間に合いそうだ。

「こんにちは。約束、果たしに来たよ」

「……そう」

またシェリーの個人研究室にお邪魔して、俺が約束を果たしに来たと言えばシェリーは少し目を伏せる。心なしかしよんぼりと元気ないように見える。少なくとも、あの初対面の険のある表情はそこにはない。

俺の言葉を聞いて、やっぱり監視がジンの兄貴に戻る、と思ったのだろう。勘違いさせてしまったかなと僅かな罪悪感があるものの、俺は少し満足する。

「それから、今後は宜しく」

「は？」

「これから、月一で会いに来るから」

きよとんとしたシェリーの顔が、月一という言葉に合点がいったような顔になる。そしてじわじわとその白い顔が赤に染まった。どうやら、先程の勘違いに羞恥を感じているようだ。少し可愛い、と俺は心の中で微笑ましく思った。

「ぼっ。——ッ、そう。好きにしたらいんじゃない」

馬鹿って言いたかったんだろうなあ。俺はそう推察する。グツと無理矢理言葉を飲み込んだシェリーはキツと睨んできた。残念ながら、俺とシェリーに身長差はない(シェリーの方が若干高いかもしれない)ので上目遣いにならなかった。俺、十三歳だから仕方ない話なんだけど、妙に悔しくて俺はこれから毎日牛乳を飲む決意をする。迷信? いいんだよ、それは。

「うん、好きにする。それと、これ。良かったら食べて」

感じた悔しさを俺はなかった事にして、ラッピングした手作りクッキーをシェリーに差し出す。今住んでいるマンションは家賃の高さに見合った設備が揃っている。当然、オーブンも備わっていて、難易

度の低いクツキーをまずは作らせてもらった。ちなみに可愛いヒヨコと猫のクツキーだ。

シエリーは俺の差し出したその可愛いクツキーをしげしげと見つめた。

「もしかして、これ手作りかしら？」

「ん。可愛く出来たでしょ？」

「……、まあそうね。お菓子に罪はないものね」

シエリーの問いに俺は頷き肯定する。不自然な間が少し空いたものの、シエリーはそれを受け取ってくれた。複雑そうなその様子に俺は首を傾げる。何がいけなかったんだろうか、と。

「もしかして、猫より犬派なの？」

「違うわよ」

猫じゃなくて犬の方が良かったのか、という俺の反省の言葉にシエリーは呆れたように否定した。

「貴方を警戒するの、馬鹿らしくなるわ」

はあと特大級のため息の後、そうシエリーに言われ俺は何とも言えない気持ちになった。どういう意味かな？それは。

その日はシエリーにコーヒを淹れて貰って持参したクツキーと一緒に食べた。うん、我ながら上手に出来た。シエリーも何も言わずに調子よく完食したので不味くはなかったのだろうと俺は満足しておく。

後日、シエリーにお姉ちゃんに何を吹き込んだの?! と凄まれ、解せない気持ちで一杯になった俺だ。シエリーを^{からか}揶揄ったな、明美さんと俺は悔しく思った。

誤解は解けたものの、シエリーの怒りの矛先が明美さんに向ってしまった。けれど、その怒りは軽いもので、こういうのが家族というのだろうなあと俺は眩しく思った。

不意打ちで縁が繋がる事もあるのだ

シエリーがその存在を知ったのは少し前の話となる。

組織の元で育てられて、将来組織の為に働く事を子ども頃から決められた子が居るらしい、と。噂の域を出ないその話は、シエリーの心の縁に留まった。

ああ、私と同じ境遇の人がいるのね、と。

名前までは知る事が出来なかったけれど、もしその話が本当ならばシエリーはほんの少し話をしてみたかった。

年の頃が同じくらい、とも聞いていたので組織の大人達のような怖さはないかもしれないという淡い期待もシエリーの中にはあった。少なくとも、あんな背筋がゾツと冷えるような気配はしないだろう、と。

そして、分かってくれるかもしれない、と。

この組織という鳥籠に捕らえられている、息苦しさや光に憧れてしまふ微かな憧憬を。

後にその子がコードネームを持つ事になったと聞いてシエリーは少し落胆してしまった。

ああ、結局黒に染まるのね、と。

それは自分勝手な失望だと気づいていても、理屈では割り切れないやりきれなさがシエリーの心の隅にいつまでも居座っていた。

※

姉に言われた事がある。そんなに肩肘張らないでいいのよ。貴女にも、ちゃんと人生を楽しんで欲しい、と。

そうね、とその時は返したけれど、それは無理な相談だとシエリーは知っていた。何故なら、組織がそんな事を許す筈がないのだ。黒が

相応しい、組織の闇は研究職に就くシエリーでも分かる。組織の人間——特に荒事を担う人間に会えばそれは明確に理解出来るだろう。

ゾツと底冷えするような冷たい眼差し、それから死を連想させるあの独特の仄暗い雰囲気。例えその身に纏う硝煙の臭いや血の残滓をどこまで綺麗に洗い流したとしても。それは決して消し去る事の出来ない類のモノなのだろう。

特にあのジンというコードネームを持つ、組織の人間が顕著だった。あの男にとっては戯れの軽い殺気なんだとしても、シエリーにとってソレは死を覚悟したくなる程鮮烈なモノだった。

だから嫌いなものよ、あの男も、組織も。シエリーは今日の予定を思い出して眉をひそめた。

今日は月に一回の組織からの監視が行われる日だ。なんでもシエリーの今携わっている、母から受け継いだ研究があの方の長年の希望を叶える代物らしい。だからシエリーが逃げださないよう、監視としてあのジンが態々わざわざ月に一度訪ねてくる事となった。

要は組織からの脅しなのだろう、とシエリーは理解している。もしシエリーが裏切ったら、シエリーは勿論、唯一の身内である姉も巻き込めるぞ、と。あの鋭い凶器そのものの男を派遣し、警告している訳である。シエリーの一番の大切な、あの陽だまりのような、人のいい姉を人質にして。

自分のテリトリーである、この研究室であの男を出迎えるのは少し気分が悪い。けれど、あの男の前でこれ見よがしに忙しくしていれば割と早く帰ってくれるので都合が良いのだ。シエリーとて少しは悪知恵染みた手段をとる事もある。むしろ何か悪いかしら？と悪びれずに言えそうだった。

確か、約束の日は午前十一時頃よね、とシエリーは思い出す。壁掛け時計を見れば、後もう少しでその十一時を指すところだった。テスト前の学生よりも憂鬱な気持ちを払うべく、シエリーはコーヒートを淹れることにした。気分を少しでも落ち着けたかったのだ。

シエリーが部屋に設けられた、簡易給湯室でコーヒートを淹れていると微かに部屋のドアがノックされる。

二、三度叩かれたノックの音にシエリーは首を傾げた。あら？珍しい、と。何故ならジンならばいつもノックなしに乗り込んでくるからだ。なので、あの男の可能性は低い。けれど、他にこの部屋を訪ねる変わり者にシエリーは心当たりがなかった。

ガチャリ、とノックされて一分ほどでドアが開く。

果たして、招かれざる訪問者が部屋に一步足を踏み入れ、辺りを視線だけで観察した。シエリーの居る給湯室は部屋のドアの位置からは見えづらい場所だったので気づかれていないようだ。なので、こちらでも観察する事にした。

肩まで伸びた癖一つない真っ直ぐな銀髪。それから、深緑の大きめな瞳、白い頬、バランス良く整った顔のパーツ。無表情なものも相まって、精巧に出来た人形のような少年だった。稀に見る美貌ってこういうのを言うのかしら、とシエリーは感心してしまった。

年の頃は多分十代前半、身体の未成熟な線の細さから間違っではないはずだ。この子、組織の人間なのよねとシエリーはほんの少し、その少年に同情した。

と、そこでその深緑の瞳がこちらに向けられた。シエリーはギクリと身を強張らせる。光がない、深淵のような瞳。殺意も敵意もないけれど、それでも底の窺えない深い闇を思わせる色をしていた。大人ですらこんな荒んだ目はしないわ、とシエリーは壁に身を預けていたまま冷や汗を掻く。グツとシエリーの中の警戒レベルは上がる。

「気が済んだかしら？可愛らしい侵入者さん」

「…………ごめん。失礼します、くらいは言うべきだったよね」

動揺をどうにか抑え、口元に微笑を浮かべさせる。笑みを持って、余裕を見せるのだ。それはシエリーの形ない武装の一つだ。但し、瞳は相手を鋭く貫く。

そんなシエリーの武装に少年は頓着せず、論点のズレた謝罪にペコリと頭を下げた。その時でさえ、揺らがない表情にシエリーは毒気が抜ける気がした。

「そういう話じゃないのだけれど…………」

「うん？そう？」

一人相撲の虚しさにシエリーの言葉尻が戸惑うように揺れる。それに少年は首を傾げた。

シエリーはしつかりしなさい、私と自分に喝を心の中で入れる。このままこの少年に話の主導権を渡してなるものか、と。

「それよりも、貴方何者なの？……いつもはジンが来る筈じゃない」握りしめていたマグカップを一旦机の上に置き、シエリーは少年に向き直る。自分でも険しい表情をしている自覚はあるけど、まだ警戒は解けないのだ。

そんなシエリーの険呑さに少年は肩を竦める。

「聞いてない？今日は俺がその代理。——ジエネヴァ。宜しく」

「……ジエネ、ヴァ……？」

「そう。俺のコードネーム」

少年の口から信じられない事が飛び出した。シエリーは上手くソレを飲み込めずに愕然とする。目の前の少年の差し出された右手に構う余裕もない。

この、少年——ジエネヴァがジンの代理？それにこの子がコードネーム持ち？嘘でしょう。確かに、この少年には組織特有のあの仄暗い雰囲気も感じる。けれど、そこに敵意や悪意は感じられない、といった妙なちぐはぐさも感じるのも事実なのだ。

これは幼さ故なのか。それとも——。考え、固まったシエリーにジエネヴァの差し出した右手が困ったように下ろされた。宙ぶらりんで放置してしまった、とシエリーは罪悪感で胸がチクリと少し痛む。けれど、その手を取る勇氣はまだ少し足りないのだ。

この目の前の少年、ジエネヴァを組織の人間という色眼鏡で見てもうシエリーには。

「ま、まあ。そんなに重く考えないでさ、気楽にしてよ。アンタが嫌なら俺はそのまま帰るしさ」

何なら愚痴とかでも良いんだぜ、特別に相談に乗ってもいいし。そう、ジエネヴァが誤魔化すように言葉を濁す。その伏せられた視線は迷うように彷徨っていた。

まるで年頃の不器用な少年、そんな年相応の言葉にシエリーは目を

見開いた。私は、何を視ていたのだろうか。まだ目の前の少年は、黒に
なんか染まりきっていないのに。むしろ、こちらを気遣える程度には
優しさを残しているのに。

こんな初対面の大きくして優しくもない私を。シエリーは震えそうに
なる唇をグツと噛みしめ、そして緩ませる。

馬鹿ね、私とシエリーはふつと力の抜けた笑みを浮かべた。それに
ジエネヴァが心なしかホツと瞳を和ませたような気がした。けれど、
きつと気のせいねとシエリーは自分の中で片付ける。

「ごめんなさい、貴方が嫌な訳じゃないのよ。……ただ、少し驚いただ
けなの」

「……おどろいた？」

首を傾げるジエネヴァにシエリーは頷きで相槌を打つ。

「貴方の噂は少し前に聞いた事があるわ。私とそう年の変わらない子
が最近コードネームを持つ事になったって」

「……うん」

「それが、まさか年下だなんて。そう、驚いただけなの」

「ごめんなさい、シエリーは喉に飲み込んだ言葉の代わりに小さく
謝った。貴方を信じられない事に対する謝罪なのだ、と言えたらどれ
程よかったか。シエリーは困ったように小さな笑みを浮かべた。

ジエネヴァはソレに首を横に緩く振る。いいのだ、と。

「そっか。それならいいんだ。幾ら俺でも初対面に嫌われちゃ流石に
傷つくからね」

「えっ」

「嫌われていないなら、それでいいんだ」

瞳を緩く細め、笑みにならない中途半端さでジエネヴァは静かに言
葉を紡ぐ。それはふと次の瞬間に消えてしまうような儂い変化。も
しかしたら、この少年は無表情の中に感情を一杯押し込めているのか
もしれない。シエリーは呆氣にとられつつ、頭の隅で思った。

また目の前にジエネヴァの右手が差し出される。握手を求めるソ
レにシエリーは益々目を丸くした。

「それなら。よろしく、そう言ってもいいよね？」

紡がれる言葉に嘘は感じられない。ジエネヴァに悪意も敵意もなく、あるのは純粹たる厚意だ。それに今、気づいた。シエリーは張り詰めていた緊張の糸を緩ませる。

「ええ、そうね。こちらこそ、宜しくお願いするわ」

シエリーは差し出されたその手に自分の手を重ねた。ぎゅつと緩く包むジエネヴァの手はシエリーの手と同じように白いのに不思議と大きく、男の子の手だ、と思わせるものだった。

その事にシエリーの頬が熱くなる前に手は離される。残るのは手に感じる温もりの残滓とほんの少しの気恥ずかしさだ。初恋を知る前の子どもじやあるまいし、とシエリーは内心自分に毒づいた。

「それで、何かある？なんか相談、でもいいけど」

無表情のまま首を傾げるジエネヴァに少し面白くないと一瞬だけシエリーは思ってしまった。不公平だ、とけれど直後にシエリーは気のせいよと思い直した。そして改めて、問われた事を考える為に顎に手を添えた。

そして少しの思案の後、シエリーは脳裏に閃いた事を口にする。

「それなら、ジンに來ないで欲しいのだけど」

「あー……。分かった、言ってみるだけ言ってみるよ」

私、あの人の雰囲気嫌いなものよ、と思わずぼやいてしまったシエリーにジエネヴァが曖昧な頷きを返す。

確約は出来ないけれど、努力してみる。そんな返事にシエリーは意外に思った。てつきり馬鹿言うな、とすげなく断られると思ったのだ。

そんなシエリーにジエネヴァは背を向けた。あ、とシエリーは咄嗟に手を伸ばす。

「じゃあ、俺はここで失礼するよ。——ああ、問題なしで報告するからそれは安心して」

じゃあ、これでドアノブを掴むジエネヴァが立ち止まる。シエリーの手はジエネヴァの黒のジャケットの裾を掴んでいた。

そこでシエリーは我に返った。わ、私何をやっているのかしら？、と。

ジエネヴァは不思議そうにそのジャケットの裾を掴むシエリーの手を見ていた。その視線に羞恥を感じ、シエリーはすぐに裾から手を離した。

シエリーが手を離れた後も、律儀にジエネヴァは待つてくれる。理由を問う事も、答えを急かす事もなかった。

ふと、思ってしまったのだ。このまま別れて、そのまま二度と会えない未来を。何を馬鹿など笑えたらいいのだけど、残念ながらこの組織では笑えない想像だ。昨日元気だった顔が翌日もう見る事が叶わないなんて事もあり得るのだ。だから、シエリーは咄嗟に手が伸びてしまった。

そんな後悔をするなら今恥をかけた方がマシよ、とシエリーは決意し、

「また、会えるかしら？」

と言葉にした。ぼそぼそと歯切れ悪い、我ながらなんて恥ずかしいと羞恥を覚えシエリーは俯く。頬が熱く、今、顔を見られなくなかった。

少しの間を空いた。俯いたシエリーの視界に入るのは彼の足元で、少し答えを聞くのが怖くなる。伏せた瞳をシエリーはギュツと瞑った。

「うん、まあ。そう言ってくれるなら、また会いに来るよ」

聞こえてきたジエネヴァの静かな声にシエリーは瞑った瞼をそろそろと開く。その声には嫌悪はない。シエリーはホツと肩の力を抜いた。

「そう……」

「またね、シエリー」

「ええ」

またね、そう言つてジエネヴァはひらりとこちらへと手を軽く振つて退室した。

パタリと静かに閉まったドアを眺め、シエリーはしばしばんやりとしてしまった。

冷めたブラックコーヒーの味は最悪ね、と感じる羞恥を誤魔化しながら。

そんな話を五日後、姉と会った際にうっかりとシエリーは姉に口を滑らせてしまった。

ここは施設内に設けられた食堂だ。とはいっても近代的なデザインの施設に似合いのカフェのような雰囲気のところ、大衆食堂のような窮屈さはない。テーブルは丸テーブルで、それぞれ適度に距離が離れていた。一面、ガラス張りでそこから見える中庭の様子が日本の四季の様子で目を楽しませる。薄暗い組織には珍しい、日光が当たる場所でもあった。

まだ午前九時半頃。周りはまだ閑散としたものである。この食堂が一番混むのがお昼時だ。

ここならば施設の部外者である姉と会っても、反対されることはない。それくらいには開放的な雰囲気の一部だ。

そこで、姉、宮野明美とシエリーは久々の対話を楽しんでいた。会えない時間を埋めるように、会話は途切れることはない。

そうして冒頭のシエリーのうっかりに繋がるのである。うっかりこの姉にジエネヴァとの出会いを一から十まで話してしまったのだ。

「で、で？そのなんだっけ、ジエネヴァ君？がどうしたの？」

明るいお姉ちゃんは好きだけど、こうして瞳をキラキラ輝かせる時は要注意である。妹たるシエリーは長年の経験上知っていた。

「……なんでもないわ。それよりもお姉ちゃん、そっちはどうなのよ？」

「えー、教えてくれてもいいじゃない。志保ったらケチね。——私の方は変わらないわよ？大くんとも順調、幸せですとも」

「まだその『大くん』と付き合っているの？お姉ちゃん」

この朗らかな姉に不満なんてないシエリーだが、一つだけ解せない部分がある。姉の恋人の趣味が悪い、という点だ。大体、あの「大くん」もとい、ライは組織のコードネーム持ちで、確かに顔は悪くないかもしれないが、その分人相も悪い。あの目元の隈がより一層あの鋭い目つきを際立たせているのだとシエリーは分析する。

おまけに愛想も悪そうな男じゃない、とシエリーはほんの少し納得がいていない。お姉ちゃんにはもつと素敵な人が似合う筈なのに、と。

シエリーのむくれた顔に姉はふふつと幸せそのものの笑みをもらす。その笑みにシエリーはふうとため息を吐いた。はいはい、分かっているわ。

「恋つて理屈じゃないのよ、志保。きつと貴女にも分かる時がくるわ。

——つて私の事はいいのよ。志保の事を聞かせて頂戴」

ね？ね？とあざとく小首を傾げる姉にシエリーは観念した。昔から、この姉に隠し通せた試しがないのだ。それに、聞いてくれると胸の内も軽くなるし。

「別に大したことないわ。……ただ、ちよつともやもやするだけで」

「もやもや？」

「ええ。——元々、同じような境遇だと人づてに聞いているから、かしらね」

不思議そうにする姉にシエリーは自嘲の笑みを浮べる。仲間意識、というと少し違うかもしれない。もしかしたら同じ思いを理解できる同士になれるかもしれないと思つたのかもその後日冷静に思い返したのだ。

「んー、ちよつと違うような気がするけど。……志保は頭で理解しようとするからお姉ちゃん、少し心配なのよ？」

「それは、どういう……」

「言つたでしょう？感情は全て理屈で片付けるものじゃないわ。きつと、言葉に出来ない思いも、形に出来ない愛情もあるのよ。……だから、いいのよ。他人と違つていても」

静かに語る姉はいつもよりも大人びて見えて、シエリーは咄嗟に言

葉を失った。

「うん。だからそのジエネヴァ君と志保は友達になってもいいだろうし。なんなら、恋人にだってなってもいいんじゃないかしら？」

「は？」

「あれ？そういう話じゃなかった？」

一つ低くなったシエリーの声に姉はきよとんと首を傾げた。

怒り故か、それとも別の理由故か。シエリーはぶわりと熱くなる頬に、感情の赴くままに口を開いた。

「全然違うわよ！お姉ちゃんの馬鹿っ」

ジエネヴァが訪ねる約束の十時少し過ぎ頃にはシエリーの頬もすっかりと通常に戻っていた。

「こんにちは。約束、果たしに来たよ」

「……そう」

訪ねて開口一番にシエリーとの約束を持ち出すジエネヴァにシエリーは少し胸を痛めた。

それはまたジンに睨まれるであろう、月一の憂鬱を思い出した所為もあつただろうし、他にも目の前の年下の少年に対する寂寥せきりようも二割は含まれた痛みだった。

シエリーの感傷染みた痛みを知らないジエネヴァは変わらぬ無表情で頷いた。

「それから、今後は宜しく」

「はっ」

「これから、月一で会いに来るから」

よろしく、を上手くのみこめないシエリーが、月一の言葉に頭の中でカチリとピースが噛みあう。

勝手に勘違いした事実にはシエリーの頬がじわじわと熱くなる。はくはくと言葉にならない思いが音に鳴らずに口から零れる。

「ぼつ。——ッ、そう。好きにしたらいんじゃない」

馬鹿、と罵りたかったのを、そう言えば目の前のジエネヴァは年下なのよねとシエリーの中で変なブレーキがかかった。要は年上の矜持だった。

せめて、熱い頬のままにジエネヴァを睨めば、ただ目をほんのりと細められただけだった。それが、なんだか微笑ましい、と言っているみたいでシエリーは心の中で悔しさを感じた。

「うん、好きにする。それと、これ。良かったら食べて」

どこまでもジエネヴァはマイペースらしい。頷きながらジエネヴァは手持ちの紙袋から綺麗にラッピングされたクッキーをシエリーに差し出した。

シエリーは怒っているのが馬鹿馬鹿しくなり、渡されたクッキーをしげしげと見やる。透明な袋の中で可愛いヒヨコと猫が仲良く入っていた。うっかりとシエリーは可愛いと眩きそうになった。危ない。そして薄々と感じていた予感をそのままにシエリーはジエネヴァに尋ねる。

「もしかして、これ手作りかしら？」

「ん。可愛く出来たでしょ？」

「……、まあそうね。お菓子に罪はないものね」

疑問は肯定で返ってきて、シエリーは複雑な気持ちになった。これ、私より料理が出来るんじゃない？いやでも私の方が……という複雑な乙女心でもある。

そんなシエリーの複雑な心情を知らないジエネヴァはこてりと首を傾げた。

「もしかして、猫より犬派なの？」

「違うわよ」

ジエネヴァの天然染みたズレた答えにシエリーは呆れた。まったく、この子は。

シエリーは特大級のため息を吐いた。

「貴方を警戒するの、馬鹿らしくなるわ」

そう呆れを含んだシエリーの言葉にジエネヴァはそうかな、と納得していなそうに首を傾げていた。

その後コーヒーを淹れてあげて二人でその手作りクッキーを一緒に食べた。クッキーは悔しい事にとても美味しいもので、シエリーは無言で完食してしまった。お店で売っていても可笑しくない出来栄えだった。

後日、姉に「この前ジエネヴァ君とお茶しちゃった」と楽し気に爆弾を落とされ、更には志保の話も聞いたわよ?と面白そうに言われ、シエリーはジエネヴァを問い詰める事に決めた。

それも後で誤解と分かり、姉の意外とお茶目な一面を思い出したシエリーだった。もう!とシエリーは久しぶりに姉に向かって怒りを表す事になった。

交わらない視点だつてあるさ

シエリーとちよつぱり仲良くなれたのは素直に嬉しいと思う。いやだつてジエネヴァ君にとつて初めての同年代の友達だぜ?……これ以上俺の意外とぼつちな現状について考えるのは止よそう。普通に泣けてくるから。

それは兎も角。手作りクッキーをシエリーと一緒に食べ、ほのぼのとした癒しの時間を終えて帰宅した。自宅に着いた時間はお昼時、十二時ちよつと過ぎだ。それで自宅の玄関のドアを開けた俺は、玄関に俺以外の靴——大人の革靴を見つけて気分が急降下した。

俺の自宅を知っているのは兄貴一択なので、必然と部屋の中にいる人物も特定できる。というか選択肢が一つしかない。つらい。

今日俺休みなんですけど、と肩を落としてつつ、リビングのドアを開けた。そこにはやつぱり自分と同じ銀色の頭が見えて、短い休日だったな、と俺は気持ちを諦めモードに変更する。

リビングに置かれた二人掛けのソファにジンはどつかりと腰を据え、少し低い四角いテーブルの上に乗っている皿をジツと見ていた。その様子は傍から見ても、軽くホラーである。何せあの人を殺しそうな鋭い眼光で射抜くように睨んでいるのだ。

テーブルの上に皿が乗っているのは俺が部屋を出る前に置いたからだ。ちなみに手作りクッキーの余りを帰つてから食べよう、ときちんとラップをかけて置いておいた。だけど、そんな気に食わない部分でもあるのだろうか。シエリーといい、兄貴といいそんな反応とは。俺的には可愛い猫とヒヨコさんという夢のコラボを再現したつもりなんだけど。

いつまでも怖い兄貴を眺めている訳にはいかないので、俺は勇気を振り絞つて声をかける事にする。

「……ただいま。兄さん、どうしたの?」

誰も聞いていない時は「兄さん」呼びをしても怒られないのでそ

う呼ばせてもらっている。こちらの方が呼び慣れているような気がするからだ。

ギロツと視線だけでジンはこちらを見た。その視線の鋭さにヒヤツとする方の胸の動悸がするが、俺はそれを堪える。

「お前、これは……」

「美味しいよ?」

これはねえよ、という兄貴のドン引きの声に俺はサラリとお勧めしておく。というかこの人もうちよい美味しい物を食べてストレス軽減した方が良くと思うんだ。カリカリし過ぎなんだよ。

俺の勧めの言葉に更にジンの顔が嫌そうに歪んだ。失礼な。……いやでも意外と甘味が嫌いとか食べ物の嗜好の違いで嫌なのか?どうなんだろ。

「二つ食べてみれば? なんなら持っていっても良いし。……作り過ぎちゃったから」

「……チツ」

クツキーは結構量が作れるからなあ。と言っても、二、三人前ぐらいしか作っていないけど。俺はソファの前のテーブルまで歩み寄り、お皿にかかっているラップを外す。それからジンの前にお皿を移動させた。さあ、どうぞ、と。

それをジンは舌打ち一つして、クツキーを一つ手に取った。その指につままれたヒヨコのクツキーが不似合い過ぎてシュールな光景だ。おかしいな、シェリーの時はあんなに違和感なかったのに。

俺はそのままじゃあ口の中がぱさつくな、と思い付き冷蔵庫から飲み物を取り出した。そして硝子のコップに淹れてジンの目の前にことりと静かに置いた。ちなみにクツキーにあわせて、アイスティーをチョイスしておいた。

「それで、何か俺に用事でも?」

「……ああ。仕事で近くに来たついでに、な。次の仕事の話もあるかな」

ぱきり、と可愛い猫のクツキーの頭を食べたジンは淡々と説明を始める。……どうでもいいけど、兄貴それ五個目なんだけど気に入った

んか、と俺は心の中のツツコミを喉の奥にしまっておく。危ない、またうっかり口を滑らせるところだった。

「——いつもの護衛の仕事だが、気をつけてやらねえといけない面倒な仕事だ」

不機嫌そうなジンの声は淡々と説明する。兄貴のこの不機嫌そうな様子つてもしかしてデフォルトなのかな、と俺は何気なく思い至った。

次の仕事の概要は、組織のパトロンの護衛。三カ月前にその人の元に脅迫状が届いたそう。警察に届けるのも躊躇われるけど、恨まれる理由には事欠かないので何もしないのは不安。それ故に組織を頼ってきたらしい。……組織に頼る方がリスクが高いような気がする、と思つたが空気を読んで黙っておいた。

三カ月前に組織の下っ端の人間を秘書として雇わせ、護衛させているらしい。それで、今度その人の誕生日で毎年恒例の誕生日パーティを別荘で開くので、もつと頼りになる人物を派遣して欲しいと要望があつたそう。出来れば、威圧感のない人物が良いと。……度胸があるなあ、そのパトロンと俺は逆に感心する。いやそれだけ組織に金を積んでいるんだらうな、きつと。

それで威圧感がない人物、という事で俺に白羽の矢が立った。設定としては俺はそのパトロンの古い友人の孫で、古い友人の代理で参加、と。既にそれで話は通してあるし、招待状も用意してある、とな。ほうほう、まあ通せなくてはならないのか？

それでその誕生日パーティが明日なので、俺は明日の朝早くからその別荘に向かわなくてはいけない、と。

女装しなくて良いのは有難いので俺は特に文句ない。朝が早いのも頑張ればいいので不都合はないな。

「それから、その別荘というのが結構山奥でな。別荘の近くまでバスは出ているそうだが、一日に三本という辺鄙へんびな場所だ」

そういう交通の便が悪いのが面倒だ、とジンは話を締めくくった。

——山奥の別荘とか俺にはフラグにしか聞こえない訳だが、気のせいだよな？と自分を心の中で励ます。

時間やその秘書の人について等の詳しい話をしてから、ジンはソファから立ち上がった。次の仕事があるらしい。

「じゃあな。——まあ、食べれなくはなかったな」

ほん、と帰り際俺の頭の上に手を置いて、褒めているか分からない言葉をぼそりと言い置いて行つた。俺は驚きのあまり、言葉を失くしてその背を呆然と見送るしかなかった。

残されたお皿にはクッキーは少ししか残っていなかったもので、多分褒めたのだろう。俺はポジティブにその言葉を捉えることにした。一人前は軽く食べたんじゃないか、この分だと。

そう言えば、とその時に気づいた。

「今日、兄さん煙草吸っていなかったな……」

今日どころか、この前来た時もそうだった。あのヘビースモーカーが。今更自分の健康の事を気にしだしたのか。うーん、分からん。きまぐれか、多分。

兄貴のきまぐれは今に始まった事じゃないので、俺はそう思う事にした。じゃないと、あの微妙な優しさが怖くて今日の夜とか寝れないわ。優しくされて怖いとか斬新だな、とやけくそ気味に考えを放棄した。

お昼は外食にしようとか俺は財布と携帯を持って外に繰り出す事にした。久々の休日だし、家の中に籠るのは少し味気ないと思ったのもある。

服装はこの前の黒のパーカーとジーンズだ。パークアのフードを被っていれば人目をあまり惹かないと学んだ訳だ。いや多少は目立つけど、素顔よりかはマシという話だ。

前にここでバーボンとばったり会ったんだよなあとか俺は少し懐か

しい気持ちになりつつ、人通りのある大通りを歩いていった。今日は平日、お昼時とはいえ、休日の時よりは人波が少ない。

「おいコラ待てえーッ!! それボクの財布だぞ!返せ!!」

後ろから人々の騒めきと、騒めきを切り裂くような怒鳴り声が聞こえた。スリだ、とも聞こえたので俺は振り返る。なんか聞き覚えのある声だな、とも思いつながら。

振り向けば、人々の間を掻きわけながら逃げる男とそれから離れて追いかける人が見えた。追いかけている方は遠くて姿が人波に隠れてしまっている。周りの人はザワツと騒ぐものの、捕まえようという剛の者はいないらしい。

しかたないな、と俺は素早くしゃがみ、逃げる男の足元をすくう様に蹴りを繰り出す。地面を滑るように放たれた蹴りは男の足首にヒットし、男が無様に顔から地面に突っ伏した。その転んだ際に男の手から財布が空中に放られたので俺はすかさずキャッチする。

その間僅か五秒に満たない刹那のやり取りだったので、小悪党の男にしてみれば何がなんやら、という気分だろう。

「おつ、サンキュー……こっちに投げてくれ」

追いかけていた持ち主が手を上に挙げて、主張する。俺は言われるままに拳がる手に向かって投げる。よし、上手くキャッチしたな。

「テメエツ!! 何しやがる!?!」

ガツと肩を掴まれ、俺の身体が後ろに引かれる。地面と仲良くしていた小悪党の男が復活したらしい。

殴られる気配がしたので、俺はそのままその男の無防備な腹に軽く肘鉄を入れる。ジェネヴァ君の本気でやったら、多分内臓に多少のダメージが入るからだ。手加減って大事だよな。

「グハッ」

その衝撃で体勢を前屈みに崩す男の無防備となった顎にすぐさま俺はアッパーカットをくれてやる。ガチンツと男の歯が鳴った。後ろに倒れて頭を打ったら危ないので、素早くその男の襟首を捕まえ阻止してやった。ぐえつと聞こえたが、締まっていなかったので無事だろう。口の痛みで悶絶する男から俺は手を離した。アッパーカットの

時に舌でも噛んだか、と思つたが手加減しての一撃だったので大丈夫だろと自分の中で結論付けた。

そこで漸く俺は男の方に向いた。無表情で冷たく一瞥してやれば、その男は悲鳴を上げて逃げ出した。根性ないな、と呆れてしまった。ただ、と駆け寄る足音が俺の背後から聞こえた。今、財布を盗られた被害者が辿り着いたらしい。逃がした事に文句を言われる覚悟を決め、俺はそちらへと向き直った。

そこにはキラキラと瞳を輝かせる、ボーイツシユな少女がいた。一見すると、少年に間違えられそうな男勝りな格好の人物に俺にはとても見覚えがあつた。

「すっごいな、君ッ!! なあなあ、君も格闘術習っているのか? ボクと一緒にだな!」

ギョツと俺の片手を両手で掴まれ、ぎよつと目をむく。人懐っこい笑みでにこにこしながら興奮したようにまくし立てられ俺はたじろいだ。

なんでこの人、ここにいるの? と俺は目を白黒しながら疑問に思う。

癖のついたショートカットの黒髪、ライに似た目元はニパツと真逆の明るい笑みがよく似合う。その緑の瞳も、キラキラと輝きその意思の強さを教えてくれる。笑つた時に覗く八重歯がチャームポイントだ。

世良真純。ライ——赤井秀一の実の妹で、ボーイツシユな見た目を裏切らぬおてんばさんだ。原作では、行方不明となつた兄、赤井秀一を探す為にこつちに引越してきたんだよな。確か。

これまじい展開だな、と俺は心の中で舌打ちした。嫌な予感もするので、多分当たっている。けれど出来れば穏便に事を済ませたいと思う。

「……別に、凄くないよ。それより、君の方は怪我とか大丈夫?」

「ああ、大丈夫さ。ちよつと隙をつかれてすられただけで怪我はないよ。そんな事より、ボクは君の方が気になるよ!」

俺の関わるな、という無言の訴えもなんのその、気にせずにごいぐ

い来る世良のコミユカの高さは流石だ。やめろ、握った手をぶんぶん上下に振るのはやめるんだ。

この光景をライに見られたら俺は割と死を覚悟せねばならない。ライからしてみれば、俺も組織の人間だし、妹に近づかれて心穏やかじゃない筈だ。

「俺はその辺に居る不良その一ぐらいの男だから。……関わらない方がいいよ」

「男!? へえー。君みたいな美人、中々見ないのになあ」

そこ驚くのかよ、と俺は舌打ちしたい気分になった。おお、と素直に驚く世良の顔に悪気は一切ない。はあ、とどうでもいい気持ちになって、ため息を吐いた。早く帰ろう、もうお昼は家にあるやつでいいや。

どっちでもいいけど、ここに留まるのは良くないか。俺は周りの視線がチクチクと刺さる現状に腹を括ることにした。まあ、あんな大立ち回りをしたら目立つよな。

「……どつか店に入ろう、話はそこで聞くからさ」

「え、やった!」

「お気楽でいいね、君」

「ボクは前向きさが美点の一つだからね!」

「……そう」

俺の諦めた声に万歳と喜ぶ世良に俺は複雑な気持ちになった。コイツ、と少し皮肉を言えば、胸を反らされ得意げに返された。ポジティブだな、この人と俺は短い時間で悟った。

※

近くの喫茶店に入って話を聞くと、どうやら今日は彼女の通う中学の創立記念日で休みらしい。それでちよつと遠出をしてここに遊びに来たようだ。……理由は別にありそうな話し方だったが、俺は深く聞かないでおく。多分、兄を探しにとかそんな理由なんだろう。原作ではあまり実家に顔を出せていなそうな描写だったし、昔一度だけチラッとライ時代の姿を見かけた事があるとも言っていたし。

喫茶店は街中の小さな店で中学生でも気兼ねなく入れそうな柔らかな印象だった。植物を適度に飾り、店内の壁紙もクリーム色という明るい配色のせいかと俺は分析する。店内は平日のせいか、少し空いていた。

「君、名前なんていうんだ？ちなみにボクの名前は世良真純っていうんだ。よろしくな」

四人掛けテーブルに向かい合わせで座り、それぞれ飲み物を頼んで十分ほど話してから世良はそう切り出した。どうやらいつまでも俺が名前を言わないので痺れをきらしたらしい。

どうするかな、と考えながら俺は一応頷いておく。いや、仲良くなっちゃ駄目だろ。

「……そう。俺は黒野でいいよ。多分もう会う事もないだろうし」「冷たい事言うなよお」

俺の淡々とした塩対応な言葉に世良がくたりとテーブルに突っ伏して嘆く。その大振りなりアクションに新鮮な気持ちになりながら、首を横に振った。

「俺はそういうツマライ奴なのさ。それに、女の子がこうやって知らない男と行動しちや駄目だろう？」

俺の小言めいた言葉に世良の目が丸くなる。なんだ、その予想外な事を言われた的な顔は。俺は当然な事を注意したままでなんだが。

「あれ？ボクの性別まで言ったっけ……？」

なんだ、その事か。世良の呆然とした呟きに俺は納得した。まあパツと見じゃあ分かりにくいのが、骨格とか注意してみれば分かる上に俺には原作知識という反則技がある。

ここは要らない事は言わない方がいいだろう。俺はそう判断した。「言われてないけど、分かるよ。——あ、そろそろ俺用事があるから」「えっ、ちよっ!？」

それじゃ、と俺は伝票を手にとって席を立った。勿論、頼んだ飲み物はきちんと飲んだ上で、だ。元々、飲み物一杯分の時間だけ話を聞こうと決めていたのだ。

慌てて立ち上がろうとする世良を放っておいて俺はサクッと会計

を済ませ喫茶店を後にした。すまんね、ここは奢るから許してなど心の中で彼女に謝っておく。

彼女は組織の人間に関わるべき人間ではない。真つ当な表側の人間である。流石の俺でもそれぐらいの配慮はしてあるさ。

喫茶店から出て、人混みに紛れれば追いつかれることはないだろう。一応、ちよつと路地裏に入り、遠回りをして帰る事にした。

路地裏に入って少し歩くと、目の前に誰かが立ちふさがった。誰か、じゃなくそいつは知り合いの姿をしていた。俺は目の前に立つ人物を現実として認めたくなかった。ねえこれ夢オチとか素晴らしい展開してくれないかな、と。

「二週間ぶりか。……少し話そうじゃないか」

黒のニット帽がトレードマークの男、ライがゆるりと歩いてくる。あ、これさっきの世良とのやり取り見ていたパターンですわ、と俺はライの目の鋭さに悟る。少しまずい展開だなあと思っていたけど、やっぱり俺の勘は当たってたか。

「いいよ。特に話せるものもないだろうけど」

俺、死んだなと久々の死亡フラグに内心泣きたい気持ちになりつつ、頷いた。俺の承諾の言葉にライは意外そうに目を細める。

「お腹空いたから、何か食べよ」

「ほお、余裕だな」

うるせー、余裕なんかあるもんか、俺はライの言葉に心の中で毒づきながら近くにラーメン屋を見つけ、アレでいいやと暖簾をくぐる。ライのもの言いたげな視線も無視だ無視。

年季の入ったラーメン屋であったものの、店内は意外と綺麗だった。そこそこ客も入っていたが幸いにも店の奥のカウンター席の隅の方が空いていた。

ライの隣に座る、というのが結構心臓に悪い(恐怖の方の悪さだ)が

どうにでもなれという俺のやけっぱちな気持ちで乗り切ることにした。

俺は醤油ラーメンを注文した。ライの方も諦めたようで、塩ラーメンを注文していた。しかし、この男の暑苦しい見た目でラーメンとかつらいものがあるな、とどうでもいい事を思った。黒の長髪、ニット帽、黒いコートの三連コンボだ。お分かり頂けるだろうか。せめてどれか一つでもいいから外すと印象も違うと言うのに。

注文したラーメンが届き、食べ始めて漸く沈黙が破れた。店の喧騒で少しの会話如き聞かれないのに気づいたらしい。そうだよ、物騒な事を言わなければ誰も気にしないさ、と俺は内心同意しておく。

「それで？」

「——何が？」

「あの子に何もしていないだろうな」

あの子、か。やはりライと言えど中学生の妹が心配らしい。俺はライの問いに頷く。

「何もしていないよ。ただ、スリの犯人を捕まえて財布を取り返してあげただけ。……喫茶店に入ったのは、あの子の興奮状態が落ち着くのを待っただけの話」

もしもあの時アデオス!! と俺が脱兎の如く逃げたら、追いかけて世良に捕まる可能性もあった。それなら少し落ち着いてから不意打ちで逃げればいい、と思っただけの事だ。

俺の答えにライはふうと安堵の息を少し吐いた。苦勞するね、お兄さん。

「なら、いいのだが」

「あの子ってライの身内でしょ。それならもう関わらないから安心して」

「……流石にバレるか。しかし、意外だな。あのスリの犯人といい、あの子の事といい。君は随分と穏便な手段をとるんだな」

アレを見られていたか。俺は少し決まりの悪い気持ちになった。ライの心底意外そうな声が余計にその気持ちに拍車をかける。どうかアレで穏便とか基準が物騒だな。

「まあ、穏便に済むんならそれに越したことはないでしょ。物騒な事は仕事だけで充分だよ」

「ほお?」

「俺は自分の領域を越えない事になっているんだ」

俺の抽象的な話にライが視線で先を促す。……ラーメンを啜るの結構違和感あるな、この人とどうでもいい事に呆れる。

促されたので渋々、俺は付け足した。

「あるだろ。表側、裏側って。そういう領域や付随する線引きも。せめて、それを越えないようにするのが良心って言うものでしょう? まあ、俺なんか言うべき事じゃないんだけど」

善人、悪人。それできつかり二分出来る世界じゃないって言うのは流石に知っている。それでも裏の人間が手をつけちゃいけない領域が存在すると俺は思うんだ。全てを言葉に出来るとか傲慢な事は言わない。俺が表側の人間を守れるとかも戯言でも言えやしない。そんな俺でも自分で決めたケジメくらいは守れると思いたいのだ。

何が言いたいかって? つまりは組織の人間である俺が表側の人間を巻き込まないようにしたいな、というだけの話だ。

「……惜しいな」

ぼそり、とライが呟く。俺はその言葉の真意を問うように視線を向けた。

「いや、何。独り言だ。君が気にする必要のない、どうでもいい事さ」
言葉を微妙に濁し、ライはまた黙々とラーメンを啜る。

どうやら聞きたい事は終わったらしい。やったぜ、俺死なないですんだ、とホッとして食事を再開させる。

「そう言えば、この前明美さんに会ったんだけど」

「っほっ」

俺はついこの前を思い出して、話す。不意打ちの話題にライがむせた。ああ、ごめんと俺は備え付けのペーパーナプキンを取って差し出す。素直に受け取ったライは口を拭いた。ライの眉間の皺が増えているが、俺は構わず続ける。

「いい人それで安心したよ。——幸せそうだったし」

「……お前は俺の親か。まったく、子どもがそんな事を気にするんじゃない」

「素直じゃないね、お兄さん。いいじゃないか、幸せそうだねご両人と冷やかすぐらい」

「おやじか」

ライのツツコミに俺は気にする事なくラーメンを啜る。もう少しで食べ終わりそうだ。ツツコミの際にライに軽く頭を小突かれたが、痛みはないぐらいの優しいものだ。

帰り際、世良の事を他に漏らさないでくれないか、と頼むライに俺は当然だろと返した。俺はそこまで外道じゃないよ。

ライと別れ、俺はやつとこの忙しない休日の残りをゆつくり過ごす事が出来た。

明日の仕事への微かな不安に似た予感に目を逸らしながら。

運命の悪戯か、神の思惑を疑うか

俺は目の前の状況に目眩を感じた。

屋敷の二階の端にある書斎。その持ち主自慢のものだけあって壁際の本棚はみっちり埋まっている。扉を開けてまず目に入ってくるのは奥に配置してある立派な執務机、黒の革張りの社長椅子、それからその手前の応接用の長机に二組のソファである筈だった。

それがどうだろうか、左手にある大きな窓は開け放たれ、その近くの床に倒れ伏す人影。

人影の正体は今日の護衛対象だった筈の男。左胸にクロスボウの矢が突き刺さっていて、それが致命傷であることを一目で察する事が出来る。恐らく、矢の先に毒物が塗られていたのだろう。

そしてその倒れた護衛対象を守っていた筈の組織の人間——秘書の女性も床に力なく横たわっている。じわじわと血が滲むのを見るに絶命してから時間は経っていない。ただし、こちらの致命傷は拳銃によるものだ。偶然か、こちらも左胸に、心臓に近い部位に致命傷を負っていた。

けれど秘書の方を殺した人物は既に分かっている。彼女の近くに呆然と立ち尽くす、ここの家の一人息子だ。その手には先ほど発砲したばかりの拳銃が握られていた。震える手がその得物を取り落とす。ゴトリ、と重い音が室内に響き、ドアを開けてから止まっていた時間が動き出したような錯覚を覚える。

「——違う、俺じゃない。俺じゃないんだッ、こいつが拳銃を持っている……それでそれをとり上げようとしただけなんだ……ッ!!」

呻くように苦し気なその声は、訴えるような切実な響きが滲む。正当防衛を主張するようだ。

これがアニメだったら開始十秒で被害者が二名と意味分かんない状況なんだろうな、と俺はガリガリと精神力が削られる音を聞きながら思考を逸らす。

「——それは話を聞いてからにしましょう」

ポツリ、と水面に投げられる投石のような、毅然とした声が室内の

空気をかえる。

「き、君は誰だね？」

招待客の一人がその声の主に問いかける。

「工藤 新一。探偵ですよ」

フツと余裕の笑みをも浮かべた少年が悠然と室内に入った。

俺はその様子を後ろから見て、冷や汗を掻いていた。周りを見れば、新一君だけでなく、蘭さんや園子さんも居た。やだー、役者が揃っていらつしやると俺は白目をむきそうになった。危ない危ない、夢の世界に旅立つのはまだ早いわ。

もうやだこの世界、と俺は内心泣きそうになりながら折れた心をなんとか立て直す。このままじゃ物理的にも社会的にもお陀仏である。誰がつて俺がだ。この任務失敗で組織からコロコロされそうなのに、更に名探偵追加とか本気で殺す気かな？俺が黒の組織の一員だと秘書さんのついでに暴かれたらマジで詰む。

OK、冷静にいこうぜ俺。まずは最初からこの任務を振り返ってみようと思う。

※

時を遡ること、三十分前。

……眠い。昨日はあまり眠れなかったから、この窓から差す温かな日差しが俺の目を刺すようで本当につらい。今の時刻は午後一時を少し過ぎた頃だ。目的地までの移動の為のバスの中で一人こうしてその揺れに身を任せているのである。目的地まで後三十分といった所か。バスに揺られ既に一時間、窓から見える景色も住宅地の家々といった人工物から、山の木々の緑へと姿を変えて少し経つ。このバスの終点が目的地の屋敷の近くで、バスから降りて坂道を五分ほど歩かなくてはいけないらしい。

目的地に着くまでの三十分、俺はやる事もないので思考に没頭する事にする。

幸いにも今日の天気予報は快晴。雲一つない青空は、出かける前に

見た予報の的中を約束してくれそうなくらい穏やかなものだ。これならば、フラグの一つである「嵐の中の陸の孤島化」という連絡、交手段の断絶はないだろう。そうなると連続殺人事件という負の連鎖も考えられるからな。

流石にここまでくると俺の考え過ぎな気もする。というか、そもそもこういう護衛の仕事は何度もやっているし、時にはもつと危険な条件だってあった。……闇のオークション会場とか。

俺は諸々の心配を神経質になり過ぎだ、と一旦頭の隅に片付ける事にした。

さて、今日の仕事の話である。そもそも、もつと早く到着していた筈だった。今朝追加の仕事だ、とジンの兄貴の指示が下りそれを片付けていたら遅れた訳だ。追加の仕事の内容はなんて事のない、ちよつと法律に引っかかる物品の運搬の仕事だった。これくらいじゃあもはや抵抗感なんて感じなくなったのは、良いのか悪いのか。……こんな気にしていたら組織で生きていけないので今は気にしないでおく。それが終わつたのが朝の十時で、それから急いで支度して現在に至る訳である。電車に乗って、バスに乗り換えてとそんな感じで健全なルートを辿った。……不健全だと何があるかだって？勿論、法律に引っかかる物品の運搬に使ったバイクとかその辺だよな。免許？技術があれば組織ではどうとでもなる、と俺はそこら辺の耳に痛い常識については諦めているのだ。

話を戻す。それで、今回の護衛対象についても明らかにしておく。

護衛対象は金剛こんごう 道郎みちろう、六十五歳。なんでも元大地主の旧家のお金持ちだそうだ。それでちよつとした会社を興し、成功。それ故に羽振りがいい、と。今回の別荘は金剛氏のお気に入り、英国にあつたちよつとした逸話付きの屋敷を丸々移転させたらしい。その逸話とというのが、日本でいうところのからくり屋敷疑惑で、それは事実でもあつたそうだ。

この金剛氏は世間でも変わり者で通っているらしく、曰く珍しい物や話が好きな蒐集家だという。屋敷もその好奇心故の購入だ、と。俺

は出かける前にその屋敷の見取り図を覚えたのだが、確かに隠し部屋が一つに、隠し通路が幾つかある変わった屋敷だと記憶している。というか、これもフラグの内の一つなんだが、と俺がその時舌打ちしたくなったのは仕方ないと思う。何のフラグってそりゃあ事件フラグ一択ですが。兄貴の言っていた面倒ってこれもか、納得した。

さて、この金剛氏には家族もいる。年の離れた後妻に、前妻の息子が一人という家族構成だ。確か、後妻さんが金剛 華純、三十四歳。数年前に結婚するまで道郎さんの秘書をやっていた元秘書さんでもある。そして前妻の息子が金剛 道久、三十歳。息子である道久さんがゆくゆくは会社を継ぐらしい。少し複雑なご家庭だな、と俺は素直な感想を抱いた。

そして現秘書で組織の構成員でもある、安楽 紗稀、二十八歳。彼女の組織の評価は可もなく不可もなく。一般人として紛れ込めるのが評価されている。俺も写真を見たが、黒ぶち眼鏡をかけた黒髪の普通の日本人女性といった印象だ。他に特徴を上げるなら、キツチリと纏められたその黒髪に几帳面さを感じさせるくらいか。

今作戦ではこの安楽さんと協力してやる手筈となっているのでちよつとしたハンドサインを事前に決めてある。と言っても俺はメールでその概要を知っただけなのでこの安楽さんとは初対面だ。……こういう秘密のサインとかってスパイ映画みたいで少し面白いよな。例えば Sign A なら作戦完了、B ならば作戦続行警戒を継続せよ、などアルファベット A～E までの簡単な指示だ。今回限りのサインなのでそう凝る必要なんてないし。

他には数名、金剛氏の趣味である話の蒐集の為に誕生日パーティーの前に招待しているそうだ。俺が着く前には、その人たちは到着している予定だという。俺の仕事の本番は誕生日パーティーでの護衛なので、到着が多少遅れても大丈夫だそうだ。ちなみに誕生日パーティーに招待されている人数は大体二十数名程。最悪の事態などを想定すると人手が欲しい、と不安になるのも分かる気がする。

後もう少し時間があるので、俺の装備品……じゃなかった所持品に

ついても確認しようと思う。と言っても今回は物騒な代物は持ち物に存在しない。手荷物は着替えを入れてあるキャリーケースのみだ。……今回のパーティにはドレスコードが存在する故に今着ている普段着とは別に正装が必要なのだ。後はペンライト(医療用の)、それからピッキングツールを隠し持っていればいいだろう。武器は要らない。最悪この身体を盾にすれば護衛対象は守れるだろう。致命傷を避ける心構えというか、コツは既に把握している。……平和に生きていれば一生要らない技術だろうな、と俺は本日何度目か分からないため息を吐いた。

……拳銃を持っていても良かったんだが、そうすると荷物検査が面倒なのと未だに拭いきれない不安があるからだ。いや、無用な心配だ、と我ながら分かっているんだけど念には念を入れて、だ。

さて、そろそろ件の屋敷が見えてきた。

遠くからでも小さく見えた、その立派な煉瓦造りの塀と鉄格子は屋敷をぐるりと囲む緑園が垣間見え、その威圧感を緩和させている。門は開け放たれ、来訪者を迎え入れているかのようだ。

敷地に足を踏み入れ、俺は屋敷の外観を見上げた。大きな洋館、お屋敷だ。敷地も広々としており、玄関前に置かれた噴水と庭師の手が入った木々と花々は見えていて、素直に感心できる出来栄だった。目の前の本館とは別に誕生日パーティを開く別館がある。本館とは渡り廊下で繋がっている、その建物は古くは小さな劇場だったような。それを改装し、その雰囲気は残しつつもパーティ会場として使えるようにしたようだ。確か、持ち主である金剛氏の遊び心で、会場の隠し通路とかはそのままにしてあるんだよな。俺は事前に確認した見取り図を思い浮かべた。部屋数も多いし、隠し通路だとか隠し部屋(三畳くらいの小さなものだ)とかオペラ座の怪人かな?と思える仕様となっている。……ますます事件とか起きそうな場所なんだよなあ。パーティまで時間がある事だし、後でぐるっと一周して確認しておく。

そんな取り留めもない事を考えていると、正面玄関に辿り着いた。正面玄関前には、老齡の執事が立っていた。時代遅れの燕尾服をきつ

ちりと着こなす姿はテンプレ通りのソレだ。形式通りに挨拶もそこそこに、俺は執事さんに招待状を見せる。その招待状には、くろの げんぞう黒野源三と書かれていた。げんぞうとか渋いな、と俺はこの招待状を手配した兄貴のネーミングセンスを疑っておく。

「黒野様、ですね。……おや？」

「……ああ、俺はその人の孫。来れなくなってしまったから、その代理でね」

執事さんの疑問の声に俺は事前に用意した答えを口にした。

それに執事さんは納得したように頷いた。

「左様でございましたか。それでは黒野様、当館にようこそいらっしゃいました。ゲストルームまでの案内をいたしましょう」

執事さんの案内に従い、その後を歩いて行つた。部屋に着いたら早速、護衛対象に挨拶をしなくてはいけない。

「……そういえば、ご主人は何処に？」

「旦那様でしたら書齋にいらっしゃいますよ。しかし一人になりたいと言つていらしたので……おや、時間が過ぎておりますな。旦那様は二階の書齋にいらっしゃいます。階段を上つて左に曲がつてその突き当たりが書齋になりますので、お客様が訪ねられても大丈夫でしょう」

「……そう」

俺の問いに執事さんは慣れたように答える。それに頷いたその時。

——バアンツ。空気を切り裂く鋭い銃声。平穩から程遠いその音に俺は瞬時に音の間こえてきた方向を特定する。——二階、それも先程案内にあつた書齋の方からか。

「——ツ」

舌打ちしたいのを堪え、俺はキャリーケースから手を離し駆けて行つた。後ろから「お客様!？」と執事さんの声が聞こえてきたが緊急事態なので無視させていただく。

件の書齋に辿り着き、そこには屋敷の訪問客、それから住人の姿があった。後妻さんと訪問客と思われる男性二名、それから扉の前に立ってドアに手をかけている少年、とその後ろで見守る少女二名。つておい、その少年つて名探偵さんじゃないですか、と俺が動揺していると扉が開け放たれ、冒頭の状況に至る訳である。冒頭で俺が呆然としていると、後ろから執事さんが漸く追いついて来た。

新一君は早速その場を仕切り、蘭ちゃんたちに警察を呼ぶように指示を飛ばす。警察は一時間後に着くらしい。そして現場から人を追い出し現場保存、書齋の近くの客間にその場に集め話を聞く事となった。事情聴取の時間である。——執事さんは今回のパーティ中止の手配で席を外した。彼のアリバイはこの屋敷の皆が知っている。何せ、ずっと玄関か、ゲストルームの案内を繰り返していたのだから。新一君がアリバイを聞きだしているのを小耳に入れながら、俺は自分の悪い振りをしながら壁に背をつける。

ちよつと状況を整理しようと思う。まずは護衛対象の金剛 道郎氏、彼が第一被害者だ。新一君が死体の状況から大体死後一時間程度、と前振りをしてからアリバイを聞きだしているので間違いない。秘書の安楽さん、彼女は先程の銃声あれが致命傷なので死後から時間は経っていないと推察できる。問題はこの第一被害者の金剛氏を誰が殺害したのか、だが。

アリバイ云々はそれぞれ主張しているようだ。

先ずは後妻の金剛 華純さんからだった。彼女は瞳を涙で潤ませ、切々と夫の死を嘆いている。

「何故、こんなことに……。一時間前ですか？ 確か、その時間は庭で花壇の世話をしておりましたわ。私の趣味で、主人もよく共に花を愛でていましたのに……」

「……その花壇は何処に？」

「丁度、書齋の真下になりますわね。ほら、あの大きな窓がありましたでしょう？ そこから見えて……。よく主人が休憩だと言って、一人で

あの書齋に籠った時も偶に花を見ると落ち着くと言っていて……」

そこで華純さんが顔を伏せる。涙が堪えきれなかつたようだ。口元を手で覆い、嗚咽をかみ殺している。話を聞きだしていた新一君は神妙な顔で続けた。

「すみません、思い出させてしまつて。もう少し話を続けても?」

「ええ」

「ちよつと、新一ッ!」

一言謝つてから話を続けようとする新一君の腕を蘭ちゃんが引つ張る。無神経過ぎだ、と咎めているようだ。それに華純さんが首を横に振つて、微かな笑みを浮べる。無理矢理の笑みがかえつて痛々しい。

「いいのです。主人の殺した犯人をどうにか捕まえて欲しい、と思ひますもの。けれど、ありがとう。心配してくれたのね」

「え、でも……」

「大丈夫、さあ続けましょうか」

戸惑う蘭ちゃんに華純さんが微笑む。それに渋々引き下がる蘭ちゃんに園子ちゃんがそつと手で背中を撫でる。まだ中学生の彼女たちにこの手の負の感情は悪いだろう、と俺は少し心配になる。

「そのアリバイを証明してくれる方は?」

「……おりませんわ。ただ、銃声を聞いた時に空山さんと途中で合流しましたから、あの前後のアリバイは証明される筈ですわ」

「なるほど。——では、次に空山さんのお話を伺つても?」

新一君に次と促された招待客の一人、空山さんは渋々と口を開く。四十前半の中肉中背の神経質そうな男性だ。銀のフレームの眼鏡が、なおの事印象をインテリに見せる。

「はあ、何故こんな子どもにも。まあいいでしょう。私は空山そらやま 史孝ふみたか、一

応小説家をしている。君たちにはオカルト小説と言つた方が馴染み深いだろうか。亡くなったこの旦那さんとは五年くらいの付き合いだ。小説の裏話とか話すとよく喜ばれたよ。……それで今日の十時頃ここに邪魔して、今度の小説の参考にしようと屋敷の中を見回つたりしていた。勿論、一人でだ。なのでアリバイを証明してくれ

る者はいないな。時折この使用人とすれ違っていたので彼らに聞けば誰かは覚えていられるかもしれないが」

そこで、空山さんは話を区切った。そして思い出すように手に顎を添える。

「そして、奥さんと会ったのは銃声を聞いた直後だ。確かに奥さんは書斎のある部屋の真下の花壇の方から出てきたよ。花壇からさほど離れていない場所だったから、恐らくは嘘はついていないと思う」

あくまで私個人の意見だが、と付け足して空山さんの話は終わった。

「ありがとうございます。それでは、次は——」

「俺の番で良いだろう？」

新一君の言葉を遮り、名乗り出たのはもう一人の招待客。背の高い、がっちりとした体格に日に焼けた褐色の肌。年の頃は三十代後半に見える。一目でアウトドア派だな、と分かる陽気な男性だった。

「俺の名前は奥池おくいけ 光洋こうよう、写真家だ。と言っても、さほど名は売れていないがね。普段は海外へ行って自然相手に仕事をしているしがない男さ。それでももってここの旦那とは二年ほどの付き合いになるかな。なんでも俺の撮った写真が気に入ったんだと。物好きな旦那だよなあ。——で、アリバイだったか」

奥池さんは無精ひげを一撫でし、思い出すように虚空を睨む。そして間を空けてああ、と納得の声を上げた。

「思い出した。ここに来たのは午前十一時。それから早いお昼をご馳走になって、一階にあるバーで酒を飲んでダラダラしていたよ。このメイドさんに話相手になってもらったりしたから彼女に聞けば分かるんじゃないかな？」

「そうですか。後で確認を取りましょう。——で、君は？っておい、顔色悪いけど大丈夫か？」

そこで新一君の話の矛先が俺に向かう。俺はそれまで気分が悪い振りをしていたのを思い出した。ちよつと話を聞きながら今後の対処について考えていたのだ。

「大丈夫。——俺は黒野。黒野くろの 静せい。俺の祖父がここの旦那さんの友

人で、俺はその代理。だから旦那さんとは初対面だよ。——それからアリバイか。先程の銃声の時はここに着いたばかりで、それより一時間前って言うと、電車かバスの中だったかな」

俺がそう言えば、新一君は一、二回頷いた。そしてその視線を、ここに集められた最後の一人に向ける。

最後の一人、第一被害者の一人息子で秘書殺害の容疑者。金剛 道久こんごう みちひささんは皆とは離れて、客間の一人掛けのソファに腰を沈めていた。その背を丸め、頭を抱えて苦悩する様は哀れでもあった。ワックスで整えた髪も乱れ、身なりの良い服装も着崩れしてしまっている。そのくたびれ具合は三十歳とは思えない憔悴っぷりだ。

「さて、道久さん。お話を最初から聞かせて下さい。勿論、僕一人の方が良いのであれば場所を移しましょう」

「いや、いいんだ。私も何がなんやらで、無我夢中だったから……どこまで正確に語れるかは分からない。それでもいいなら——」

「ええ、構いません。覚えている範囲で良いんです」

「そうか……。私は一階の書斎に居たんだ。丁度、一時半を少し過ぎた頃。そろそろ親父の休憩時間が終わるだろうと二階の書斎に行くことにしたんだ。少し読みたい本もあったしね。——扉を開けて驚いたよ。何せ、そこには親父が床に倒れていて、傍に秘書の姿があったんだから」

そこで言葉を切った道久さんはグツと奥歯を噛んだ。ごくりと唾をのみ込み、続きを話す覚悟を決めたように下を向いていた顔を上げる。

「しかもその手には銃が握られていた。咄嗟に親父を殺したのが秘書なのでは、と思ってしまった。親父の胸に刺さるクロスボウの矢に気づいたのは、全てが終わってからさ。ピタリと銃口を向けられると、人って分からないものだな」

はは、とそこで道久さんは掠れた声で自嘲の笑みを零した。

「そこからは無我夢中さ。銃をとり上げようと距離を詰めて驚く彼女の手を掴んだ。それから——」

言葉が続かない、そんな苦汁を飲んだ道久さんは黙り込んでしまっ

た。皆、この場に集まった人達は言葉が出ないようだった。

「それからそれは事故だったと。正当防衛だ、と貴方は主張するので
すか？」

静かな声だった。新一君の真つ直ぐな瞳と声に誰もが視線を向ける。罪を責めるではなく、そこにあるのは真実を見つめる探偵の目だ。

新一君の確認の言葉に道久さんは頷いた。

「ああ」

それから警察が来るまで皆客間で待機だ、と新一君は言い残し去って行った。容疑者達の他に、この場に残るのは蘭ちゃんと園子ちゃん
の二名だ。成程、犯人がこの場に居ようと人が集まっていれば下手な
事をやらないだろう、と。しかもご丁寧にこの使用人の人に見張りを
頼んでいた。

警察が来るまであと三十分。それが俺のタイムリミットだ。

俺は体調が悪いので、少し別室で休ませてくれと見張りの使用人に
願い出た。少し渋られたが、この儂げ美少年というジェネヴァ君の見
た目で眉を下げてほんの少し悲し気にすれば一発だった。やったぜ、
これで自由行動がとれる。ちなみにこの鉄仮面の無表情はほんの少
ししか変わらないのだ。俺だって頑張った。でも限界ってあるよな、
と俺は一人悲しむ。

さてここで情報を整理しよう。金剛氏殺害と秘書殺害はそれぞれ
別の犯人だ。一人は言わずもがな、金剛 道久氏。問題は金剛氏殺害
の犯人だが、俺はもう当たりを付けている。今からその証拠となる物
を確認する為にこうして仮病を使って抜け出したのだ。

その前に、と俺はポケットにしまっていた携帯を取り出す。パカ
リ、と開けて、シンプルな初期設定の待ち受けを眺めた。まだかける

決心がつかないのだ。

いや、確認してからでもいいよな。俺はちよつと問題を先送りする事にした。例え五分しか先延ばし出来なくても心の準備の為にはその五分が必要だ。

——情報の整理に戻ろう。

現在、容疑者は道久氏と俺を除いて、三名。後妻の金剛 華純さん、そして招待客の空山 史孝さんに奥池 光洋さんだ。この内でアリバイ証明がなされているのは、奥池さん一人。他の二人はグレー。しかし、この二人も現場からは距離が離れた場所に居て、しかも使用人に目撃されても可笑しくない位置に居た。

そんな危ない所で犯罪を犯すだろうか。——そう思わせるのが犯人の狙いだろう。後で侵入者を見かけた、とそれらしく証言すれば誤魔化せる可能性がある。犯人が現場に残したのは被害者を射抜いたクロスボウの矢。そのみなのだから。

さて、俺には新一君よりも二つほどアドバンテージがある。一つ目、この屋敷の見取り図を事前に覚えていた事。隠し通路や隠し部屋は事件現場の近くには存在しない。——主にパーティ会場である別館の方に仕掛けられていたからだ。けれどこの屋敷には隠しギミック（というには大げさか）が存在した。二つ目、俺は秘書が組織の間だと知っている。なので、彼女が被害者を殺す筈もないし、拳銃の持ち主であるのも知っている。それから何故道久さんに後れをとったのかも推察出来た。

俺は事件現場の真下、花壇があるという場所に着いた。——良かった、名探偵君は居ないな。

そして書齋の窓の前に生い茂る木を見上げる。広葉樹で、その背丈は屋敷の屋根につきそうな程に成長している。葉の緑に紛れてしまっているが、その中で尖っている金属が見えた。——釘だ。丁度窓の前、木の枝の二股に分かれているそこに何かの支台、もしくは何かを引っ掛ける用途にだろうか。多分、その釘の上と枝分かれの所にクロスボウを上手く置いて、仕掛けを作ったのだろう。

俺は今度は下に目を向ける。そこにあつたのは花壇だ。よく手入れされている花壇は手作り特有の温かみを感じさせる素朴な作りをしていた。花壇の周りに置かれているノーム人形なんて事情を知らなければ微笑ましい部類になるのだろう。

花壇に配置されているノーム人形は七体。かの白雪姫の再現だろうか、なんて頭の片隅で考えながら俺は件の木の前に配置されているノーム人形の前にしゃがむ。

どのノーム人形も微笑み口を開けている。その口の中は空洞だ。俺はしゃがんで目の前のノーム人形の口の中を手持ちのペンライトで照らす。薄らと浮かび上がるシルエットは想像していた通りのものだった。よく観察すると、なるほどノーム人形も陶器ではなくプラスチック製でこれなら傷がつくだけだろうなと俺は納得する。

ノーム人形に仕掛けられていたのは小型のモーターとワイヤーを巻き取った装置だった。ここまで暴けば自ずと犯人が分かるだろう。——そう、犯人は後妻の華純さんだ。

そして凶器となるクロスボウは屋敷の仕掛けである隠し収納スペースにあるだろう。丁度花壇の近くの壁は上は白の壁なのに下の三分の一が煉瓦造りとなっている。その内の一つを押せば外れて、そのスペースを現してくれるという寸法だ。多分煉瓦五個くらいは外せると思う。

俺はそこでため息を吐いて、携帯で兄貴へと電話をかけることにした。

コール音が三回した後で低い声が聞こえた。

『チツ、なんだ』

『緊急事態。——対象が殺された。しかも、秘書も』

『あ?』

もはや舌打ち程度は挨拶ぐらいになってしまった。そのことに若干の悲しみを覚えつつ俺は本題を切り出した。グツと冷え込む兄貴の声に背筋が冷えていくのを感じる。

だが、めけてもいられない。俺は腹に力を入れて、勇気を絞り出す。「それで、秘書の方の自宅に警察が行くと思う。あと三十分もしない

内にこちらに警察が到着するそうだからそっちも時間の問題だね」

『大惨事じゃねえか。——仕方ねえ、簡単に説明しろ』

兄貴の心底面倒臭そうな声に俺は心の中で同意しておく。しかしそんなどこぞのスレみたい在三行で説明、みたいに急かされても悩む。

「俺が到着した時にはもう既に対象の方は事切れていたようだよ。それから玄関で銃声を聞いてね。そうしたら秘書の方が亡くなっていたんだ」

『つまりは拳銃の方の証拠隠滅は無理か。面倒だな。——分かった。そっちの方の証拠隠滅は請け負ってやる。それで？そんな舐めた真似をしてくれた馬鹿は何処のどいつだ』

「——普通の一般人だよ。大ごとにしなない方が綺麗に片付くと思うよ」

『チツ』

俺は呆れ気味に兄貴に進言しておく。無用な血を見るのはご免だ。とそこで俺は近づく気配に気づいた。一応は身を潜めようとしているみたいだけど、バレバレのこの気配。素人か、と俺は結論付ける。

「それで俺の方はどうする？——片付け、必要かな」

俺はマイルドな言葉遣いに直す。多分、あちらでは今から聞き耳を立てるのであろうなと推察をしながら。

『いいや、必要ねえよ。元々秘書の方の携帯も心配いらねえように仕掛けが施してあるからな。護衛対象の方も精々用途不明金の存在が薄ら分かる程度だろう』

「仕掛け？」

『ウイルスき。こっちの指示一つで携帯のデータは破壊出来る。念を入れといて正解だったな』

「……そう」

相変わらずの組織の謎の技術力がジンの口からサラリと披露された。何それ怖い、と俺は素直な感想を胸にしまっておく。

『……この件に関しちゃお前に責はない。俺からあの方に報告しておこう。——だからお前は五体満足のままとんずらして来い』

「——難しくない?」

『お前なら出来んだろ』

じゃあな、と無茶ぶりをしておいて兄貴は無慈悲に電話を切った。一方的過ぎる、と俺は内心慄く。というか、今の口ぶりだと警察の事情聴取からバツクレて来いよ、って意味だよな?」

俺はそこで漸く肩の力を抜いた。聞き耳を立てている某探偵君がいなければガッツポーズもしたところだ。これで今回の死亡フラグ一つ目解消。任務失敗、残念死ね!という可能性を恐れていたのだ、俺は。

あとは目立たないように過ごしていればいいんだけど、少しお節介を焼こうか。

「……そろそろ出てきたら?俺に何か用事かな」

「——バレてたか」

俺の指摘にちえつ、と少し罰が悪そうに新一君が物陰から出てきた。気づいていたよ、と領けば、ますます顔をしかめられた。

「……さっきの電話、誰だよ」

「家族だけど、何か?」

歯切れの悪い新一君の問いに俺は間髪入れずに答える。ちなみに嘘は言っていない。

「それにしちやあ——」

なんか怪しかったような、と腑に落ちない新一君を横目に俺はこの場を立ち去る事に決めた。あれだ、あんまり主人公君に関わるとボロが出ちやうからね。

「じゃあ、俺はこれで」

「ちよっ、待てよ!」

新一君の気の漫ろなところに横を通り抜ける。通り抜けてから新一君に呼び止められるが、足を止めずに顔だけ振りむいた。

「そこ」

「これか?」

「うん、そこ押してみて」

俺は花壇の上の壁の煉瓦の一つを指さす。これか?と首を傾げて

手袋をはめる新一君に頷く。そして動かすように促し、俺はさつさとこの場を抜けた。

「は？——これは凶器の」

そんな呆然とした眩きを背に受けて。

それから俺は皆の集まる客間に戻った。戻ったら蘭ちゃん達に、「君、大丈夫？」と優しくされてめちやくちやビビった。口元が引きつらないように頷き、なんとか誤魔化した。

そして五分ほどしてから新一君が皆に事件現場に戻って欲しいと招集を受けた。その際にこちらをキツと睨まれたのは気のせいにしておく。名探偵が俺なんかを睨むはずがないじゃないですかーははは、と心の中で現実逃避が忙しい。

さて中学生の新一君の推理ショーは如何ほどか。俺は不謹慎だと分かっていながらも少し高揚した。

「まずはこの事件を最初から辿ってみましょう」

新一君は一つ一つ丁寧に事件をひも解いて見せた。

「これは犯人にとって大きな賭けだったことでしょう。いや、案外分かっていたのかもしれませんが。何故なら犯人は被害者と親しい人物だったので、彼の日常を予想する事も出来た筈です」

「な、なんだって」

新一君の親しい人物、の言葉で驚愕するのは小説家の空山さんだ。それを頷き一つで受け流し、新一君は続ける。

「被害者は決まってる行動がありました。日課、と言い換えてもいいでしょう。勿論、これは屋敷の皆知っていた事実です。——それは午後の食後の小休憩。そうでしょう？被害者の奥さんの華純さん」

「え、ええ。主人は気分転換も兼ねて普段でもそうしていましたわ」

急に話題の矛先を向けられ、華純さんは少しうろたえる。

「そこまでは屋敷の皆知っていた事実。けれどその先、貴方はもう

一つの行動も知っていた。それは窓を開ける事です」

「まじっ。」

蘭ちゃんが不思議そうに首を傾げる。この場にいる半数は同意し
たはずだ。何故、今更と。

「そう。——とここでこの書斎の窓は少し変わっていますね。内側だ
けでなく、外側まで取っ手がとりつけてある」

「そ、それはッ。ここに屋敷を移転する前からのデザインですわ。つ
まりは百年ほど前にイギリスに建ててあった時からの初期のデザイ
ンです。何も可笑しくはありませんわ」

それに書斎だけでなく、二階全ての窓がそのデザインなのよ、と華
純さんは語気を少し荒げた。

「そうですね。ではこちらはどうぞでしょうっ。」

そう言つて新一君は白の手袋をはめたまま、書斎のソファの影に隠
していた物を取り出す。

それは件の凶器のクロスボウ。行方不明だった凶器の出現に場が
騒めく。

それで華純さんは悟つたのだろう。全てが暴かれた、と。

どきりと華純さんが膝が崩れるように床に座り込んでしまった。

「——犯人は貴女だ。華純さん」

ダメ押しの一言に華純さんは顔を手で覆った。新一君は途中で自
白して欲しかったのだろう。まあまだ警察は来ていないので、まだ自
首扱いが出来るからいいのか。

「事の真相はこうです。ご主人がいつも小休憩中だけ窓を開ける事を
知っていた貴女はその窓の取っ手の部分にとある仕掛けをした。――
細い透明な釣り糸を窓の取っ手に巻き付け、窓を開ければ窓の外に
ある木に設置したクロスボウの矢が射出出来るように。そこからは
簡単だ。――下に居た貴女はノーム人形に仕掛けていたモーターを
作動させ、釣り糸とクロスボウに巻き付けていたワイヤーを巻き取り
回収。その証拠に木とノーム人形の一つには少し傷がついていまし
た。勿論、ノーム人形の方は地面に杭のように動かないよう固定して
ありました。そのノーム人形の中にはモーターと仕掛けも」

新一君は静かな声で事の真相を語った。仕掛けを知ってしまったえばなんて事のないものだ。

「許せなかったのよ……」

顔を手で覆っていた華純さんが低い声で語り始めた。そこにはお淑やかな奥さんの優しさはない。蘭ちゃんや園子ちゃんが「嘘……」と呟くのも仕方ないだろう。それくらいの変貌だった。

「許せなかった、新しい秘書なんて雇って！デレデレと頬を緩ませて侍らすあの人もッ!! それを許すあの女も！今更私を捨てようとするあの人が憎くて憎くて仕方なかったのよッ」

金切り声で喚く華純さんは悔しそうに唇を噛みしめた。つまりは浮気を疑った末の暴走らしい。怖いな、女の嫉妬って。しかもそれが勘違いなのだから尚更救えない。

そして新一君は目線を道久さんに向ける。ビクリと身体を揺らす道久さんはこれが悪い事だと分かっているのかもしれない。

「次は貴方だ。——嘘なんでしょう？揉み合う内に撃ってしまった、なんて」

「う、嘘じゃない。私は本当に——」

「時に道久さん。発射残渣、はっしやせんさという言葉をご存知ですか？」

「は？」

新一君の言葉を否定する道久さんは続いての問いにポカンと口を開ける。

「拳銃を発砲するとスス、鉛、アンチモン、バリウム、亜硝酸塩が飛散し、発射したもののまわりに付着する。その事を言うのですが、恐らく秘書の安楽さんには付着していないでしょう」

「な、なんでそんな事が分かるんだ?!」

淡々とした説明の断定的な言葉に道久さんは反射で反論する。だが、そのうろたえようが自分が犯人だと言っているようなものだ。

「弾道ですよ。被害者の貫通している箇所がね、丁度上から撃った時のモノに近いんですよ。左胸の高さなのに。——仮定できる状況は二つ。一つは犯人がソファの上に乗って上から撃ったか。もう一つは犯人が被害者を突き飛ばし、身を起こすところを上から撃ったか。」

この二択です」

「——ッ、仕方なかったんだ！アイツが、あの女が俺を振ったから。それで揉み合って拳銃を奪った時に断られたその時がフツと頭をよぎって、気づいたら引き金を引いていたんだ」

「仕方ねえ訳があるかよッ！——あんたはただ理不尽な怒りを彼女にぶつけたただけだ。それを正当化しちやいけねえよ」

新一君の一喝に目を見開いた道久さんはがっくりと肩を落とした。諦めた、というよりは己の愚かさを受け入れるような力の抜けようだ。

「……最後に、一ついいかな」

「ああ」

「“サインA”、これが何かわかるか？」

「は？」

「死に際の彼女の最期の言葉だ。——ずっと何か分からなかった。もしかして君なら、と思ったんだが……」

唐突な犯人の問いに新一君は怪訝な面持ちになる。その後の犯人の独白に真剣に考え始めた。俺はというと、は？と愕然とした。

——Sign Aサイン エーなら作戦完了。今作戦のみ意味を持つ安直な暗号だ。つまりは俺に向けてのメッセージ。作戦完了、それ以上は何もするな、と言いたかったのだろう。つまりは自分を殺した男を組織から庇ったのだ。それも、会った事もない子どもの俺に託すか釘をさす形で。

その時にこみあがった思いはなんとも言えないものだった。悪態を吐きたい気持ちで一杯だ。最悪だ、こんなの。

護衛対象の死体を見た彼女が一番混乱したに違いない。任務失敗して死をもって償うなんてことも珍しくない話なのだ。それがこんな大失敗なら尚更。目前の死に抗いたくて、咄嗟に拳銃を握ってしまったのだろう。そこに護衛対象の息子が現れ、混乱の極致に至ったのだろう。冷静になれば、素人の男を投げ飛ばすくらいの護身術は身につけていたはずなのに。……これ以上の推察は死者への冒瀆だ。彼女にだって胸に秘めていたかった部分だろう。けれど、このまま終

わるにはあまりに惨い話だ。そうまでして守りたかった、その人になんの真意も伝わらない。しかも誤解されたままだなんて。

「……その意味は分かんないけどさ。きつと、秘書の人はアンタに早く罪を償って、それから真つ当に生きて欲しかったんだと思うよ」

俺は我慢しきれずに気づけば死んだ元同僚の最後の言葉を吐露していた。視線が、室内の注目が俺に集まる。

「……そうかな」

「そうだよ。——だってアンタに告白された秘書さん、困ってはいても邪険にはしなかっただろう?」

「そうだったかな、下を向いてばかりで分からなかったが。私達は釣り合っていません」、それがフラれた時の台詞だったな」

道久さんの声は掠れていて、ひび割れてしまうような渴きがそこに滲んでいた。

「貴方が」じゃなく「私が」釣り合っていない、という意味だったんだと思うよ。多分ね」

「そうか……」

それきり静かに泣き始めた哀れな男を、周りにはただただ見守るばかりだった。

道久さんに注目が集まったところで、俺はそつと部屋を抜け出した。キャリーケースと招待状は既に回収済みである。後は兄貴の言われた通りにとんずらするだけだ。今回、俺は何も悪い事していないしな。

玄関まであと少し、というところで声がかかった。

「待てよ」

鋭い険のある少年の声。言わずもがな、名探偵君のものだ。俺は呼び止められたので渋々振り向いた。

「何かな」

「おめー、何者だ？」

ひたりと狙いを定める一片の曇りもない探偵の瞳に俺は勘弁してくれという気持ちだった。

「何者もなにも。——ただのちよつと勘の鋭い中学生だけど？」

「は？」

「あ、そろそろバスの時間だ。じゃあね、探偵君」

俺のとぼけた答えに新一君の目が見開かれる。虚を突かれているその隙に俺はさっさと足を進めこの場を去った。

「クツソ、また会ったらぜってー追及してやるからなッ！」

そんな恐怖の予告を俺は聞かなかつたことにした。

屋敷から離れた所で俺は携帯で再び兄貴にかけた。

「作戦完了。やはり犯人は一般人だったよ。——今から戻るけど、歩いて帰らないといけないから、明日の午後になると思う」

『は？——公共交通機関に乗ればいいだろ』

俺の端的な報告にジンの声は不機嫌そうに返された。そうは言うけどさあ……。

「ごこ、一日に三本でしょ。バス」

『チツ。仕方ねえ、ウオツカを迎えによこすからソレに乗れ』

「やった。じゃあ俺、それまで下山しているから近くまで来たら電話で知らせてほしいな」

『下山ってお前……』

ジンの呆れた声に俺はムツとする。

「だって警察に見つかつたら面倒だろ。——俺だつたら身を隠しつつ回避できるからね」

『なんだ、その自信』

俺の特技自慢にジンはククツと喉で密かに笑う。他で聞いたら悪企みでもしてんじゃね？くらいの黒さが残る声だが、俺にはもう普通に笑っているように聞こえる。ヤバイ、末期かな？

『おそらく二、三時間はかかるだろうが、頑張れよ』

「ん、頑張る」

未だに笑いの含む兄貴にしては珍しい声で通話が終わった。多分下山頑張れよ、という激励だろうがこのキャリーケースをカラカラ鳴らしながらの長い道筋に俺は今から少しうんざりした。

表側があるなら裏側もあるだろうよ

いつも通りの平和な日常。帝丹中学に通い、授業を消化し、放課後は部活動で友達とサッカーをする。そして幼馴染に馴染みのホームズの蘊蓄を語れば、うんざりされながらも聞いてくれる。男友達にいなあ可愛い幼馴染とか爆発しろ！とやつかまれたりするが、うるせーと返せば笑いが返ってくる。

それが中学生、工藤 新一の愛すべき日常だ。

素直になれず、照れが先に立つから言えやしないが、蘭や園子と話すのも中々に楽しい。

そんな平和な日常も唐突な提案で崩される事となった。

給食を終え、昼休み時間となった。各々が好きな時間を過ごすその時間。いつもは友達に誘われるまま友達と共にサッカーに興じる新一だが、今日は推理小説を読みたい気分だったので図書室の蔵書を教室で呼んでいた。そこに蘭と一緒に園子がやってきて提案に至った。「はあ？——今度の休みに金持ちのパーティーと一緒に出て欲しいだど？」

「そう！前にお世話になったらしいんだけど、両親や姉貴の予定も合わなくてね。それで私が代わりに務める事になったんだけど。一人じゃ心細いじゃない？」

「——蘭に頼めばいいじゃねえか。なんで俺が」

「勿論、蘭にも付き合ってもらうわよ。ね？蘭」

「うん。……新一、ダメかな？」

園子には素気無く断れる新一だが、幼馴染で淡い想いを抱いている蘭となれば話は別だ。こてりと可愛らしく小首を傾げられ、うぐつと新一はたじろぐ。

「ちなみにパーティ会場となる別荘なんだけど、元劇場の別館があるらしいのよ。そのご主人って変わり者らしくてね。『オペラ座の怪人』みたいなその劇場を改装しても仕掛けをそのままにしているらしいの」

「——行く」

面白いと思わない？と付け足された園子の言葉に新一は渋々と承諾する。

「それにしても意外だな。園子ってそんな話に興味あったか？」

どちらかというところ、少女漫画や恋愛ドラマの方が興味があったはずなのに、と新一は首を傾げる。

それにああ、と相槌を打ったのは蘭だ。そしてこっそりと耳打ちしてくる。

「——実はね。今園子がハマっている少女漫画、『オペラ座の怪人』のパロディなのよ。登場人物とかをイケメンにしたりしたもので、結構話題なの」

私も読んでいてドキドキしちゃった、と頬を染める蘭を横目に新一は少しムツとする。納得はしたが、なんとなく面白くない。

「なるほどな。通りで、乗り気な訳だ」

「でしょ？——でも意外ね。てつきり新一も」

そこで言葉を切った蘭に新一は視線で先を促す。

「まるで『ミステリー小説の舞台みたいだ！』ってはいやぐと思つたのに」

「おめーの中の俺はどんだけガキなんだよ……」

蘭の言葉に新一はげんなりする。流石にそこまで見境がない訳じゃない。……ホームズ所縁ゆかりの場所ならばはいやいでしまうと思うが。

「ほら、その夫婦！私を省いていちゃいちゃしないッ」

「誰が夫婦だ!!」

蚊帳の外になってしまった園子の鋭いツツコミに蘭と新一は声を揃えて異議を唱える。遺憾ながら、こういうのはここではもはやテンプレとなっている。

※

件の休日まで時が過ぎた。朝の九時に園子の家の運転手が運転するベンツに乗り、県を跨ぎ、山奥の件の別荘まで来た。ちなみに服装はドレスコードを意識したもので、蘭と園子もおめかししていた。……可愛らしい格好をした蘭に少し見惚れてしまつて、園子に押掬われたのは不服だったが。

到着したのは午前十一時頃だ。——流石に早すぎないか、と心配する蘭と新一にいいのよ、と園子は言う。ここの屋敷の主人は珍しい話が好きでお喋り好きなのだという。そして初めての客人の話を喜んで聞くだらうし、探偵を目指す新一君の話も喜ばれると思う。その園子の言葉に新一は顔をしかめた。それをまあまあと蘭が宥める。

招待状を玄関で待っていた執事に見せ、それぞれのゲストルームに案内された。この後どうするか、という話になり、先ずはこの屋敷の探索からしようという事になった。忙しい人だし屋敷の主人への挨拶はお昼頃でもいいだろう、と。

屋敷の探索途中で屋敷の住人に出会い、そして屋敷の主人とその秘書にも続けて遭遇した。そのまま和やかに昼食を一緒にとる事になった。その途中で招待客の一人の奥池さんとすれ違った。どうやら、これから屋敷の一階にあるバーで酒を飲むらしい。大丈夫か、この大人と新一は声に出さずに呆れた。

一階にある食堂で食事中、屋敷の主人金剛 道郎さんから奥池さんのフォローが入った。

「すまないね。彼は素晴らしい写真家なのだが、おおらかさが行き過ぎるところがあつてな。そこが彼の長所でもあるのだが……」

「はは、父さんはなんでも人の長所にするところがあるからなあ。

……人が良すぎるといふか」

「ふふ、そこがこの人のいいところですよ。道久さん」

「おやおや、惚気られてしまったな」

ははは、と笑う息子の道久さんに華純さんはもう、と窘める。二人のやり取りに道郎さんは照れたように笑った。

道久さんと華純さんに血の繋がりがなくとも家族だと思える温か

さがそこにはあった。

「そう言えば、君たちは中学生だったか」

「ええ」

道郎さんに水を向けられ、新一達は頷く。それに道郎さんは眩しうに目を細めて鷹揚に笑った。

「はは、そうか。君達くらいの時が一番輝いている頃だろう。——大事に過ごすんだよ。大人になってからじゃ、その頃の輝いた光景なんて中々見れないのだから」

「まあ、あなただったら。——そんなお爺さんみたいな事を言つて。鈴木さん達も困つてしまふでしょう?」

「はは、すまない。どうもこの年頃になると説教臭くていけないな。——それで、君達はちゃんになりたい将来を見据えているのかな」

道郎さんのしんみりした言葉に奥さんの華純さんが軽く窘める。それに曖昧な笑みで返せば、道郎さんは軽く笑つて将来の事を聞いてきた。

「……うーん。難しい事ですよ。あ、でもそこに居る新一君は将来、探偵になるそうですよ」

「ちよつ、園子」

園子の余所行き言葉遣いはどうも聞き慣れない。コイツもお嬢様だったんだな、と新一が感心していると話の矛先がいきなりこちらに向いた。ぎよつとして、蘭が止めようとしてくれるけれど、驚いたのは新一も一緒だ。

「そうなのかね?」

「ええ、まあ」

驚いたような道郎さんの声に新一は曖昧な笑みのまま頷く。——将来の夢を周りの大人に語ると大抵は驚かれる。新一の親を知る人は更に顕著だ。新一の推理オタクな面を知る親しい人ならば納得してくれるが。

「ホームズのような探偵になればと思つています。彼のように、真実を零さないそんな探偵に」

「ホームズ、と言うとかの有名なシャーロック・ホームズの事かね?ど

んな難事件もたちまち解決できる名探偵。成程、それは素晴らしい夢だ。——君の名が有名になって、この耳に届く日が来ることを楽しみにしておこう」

「……ありがとうございます」

すんなりと頷かれ、手放しの賛辞に新一は照れくさい気持ちになった。視線をそれとなく蘭や園子の方に向ければ、微笑ましそうにされた。いや、園子の方は面白がっているな。

「——お先に失礼いたします」

かたり、とそれまで黙々と食べていた秘書の安楽さんが静かに席を立った。

「あら、もう？もう少しゆつくりされてもいいのよ？」

「いえ、奥様。やり残した仕事もありますので。——旦那様方はどうぞご歓談を続けて下さい。それでは」

華純さんの引き留める声に、仕事を理由に淡々と安楽さんは退席した。

「……いつも彼女は忙せわしない人だから、気にしないでくれ」

「まったく、生真面目過ぎるのも心配ですわ」

「はは、まあそれ故に優秀な秘書なんだよ。彼女は。——さあ楽しい話をしようか」

道久さんは困ったような笑みで弁解を入れ、それに華純さんが同意する。しみじみとした言葉に道郎さんが軽く笑って次の話題に移っていった。

新一たちは領く事しか出来なかった。流石、珍しい話が好きだと豪語する道郎さんの話はとても話し上手で聞き手を疲れさせない程度に楽しませた。

昼食を終え、各自予定があるそうで解散となった。それで新一たち三人は当初の目的であるパーティ会場の別館を見る事となった。

元劇場、というだけあつてとても立派な建物だった。中世ヨーロッパ建築の美しさと劇場の華やかさの両立させた建物は外観を見るだけでも圧倒させそうな雰囲気を持っていた。なるほど、園子の言っていた通り『オペラ座の怪人』が居ても可笑しくなさそうな趣がある。「流石に忙しそうね」

「うん。ちよつと悪いから、きりあげて他の場所を見ようよ」

「そうだな。あんま見て良いもんじゃないだろうし」

忙しなく行き交う使用人の姿に園子は感嘆の声を、蘭は申し訳なさそうにしている。新一も蘭に賛成だ。こういうパーティなどの準備は客人が見て良いものではないだろう。園子も特に反対はせずに、そういうばと話を切り出した。

「この屋敷の一階の書斎には色々蔵書があるそうよ。あのご主人自慢らしいし。ま、推理小説は新一君の家まではいかないでしょうけどね」

「へえ」

「ほお。まあ俺ん家ぐらいまで揃えるのは相当なマニアだろ。アレだって親父の仕事道具みたいなもんだしな」

多分趣味も五割ほどは入っているだろうが。新一の遠い目に二人は不思議そうな顔をする。それに気にするな、と言ってから場所を屋敷内に移動した。

時刻はもう午後一時半も近くなっていた。

「そう言えば、道久さんが居ないな……」

「そうよね。お昼の時にはこの書斎に居るって言っていたのに……」

「別の所に居るんでしょ。それにしても頭が痛くなりそうな本ばかりねえ」

新一は昼食後の道久さんの予定を思い出し、新一は首を傾げた。それに蘭は同意し、園子は頭を横に振る。

——バァンツ。空気を切り裂く鋭い銃声。平穩から程遠いその音

に新一は瞬時に走り出した。

「チツ」

「新一!？」

アレは、二階から聞こえてきたか。蘭の制止の声も無視して新一は階段を駆け上った。

駆け上った先で、音の先だと思われる二階の書斎の扉前に辿り着いた。後ろから、困惑した様子で遅れて到着するのは、蘭達と華純さんと招待客と思われる男性客二名。緊急事態なので、新一は躊躇いなくドアノブに手をかけ、開ける。

そこには、床に力なく倒れる二つの人影。そして、その近くで先程の銃声の元凶である拳銃を握って呆然と佇む道久さんの姿があった。

新一は素早く、室内を見渡す。壁際の本棚、奥に配置されている執務机に黒の革張りの社長椅子。その手前の応接用の長机に二組のソファ。——室内に争った形跡はない。

被害者の近くの左手にある大きな窓は開け放たれ、カーテンが風に靡いていた。被害者は先程、話したばかりの道郎さん。その左胸にはクロスボウの矢が刺さっている。そしてもう一人の被害者はその秘書の安楽さんだ。——彼女は左胸に拳銃による傷があり、それが致命傷であると見て取れる。犯人の一人は呆然と立っている道久さんなのだろうが、新一は少し引っかかりを感じた。

とそこで道久さんの手から拳銃が滑り落ちた。ゴトリ、と重い音が響く。

「——違う、俺じゃない。俺じゃないんだッ、こいつが拳銃を持っている……それでそれをとり上げようとしただけなんだ……ッ!!」

呻くように、苦し気なその声は訴えるような切実な響きが滲む。そ

ここにはあの紳士然とした余裕は見られない。頭を抱え、悲痛な慟哭を上げる道久さんの様子に新一はゆっくりと歩み寄る。

「——それは話を聞いてからにしましょう」

穏やかな、静かな声で刺激しないように新一は心がける。

「き、君は誰だね?」

招待客の一人、銀フレームの眼鏡の男性が新一に問いかける。

「工藤 新一。探偵ですよ」

そちらに振り返り、フツと笑みをもつて答えた。そう、今から己は探偵である。室内を見渡した限りだと道郎さん殺害の凶器であるクロスボウはなかった。外部犯、である可能性も捨てきれないが、新一の探偵の勘が言っていた。

これは内部犯。今、犯人に時間をあたえてしまうと証拠隠滅される可能性が高いと。

ここは山奥で警察が来るのも多少時間がかかるだろう。このままじゃ真実が埋もれてしまう。——ならばなつてやろうじゃないか。道郎さんに語った、名探偵に。

新一は覚悟を決めた。

まずは蘭たちに警察に呼ぶように指示を出し、事件現場から集まった皆を閉め出す。そして近くの客間に移動してもらった。——若干名不満そうな人は居たが、警察が来るまでですよ、とえば渋々と承諾が得られた。

遺体の状況を見て、死亡推定時刻を割り出した。新一は、父の影響もあって知識はあったのだ。道郎さんは死亡推定時刻、三十分から一時間前。秘書の安楽さんはまだ死後さほど経っていなかった。

そして客間に戻った新一は、アリバイを順次聞いていった。内容は以下のものだ。

後妻の華純さんはあの昼食の後、現場の書斎の真下にある花壇で花の世話をしていた。アリバイ証明をしてくれる人は居ないが、銃声の後招待客の一人である空山さんと花壇の近くで合流。なのでその前は証言通りとみて良さそうだ。

銀フレームの神経質そうな中年男性、空山 史孝さん。オカルト小

説家で道郎さんとは五年前からの交流。アリバイは十時頃から館内を見て歩いていたというもの。その際この屋敷の使用人と数名すれ違ったので、彼らが証明してくれるかもしれない、との事。

昼食前にすれ違った、体格の良い褐色の肌の男性は奥池 光洋さん。彼は海外を拠点とする写真家だそう。アリバイはあの後ずつと屋敷の一階にあるバーで酒を飲んでいて、給仕である女性に話を聞いて貰ったそう。なので彼女に裏をとれば確定と言ってもいいだろう。

それから、招待客の三人目。遺体発見の際、最後に合流した少年。銀色の髪に深緑の瞳、と外国の血を感じさせる。繊細な容姿の印象のままに彼は具合悪そうにしていた。——無理もないと新一は思う。蘭達はこの客間に居て貰った方がいいな。……彼のアリバイは銃声の間こえてきた頃に屋敷に到着したばかり。道郎さんの死亡推定時刻の頃はおそらくバスか電車の中だっただろう、と。

そして、最後。秘書殺害の容疑者、道久さんは憔悴した様子で一人掛けソファに座っていた。頭を抱えたままの彼に事情を聴くのは、酷な事だと思ふ。けれど、聞かない訳にはいかない。新一の問いに道久さんはポツリポツリと語り始めた。——昼食後、一階の書齋に居た道久さんは一時半頃になって、二階の書齋に本をとりに行った。その頃にはいつもの道郎さんの小休憩も終わるだろうと踏んで。そして、そこで拳銃を握る安楽さんと遭遇。銃口を向けられた道久さんは咄嗟に拳銃をとり上げようとした。

そこまで語って黙り込んだ道久さんの後に続く言葉を、新一は拾った。

「それからそれは事故だったと。正当防衛だ、と貴方は主張するのですか？」

「ああ」

確認の言葉に返ってきたのは頷きだ。——それは苦汁を飲み込んだかのような頷きだった。

屋敷の使用人、三名ほどに客間を見張るように頼んだ。蘭たちには客間で待っているように説得した。その際に心配そうにされたが、新一は安心させるようにいつものように自信をもって、任せておけ、と言いつ残す。

現在の時刻は午後二時頃。警察が到着するまで後約三十分。

事件現場の検証を始めた。勿論、指紋等を残さないように細心の注意を払って、だ。もしもの時に備えて、いつも白手袋をポケットに常備しておいて良かったと新一は思う。

現場には犯人のモノと思われる遺留品はない。——そして、遺体発見の時に感じた違和感が分かった。

第二被害者である安楽さんの表情だ。新一の推理が正しければ、彼女は道久さんに殺害されたはずだ。それを裏付ける証拠もある。……警察が来れば確定にもなるであろう。

それなのに、安楽さんの表情は穏やかだ。致命傷となる傷と血がなければ眠っているだけと錯覚出来る程その表情は苦しみとは程遠いものだった。何故だ？ 新一は首を傾げる。

いや、ここで結論を急ぐにはまだ早い。新一は焦る自身の心を宥める。そして、ふと書斎の大きな窓の外が気になった。……窓の造りが変わったものだなと感想を抱いた。そして窓に近寄り、見下ろす。真下には奥さんの華純さんが手入れしていた花壇があった。そして、その近くに人影があった。何故、彼の姿が、と新一は訝しがる。キラキラと日の光りを反射する銀色の髪。確か名前は黒野 静、だったか。

兎に角、客間に待機するように言った筈なのに。幾ら彼が白だとしても、ウロウロされては困ってしまう。新一はその場に急いで行くことにした。

走れば、五分とかからず件の花壇の近くに行く事が出来た。この角を曲がれば花壇だ、という所まで近づいて、新一は話し声に気づいた。

黒野一人だと思っていたが、と不審に思い、そのまま聞き耳を立てる。

「それで俺の方はどうする？——片付け、必要かな」

聞こえてきた、静かな声は先程と変わらぬ平坦さだ。

「仕掛け？」

「……そう」

「——難しくない？」

間を空けながら淡々とした言葉が続く。どうやら、携帯で誰かに電話をかけているらしい。単語自体は物騒さはない。だが、なんだろうか。この不安感。新一は胸の内に湧いたその感情に眉をひそめる。

「……そろそろ出てきたら？俺に何か用事かな」

「——バレてたか」

声をかけられ、新一は観念して物陰から出ていく。ちえつ、と少し罰が悪そうにしていれば、気づいていたよと黒野に頷かれた。思わず顔をしかめてしまう。

その時、あらためて目の前の少年の容姿を注視した。年の頃は新一と変わらないくらいだろう。もしかしたら年下かもしれない、とその少女めいた顔を見ると思う。しかし何を考えているか分からない、無表情で折角の美貌が台無しだ。服装は、顔に似合わぬ黒で統一されたシンプルなものだった。

「……さっきの電話、誰だよ」

「家族だけど、何か？」

具体的に上げられない不安に新一の問いが鈍る。それは間髪入れずに返された。

「家族」、そう言われて新一は首を傾げた。

「それにしちやあ——」

なんか怪しかったような、と腑に落ちない。しかし、追及できるだけの材料がない。

「じゃあ、俺はこれで」

「ちよつ、待てよー」

新一が考えに没頭する横を黒野が通り抜ける。思わず呼び止めるが、その足が止まる事はない。けれど、代わりに顔だけが振り向かれた。

「そこ」

「これか？」

「うん、そこ押してみて」

黒野の白い指が指し示す、花壇の上の壁の煉瓦。それに首を傾げつつ、新一は言われるまま、白手袋をはめて確認した。もう黒野はこの場から立ち去ってしまっている。

「は？——これは凶器の」

果たして、そこに現れたのは凶器のクロスボウと毒が入った小瓶。

新一はクロスボウだけ取り出し、その柄の部分に取り付けられたワイヤーの一部を見て閃く。

「そうか！犯人はアレを使って犯行に及んだのか。——だとすると」

直ぐに立ち上がり、証拠を見つけておくべく辺りを見渡す。そして証拠を目に留めるとフツと笑みを浮かべた。——全てが分かった。犯人も、トリックも。

けれど、そうすると別の事が気にかかる。

「黒野。一体、何者なんだ？——あいつは現場に一度しか足を踏み入っていない。しかも、遺体の近くに行く事なんて出来なかったはずだ。……遠くから見て全てを見破った？トリックも犯人も？」

そんな馬鹿な。新一は思いついた可能性を否定する。——もしくは。

「……そう言えば、何故秘書の安楽さんは拳銃を所持していたんだ？いや、道久さんの嘘である可能性も少しはあるけど、そういう嘘は感じられなかった。——彼の嘘は、揉み合う内に“撃ってしまった。この一点のみだ。うーん……、分かんねえ”

推理するにはあまりに情報が足りない。安楽さんの背後関係も分からない上に、あの黒野に感じる不安も我ながら訳が分からない。特に黒野 静という少年はただの中学生の筈だ。だから疑い過ぎるなんてやってはいけない行為だ。

彼は頭のきれいな中学生なのだろう。……新一には少し面白くない話だが。

新一は頭を掻きむしっていた手を止め、事件解決に思考を切り替えた。まずはこの事件の真相からだ。

客間に戻り、皆に事件現場に戻ってほしい旨を伝える。その際に黒野の涼しい顔を一瞬睨んでしまったのは新一の未熟さだ。あとで反省した。

これから始まるのは、この事件の真相を暴く事だ。小説では胸が躍るシーンだが、実際に探偵としてやると違うのだなと新一は実感した。

己に出来るのはただ、真実を白日の下に晒す事。そこに誠意はあれど、胸が躍る高揚など感じてはならない。そう言う事か、と新一は感じた。

「まずはこの事件を最初から辿ってみましょう」

静かに始まる推理。一つ、一つ丁寧に、見落とさぬように。

「これは犯人にとって大きな賭けだったことでしょう。いや、案外分かっていたのかもしれませんが。何故なら犯人は被害者と親しい人物だったので、彼の日常を予想する事も出来た筈です」

「な、なんだって」

新一の親しい人物、の言葉で驚愕するのは小説家の空山さんだ。それを頷き一つで受け流し、新一は続ける。

「被害者は決まってる行動がありました。日課、と言い換えてもいいでしょう。勿論、これは屋敷の皆知っていた事実です。——それは午後の食後の小休憩。そうでしょう？被害者の奥さんの華純さん」

「え、ええ。主人は気分転換も兼ねて普段でもそうしていましたわ」
急に話題の矛先を向けられ、華純さんは少しうろたえる。

「そこまでは屋敷の皆の知っていた事実。けれどその先、貴方はもう一つの行動も知っていた。それは窓を開ける事です」

「まじっ。」

蘭が不思議そうに首を傾げる。この場にいる半数は同意したはずだ。何故、今更と。

「そう。——ところでこの書斎の窓は少し変わっていますね。内側だけでなく、外側まで取っ手がとりつけてある」

「そ、それはッ。ここに屋敷を移転する前からのデザインですわ。つまりは百年ほど前にイギリスに建ててあった時からの初期のデザインです。何も可笑しくはありませんわ」

それに書斎だけでなく、二階全ての窓がそのデザインなのよ、と華純さんは語気を少し荒げた。

「そうですね。ではこちらはどうぞでしょうか？」

新一は白の手袋をはめたまま、書斎のソファの影に隠していた物を取り出す。

それは件の凶器のクロスボウ。行方不明だった凶器の出現に場が騒めく。

それで華純さんは悟ったのだろう。全てが暴かれた、と。

どさりと華純さんが膝が崩れるように床に座り込んでしまった。

「——犯人は貴女だ。華純さん」

ダメ押しの一言に華純さんは顔を手で覆った。その様子は、新一の胸に苦さを感じさせる。だが、それも一瞬だ。そして途中となつていた推理を続ける。

「事の真相はこうです。ご主人がいつも小休憩中だけ窓を開ける事を知っていた貴女はその窓の取っ手の部分にとある仕掛けをした。——細い透明な釣り糸を窓の取っ手に巻き付け、窓を開ければ窓の外にある木に設置したクロスボウの矢が射出出来るように。そこからは簡単だ。——下に居た貴女はノーム人形に仕掛けていたモーターを作動させ、釣り糸とクロスボウに巻き付けていたワイヤーを巻き取り

回収。その証拠に木とノーム人形の一つには少し傷がついていました。勿論、ノーム人形の方は地面に杭のように動かないよう固定してありました。そのノーム人形の中にはモーターと仕掛けも」

新一の静かな声は犯人にはどう聞こえる事だろう。——どうか、罪を認める一助となればいい。そう願わずにはいられない。

「許せなかったのよ……」

顔を手で覆っていた華純さんが低い声で語り始めた。そこにはあのお淑やかな奥さんの優しさはない。蘭や園子が「嘘……」と呟くのも仕方ないだろう。それくらいの変貌だった。

「許せなかった、新しい秘書なんて雇って！デレデレと頬を緩ませて侍らすあの人もツ!! それを許すあの女も！今更私を捨てようとするあの人が憎くて憎くて仕方なかったのよツ」

金切り声で喚く華純さんは悔しそうに唇を噛みしめた。つまりは浮気を疑った末の暴走らしい。中学生の新一にその暴走する情愛は理解が出来ない。もしかしたら、大人になれば理解できるのだろうか。そんな感傷を抱いた。

そして、視線を道久さんに向ける。ビクリと身体を揺らす道久さんはこれが悪い事だと分かっているのかもしれない。

「次は貴方だ。——嘘なんでしょう？揉み合う内に撃ってしまった、なんて」

「う、嘘じゃない。私は本当に——」

「時に道久さん。発射残渣、という言葉をご存知ですか？」

「は？」

新一の言葉を否定する道久さんは続いての問いにポカンと口を開ける。

「拳銃を発砲するとスス、鉛、アンチモン、バリウム、亜硝酸塩が飛散し、発射したもののまわりに付着する。その事を言うのですが、恐らく秘書の安楽さんには付着していないでしょう」

「な、なんでそんな事が分かるんだ?!」

淡々とした説明の断定的な言葉に道久さんは反射で反論する。だが、そのうろたえようが自分が犯人だと言っているようなものだ。

「弾道ですよ。被害者の貫通している箇所がね、丁度上から撃った時のモノに近いんですよ。左胸の高さなのに。——仮定できる状況は二つ。一つは犯人がソファの上に乗って上から撃ったか。もう一つは犯人が被害者を突き飛ばし、身を起こすところを上から撃ったか。この二択です」

加えて、間近で撃った時は傷跡に火傷が残る筈だ。取っ組み合いとなれば銃口と肌との距離が離れていたとは思えない。安楽さんにはそれがなかったので、新一は発射残渣の事を言ったのだ。

「——ッ、仕方なかったんだ！アイツが、あの女が俺を振ったから。それで揉み合って拳銃を奪った時に断られたその時がフツと頭をよぎって、気づいたら引き金を引いていたんだ」

喚く道久さんの身勝手な言い様に新一の脳裏が赤く染まる。瞬間、あの穏やかな安楽さんの死に顔が浮かんできたのだ。彼女が悪しきように言われるのは違うだろう！そう瞬間的に怒りを抱いてしまった。

「仕方ねえ訳があるかよッ！——あんたはただ理不尽な怒りを彼女にぶつけただけだ。それを正当化しちゃいけないよ」

この一喝に目を見開いた道久さんはがっくりと肩を落とした。諦めた、というよりは己の愚かさを受け入れるような力の抜けようだ。

「……最後に、一ついいかな」

「ああ」

力の抜けた道久さんの呟きに新一は頷く。

「『サインA』、これが何かわかるか？」

「は？」

「死に際の彼女の最期の言葉だ。——ずっと何か分からなかった。もしかして君なら、と思ったんだが……」

唐突な道久さんの問いに新一は怪訝な面持ちになる。その後の独白に新一は真剣に考え始めた。だが、いくら考えても納得の行く答えが出ない。

「……その意味は分かんないけどさ。きつと、秘書の人はアンタに早く罪を償って、それから真っ当に生きて欲しかったんだと思うよ」

ポツリと、静かに割り込んだ声に新一は内心驚いた。道久さんはそ

の声の主、黒野の方に顔を顔を向ける。室内の視線もまた、黒野に集まった。

「……そうかな」

「そうだよ。——だってアンタに告白された秘書さん、困ってはいても邪険にはしなかっただろう?」

「そうだったかな、下を向いてばかりで分からなかったが。〃私達は釣り合っていないよ、それがフラれた時の台詞だったな」

道久さんの声は掠れていた。静かな問答は誰も割り込めそうにない。何故なら、黒野の言葉に嘘は感じない。言葉が少ないにも関わらず、そこにあるのは真実だと信じさせる何かがある。そこにはあった。

「〃貴方が〃じゃなく、〃私が〃釣り合っていない、という意味だったんだと思うよ。多分ね」

「そうか……」

それきり静かに泣き始めた哀れな道久さんの姿を、周りにはただただ見守るばかりだった。淡々と語った黒野の目がやけに印象的だった。

冷たいでも、温かいでもない。——けれど、そこには折れる事のない強さが見えた気がしたのだ。

見守っていた新一は悟った。ああ、きつとコイツは俺の辿り着けなかった真実にも辿り着いたのだろうか、と。

道久さんに注目が集まったところで、気配を消してそつと部屋を出て行った黒野の後ろを新一も追いかける。と言っても気づいたのは彼が出ていって少し経ってからで追いついたのも結構ギリギリだった。

玄関の近くで、銀色の後ろ頭に声をかけた。

「待てよ」

声に陰が滲んでしまったのは仕方ない、と新一は思う。渋々振り向いたその顔に新一は悪態を吐きたくなった。

「何かな」

「おめー、何者だ？」

何故なら、この目の前の少年は真実に辿り着いて尚、それを明かすことなく去ろうとしているのである。

それは真実を追い求める探偵である新一には看過出来ない姿勢だ。

「何者もなにも。——ただのちよつと勘の鋭い中学生だけど？」

「は？」

「あ、そろそろバスの時間だ。じゃあね、探偵君」

そんな思いを込めた視線を、黒野はとぼけた返しをしてきた。思わず虚を突かれると、するりとその姿はあつという間に遠くに、小さくなくなっていく。その足の速さといったら、拍手したくなる程だ。

「クツソ、また会つたらぜってー追及してやるからなッ！」

咄嗟に新一がその背に投げてしまった台詞は我ながら酷いけれど、けれど、これもまた新一の偽らざる気持ちだ。

謎の少年、黒野。彼が何を隠しているのかは分からない。だけど、また会えたならその謎の端くらいは分かるだろうか。

そんならしくない弱気を含んだ気持ちだった。

その後、二十分後に地元警察が到着した。とうに犯人が解明されていて、聞いて駆け付けた巡査が腰を抜かしたのはいいのかわいのか。その後に来た県警の警部にはこつてりと新一は説教をくらった。けれど、それも覚悟の上だったので粛々と受けたのだった。要は嚴重注意だ。犯人をつきとめた功績で、親まで話が行かなかつたのは良かったと新一は安堵の息を吐く。

帰りは行きと同じく、園子の家のベンツだった。時刻は事情聴取を終えて、夕方から夜に姿を変える時間だ。午後六時半過ぎだ。

静かな車中、流石に殺人事件の後だ、当然かと新一はため息を吐いた。

新一の頭の中にあるのはあの謎を残した少年だ。——もしかしたら悪の組織の一員か、だなんて迷推理まで飛び出す始末だ。ないな、とすぐに浮かんだ答えを脳内で却下する。

「——にしてもさあ。あの子、将来有望株だと思わない？」

園子の唐突な言葉に新一は蘭と一緒に首を傾げた。なにが？と。

「あのこ？」

「そうーあの黒野君。結構綺麗な顔してたわよねー！あれは数年後化けるわよ」

「え」

キリツと表情を引き締めて断言する園子に蘭はぽかんと口を開ける。隣で聞いていた新一もはーん、と乾いた笑みしか出てこない。出たよ、園子のイケメン好きが、と。

「そう？可愛い子だなあとか、綺麗な子とかなら分かるけど……」

「うんうん。あれは美人系のまま順当に成長しそうだわ」

暗くなっていた車中が一気に賑やかになる。園子のこういう所は新一は素直に感心する。……蘭の暗くなっていた気持ちも晴れるといい、と。まあ園子の場合、元気づけるといよりは単にミーハーなだけな気がするが。

女二人きやつきやつしてる会話から思考を逸らし、新一は窓の外をただ眺めた。

ああ、そう言えば黒野、秘書の安楽さん が道久さんに釣り合っていないかと思っていたと言っていたな。逆じゃなく。あれどういう意味なんだろう。

新一のその疑問の答えが分かったのは後日発行された新聞だった。そこには小さな記事でも安楽さんが身寄りのない身の上である事。そして、友人関係も希薄であったことが簡潔に書かれていた。

これが釣り合わない理由か、と新一は一応納得した。まだ喉に小骨が引っかかっているようなモヤモヤはあっても、知る手段がない今は

仕方ないのだ。

今のままじゃ探偵の真似事だ。真実、名探偵を名乗るなんて程遠い事だろう。

新一は決意した。必ず、なつてやると。

真実と向き合える、名探偵に。

束の間の平穏だと誰が言ったか

別荘での殺人事件から早三時間ほど。現在の時刻は午後五時、日が暮れ始めて辺りをオレンジ色に染めるそんな時刻だ。ひたすら道路を歩いて、山から街へ景色を変えようとする頃にウオツカと合流する事が出来た。

兄貴の電話の通りに迎えに来てくれたウオツカに促されるまま、車に乗り込む。迎えに来てくれた事に礼を伝えれば、首を横に振られた。気にするな、という意味だろう。……それはいいんだけど、ポルシェ356Aの目立つ車体に俺は複雑な気持ちになる。いや、これから日も暮れて、夜の暗闇に紛れるからさほど目立たないか。

色々あつて疲れた体をぐったりと車のシートに預ける。後部座席に座っていて、ふとルームミラー越しにウオツカと目があつた。

「……お疲れですかい？」

「うん。ちよつと精神的に、ね。——それよりも敬語は使わないでくれるかな」

そつと気まずそうに気を遣われ、俺は内心苦笑する。というか、ウオツカに敬語を使われると余計気まずい。なので、使つてくれるなと俺は肩を竦めた。

「えつ。そ、それはちよつと——」

「兄さんの言葉、忘れたの?……俺なんて小生意気なガキくらいの扱いでいいよ」

躊躇うウオツカにだよねーと内心同意しつつ、少し前の事を引つ張り出す。アレだ、ジンの「兄さん呼び禁止事件」の事だ。あの時ウオツカにジエネヴァを特別扱いするな、とジンが命じたのに、敬語を使っていたら他の組織の人に怪しまれるだろう。

ウオツカは引きつった顔をした。内心、生意気という自覚があつたのかと舌打ちくらいはしているかもしれない。それくらいの顔の歪みだった。というか、この人ポーカーフフェイス出来ないよなと俺は呆れる。

「——ッ。そうだが、あんたそれで良いのか?その、兄貴とは実の兄弟

「言わねえよ」

俺の殊勝な言葉はウオツカにケツと吐き捨てるように返される。それに俺は一つ頷く。

「……後三時間程でお前の家に着くから、それまで寝てても良いぜ」
「うん」

ウオツカの気遣いに溢れる言葉に甘えて、俺は静かに目を閉じた。今日の出来事をそっと思り返す。思考の主な内容は、今日の反省点と、出会う事なく散ってしまった命についてだ。今更思い出すべき事ではないのは分かっている。アレは終わってしまった事だ。同情や憐憫は抱くべきではない。それも分かっている。

ただ、ふと思ってしまったのだ。

アレは、ともすれば俺の、ジェネヴアの末路なのではないかと。

一歩間違えば、あんな末路がすぐにでも訪れるだろう。これは予想でも、予想でも、想像でもない、厳然たる事実だ。それがジェネヴアおれのいる世界だと、情けなくも改めて思い知ったのだ。

一歩間違えれば、死に繋がる。そんな綱渡りの世界が。

仄暗い思考も自宅のあるマンションの近くに着く頃には区切りがついた。というか普通に寝ていたわ。……うじうじ考えるのは俺の性に合わないのだ。色々と覚悟を決めてある。と言っても少しだけな、少しだけ。

マンションの近くで降ろして貰い、ウオツカに軽い礼を告げて帰路へと着く。その頃にはもう夜と言っている時間となっていた。午後八時という、一日の終わりに近い時間。疲れていたのもあって、食事の用意も億劫になってしまった。今日は朝から何かと忙しかったからなあと一日を振り返りながら、俺はカップ麺を啜って夕食を済ませた。それからシャワーを浴びて、フラフラとおぼつか無い足取りでベットに沈んだ。眠さの限界だ。すやあ、と眠りの世界にも沈んだのは多分、二秒とかからなかった。

※※

prrrr……と携帯の着信音が枕元で鳴り響く。

「うー……」

寝ぼけ眼のまま、携帯を手に取り通話ボタンを押す。ロクに働かない頭は着信相手の確認、という簡単な作業すらすっ飛ばす。

『起きてるか。——まさか、今まで寝てたとか吐かすんじやねえだろうな?』

「そそんなまさか、気のせいじゃないかなー」

耳元で聞こえたド低音に俺の頭は一気に覚醒した。目が覚めた勢いでつい、どもってしまつた上に一部片言になつてしまつた。

『? まあ、いい。それで次の仕事の話だが、明日の昼頃から予定を空けておけ。いつもの護衛の仕事みてえなものだ』

「……了解。必要事項、他にない?」

いつもの護衛の仕事つて、最近それでロクな出来事がないのですが。なので聞きながら俺は少し遠い目をしてしまつた。

兄貴は俺のどもつた声を流しつつ、淡々と次の仕事について説明する。

曰く、兄貴達の仕事への同行をして欲しいらしい。その際に同行者がおり、その同行者の護衛というか監視をしろ、との事。兄貴達の仕事の時に逃げられても困るから、その時の監視を、とな? ほうほう。いや、でもさあ……。

「……なんで俺?」

『あ?』

客観的に見て、俺は護衛は兎も角監視要員としては失格だ。見かけの威圧感やら威厳が圧倒的に足りない。まあ、その対象者の一挙一動を見逃さない事に関しては合格点だろうが。

俺の疑問に耳元の携帯からため息が返ってくる。

『はあ……。そんなのお前が一番適任だからに決まつてんだろ』
「え」

『同行者の名前言った方が早いかな。——あのシエリーなんだからな』

「ここまで言えば分かんたら、と放られた言葉に俺は苦虫を噛み潰したかのような苦味を感じた。ぐぬ、それを言われると断れない。……」

この威圧感の塊の兄貴と一緒にの仕事とかシエリーの胃が心配になるわ。

「……分かった」

『ククツ、頼りにしてるぜ？兄弟』

「——嫌味でしょ、それ」

俺の苦い声を喉で笑うジンに思わずツッコミを入れる。明らかに揶揄う声色だった、アレは。

俺の返しに、電話向こうでククツと笑う声があった。多分、あちらでは俺の葛藤も含めて笑っているに違いない。言語化するならば、「若いな、坊主」と青春を眺める大人の揶揄いの類だ。

微かに聞こえる笑い声に俺が面白い筈もなく。思わず黙り込む。

『そう拗ねるな』

「……拗ねてない。もう用件は済んだ？」

『ああ、じゃあな』

思わず素っ気なく言ってしまった言葉に、返ってきたのは柔らかな声だった。余裕の大人、そのものな態度に俺は妙な悔しさを感じてしまった。ぐぬぬ、見てろ俺が大きくなったら言い負かしてやるからな、という密かな決意と共に携帯をしまう。

で、今何時よと枕元に置いてある時計を見れば、午前七時を少し過ぎた頃だった。うーん、相変わらず人の都合を容易く無視する兄貴である。いや、身内括りにしてしまえば、許せない所業ではないような気がする。……うーん？

そんな取り留めもない事に思考を割いていると、ガツと足を本棚にぶつけてしまった。

「痛っ」

つま先に走る鋭い痛みと目の前に本棚から落下していく本達のバタバタとたてる騒音に心が挫けかける。今日はツイていないな、と涙目になりつつ落ちてしまった本の一つを拾い上げる。ぶつけてしまった方の足のジンジンとした痛みはその内治まるだろうと自分で虚しく慰めた。

はらり。

拾った本から落ちた、薄っぺらいカード。色は黒一色のソレは、勿論葉などではない。

「カードキー？」

拾ってマジマジと見れば、そのカードはカードキーのようだった。なんでこんなものが……、と首を捻って見ても、ジエネヴァ君の断片的な記憶に引っ掛からない。……こういう時、不便だなあと思う。

それにしてもカードキー、ねえ。これって組織の施設のどこかの物なんだろうけど、組織、という前提だけでこの感じる不穏さよ。

「……思い出せないし、とりあえず持つていればいいか」

失くさないように気を付けられればいいだろう。

そう結論づけて、手早く散らばった本を本棚へ片付ける。今日は朝から踏んだり蹴ったりな感じなので今から憂鬱だ。まだ家から出ていないのに。

※

今日も快晴で、朝の光が清々しく感じる。現時刻、午前十時。次の任務は明日らしいので、俺はいつも通りの訓練の消化をすべく組織の施設の廊下を歩いてた。相変わらず真っ白な廊下だな。まあこの区域がそうなだけで、地下とかは普通に黒色ベースだったりするんだけど。

そう言えば朝本棚から出てきたあの黒のカードキーはその地下の奴だったりするのか。俺はふと気になって、ジャケットの胸ポケットにしまっただけのカードキーを取り出す。

改めて見ても、カードキーに特にヒントになる文字は書かれていない。デザインとしてか、細い赤のラインが二つ表面を走っているだけだ。

「これだけじゃなあ……」

場所を特定するなど不可能だろう、と結論付ける。運が良ければ、その内見つかるといえるという事しておく。

とそこで俺は前から歩いてくる人影に気づいた。

日の光りを弾くように輝く長い金髪。グラマーな体型、ミステリアスな魅力を湛える微笑み。世界的にも有名な大女優でもある、ベルモットだった。

ベルモットも俺に気づいたのか、視線ががち合う。そして手を挙げて、親し気な声をかけてくる。

「ふふ、久しぶりね。元気だったかしら？」

「ん、そうだね。だいたい二カ月半ぶりくらいかな」

和気藹々、そんな和やかな雰囲気のままに会話が進む。もう二カ月も経つのか、早いなーと他人事のように考えているとベルモットがクスリ、と笑う。

「二カ月、というのは子どもには大きいのね。ちよつと背が伸びたんじゃない？」

「……そう？ベルモットは変わらず綺麗だね」

「ふふ、そこは〴〵もつと綺麗になったね〴〵くらい言わないと駄目よ」
「俺にそんなの求めないでよ……」

微笑ましそうなベルモットの言葉に照れ臭さを感じる。背が伸びたかなんて最近忙しいのもあって気にしていなかった。本当であれば素直に嬉しい。

俺の素直な褒め言葉はベルモットには足らなかつたらしい。クスクス笑われながらの指南に俺はげんなりしてしまった。

「本当ならゆつくり話したいけれど、残念ながら私も忙しいのよね。」

——この後、またすぐに国外に行かないといけないのよ」

残念そうに話題を切り替えたベルモットの憂鬱そうな声にだろうな、と内心相槌を打つ。

さもありません。この美女は世界に名を轟かせる大女優、忙しくない訳がない。更にこの組織の仕事も追加とか想像だけでも同情してしまいうさだ。

それでもその美貌に疲労の影を乗せないのは、流石と言ったところか。

「……大変そうだね」

「そうよ。——貴方も、表の顔を持っては分かるわ。いずれは……、と思っただけど貴方どうなのかしら？」

「？」

俺の月並みな言葉に頷きながら、ベルモットは諭すような言葉を途中で止めた。それから首を傾げられ、俺も釣られて首を傾げる。

「表の顔って言っても、その無愛想じゃあちよつと厳しいものがあるわよね……。折角、素材はいいのに」

「……ベルモット？」

「無表情もいい加減にしなさいね。——ほら、笑顔笑顔」

ブツブツと呟くベルモットに、俺は声をかける。というか、俺が無表情なのはデフォだし、ほつといてくれ。

そして、ベルモットに両頬をむいいと掴まれる。無理矢理引つ張られた頬は地味に痛い。けれど、綺麗にマニキュアが塗られた長い爪に当たらないように配慮されていて、この手を拒むべきか一瞬迷ってしまった。……俺には基本女性には優しくすべき、という大前提があるのだ。

「……………」

「あら、意外ね。てつきり振り払われるかと思っただのに……」

無言で半目で呆れる俺からベルモットは手を離れた。それから心底意外そうに呟かれ、俺の心境は複雑だ。

「——ベルモットの中の俺って、どうなってんの。そんな粗暴な振る舞いはした覚えないけど……」

「それはそうなんですしようけど。——貴方の噂は色々と耳に届くのよ」

「え」

「まあ私だけに限った話ではないわね。貴方って、組織の一部では有名なもの。——ところで、その手に持っているの」

ベルモットの指摘に俺は手元のカードキーの存在を思い出す。そう言えば持ちっぱなしになっていたな。まああわよくば、ベルモットから情報が出てこないかなという下心があったのもあるが。

ベルモットのマニキュアで赤く煌めく指先が指し示すのは俺の手

元のカードキーだ。それを手で揺らし、応える。

「……………これ？」

「ええ。そう言えば、貴方特別に部屋を与えられていたのよね。——あの方に期待、されているのかしら？」

先程からベルモットから出てくる情報の不穏さがやばい。俺は冷や汗を掻きながら、首を横に振っておく。

「……………そうかな。俺自身、そんな期待される覚えはないけど。コレってそんな“特別”なの？」

「まあそうね。“特別”ではあるんでしょうね」

マジか。俺は聞いておいて、返ってきた答えの含まれたモノに頬が引きつりそうだった。いや、この表情筋は仕事してくれないけどさ。

ベルモットの意味深な言葉の含みは悪い意味もありそうだ。組織のボスである、あの方に出るだけ関わらないようにしよう。これ悪ければ、気に食わないと言われそうで怖い。

「……………そう。でもコレ、久しく行っていないし。——場所も忘れるくらいだからね」

「仕方のない子ね。確か、この地下の——」

駄目元で冗談交じりに零せば、ベルモットは呆れながらも場所を覚えてくれた。おお、やったぜ。少し折れそうだった心が復活する。

「ああ、そろそろ行かないといけない時間だわ。——それじゃ、またね」

「ん」

颯爽と歩き去っていったベルモットの背中を見送る。少し心配になる事実（あの方の期待云々）もあつたが、取り合えず確認を先にするべきだろう。

これで、ジエネヴァ君の思い出せない記憶も蘇るといいんだけど。出来れば、ソフトな思やさしいい出だと良いなあと無理な願いを抱きつつ、俺はベルモットに教えられた場所へと足を向ける。訓練は自主練なので、やるやらないは俺自身の気持ち次第だ。なので、確認してからにしようとして今日の予定を頭の中で組み替える。

ベルモットに教えられた場所は組織の施設の地下。人通りすらも

稀である、奥まった場所にあった。コレ、倉庫の一つじゃね？と思わずに居られない配置だった。だって、両隣物置と武器庫（予備）だし。

部屋の横にはカードキーを通す機械があった。持っていたカードキーを通せば、ドアのロックが解かれ、開く。……ベルモットは嘘をついていない、か。

「……埃一杯だ。こりやしばらく来ていないな」

ドアを開けて先ず目についたのは埃の積った品々。普段住んでいる、マンションのあの殺風景さと比べるとこちらの置かれた物の多さに困惑する。……イメージ的にジエネヴァ君片付け上手だと思っただけだな。

部屋の広さはおよそ十畳程。まあ大分空間が物に狭まれているけど。

乱雑に置かれたよく分からない機械が奥に置かれ、その手前に机が壁際に置かれている。机の上には資料やら本が雑に積みられ、崩落するか否かの心配をしまいそう。椅子が辛うじて上に埃のみ積らせているだけだ。足の踏み場はあるが、結構触るのに躊躇してしまいそうな散らかり様だった。

入って直ぐの所に配置された棚は整理されていたので、試しに一つ手に取ってみる。

「なんだこれ」

手の中に納まりそうなサイズの球体。赤いボタンが少し突き出ている、それを見て脳裏に閃くものがあった。

これ、スタングレネードじゃないですか。しかもジエネヴァ君が改良した奴。え、ジエネヴァ君開発も出来るの。奥に置いてある機械とかソレ用だって？なんだって、と震えそうな心を叱咤しつつ、俺は更に記憶を思い出そうと目を瞑る。

ズキンッ。

「うっ……頭が」

まるで思い出すな、と言わんばかりの頭部の激痛に俺は膝をつく。ぐるぐると視界も回る気がして、吐き気も強くなってきた。これだよ、これ。この発作があるから、俺はジエネヴァとしての記憶が思い

出せない。

思い出すのをやめて、目を閉じてしばらくじっとしていれば、痛みが徐々に引いていく。大体五分くらいだったか。痛みをこらえる為に握りしめていた掌は爪の痕が痛々しく残っていた。後もう少して血が出そうなくらいの力だ。

仕方ないので、この部屋に何かがあるかだけ確かめる事にした。爆薬があつた時はドン引きしたが、ちよつと使えそうだなあと思った物は持つていくことにする。

収穫と言えばそんなもので、まだまだ問題が山積する現状に俺はため息を吐きたくなった。

ちなみに使えそうな物を明かしておく。先程の改良型スタングレネード。コレは殺傷性がないのと改良部分が良かったので採用。それと、腕時計に偽装されたワイヤー射出装置。ちゃんと引つ掛けるアンカーも収納されているので、いざとなつたらビルとビルとの間も渡れるぞという便利さだ。まあ良い子は真似しないでね☆、という注意書きが必要そんなものだけど。ジェネヴァ君の身体能力の高さがあつてこそのアレだし。

他は随時必要になつたら取りにくければいいか。思ったんだけど、ジェネヴァ君らしくない、物を分別しない乱雑な置き方は誰かが侵入してもいいようにという配慮かもしれない。一見すれば何の機能があるか分からない物が多かつたし。

どっちにしろ、俺もここに来ることは滅多にないだろう。ほとんど必要ないし。この放置のされ方から見て、ジェネヴァ君もそうしてみたいだしな。

用事は済んだので、カードキーでロックをかけてこの場を去る。そして、いつも通りの日常を消化する事にした。

あ、そう言えば明日シエリーも一緒の仕事だつてな、と思い出す。ならば、事前に声かけてもいいか。

いや、待てよ。

「……シエリーの電話番号知らないや」

ポツリ、と思わず零れた独り言は誰も居ない廊下に虚しく落ちる。

悲しい。電話番号どころかメールアドレスも知らないこの現状よ。やっぱり友達になれたとかとんだ思い上がりだなハハッ。……やめよう、自分を追い詰めるのは。

「——仕方ないな」

仕方ないので次の策を。携帯でシェリーの居る研究施設へ電話をかけ、今日シェリーにアポイントを取れるか確認する。

※

アポイントは無事にとれた。やはり、監視役に就いているから融通が利くらしい。

午後の三時に時間がとれたので、それ通りに赴く。その前には日課の訓練は消化する事が出来てホッとした。一日くらいやらなくてもいいんだけど、やらないとしっくりこないんだよなあ。

シェリーはやっぱり自分の専用の研究室に籠っているそうなので、IDカードを首からぶら下げて行く。今日は急だったので、手土産は近場のケーキ屋のケーキを一つだけだ。鞆の中に入れて、中身が崩れないように注意を払う。

ドアをノックして開ければ、出迎えてくれたのは不機嫌顔だった。うん？と俺が首を傾げれば、違うのよと疲れた声が返ってきた。

「……今日は急にごめん。ちょっと確認したい事があってさ」

「何かしら？」

「明日の件で」

明日、という言葉にシェリーの肩がビクつく。え、なんだその反応、と俺が戸惑っているとシェリーの顔色が青ざめていく。

「……明日なら悪いけど私は仕事でここに居ないわよ」

沈んだその声は憂鬱を通り越えて、世界の終わりのような絶望だ。そんなに嫌か、兄貴との仕事。嫌か普通は。

俺は内心苦笑いしながら、訂正を入れる事にする。……この様子だとまた情報伝達ミスがあったらしい、と察したからだ。

「うん、知ってる。——俺もそれに行くからね」

「！」

俺の言葉に俯いていたのをパツと顔を上げてこちらを凝視する。シエリーの灰色の瞳が見開かれ、なんて言ったの？という副音声がこころなしか聞こえる気がする。俺はそれに頷き一つ。

「俺はあんたの護衛兼監視役だつてさ。——俺が言うのもなんだけど、アンタを物騒な目に合わせないから、安心しなよ」

「……それを言う為に貴方、ここに来たの？」

信じられない、と語尾が掠れるシエリーに頷きを返す。シエリーのその反応に、無表情だから説得力はないかもしれないという俺の懸念が膨れる。

「うん。お仕事宜しくなという挨拶が半分、もう半分はシエリーの顔を見たくてさ」

「……そう。——貴方つて意外と馬鹿なのね」
「え」

シエリーの辛辣な言葉に俺はショックを受ける。けれど、それも束の間の話だ。

ふわっと花が開く微笑。シエリーはふふ、と柔らかな声で笑った。

「私を氣遣つてくれたんでしよう？私がジンを苦手に思っているのを知っている。——これって自惚れなのかしら？」

小首を傾げ、悪戯っ子のような勝気な笑顔のシエリーに思わず言葉が詰まる。

「——ツ、アンタ結構いい性格してるね」

「あら、褒めてくれて嬉しいわ」

辛うじて返した言葉はすっかり調子の取り戻したシエリーがふふんと嬉しそうにされるだけだった。どうやらシエリーの方が一枚上手だ、今日は負けを認める事にしよう。

「じゃあ、褒めついでにこれを。明日への活力になればいいな」

鞆からケーキの箱を取り出し、シエリーに差し出す。目を丸くするシエリーに俺は少し満足するのだった。

シエリーは俺の分まで紅茶を淹れてくれて、ささやかなお茶会となった。俺の分のケーキがない事を少し咎められ、次は一緒に食べよう（意識）というお誘いを貰うのだった。

ほのぼのとした癒しの時間を過ごし、じゃあまた明日とシエリーと別れ、家に着いて漸く俺は気づいた。

「あ、シエリーに連絡先聞くの忘れた……」

今日の俺はつくづくどうしようもない奴である。と猛省し、明日への準備は入念にすることに決めた。

足元の危うさを不意に思い知るもんさ

prrr、とシンプルな定番の着信音が寝室に響く。深い眠りを貪っていた俺は夢うつつにその音の元を手に取り、開く。薄暗い室内に携帯のライトがぼんやりと光る。

「……まだ朝の五時」

画面に表示されていた時間を読み、確実に機嫌が急下降していくのが分かった。朝はやめろよ朝は。

着信先は早く出ないと即死案件の相手なので、渋々と通話ボタンを押しした。

『起きたか。——今日の仕事の説明をもう少ししておかねえといけな
いからな』

「え？」

『今回はシェリーの監視兼護衛というのは話したな？——奴の仕事の内容は深入りするな』

「は？」

『今回のお前の仕事はただ疑問を抱かず、敵が現れたら排除に徹する。そのみで良いと言っている。——簡単なものだろう？』

一方的に告げられる言葉に俺は疑問形でしか返せない。待つて、寝起きの頭にもう少し優しくして？……冗談はさておき、とりあえず。

「ふーん？……それはいいけれど、今回の件そんなに危ない橋を渡るの？」

『一つ、親切心で教えてやろうか。——引き際を弁^{わか}まえる事だ。Curiosity killed the cat. そんな愚かな猫にはなりたくねえだろ？』

日本語で訳すと好奇心は猫も殺す、か。これはもしかしくなくても、これ以上聞いたら冗談抜きで殺されるやつですね。分かりたくないけど、凄いい分かつちゃうわつらい。ジンの兄貴の声が絶対零度過ぎる。

「……そうだね。了解、詮索はしないよ」

「ああ」

兄貴の有難い忠告に従えば無愛想な声で通話は切れた。うーん、どうしたものかね。これは。

とりあえず、起きて準備してそれからだな。——どうやら今回の件、護衛の方が比重が大きいようなので、拳銃を携帯することにした。それから昨日収穫した冒険セット……じゃなかった秘密道具も仕込むことにする。服装は黒を基調とした、モノトーンコーデでいいだろう。どうでもいいけど、ジエネヴァ君の服のバリエーションが見事に黒か白かの二択になっていて悲しい。あれかな？割と服装とかどうでもいい大雑把派だったのかな？今度の休み、服を買いに行こう。白や黒が一番ジエネヴァ君に似合うけど、他の色も文句なしに似合うと思うんだ。折角こんな美少年な訳だし。

最近温かくなってきたからソレに見合った軽装にしておく。武器類は羽織る上着の内側にでも仕込んでおく。……鞆はボディバッグでいいや。動きやすいし、邪魔にならないだろう。一応、素顔を隠すために伊達眼鏡しておこうか。確か変装用にしまつてあるのがあったな。え？誤魔化せるわけないって？——このアニメの眼鏡先輩の仕事の凄さを見てみ？正体は隠すわ、盗聴器になるわ、発信機を受信して追跡まで出来るんやぞ!! え？違う？

※

今日も今日とて晴天なり。車中の空気の重苦しさに思わず、思考を飛ばして現実逃避したくなった。現時刻午前十時を少し過ぎた頃である。途中でシェリーを拾い、目的地である福井県の若狭湾沖にあるという小島を目指している。普通に遠い。なんでそんな所に行くんだか。

シェリーと合流して早一時間。彼女は膝にノートパソコンを置いてカタカタとタイピングに忙しそうだ。意地でも兄貴達と話さない姿勢を感じる。……そんなに兄貴が嫌いか。聞くまでもないか。

一番つらかったのは昼ご飯の時だったか。兄貴とウォツカの服装

があの黒尽くめの服装なのだからどんな店に入っても注目を浴びるのはもはや必然だ。——あまり思い出したくない体験でした、とだけ言っておこう。なんなの、あの人達実は天然だったりするの？流石のシェリーもドン引き……というか冷たい目で兄貴達を見ていたのが印象的だった。

そんなこんなで目的地へと行く唯一の手段である船まで着いた。下から見上げれば大きな船だな、ぐらいの感想しかない。大型客船とどうか、そんな感じの船だ。

船が出発してしまえば後は島に着くまで自由行動だ。昼を越えて、今は午後の二時頃。そろそろいつもならおやつ心配をする時間帯だ。いや真面目な時もあるけれど。

ジンとウオッカは島に着くまで船室で座って待つようだ。まあウオッカさんは休憩が必要かもしれない。ずっと運転していたことだし。まあ、ここで会話なんてあるはずもなく。

俺はこの空気の重さに堪えかねて、シェリーを連れ出した。船室から甲板まで出てくれば頬を撫でる潮風とこの青空も相まって中々気分転換に向いていると思う。兄貴が何か言ってくるかもしれない、と危惧していたがそんなこともなくすんなりと許してくれたのが意外だった。もしかしたらシェリーの顔色の悪さを兄貴も気づいた、とか？

そんな訳でシェリーの気分転換も兼ねて甲板まで連れだしたわけだけど。どうやら成功だったようだ。シェリーは柵も兼ねている手摺に腕を乗せて穏やかに海を見つめていた。その顔色は先程より良くなっている。

俺も隣で海を見ることにした。離れた所では民間人が和気藹々と思い思いの時間を過ごしているのが分かる。家族、友達、恋人。それぞれの時間を過ごしている事が話し声の騒めきで背中越しでも理解できた。

「髪、切ろうかな」

ぼんやりとしていたからか、口から零れた眩きはシェリーに届いたみたいだった。意外そうな顔をされる。

「あら？勿体ないわね。結構似合っているのに」

「え、そう？」

シエリーの言葉に俺は首を傾げる。その拍子に風に遊ばれ、視界を遮る銀髪を手でかきあげた。耳に髪をかけても風で直ぐに逆戻りだ。シエリーは似合っていると言ってくれるが俺としてはどうにもこの肩まで伸びた髪がこの中性的な容姿に拍車をかけているような気がしていた。

「いつその事ばつさりと短くするのもアリかな、と。こう、坊主頭とかさ」

「ふふ、なにそれ」

「だってさー」

口元に手を当てて、クスクスと控えめに笑うシエリーに俺は密かに安心する。よかった、少しは余裕が出てきたようだ。

この調子なら大丈夫そうだな、と少しばかり肩の力を抜いて手摺に寄りかかる。ぐだーと手を伸ばした俺をシエリーは微笑ましそうに見ていた。子どもっぽいと思われただろうか。

それからシエリーは視線を再び海に向けた。俺もつられて海を見る。日光を反射する海原はキラキラとして綺麗だ。

十数秒、ただ海をぼんやりと眺める。不意に訪れた沈黙は意外にも重苦しくなく、落ち着くような心地だった。

「ねえ、貴方は今回の仕事について何か聞いてる？」

「……いや、何も。そっちの仕事の内容すら聞いてないよ」

ぽつり、とシエリーの口から零れた質問に俺は短く返す。ちらりと彼女の方を横見すれば、その視線の先は未だに海の向こうを見ている。

「そう」

「……聞いてもいい内容？」

少しだけシエリーの眼が翳ったような気がして、俺は少しの躊躇いの後一步踏み込んだ。首を傾げた俺にシエリーは少し言葉を探すように口ごもる。

「……………そうね。貴方はこちら側の人間だから、少しだけならいい

かもしれないわね。仕事自体は簡単なものよ」

そこでシエリーは言葉を切つて、少し迷つてから言葉を続けた。適切な表現を探したのかもしれない。

「そうね、確認作業……みたいなものかしら。きっと確証が欲しいのね、あの方は」

「ふーん？あの方が、ね」

「そう。あの方は石橋を叩いて渡るような慎重派だから」

そこまで言つてから、シエリーはため息を吐いた。俺は視線で先を促す。まあ言つてみ？と。シエリーは少し渋りながらも口を開いた。

「——話は変わるけれど、これから行く島は『人魚のいる島』として有名だそうよ。ほら、八尾比丘尼伝説や不老不死伝説とかあるでしょう？あんな感じの。まあ、これは関係のない話なのだけど……」

「おい……」

突拍子もない話の脱線に俺は思わずジト目になる。それを可笑しそうにシエリーは微笑んだ。

「ふふつ、ごめんなさいね。——ねえ？若さを保ちたくて若作りをする人はいるでしょうけど、その逆って聞かないじゃない？」

「うん」

「もしも、わざと老婆に装う人がいるのなら。その理由ってなにかしらね？」

「……よく分からないけど、色んな事情って奴があるんじゃない？」

シエリーのたとえ話とやらに俺は少し迷つてから答えた。出来れば彼女の力になつてあげたいので、今思いつく事を挙げていく事にした。

「それはもしかしたら、正体を隠すとか身を隠すまたは、誰かを守る為になんて理由もあるかもしれない。あるいは、その老婆に成りすます事によって守れる何かがあるのかもしれないね」

まあどつちにせよ。

「自分で信じたい『真実』って奴は自分で調べて選ぶしかないと思うよ。俺はね」

「そうね……」

「あんまり深く考え過ぎない方がいいんじゃない？……真実って奴は案外気まぐれで、思いもしない時に見つかったりするもんだよ」

手摺に上半身を預けさつきよりもぐったりとしながら言えば、シエリーは呆れながらも笑ってくれた。そうそう、そうやって笑える時に笑った方がいいんだよ。

「——少しは参考になりました？」

「なんだか、最後の言葉はなくし物をした人へのアドバイスみたいね」
「あ、そこ笑っちゃうんだ？」

「気のせいよ」

「そうかな」

「そうに決まっているわ」

ツンといつもものすまし顔に戻ったシエリーはそろそろ船室に戻りましょう、と身を翻し元来た通路へと足を進めた。俺は頷き一つで了承し、その後についていく。その場から離れる時に海に視線を移せば、船の進行方向に小さな島影が見えた。なるほど、もう少しで着くのか。

ふと、シエリーの足が止まる。

「……………貴方は——」

「ん？」

「いえ、なんでもないわ」

前を歩くシエリーの表情は俺から見えない。それ故に、何を言おうとしたのかさっぱり分からなかった。それを聞こうにも、タイミングを逃してしまつて聞けず仕舞いとなつてしまった。

※

島に着く頃には時間が三時半を過ぎた。

“儒良祭り”
// 儒良祭り” という案内

看板がまず目に入った。辺りを見渡せば、神社に続く道や案内看板を除けば、少しばかり寂れた雰囲気の村だった。住宅と思われる家屋の他は神社しかないようだし、小さな漁船も港に停まっている以外のものはないようだ。なんとなく、一昔前の漁村を思わせるような素朴さもあつた。

少し進めば、祭りの受付がありそこで祭りの参加者は名簿に記入しないといけないらしい。しかも雰囲気を出す為なのか、筆ペンで書かないといけないようだ。……インクが服に付かないように気をつけないとな。

名前を書けば参加者に木で出来た札が渡されている。遠目で見れば旧漢字で数字が書かれていた。……参加番号か、何に使うのかね？ ジンやウオツカの後に続いて、俺も記入する。さて、あの二人はどんな偽名を使うのだろう？と興味に負けて、チラリと近くの欄を見る。

〃黒澤 陣〃

〃魚塚 三郎〃

とそこに書かれていて、それが本名なのか偽名なのか少し判断に迷ってしまった。まあ、シエリーも居ることだし、本名じゃないとは思うのだけど。それにしても兄貴もウオツカもジエネヴア君に負けず劣らずの名前のセンスですね、と俺は内心震えた。割とコードネームのまんまじゃね？

あまり時間もかけられないので、俺も〃黒野 静〃と筆を走らせる。うん、綺麗に書けた。シエリーもささつと書いたようだ。

兄貴達に追いつけば、顔だけ後ろに振り向いた。

「俺達は別件の仕事があるからな。お前達とは別行動だ。——ジエネヴア、分かっているな？」

くれぐれもシエリーを逃がすなよ、とジンは言外に、視線だけで告げる。俺はそれに頷き一つ返す。シエリーはさりげなく俺の後ろに居た。ここで振り向いたら不審に思われるので、あまり気にかけないようにする。

「合流するのは帰りの船の中だな。——じゃあな」

「ま、待って下さい、兄貴」

さつきと先に進むジンの背をウオツカが慌てて追いかける。随分、あつさりと去って行ったものだ、と感心する俺の背にポツリとシェリーの眩きが届く。

「あのジンに随分と信頼されているのね、貴方は」

その眩きは、小さく掠れていたものだから思わず振り向いた。目を伏せ、視線を俺に合わせないように逸らすシェリーはどんな気持ちなのか。その伏せられた瞳に浮んだ一瞬の翳^{かげ}りが、複雑な何かに見えて俺には掴みきれなかった。

「……あれは違うんじゃない？」

「そう。——いきなりぐめんなさい。私達も行きましょう」

上手い言葉が見つからず結局言えた言葉も空回りした。俺とシェリーの間にあきまじい空気が一瞬流れるも（俺が一方的に思っただけでもなんて）、先を促す彼女の言葉に一旦はあきまじさがなくなった。

シェリーは積極的に人々に話しかけていた。こうしてみると何かの調査みたいだな。……確認作業か。俺はただ後ろから傍観するのみである。

まずはこここの神社の美國神社へと足を運んだ。どうやら「命様」なる人物との対面を望んでいるようだ。神社の若い巫女さんに取次ぎを頼むも、祭りの準備で断られてしまった。シェリーは残念そうにするも、引き下がる。命様、というのはこの「儒艮祭り」の司祭的な存在らしい。どうも人魚の肉を食べて不老不死になった、という曰くがあるらしい。実際は百歳を越えても元氣なお婆ちゃん、なだけらしいが。

そんな話を島民に聞きながら、俺達は島を回る事にした。シェリーにそう提案されれば俺に断る理由はない。

途中島民から、命様の家族がらみの話を聞き及んだ時のシェリーの反応が気になっただけで、平和に調査は進んだ。……なんか、やつぱりねと納得したようなそんな反応だったのだ。確か、今居るのは命様の曾孫だか玄孫だかの女の子のみでその人が命様と一緒に神社を切り盛りしているようだ。その人の母は二年前に行方不明になってい

るだとかきな臭い噂も聞いた。……意外と聞き込みが上手だね、シエリー。

一通り聞き込みも終わっても、まだ祭りまで時間があるようだった。

「少し、この島の外周も確認したい所があるの」
「分かった」

シエリーの言葉に頷きその確認したい所まで歩くことにする。どうやら砂浜や入り江の方へ行くようだ。

ここら辺になると人も居ない。時期的に海水浴には少し早いからか、それとも皆祭り目的だからか。ただ黙々と歩くのもつまらないので少し気になっていた事を聞くことにした。

「なんでシエリーがこの仕事をやらないといけないのかな？」

「あら、私じゃご不満？」

「いや、そうじゃなくってさ。……純粋な疑問って奴。アンタじゃなくても出来そうな仕事だな、と」

俺の素朴な疑問にシエリーは冗談交じりに拗ねてみせる。わざとなのだと分かっているにしても心臓に悪い。俺は頭を横に振って少し焦って言葉を補足する。

「そうね。——きつと私じゃなくても出来る仕事よ。これは」

「なら……」

「でも、そうしないといけない理由もあるのよ。懐疑的と言うか、単純に私の信用が足りないのね」

「……そうっ！」

「そうよ」

シエリーの自虐に近い言葉に、思わず俺は首を傾げた。もしかしたら眉間に皺が寄っていたのかもしれない。シエリーは少し苦笑すると、人差し指で俺の眉間をほんの少し突く。

その挙動にぎよつと目を見開くと、ふつと軽くシエリーの顔がほころぶ。

「貴方がそんな顔をする必要はないわ。——組織に信用されなくても、私には痛くも痒くもないわ」

嘘だ。シエリーの言葉を聞いて咄嗟に思ってしまった言葉。俺はグツと言葉を喉に留まらせた。原作を見る限り、彼女は現在進行形で困っているのだろう。組織に一般人だった姉を巻き込まれ、人質に近い状態にされているのがいい証拠だ。

けれど、俺に何が出来るというのだろうか。俺は何も持っていない、『ジエネヴァ』が持っているのは純粋な暴力だ。こういう時に役に立たない、力だ。

「……………俺、出来る限り助けになるよ。友達、だからね」

結局言えたのはこんな陳腐な言葉で。我ながら反吐が出る。声は震えていなかっただろうか、なんて格好悪い心配さえしてしまう有り様だ。シエリーはただ、静かな目で見ていた。

「やっぱり貴方って優しい人なのね。——同時に心配してしまう程の」

「アンタ、見る目がないね。優しくなんてないよ。だから心配無用さ」
シエリーの優しい声に俺は緩く首を横に振った。そんな言葉を貰えるような人間ではない。そんな俺の否定的な言葉にシエリーはふう、と軽いため息の後仕方ないわね、と呟いた。

「……………そう言う事にしておいてあげるわ」

「なにそれ」

「それよりも先を急ぐわよ。もう少し、調べたい事があるのよ」

「了解。なんなりと」

この口からなんとか絞り出した小さな呟きにシエリーはこのしみりした空気を換えるように明るい声に切り替えた。立ち止まっていた足を一步前に踏み出し俺の前を軽やかに歩き出す。

シエリーの作ってくれた流れに則り、俺は恭しく一礼する。

「なあに？ 貴方、私の従順な従者にでもなってくれるのかしら？ それとも忠誠を誓う騎士にでも？」

ふふ、と笑みを浮べるシエリーは俺の反応を窺うような数拍の空白を開けた。ちらりとこちらを見つめる瞳には悪戯めいた光が見えたような気がした。シエリーのそんな茶目っ気交じりの態度に俺は言葉を失った。

「……なーんてね」

「……それもいいかもね」

「えっ」

「冗談だよ。——あ、そういえばシエリー」

なんてね、なんて一杯食わされた俺は逆に頷いてやった。それに僅かな動揺を見せたシエリーに俺は満足し、シエリーと同じように返した。すなわち、冗談だと。

生憎、シエリーには気に食わなかったようだ。俺の言葉の途中で、フイツと顔を背けて一人でさっさと先に進んでしまう。

「何よ」

「……ごめんね。友達の一步として、連絡先教えてくれない？」

ちよい、と先に進むシエリーの袖を掴めば、ぎろりと鋭い目と声がおずおずと昨日から逃し続けた連絡先交換を提案すれば、鋭かったシエリーの視線が和らいだ。というよりポカンと信じられないものを見るような顔をされた。失礼な。

「——友達、って冗談じゃなかったの？」

「当たり前でしょ。……幾ら俺でもそこまで外道じゃないよ。まあ、俺らは『普通』のお友達は難しいかもしれない。でも、まあ。お互いに困った時に少し手が貸せるような、そんな友達にはなれると思いたいんだ」

シエリーの隣を歩きながら心の内を話せば、隣からため息が聞こえた。チラリと視線だけ向ければ、シエリーは呆れ笑いを浮かべていた。

「……呆れた。貴方って、意外と理想論者ロマンチストなのね。——それがどれだけ危険な事なのか、分かって言っているのかしら？」

「勿論」

シエリーの言いたい事は分かっているつもりだ。組織お抱えの科学者、それも組織の機密に近い人物。この肩書の持つ意味も。

「貴方のリスクが増えるのも？」

「当然」

「この友情にメリットなんてないわ。互いのメリットとデメリットを比べて、デメリットの方が勝つのに、馬鹿らしいじゃない？」

「友達、って損得勘定で計算するものじゃない。……そう聞いた事があるよ」

「……………ばかなの？」

「そうかもね」

ポンポンとリズムよく交わされる会話。最後の方はただの罵りだ。ただ、その声は侮蔑とは無縁の、心底呆れたと言わんばかりの声だ。そして呆れの中に清々しさも感じる事が出来る。俺はと言えば、ただ穏やかに、思っている事を返しているだけ。

そこに組織特有の腹の探り合いの黒さはない。技巧も、打算もない、ただの会話。もしかしたら、無意味だと言われかねない程素直に交わされるものだった。

「……………ばかね。後悔しても遅いわよ？」

「しないさ」

シエリーはやれやれ、と肩にかけていた鞆から携帯を取り出すと連絡先を交換してくれた。

ふと、俺は思い立つ。そう言えば、コレジエネヴァ君としては初めての友達なんじゃ……………？断片的な記憶を浚えば、まさかの肯定。まさか、ジエネヴァ君つくづくボツチだったんだなあ。

「秘密の友情、ってなんか格好良いと思わない？」

「……………ばか」

思わず浮かれてふざけた事を言えば、シエリーの小さなツツコミが返ってきた。

※

一通り海岸線を歩けば、祭りの時間までもう少しとなった。日が沈み、辺りは真っ暗に近くなる。月が出ているとは言え、この街灯も少ない島の夜道を明かりも無しに歩くのは難しい。シエリーの手を

とって、祭り会場である神社まで戻ってきた。

神社は観光客や地元の人で賑わっていた。海岸線を歩いていた時の閑散とした光景から雲泥の差だ。隣の人との隙間がなく、すし詰め状態に近いこの状況は護衛としてはつらいものがある。まあ、守りきるけれど。

そしてシエリーに調べ物は大体終わったか問えば、頷かれた。

「そうね。……大体は大丈夫よ。出来れば決定打が欲しいところなのだけれど……」

「決定打？」

「そう。……これから『儒艮の矢』の当選会が行われるわ。そこで当選して、『命様』と運よく接触出来れば私の任務は完了ね」

「……そこは話すんだ？」

「ここだけじゃ大して分からないわよ。——もし、貴方が当選したら少し確かめて欲しい事があるから」

「ふーん？」

シエリーの話聞きながら、さりげなくジンやウオツカの姿を探す。あの黒づくめの格好だ。この人混みでも判別可能だろう。夜だからあまり目立ちほしなだらうけど。

しかし、彼らの姿は見つからなかった。まだ仕事なのだろうか。しばらくすると本殿に一人の小さな老婆（あれが命様か）が現れて、障子に火をつけ始めた。それは参加者に配っていた木札に書かれていたような旧漢字の数字だった。

あー、なるほど。この木札はくじも兼ねている、ということね。

しかし、障子に現れた炎の数字は残念ながら俺のともシエリーのものとも違っていた。外れたらしい。

シエリーにどうするか聞くと、彼女は仕方ないわよと諦めの姿勢だ。

「これは運。どうしようもない事だもの。組織もきつと分かってくれるわ」

「けど……」

「平気よ。さ、船に戻りましょうか。後三十分くらいで船が出る予定

「でしよう?」

「渋る俺を時間に遅れる方が問題よ、とシエリーが背中を押す。でもなあ、そう言われても中途半端でダメでした、じゃあ笑えないんだよな。」

「一応、俺はシエリーの護衛だ。故に今の所危険はないと判断出来てもここで別行動をとる訳にはいかない。」

「だから俺は船までシエリーを送って行ってから別行動をとる事にした。何、ほんの十数分だ。まだ船の出航時間には間に合う範囲だ。船までもう少しという所まで着いた。」

「シエリー。……確認事項を簡潔に教えてくれる?」

「何よ、急に。って貴方——」

「そう。少し走って確かめてくるから。——俺の仕事ぶりは伝え聞いているでしょ?」

「俺の意図はシエリーに正しく伝わったらしい。愕然とする彼女に、俺はいつも通り平然とした態度で接する。ちよつとコンビ二行ってくるから、くらいの気軽さで。」

「時間がないから早く、と急かせば震える声で答えてくれた。いい子だ。」

「……確認するのは、『命様』が誰かの変装であるか否か。その一点のみでいいわ」

「——その『誰か』は確認しなくても平気?」

「ええ。正直なところ大体の当たりはつけてあるのよ。だから『確認作業』な訳で」

「了解。行ってくる」

「……気をつけて」

「シエリーの見送りに頷き一つ返し、俺は踵を返す。あまり長くは離れられない。船の出港時間を鑑みても、残された時間は僅か十五分。内、五分を往復で使う訳だから使える時間は十分。難易度はベリーハードと言ったところか。コレ、ジエネヴァ君の健脚がなければ無理だったわ。ジエネヴァ君足、滅茶苦茶速いもの。」

「人とすれ違わないように、けもの道を進む。近道、なんて言えば聞

こえはいいが要はただの草むらを突つ切っているだけだ。一步足を踏み出し地面を蹴れば、グンと景色は移り替わる。それだけの速度が出ている。最低限草木で肌を切らないように気をつけて進めばあっという間に神社へと辿り着いた。

ぱぱつと服に付いた草や汚れを払えば準備はOKだ。さて、後は命様の居場所だが……。なんかこの場所といい、「命様」や「儒艮祭り」といい、既視感がある。実体験ではなく、テレビや本で見た事があるような曖昧さだ。

首を捻って、アツと閃いた。そう言えば、この神社の外れに倉が立っていた事をふと思い出したのだ。なんとなく、そこに命様は居るような気がする。本殿の近くの自宅という線もあるが、こういう時は勘に頼った方がいい。何せ、ジエネヴァ君の勘は外れた事がないのだから。こと、仕事に関しては特に。

そして問題の倉まで着いた。そこで俺は己以外の存在の気配を察知した。恐る恐る、覗き見れば三人組の後姿が見える。三人はマツチで火をつけているところで、その姿が暗がりにはぼんやりと浮かび上がる。見れば、大学生くらいの若い女性三人組だ。……神社の巫女をやっている女性も同年代だったな、そう言えば。

三人が何をするのか、見守っていれば信じられない事にマツチの火を倉の壁際に落とす。火が落ちた先は燃えやすい紙屑の山だった。アレはあらかじめ燃えやすいよう準備していたのだろう。つまり放火現場に出くわしてしまった訳だ、俺は。

もはや迷っている猶予はない。火の手が倉全体に回ったら大ごとだ。今だったら小火騒ぎ程度で済む。俺に出来る事は――。

「ねえーそこで何をしているの……!?!」

神社に居た若い巫女さんの声を真似て、あたかも今気づいたかのよううに三人組に声をかける。

「げッ、き君江!?!」

「うっそ」

「逃げようよ皆!?!」

三者三様の反応でわたわたと逃げて行つた。なるほど、あの若い巫

女さんはきみえさんというらしい。ま、後で確認なんてしないだろう。己の罪の方が大きい場合、確認は最小限に留め、気づかれていない可能性に賭ける方が多いからだ。最小限の確認なんて、きみえさん本人からすればなんのこっちゃ、という話だし。

三人の去った後、俺はさつきと鎮火させた。幸いにもまだ火は小さく直ぐに消せる範囲だったのだ。ふう、よかった。

「……きみえ？そこに居るのかい？」

倉の中から声がかかる。その落ち着いた声音は三十から四十歳くらいの中年女性を思わせた。少なくとも二十代の若者の声ではない。俺は少し迷ってから、一芝居打つことに決めた。漸く少し思い出したのだ。原作の「そして人魚はいなくなった」という回を。多分、この人はその犯人の母であり動機を中心となった人物だ。

この人は命様の中の人、演技手だ。組織が正体を探っていた人物だ。だから俺の仕事はここまですりゃいいけど少しばかりお節介を焼くことにしたのだ。

「——ごめんなさい。私、違うの。きみえ、という子の守護霊。あの子の大切な人である貴方の危機だったから、一回だけ助ける事にしたの」

「ッ!？」

きみえさんの声のまま、倉の中の声に答えれば微かに驚愕の音が聞こえた。うん、分かるよ。実際、有り得ないオカルト体験だよな。いきなり守護霊（笑）とか言われても困るよね。

ただ、倉の中の人には通じたようだ。こちらの言葉を待つ沈黙がある。感じる気配からは、緊張がありありと伝わって来る。——確か、あの回で確かな教訓があったはずだ。

「ねえ、大きな秘密を抱えるのなら。選択肢は二つよ。一つ、島を巻き込んで公然の秘密にしてしまうか。二つ目、徹底的に事実を隠蔽するか。……ああ、もう一つ選択肢があったわね。——秘密をやめてしまおうか。お勧めは三つ目よ」

「……今更、どの顔を下げて戻れましょうか。秘密は抱えなくてはいけない理由があるから秘密なのよ。どうしても、譲れないものが私に

はあるわ」

倉の中から聞こえてくる声は沈痛さを滲ませている。そこは、部外者の俺では到底解決出来ない葛藤があるようだ。——結局最後は本人の選択が全てだ。

最後に一つだけ。

「それって、貴方の命よりも大事な事？」

「え……」

「夜が明けてから倉の外を見てみて。それからさつき三人組の女の子達の声を思い出してみて。——貴方の天秤が、どっちに傾くのか」

命か、その譲れない何かか。

「出来れば……命が重くなるといいわね。貴方の天秤」

足元には先ほどまで燃えていた、小火の証拠がある。あの三人組は戻ってこないだろう。確認するにしても人の少ない明日の夕方辺りだろうか。

俺はさっさとこの場を去る事にした。もう時間がない。後ろから、制止の声が聞こえたが振り向くことはない。

……それにしてもこの世界、油断も隙もあったもんじやないな。ちびるかと思っただわ。表側の人間だからって油断も出来ないのは現実世界と同じか。あー、女言葉がつかったわー。違和感バリバリだもの。

急いで船に戻れば、出航ギリギリだった。ギリギリセーフ！と滑り込むと、待っていたシェリーに怒られた。そのついでに報告したら、納得するように頷かれる。どうやら推察していたものと相違ないらしい。良かった。

船室には兄貴達も居て、兄貴に一言「遅え」とぼそつと呟きの後睨まれた。まあまあ、と受け流せば、ウオツカからマジかよコイツと信じられないものを見る目で見られた。普通にショックだ。

※

今日一日の強行軍仕様なので、帰り道ともなれば当然夜の時間帯まで時間が食い込んだ。このままじゃ、深夜まで時間がかかるかもしれない。車で飛ばせるところは飛ばして、道路交通法を鼻で嗤う程度にはスピードが出ていた。こういう時、ウオツカさんの運転スキルの高さが窺える。あのスピードだというのに、カーブの時とか荒っぽさが出ていなかったからだ。

さて、遠足の時のお約束が脳裏にふと蘇る。遠足は帰りまで、だからきちんとしてしよう。そんな微笑ましい言葉だ。実際は微笑ましいとは真逆の状況下だったが。

ウオツカがハンドルを握り、約二時間程の頃だ。その頃には夜の帳が深くなり、海が近かった景色も変え、都心近くの街並みとなったそんな頃合いだった。後部座席に座っていた俺に向けて、ジンが懐から何かを取り出し投げてきた。

慌ててキャッチすれば、それはサイレンサー付きのジンの愛銃、ベレッタ（M1934）だった。おい、コレ隣にいるシエリーに当たったらどうしてくれる。隣のシエリーもノートパソコンを開けたまま、目を見開いて驚いていた。

「――後ろの奴がうるせえからそれで黙らせろ」

「あ、兄貴!？」

「ウオツカ、貴様はハンドルを握っていればそれでいい」

突然のジンの命令にギョツとウオツカは動揺した。それに冷たく返すジンは安定の兄貴だった。

ああ、やつぱり気づいていたか。俺は内心嘆息する。実は一時間前からこの車の後ろをピッタリと追隨してくる一台の車があった。車種はごく普通の国産車でこのポルシェのような目立つものではない。同じ黒の車、という共通点以外は笑える程の差だ。よくウオツカの運転についていったものだ。途中結構飛ばしていたというのに。

この追跡してくる車の主は何者か。警察組織の人間？それとも同業者？どっちもありそうだな……。

ずっと撒けていない現状にとうとう痺れを切らしたらしい。原因の一端のウオツカの顔色は可哀想なくらい悪い。……仕方ないか。

「了解」

「……騒がれても面倒だ。一、二発で仕留めろよ」

お前、それこの悪条件下だって理解して言ってる？了解した俺にプレッシャーをかけてくる兄貴に対する文句が喉までせり上がった。それをグツと飲み込み、頷き一つで返す。

隣のシェリーから不安そうな、戸惑いの視線を感じた。まあ心配しなさんな。

ドアウインドーのスイッチを押して開ける。風が車内に勢いよく入ってくるが、少し我慢してもらおう。銃の安全装置を外す。半分くらい開けて、少し身を乗り出した。

高速道路はさほど混んでいない。この車以外は大分離れた距離にいる。巻き込み事故は確率が少しは下がったか。

車のライトが眩しく、夜の視界不良を更に悪化させる。付け加えるところの暗闇で、車のタイヤの位置も狙うのは難しそうに思える。距離はおおよそ二十mくらいか。

後ろを見て一瞬で判断する。何処を撃つか、周りを如何に巻き込まないか。この状況下だと運転手の脳天を撃ち抜くのが一番簡単だが、周りの事やこの俺の倫理観の問題から却下だ。

よって、狙うのは左前のタイヤだ。難しい、と言っても物理的に可能ならば不可能ではない。よく狙う必要はなく、ただ、研ぎ澄まされた感覚の中で引き金を引くだけでいい。それだけでジエネヴァ君の腕は正確に対象を撃ち抜いてくれる。

パスツ、と軽い音の後、パアンと後ろの車がパンクした。ギキイツと甲高い車の悲鳴染みたブレーキ音の後、ドゴンツと遮音壁にその車体をぶつけたようだった。運転手も多分無事だろう。……よし、狙い通りだな。

ドアウインドーから身体を離し、閉める。暴風染みた風が止んだ車内はシン、と静まり返っていた。あれ？命令されてから二十秒足らずで終わらせたのだから、文句は言われないと思うんだけど。

「はい、これ」

「ああ。——腕は鈍っていないようだな」

「まあね」

銃をジンに返す。ジェネヴァ君の前の銃の腕前、なんて俺は知らないがとりあえず領いておく。

「——だが、甘いな」

「そう?」

ボソツと呟かれたその言葉にヒヤリとしたものを感じる。素知らぬふりでそんな事ないんじゃない?とニュアンスを含ませて、俺は首を傾げておいた。すつとぼけるともいう。内心ではヤツベエ!! と冷や汗ダラダラだった。

「まあいい。後もう少しで着くからそれまで大人しくしてろ」

「うん」

再び沈黙が車内を満たした。隣をチラリと見れば、シエリーと目があつた。それも一瞬のことで、直ぐに彼女の視線は膝の上に置かれたノートパソコンに戻された。……もしかしなくても引かれたかな。

※

途中でシエリーを下ろして、俺の家であるマンションまで着いたのは深夜二時もなる時間だった。言葉少なに兄貴達と別れ、自室のベッドに身体を沈ませた。あー、疲れた。

シャワーを浴びて、それから軽く夜食をとろうか。そこで携帯にメールの着信を知らせるイルミネーションがチカチカと光っているのに気づいた。携帯を開いて、メールを確認する。そこにはシエリーからのメールで、回りくどい言い回しでこちらを心配する内容だった。……ツンデレかな?ちよつと癒されたわ。

メールには感謝と少しだけの心配を一言二言付けて返信しておく。そして米を研いで、炊飯器にセットして炊くまでの時間でシャワーを浴びることにする。もう寝たいんだけど、凄くお腹が空いて寝れそうにないのだ。ほんと、あの沈黙に満ちた車中でお腹の虫が鳴かなくてよかった。

脱衣室で服を脱げば、露わになる肢体にため息を吐きたくなる。なんか見ちゃいけない感が凄いなだよなあ。肌は白く、身体は鍛えられてなお細い。傷も薄らと残るものもある。その大体が胴体に残っているの、服で隠せるのが不幸中の幸いか。つーか、これとか弾痕なんじゃ……後は切り傷と縫合した場所が数か所か。肌が白いから傷跡の赤が目立つ。

ジェネヴァ君のこれまでの人生が物騒なのは薄々気づいていた。……覚悟するしかないんだよな。

全てを思い出したら、俺はこの俺のまままでいられるのだろうか。俺はもう既に前の世界の事はほぼ諦めている。もう、夢で片付けられない程この世界で生きてしまっている。この歳になってからオカルト案件を信じる羽目になるとはな。

シャワーを浴びて頭をスツキリさせて、暗くなる思考を打ち切る。まずはご飯を食べて、寝て、朝日を浴びる事からだな。そうすれば大抵のネガティブは消し飛ぶってもんよ。疲れているから思考も暗くなるんだ、きつとさ。

風呂から上がり、寝間着に着替えて髪を乾かす。冷蔵庫から牛乳をコップに注ぎ、ごくごく飲めばやっと一息ついた。丁度、炊飯器が炊き上がりを知らせる。おにぎりを握り、もぐもぐと食べた。残ったご飯もおにぎりにして冷蔵庫に入れておく。朝、レンジでチンして食べよう。

腹も満たされ、襲ってきた睡魔に身を任せ、倒れるようにベッドの上に乗る。沈むように、眠った。

助けるのに理由が要る、臆病者も居るものさ

さて、あの印象深い兄貴達とシェリーとのお仕事からだいたい一カ月。俺がジエネヴァ君として生きて、早四カ月ぐらいだ。季節は移り替わり、今や初夏の日差しが眩しい頃だ。この白い肌の天敵の日光が強くなり始める頃でもあるので日焼け止めが手放せない時期となった。……女子か、俺は。日焼けすると真っ赤になってシャワーが大変沁みるだけでなく、お仕事にも支障が出るから仕方ないね。素直に虚しい。

先に言った通り、比較的平和な日常を過ごしていたので、誰かとの仲が拗れたとかの厄介ごととも無縁だった。かと言って仲良くなつたか？と問われると首を傾げるけど。悲しい。あ、でもシェリーとはくだらない会話とかお互いのお勧めを教え合えるような友好を築いている。まあ、組織の人間にバレない程度にこっそりとしたやりとりだけだ。

後近況報告としては、少しばかり夢見が悪くなっているのが気になる。気のせい、で済ませられる範囲だし、これは様子見か。悪夢を見ようとも、どうせ寝るから俺は。凶太い？ほつとけ。

起床して、朝食を適当に摂り、支度を終えた頃。時計を見ればもう八時を指しており、少し急ぐことにする。今日は久々にバーボン達との奇妙なランチタイムがある日なのだ。まだ続いているとか地味に凄いやな。……あの人もめげないな。

気分が向いたから今日は手作り弁当を持って行くことにする。週三くらいでお弁当箱を持参して食べている。飯にも成長期なんだし、栄養バランスは考えた方がいいだろう。毎日じゃないのは昼を食べている余裕がなかったり、単に面倒だったりするからだ。モチベーションって大事だよな。ちなみにお弁当箱の中身は定番ものが多かったりする。卵焼きにたこさんウィンナー、プチトマトで彩りを作ったりするアレだ。昨日の夕飯の残りも入っていたりするけど。

今日の予定は午前中はいつもの特訓、午後も特訓を継続するが、夜

になると兄貴達とお仕事に行かないといけないのだ。なんでも怪しげな取引の付き添いだそうで、俺の今後のお勉強の為の同行らしい。つまり後ろで見てろ、という簡単なお仕事である。フラグかな？

いかんいかん、簡単な仕事と聞いて普段との差に死亡フラグを幻視してしまった。俺、疲れてんのかな。いつも兄貴の言う「簡単な仕事」にフラグが立っていたからそう見えちゃうのも許されるだろう。

まあ流石にないだろ。俺は自身の心配を振り切り、家を後にした。

※

一日の折り返し地点、昼食を摂る時間となったので恒例となった休憩所の所まで足を急がせる。意外な事にこの休憩所、人気がなく誰かに見られる心配がほとんどない穴場だった。完全なる誤算である。……他にも休憩スペースあるし、ここは組織の施設の端にあたるから利用しにくい場所であるのは承知の上なんだけど。仕方ない、俺の特訓場所に一番近かったのがここなのだから。

休憩場所に着くと、奥の席に既にバーボンとスコッチの姿があった。彼らは手を軽く挙げ、気楽な挨拶をくれる。それに頷きで応え、彼らの前に着席する。

「久しぶりだな、ジエネヴァ。元気だったか？」

「うん。——スコッチ達こそ大丈夫？」

「おう、勿論。まあ、バーボンの方は忙しさに拍車がかかっているみたいだけどな」

「バーボン、それはどうかと思うよ……」

「放っておいて下さい。僕はいいいんですよ」

スコッチは笑顔で温かな労わりの言葉をくれる。それに頷き、彼らの心配に首を傾げれば、スコッチは苦笑してバーボンを指し示す。どうやら、相当無理をしているようだ。……この人原作でもトリプルフェイスとか訳分らない忙しさだったもんな。数年前である現在も同じくらいの忙しさを押し通しているのだろう。注視してみれば、

彼が疲れている事ぐらいは分かる。

俺の呆れた視線にバーボンは目を逸らして分かりやすく拗ねる。仕方ないので、お弁当箱を広げて昼食を食べ始める事にする。バーボンとスコッチもそれぞれのお昼ご飯を食べ始める。——二人ともいつ見ても面白い食いなんだな。大体がコンビニか、お店で買ったか。この二択である。ちなみにスコッチのチョイスはお総菜パンが中心で、バーボンのチョイスは少し女子力が高い——いや、お洒落なモノが多い気がする。これだからイケメンは、と俺の心がちよつとやさぐれる。

「——それにしても、ジエネヴァ。君、結構料理上手なんですね？」

「確かに。俺、お前の年ぐらいじゃ料理とか出来なかつたなあ」

「……そう？」

バーボンとスコッチの視線が俺の手元に注がれる。そんなに手間をかけている訳ではない弁当箱の中身をまじまじと見られるのは少し恥ずかしい。

そんな気恥ずかしさを誤魔化しつつ、首を傾げる。

「ええ、自炊出来るというのはいい事だと思いますよ。——というか、君保護者とか居ないのですか？てつきり組織の人間に養育されているのかとばかり思っていました」

「うん？一緒に暮らす家族、という意味では居ないかな。一人暮らしを満喫中さ。特に困るような事もないし……」

「そうですか……」

バーボンのザックリと踏み込んだ質問にしれつと素知らぬ顔で返せば、複雑そうな顔をされた。隣のスコッチさんもなんだか地雷を踏んじやった、みたいな苦い顔である。うーん、やっぱりこの十三歳で一人暮らしというのは彼らの倫理観的にもアウトなのだろう。あ、卵焼き美味しい。

「やっぱり美味しいは正義だよ」

「——君って結構能天気というか、見た目を裏切る前向きっぷりですよね……」

「うん？」

「いい事なんじゃないか？うじうじするよりはよほど建設的だからな」

「確かに」

俺の心の底からの眩きにバーボンが呆れと感嘆が混じった言葉が返される。思わず首を傾げたが、見事にスルーされた。スコッチのフォローにバーボンが疲れたように頷いていた。……俺は口出しせず黙々と箸をすすめるのみである。

「それにしても、なんか今日機嫌良さそうだな。最近いい事でもあったのか？」

「……ん？うーん、最近初めての友達が出来たことぐらいかな？」

「ともだち、か……」

スコッチに話を振られ、それに素直に答える。——が、それに返ってきたのは沈痛な響きの静かな眩きだ。え、何このシリアスな空気とバーボンに視線で無言の助けを求めてもそちらはそちらで顎に手を添え思案中だった。……無慈悲すぎない？

「——なら、僕らとも友達になりますか。結構お得ですよ？」

「え。嫌だけど」

バーボンは小首を傾げてサラツと告げてくる。それに俺はお断りの返事を即答してしまった。ピシリ、と固まるバーボンに俺はああ、違う違うと慌てて弁解する。

「なんか……。多分、今のままがいいんだ。俺は」

「？なんだそりゃ。それは友達になろうと一緒だろ？難しく考えんなよ」

俺の抽象的な例えにスコッチは片眉を上げ、怪訝そうな顔になった。ズバツとそのまま清々しいまでの正論を言われたが、俺はゆるゆると頭を横に振る。そうじゃない、と。

「兎も角、今のままの方がやり易いんだ。お互いに」

「そうですか？——君がそう言うならいいんですけど。でも残念、友達ならこうやって癒し画像を送っても平気なのに」
「ぐっ」

ぴろりん、と軽快な音をたて手元の携帯がメールの着信を告げる。

送り主であろうバーボンを見れば、奴はやれやれと肩を竦めた。わざとらしい。ぐぬぬ、と内心の悔しさが呻き声となってこの口から零れた。悔しい。それをスコッチが呆れたような眼差しで見ている。くっそ、お前助けるよ。

手元の携帯を渋々開ければ、何処かの家猫と思われる親子の姿が映されていた。その証拠に毛並みも綺麗だし、おそろいの赤い首輪がついてる。子猫はどんな猫でも可愛い。青空の眩しい背景から察するに偶々見かけて写真を撮ったのだろう。仕事で荒んだ心をこういつた癒しで慰めるなんて、と無理矢理バーボンに憐憫を抱いて気を逸らそうとも無駄だ。普通に猫可愛い。

「君って意外とそういう可愛いものが好きですよね」

「!? ——え」

「へえ？ そうなのか。まあ、大人だって可愛い動物とかで癒されるんだし、いいんじゃないか」

待って。バーボンが確信を持った声でこちらの嗜好を当ててくる。確かに俺は可愛いものとかに癒されるタイプだ。男だから、と意地を張る前に誰だって小動物がてくてくしてたら癒されるものだろう？ つまり可愛いは正義。まあ俺は眺めるだけで満足出来るんだが。でもジエネヴァ君、としてそれを表に出した覚えはない。なにこれ怖い。

俺が無言でバーボンにドン引きしていると、スコッチはうんうんとこちらをフォローしてきた。こう思春期の男子だったら恥ずかしいかもだもんな、みたいな善意の塊だ。

「——いや、そんな無言で引かれても困りますが。君、無表情なだけで普通に見ていたら分かりますよ。これでも二、三カ月の付き合いじゃないですか」

「え、怖」

呆れた声でバーボンは補足を付け足す。が、それは俺の恐怖心を募らせるだけだった。思わず素直な呟きも口から零れるものである。バーボンの洞察力も怖い、俺の思ったよりもザルだった鉄仮面の自信も無くなりそうだった。これからもっと気をつけよう、うん。

「ほんと、遠慮がなくなりましたよね」

「いいんじゃないか？それはそれで」

「それはそうですが……」

頭を抱えた俺に構う事なく、交わされる二人の会話は当初の緊張感はないものだった。少なくとも、この奇妙なランチタイムが始まった当初よりは。

※※

現時刻午後八時を少し過ぎた頃、雲一つない夜空は都会だけあって星々の輝きが少し霞んで見える。その代わり周りの建物の電灯や電飾は一層輝いて見えた。

俺は仕事の為にジン達に追従していた。今回の仕事は簡単も簡単。ただこれから行われる取引を見学するだけである。これが今後、俺の仕事に追加される可能性が高いという前提がなければもつと気楽だった。

取引現場は東都の繁華街の外れにある廃ビルの一つ。元は雑居ビルだった建物は不況の煽りで軒並み入っていた店舗が退去。今はこうして裏のある人間が利用するようになったのだ。だからか、四階建てのビルの外観は廃墟特有の陰鬱さがあった。まだ廃業となって、三年程だというのに。幽霊とか出そうな貫録すら感じる。

ジンの兄貴は躊躇せずにそのビルに足を踏み入れた。その後にくウオツカは少し身構えていた。あれか、取引相手が裏の人間なので警戒はして然るべきなのだろうか。当然、電気なんて通っている訳なく、仕方なく懐中電灯を持って足元を照らしていた。俺は夜目が利く方なので、兄貴達が照らす光源のみで充分だった。……なんで夜目が利くのか、ジエネヴァ君の記憶に聞くのはやめておく。藪蛇やぶへびだ、きつと。

取引現場となるのはビルの三階。懐中電灯が照らした空間が埃が舞ってきらりと光る。流石に階段に足跡が付く程積もってはいない

が、それでも部屋にあった机などの備品に手をつけばくつきり跡がつかうだろう。

無言でさくさくと足を進める兄貴の手には取引に使うジュラルミンケースがあった。今回は拳銃の密輸だとか。……：：：：そういえば原作一話でもやってましたね、拳銃の取引。それなら相手は暴力団関係者とかそこら辺なのだろうか。あんまり踏み込んでも百害あつて一利なしなのでこういうのは聞かない事になっている。俺、捜査官でもなんでもないし。

取引現場となる三階に着いた。元はバーだったのだろうか。カウンターや客席はそのままに埃だけが積もり、酒瓶が置かれていたがらみどのの棚が物寂しさを感じさせる。

取引相手は奥の方で椅子に座って待っていた。四十代後半のスーツ姿の男性で、髪をオールバックで固めていた。一見、サラリーマンに見えなくもないが、その瞳の荒んだ眼光がそれを躊躇わせる。こういう裏の人間同士が分かる、同種の人間特有の仄暗さがあった。

「金は用意してあるのか」
「ああ」

言葉少なに最低限の確認をするジンに取引相手の男は眉一つ動かさず頷く。一瞬、俺に視線が向けられたがそれ以上の反応はなかった。顔を晒すのを防ぐために、今俺は上着に付いているフードを目深に被っていた。ちなみに色は黒だ。お仕事の時の服の色が黒固定、というのがづらい。夏とかめっちゃ暑いわ。

取引は静かに行われた。品物を見せて、確認の後金を受け取る。その金を一応確かめて、解散の流れとなった。

あまりにすんなり済んだので俺としては肩透かしをくらった気分だった。念の為に拳銃と護身用ナイフを隠し持っていたのが馬鹿らしくなる程だ。いや、まあお仕事の時は警戒してもしたりないくらいでいいんだけどね？

先に取引相手が引き上げた。立ち去る相手の背中を見送り、こちらもいざ帰ろうと階段を下りる。無言だが、兄貴が相手なので俺としてはそちらの方が気が楽だった。まさか、兄貴とウオツカと仕事をし

て、無言の空間に慣れる時が来るとは……。最初の俺には考えられない変化だろう。

そして、雑居ビルから足を踏み出そうとしたその時だった。今日は早く終わったな、と一息つこうとして。瞬間、ピリツと項辺りがざわつくのを感じた。それは直感に等しく、とても覚えのある嫌な感覚。これは――。

考えている猶予なんてない。

「ッ！」

短く息を吸い込み、一步踏み込み目の前の長い銀髪の主の背中に突進を決める。感覚から二秒と経たない間の出来事だ。

「?!」

「!? ——ッてえな、何してんだテメエ!!」

ドン、と衝撃により、大きくバランスを崩したジンは後ろを振り向き怒鳴る。ウオツカは突然の事で目を白黒させていた。

——ドツと肩を銃弾が貫通し、鮮血が舞う。

狙撃、しかもライフル等の遠距離射撃だ。銃声なんて聞こえない上に、遠距離の敵意を察するのは難しい。——狙撃の標的は恐らくはジンだ。その証拠に銃弾が貫通した個所は丁度先程ジンが居た場所、しかも心臓の位置だった。俺はグツと奥歯を噛みしめ、痛みを堪えた。目を見開き、こちらを凝視したジンはすぐに状況を察したらしい。舌打ち一つの後、こちらの無事な方の腕を掴み、走りだした。

「ウオツカ、行くぞ」

「え」

「分かりやした！」

力強い有無を言わさぬ力で腕を引かれ、俺はされるままに走った。その前にチラリと狙撃したであろう、ポイントの方向を盗み見るのも忘れない。が、所詮夜の暗闇の最中だ。特定は難しい。何せここは繁華街、似たようなビルはごまんとある。

そのままジン達は一旦路地裏に入る。先程の雑居ビルから直ぐの

路地裏は多分追加の狙撃の防止策だろう。こつちが見つけられないなら相手も優勢とはいえほぼ同じ。暗視スコープだつて限度があるのだ。

「——チツ、ぬかつたな。下手人は先程の取引相手の組織か、それとも奴らを陥れようとする敵対組織か。はたまた、俺個人を恨む輩か。……まあいい。ウオツカ、車を回せ。次の行き止まりで合流だ」

「はい」

「言うまでもねえが、待ち伏せに殺られるんじゃねえぞ」

「勿論ですぜ、兄貴」

ジンの指示に合点承知、と気合十分に頷いたウオツカは走つて路地裏の曲がり角に消えていく。そう言えばあちらに車を止めていたのだったか。

狭い路地裏は空き缶などのゴミが転がり、何とも言えない臭いがあった。そして路地裏の奥は繁華街のネオンや淡い月明かりが僅かにしか届かない。夜目が利かなければ歩くのさえ困難だ。

「おい」

「何?」

未だ腕を掴まれたまま、不意に呼ばれる。周りに向けていた視線を渋々向ければ、この暗がりですえ分かる程露骨に不機嫌な様子だった。具体的には視線が殺されそうな程に鋭くなっている。うわあ。

「……………怪我は」

「?——大丈夫だよ。弾は貫通しているし、撃たれたつて言つても掠つた程度だから。後で手当てすれば平気」

ぼそりと呟きに近い問いに俺は首を傾げつつ、素直に答える。撃たれた箇所は肩、と言つても中心より外側だ。つまり皮を抉られた程度の怪我だろう。止血処置さえ誤らなければ掠り傷に等しい。いや、普通なら病院直行なんだろうけど。

「そっか」

するりと掴まれた手が外れた。あんなに鋭かった視線もいつの間にか普段通りのソレに戻っている。うん?」

「——小言は後にしてやる。行くぞ」

「うん。……アレ、追わなくていいの？なんなら、俺が行ってこようか」

さっさと背を向けて路地裏の奥に足を進めるジンに思わず問いかけてしまった。なんか、こうしつくりこないというか。ジンの兄貴ならああいう手合いは皆殺し、ぐらいのイメージだったので、こうもあっさり引き下がると調子が狂うのだ。ほら、原作時の殺意の高い兄貴を思い出すと、さ。

「チツ、ガキが調子に乗るな。——別にいい。仕留め損ねた奴らは手ぶらでは古巣に戻れやしねえよ。かと言って、今襲撃がない以上、奴らは次の好機を窺うかがうだろうな。その時に思い知らせるからいい」

舌打ちし、こちらの問いを斬り捨てようとするジンに視線で訴えかければ、殺意満点の返事が貰えた。あー、ですよー。しかし、思い知らせるって……。

「……何を？」

怖いモノ見たさで恐る恐る問えば、返ってきたのは無言。が、ニヤツと口端がつり上がった凶悪な笑みが、何よりも雄弁な答えだった。こう、何が何でもぶち殺すという鉄の意思を感じる。……俺は何も見なかった、いいな？

肩を撃たれたのでインナーの袖を破り、それで簡易止血をした。それらの作業を歩きながらしていたら、ジンのもの言いたげな視線がやばかった。心なしか、歩く速度が緩められたような……？気のせい、という事にしておく。

※

合流地点へは徒歩で五分程かかった。暗く狭い道幅故か、前を歩くジンの足がゆつくり目だったからか。

もう既にポルシェ356Aが停車していた。運転席にはウオツカ

が待機している。——辺りに気配はなく、先程のような焦燥のような直感も感じない。敵影はなし、か。

「……早く乗れ」

「は？」

「？怪我してんだろ、早くしろ」

いつの間にかポルシェ356Aの後部座席のドアを開けて待機していたジンの兄貴に俺はぼかーんとしてしまった。え？俺の為に？いやいや、先に乗つてろよという俺のツッコミが口から出ることはなかった。その後ドスの利いた低い声で乗れ、と促され俺は流されるまま乗り込んだ。

乗り込んで、運転席のウオツカとバックミラーで視線がかち合う。ウオツカもサングラスで分かり辛かったが、ぎよつと驚いているようだった。だよな？と俺もウオツカのリアクションに全力で同意した。

ジンの兄貴の親切とか明日の天気や槍が降るか心配する奴じやないですか、やだー。すつごい死亡フラグだわこれ。明日の夜とかに背中から拳銃でパンツとされるルートですね、分かります。俺は混乱のあまり思考が可笑しな方向へと飛んでしまった。

ジンは俺の隣に乗り込み、ウオツカに指示を出す。

「ウオツカ、このまま医者の方へと急げ」

「……分かりやした」

俺が思考に没頭している間にウオツカとジンの会話は終了してしまった。静かに走り出す車はいつものように沈黙が満ちる。俺は手持ち無沙汰に窓の外を眺めた。……追跡車の存在もない、か。傷がジクジクと痛むのもあって、思考を逸らしていたかった。

「なぜ……」

「……？」

思考が飛んでいたから、ジンの掠れた呟きを拾うのが遅れる。珍しい、と視線を向ければ、あの三白眼が伏せられていた。え。

「何故庇った？お前にそうする理由なんてないだろうが」

「は？」

突拍子もない問いに、俺は素の反応を返してしまう。先程よりも間抜け面を晒した気がしたが、気にする余裕なんてない。俺のそんな反応が気に食わないのか、ジンの眉間の皺が増えた。伏せられた三白眼も鋭さを取り戻す。即刻止めろください。

というか、助けるのに理由が要る身内って……。冷静に考えるととても悲しくなる現実なので俺は一旦そこで考えるのを止めた。理由なんてなくてもいいだろうに。

「……理由、必要？ 同じ組織だし、兄さんを助けてもいいだろ。別に」
「……………」

「俺が兄さんを助けたかった、これぐらいでいいんだよ。理由なんて」俺の言葉に納得してない様子のジンの兄貴に俺はため息まじりに言葉を付け足した。他に聞いている人なんてウオツカしかいない訳だし、ここは敢えて「兄さん」呼びにさせてもらおう。つか、無言の威圧怖すぎかよ。

「——分かった」
「お」

「これは「借り」だ、後で返す」
「……………」

一瞬でも分かってくれたかな、と期待した俺が馬鹿だったわ。駄目だこれ、と俺は内心嘆きながらもジンの言葉に頷いておく。

まあ、考え方によってはあのジンの兄貴に貸しを作れたとか凄くね？……………使うような鬼畜ルートが来ない事を祈っているけど。

「それから、あんな事はもうやるなよ。——お前に守って貰う程、もろく碌していないからな」
「……………」

静かな、けれど譲らない強さの声で言われた。そうは言われても、アレは咄嗟の反射に近い動きだったので困る。返事に困った俺にジロツとジンの視線が突き刺さる。

「返事」

「——了解」

断る事を許さない気配を感じたので、促しに渋々俺は頷いた。それ

をジンは面白くなさそうにフン、と鼻を鳴らした。

「早く治してしまえ、そんな傷」

「まあ若いから早く治るんじゃない？」

「言ってる」

俺の軽口染みた言葉に、ジンの吐き捨てるような呟きが返ってきた。ちなみにウオツカはそんな俺達のやり取りをハラハラと見守っていたのを追記しておく。ごめんて。……後でウオツカに何か差し入れよう。

後日肩の怪我は数針縫うのみで早々と治った。入院？この真つ黒な組織にそんなシステム存在すると思う？というか医者って闇医者の部類だしね。余程重傷じゃないと入院なんてことにはならないんだよなあ。

答えのない問なんていくらでもあるのさ

何も、なにももっていやしなかった。

誰もかれも助けてなんてくれなかった。だけど、助けてくれなかったのは仕方ない。

だって、助けも呼べない程無力だったから。手を伸ばす術も知らず、痛みを訴える言葉さえ知らなかった。

無力で無知で、頑^{がん} isn't ない幼い子どもに抗う術なんてある筈がなかった。

きつと新聞やニュースで報道される悲劇のように、どうしようもなかった事なのだろう。

ただ、運がなかった。それだけの話。

だから、覚えた。

研ぎ澄まし、習熟し、抗う術を、純粋な力を求めモノにした。例えその過程でどれ程のモノを犠牲にして失くしてもいい。それ程に必死だった。成長の過程はいつだって死と隣り合わせだった。人との出会いは、その先の別れとセットだと随分前に学んだ。先の別れとは、即ち死だ。

だからかもしれない。手を伸ばしたのは。その平凡な生き様を観て、平和な倫理観の上に築かれた記憶に触れ、退屈でいて温かな普通の日常の欠片に焦がれてしまった。少しだけ触れられたら、それでよかったんだ。

人生を道筋に例える話は結構有名だと思う。その過去を足跡に例え、人生の岐路を道の分岐点に例え、人生の身の振り方を論ず。そんな話だったはずだ。

ならば。それならば、この四半世紀にも満たないこの人生の半ば。この道はきつと赤で染まって、お世辞にも綺麗とは言えないものだろう。赤は赤でも、血の赤、他人の返り血とかなんだから。な、お綺麗なものじゃないだろう？

俺はアンタで、アンタは俺だ。例え記憶がなくても、俺である

事にかわりない。だから、アンタは俺の過去なんて知らなくてもいい。罪悪感も、懺悔も、同情すら要らない。そんなのこの俺には必要ない。

俺は、もう満足しているんだ。アンタの望む先が俺の望む先だと思ってくれていい。アンタの目で見る世界がいいんだ。

——きつと、俺では見れない世界だと思っから。

滔々と語っていた、目の前の少年はそう言っただけ口の端を緩ませた。

それは普段の鏡では見れなかった微笑みであり、無意識の産物であろう真実の表情だった。

肩まで伸びた銀色の髪と、一切の光を通さない深緑色の瞳。幼いながらも整った美少女めいた顔はこのところ毎朝鏡で見ている。

ジェネヴァ。——本名すら分からない、そんな子供が彼だ。偽名なら分かってても、なんの慰めにもならない。俺は、思ったよりも饒舌に話された衝撃で詰まっていた喉の言葉どうにか絞り出そうとする。

が、それも目の前のジェネヴァ君が片手を上げて制する。

——言っただでしょ。アンタは知らなくてもいいんだ。知らなくても事実なんかなくていいでしょう？

淡々としたその言葉に俺は言葉を失った。まるで、これまでのジェネヴァ君の人生が無価値だと、知る価値すら、覚えている価値すらないと言っているみたいだ。それ程までにその声に温度がない。ジンみたいな絶対零度の冷たさではなく、ほんの欠片の興味すらない熱のなさ。なんでだ、喉の奥にそんな言葉が引っ掛かる。けれど、悲しいかな。これは夢。刹那の、覚えていられないかもしれない泡沫だ。

——という悪夢をこここのところ連日で見ている。おかげで俺のコンディションは最悪だ。まだこの鋼の鉄仮面で誤魔化しが出来る程度だけど、これが続くようなら問題だ。

ちなみに今日見た夢は割とライトな方だ。いつもの夢はグロの方でR指定が入る。あれはアウトだろう。暫く肉系の食事が駄目になった、と言えば察しの良い方は想像できると思う。やっぱり、ジェネヴァ君ロクな人生おくらっていないな。何気に凶太いと定評がある、お気楽な俺でも気が滅入っていた。先日、シエリーに心配の小言を貰ってしまった。要反省。

前回のジンの兄貴を庇った事件から二週間が経った。夏の盛りであるのは変わらないが、学生の楽しみである夏休みももう後半に入る時期になっていた。いやあ、学生が羨ましいな、とやけくそ気味に妬ましく思うしかない。

あれから兄貴の態度は変わりないように思う。邪険に扱うでもなく、淡々と任務を申し付けられる日々だ。いや、でも偶に泊まりに来たりするので、少しは家族の日常って奴に近づいてきたような気がする。……ほんの少し、蟻の歩み程の微々たるものだけど。

肩の傷も包帯ももうとれたし、ほぼ完治したと言ってもいいだろう。このジェネヴァ君、見た目は儂げ美少年なのだが、見た目を裏切る頑丈さだ。記憶が徐々に夢で明らかになってきているからね、思ったよりも武闘派でびっくりだよ。ほんとに。

回想に思考を費やし、悪夢の余韻を軽減させる。二、三度瞬きをし、ぼんやりした眠さから覚めさせる。よつこらしよ、と身体を起こし、ベッドから抜け出した。枕元の置時計が示すのは、午前三時。どうりでまだ薄暗いと思っただわ。

二度寝する気分でもないし、もう朝まで起きていよう。
そつと部屋から出て、リビングに出る。

「……眠れないのか」
「ッ」

ドアを開けて直ぐにかけられた声に俺は短く息を呑む。反射的に声の主の方向へ振り向けば、壁に背をつけてこちらをジッと見る兄貴

の姿があつた。……どうでもいいけれど、グレーのスエット姿の兄貴に違和感が凄い。そうだ、昨日珍しく泊まったんだっけ。空き部屋だった暫定物置の部屋が目の前の兄貴のせいで生活感が徐々に増していつている。由々しき事態だ。

「——酷い面をしていやがる」

黙っている俺に渋面のままジンはぼそりと呟く。少し待ってろ、とジンは背を向けて台所までスタスタと行ってしまった。そして手にコップを一つ持って戻ってきた。

「水を飲め。……少しはマシになるだろ」

「……ありがとう」

ぶつきらぼうに渡されたコップを有難く受け取り、飲む。ひんやりと冷えた水は、少しの清涼感をもたらし、自然と息を吐いた。ホッと一息ついた俺を見て、ジンはフンと鼻を鳴らす。

「随分、参っているようじゃないか。——なんだ、地獄に落ちる夢でも見たのか？」

「……違うよ」

「ほう？」

少しばかり小馬鹿にしたような嘲りを滲ませるジンに、俺は微かに首を横に振る。それを面白くなさそうにジンの片眉が跳ね上る。なら、言ってみろ、と副音声がか心なしか聞こえる気がする。……幻聴かな？

「……もしかしたら、全てが無意味だったのかもしれない。それだけの話だよ」

「なんだそれは」

俺の出来る限りぼかした例えは兄貴のお気に召さなかつたらしい。低つくい声の問いが返された。ええ？これ以上分かりやすく？と言われてもなあ……。

俺がうんうんと内心悩んでいると、その沈黙をどう受け取ったのか、兄貴の盛大なため息が上から聞こえた。思わず俺は俯いていた顔を上げる。

「——別に、言いたくないならばいい」

仕方ないな、なんて聞こえてきそうなほどの呆れ顔でぼそりとあの兄貴が譲歩した。いつもの殺人級の眼光さえ、今は冴えない。俺の勘違いじゃなければ、その三白眼に浮かぶのは単純な心配、に似たようなソレ。

……頭でも打ちました？珍しい兄貴の態度に俺はついそんな事を思ってしまう。

「……お前は難しく考える必要はない。ただ、敵を葬る刃であれば、こちらに文句はない。お前はその切れ味が落ちぬよう、ひたすらに研ぎ澄ましている。——いざという時役に立たねえとか吐かすような鈍らになつてくれるなよ」

それは念を押すようなドスの効いた低い声だった。同時に威圧と殺気に近い気配。瞬時にいつものオーラに戻るとかやめて欲しい。ジェットコースター並の高低差のテンションでこっちが風邪ひきそうだわ。

「今更。——俺がそんなへタレな訳ないでしょ」

「生意気なガキだな、お前は」

そりゃ、ジェネヴァ君のキャラですし？と俺は兄貴の皮肉交じりの声にツーンとそっぽむいておく。

と、そこで携帯の微かなバイブレーションが微かに響く。おや？と俺は音の方向——ジンに視線を向ける。

ジンは煩わしように携帯を開け、画面をしばし睨む。そして、ニヤツと微かに歪む口端に俺の嫌な予感が膨らむ。

「……喜べ。早速お前が役立つ機会が与えられたようだ」

「はっ」

「任務だ。——少しばかり変わっているがな」

おっと、これは久々の死亡フラグの予感ですな。目の前の悪辣な笑みへの感想で現実逃避しそうになった。……この兄貴に家族感とか気のせいだったな。うん。

兄貴の口から出た任務の概要に、俺は生きて帰れるかな、と冷や汗が止まらなかつた。あー、これはフラグが立ってるわ、と出来るなら似非訛りで愚痴りたい。無理だけど。

※※※

さて、気を取り直して任務の概要を確認しよう。

俺はある任務の助っ人役だ。そして他のメンバーが所謂ウイスキートリオ、と以前の俺の知識が呼んでいる三人組。ライ、バーボン、スコッチの三名。この時点で俺のアウェイ感半端ないよ。何せ三人とも隠された表側の顔が本業だからね、本当は。悪じゃなくて正義の味方なんですよ、この人達。

そして俺に与えられた役割が変装して、会場に紛れ込むのをサポートする事だ。つまりは補助役がメイン。——臨機応変に対応していかないといけないけれどね。

肝心要の任務の目的は、というところ……。

「——この二名が今我々が追っている標的候補者です」

「ほおー。いくら君でも特定は難しかったか」

「は？むしろ少ない手掛かりでここまで特定出来た事に感謝して欲しいですね。ライ」

「まあまあ。お二人さん、そうピリピリするなって。——ジエネヴァも困ってるだろ。な？」

バーボンが今回の標的候補者の写真を机の上に滑らかに出し、ライが思案顔で静かに煽り、それをバーボンが受け流さずに喧嘩を買うという流れるようなコンボを、スコッチが苦笑して仲裁した。凄いな、スコッチ。ただ、俺に振るのは止めてくれ。二人ともピタリと動きを止めた上にこちらを凝視して非常に怖いから。

今俺達が居るのは組織の施設の地下三階にある会議室の一つ。そこで明日に控えた、決行日の打ち合わせをしていた。如何に黒の組織と例えば、会議室まで黒一色とはいかないらしい。普通に白い壁に茶色い長テーブル、キャスター付きの普通の椅子が幾つか。今回使用した会議室は一番狭い部屋なのでテーブルが一つに、椅子も五つ程という手狭な感じだ。微妙に庶民的で俺は良いと思う。

ちなみに兄貴から任務を言い渡された翌日である。時刻は午前十時。まだまだ一日は長い。

「……すみません。少しばかり大人げなかったですね。——話を続けましょう。今回の任務は組織の裏切り者の始末及び情報の抹消。この標的の男は今から一カ月前に組織のとある施設から逃走。その時に研究データの一部を持ち出した、と推測されています」

「随分と運のいい男だ。——組織の追っ手を一カ月とは言え、やり過ぎすとは研究職にはつらいだろうに」

バーボンの情報整理に、ライが皮肉なコメントを呟く。それにバーボンは頷いた。

「ええ。運のいい男です。実際、逃亡の際は警備が手薄なばかりか、施設に下っ端しかいなかったそうですから」

「それにしても、一カ月ね……。組織らしくない、というかなんていうか」

「組織にしては、対処が甘いよね」

「そうだよなあ」

スコッチはそこまでぼやいて言い淀む。言い淀んだ部分を俺は引継ぎ口に出す。スコッチはだよなあ、と頷く。

「問題は、だ。組織の盗まれたデータの内容じゃないか。そこは調べがっているのか、バーボン?」

「ええ。男は新薬の研究に携わっていたそうですよ」

「新薬、だど?」

バーボンの答えにライの眉が怪訝そうに寄せられる。うわあ、きな臭い話になってきたぞ、と俺は内心引き気味だ。

「なんでも、夢のような薬だとか」

「は?」

夢のような薬、と言われてスコッチがピンと来ていない顔をした。まるで予想の斜め上を言われたかのような顔だ。

「ほら、スコッチは覚えがあるでしょう? 少し前の任務での危ない薬、ですよ」

「ああ。アレか」

「ええ。……そういえば、その時がジエネヴァと初めて手を組んだ任務ですね。今回は二回目となりますか。——残念ながら、貴方が他の任務で忙しく不在の時の話ですね。ライ」

スコッチにヒントを与え、記憶を促すバーボンにスコッチは納得の頷きを返す。ついでのように、俺にこやかな笑みを浮かべ懐かしむように話を振った。息をするようにライに当てこすりをするバーボンの器用さは半端ないと俺は若干口元が引きつる思いだ。ライはライで、そうか、の一言のみだった。涼しいお顔である。

とはいえ、バーボンの言葉に俺は思い出した。バーボンとスコッチとの初めてのお仕事だったあの出来事。少しばかり苦味を思い出した。——確かあの仕事の時、組織の下っ端がしくじって組織の薬がどうとか言っていた。あれ？夢のような……？つまり、アポトキシンさんのことなんですか？

「——俺はあの時、詳しい話は聞いていないからね。……そんなにヤバイ薬なの？」

もしかしたら、という一抹の不安を拭う為には俺は首を傾げる。否定してほしい、俺のそんなささやかな願いはバーボンの瞳を見れば儂くなる。

肯定。一欠片の冗談さえない、真剣な眼差しそのままにバーボンは一つ頷く。

「ええ。と、言っても盗まれたサンプルは試作の試作。つまりは粗悪品です。成分が検出されない、という謳い文句も怪しい程の未完成品。——組織の追手が多少緩かったのもこの辺りの事情もあったのかもかもしれませんね。違法薬物には違いありませんが、あのサンプルから我々に辿り着くのは無理ですし」

「ふむ。組織がその程度の事情で手を抜くものかな。……どうでもいいが、君はどう考える。バーボン。これはただの任務、で終わると思うか？」

「ハッ、そんな訳ないでしょう？その程度で済むと本気で考えているなら、転職をお勧めしますよ。それが、いい病院を紹介しましょうか？」

「前から思っていたが、君は俺に当たりが強くないか？」

「気の所為ですよ」

「……………」

バーボンの推測にライが思案顔で指摘する。そのやや投げやりな指摘に、バーボンは鼻で嗤った。ライに返すのは皮肉と煽りだった。……普通に仲悪い。

そう思ったのは俺だけでなく、ライもらしくバーボンに直球に聞いていた。それをしれっと躲すバーボンの肝の太さがヤバイ。ライもだんまりになり、室内の体感温度が少し下がった気がした。

「まあまあ、本題に戻ろうや。バーボンもライも、さっさと解散したいだろ？」

「それはまあ」

「そうだな。こんな所で時間を浪費するのも勿体無い。——で、作戦の確認だが、このセレモニーに紛れこみ、標的二人に接触、そして証拠を回収。そして、裏切り者の生死は問わない、と」

スコッチが宥めるように話の軌道修正すれば、バーボンとライは頷いた。バーボンは仕方なさそうに、ライはやれやれ、と肩をすくめながら。……ライは無意識なのかな、このバーボンを煽る言動。いや、バーボンを煽る、というより、一匹狼気質が染み付いているが故って気がする。まあ、組織の人間と仲良しこよし、なんてしたくないんだろうなライは。

「ええ。出来れば元研究員であるその男を尋問したいそうですから、生きてるのが望ましいらしいですよ？」

「尋問？」

「——組織の情報を何処まで盗み、そして拡散してしまったか。知りたくて仕方ないのでしよう。だって我らのボスは些か心配性、らしいですからね」

「なるほどな」

バーボンとスコッチのテンポのいい会話で俺は今回のおおよその概要を理解した。そのついでに聞いておこうか。

「あのさ。結局、俺は何をすればいいの？……え、何二人共目をそらす

の?」

「……さて、ライ。貴方は会場の外で待機してもらいます。今回の場には貴方は不釣り合いですからね」

「ああ。向き不向きがあるのは承知している。——精々殿役でも務めるさ」

俺の質問なんてなかったかのように、ライとバーボンのやり取りはスムーズに終わる。先程の不仲な様子なんて嘘のようだ。

「結構。それとスコッチ、貴方は数日前から先に潜入してもらっていますから、分かりますよね?」

「了解了解。——『佐藤 光』というフリーターに成りきっているさ。もう馴染んでいるしな」

「貴方の謎の適応能力もそうですが、偽名、もう少しなんとかなりませんか?」

「はは、シンプルなのが一番さ」

「それはそうかもしれませんが……」

スコッチの偽名のおざなりさにバーボンは微妙な、苦い表情になる。だが、当人であるスコッチがカラカラ笑ったら、呆れ気味な苦笑へと変わった。

そして置いてきぼりな俺にバーボンは向き直る。お?

「さて、ジエネヴァ。………誤解しないでくださいいね?」

「うん?」

「貴方は僕と共に当日に潜入してもらいます。セレモニーの招待客、その一くらの認識でいいですよ。ただ、僕の隣にいてくれればそれでいいんです」

「……となり?」

バーボンのふわっとした説明に俺の嫌な予感は留まる所を知らない、むしろ膨らむ一方だ。眉を顰めれば、バーボンは困ったような笑みを浮かべた。いや、バーボンの本意ではないのは伝わったよ?

「ええ、変装してもらおうので。——女性客、僕の同伴者として」

「え」

「仕方ないじゃないですか。セレモニーの大多数が同伴者を連れてい

るのですから。なるべく違和感を失くしておきたかったんです。……当初はちゃんと女性組織員のあてもあつたんですが……」

「つかなくなった、と」

「ええ、情けないことに」

バーボンの固い声に、俺は咄嗟の言葉が出なかった。喉から出たのは言葉になる前の一音のみ。そんな俺に罪悪感が募ったのか、バーボンの言い訳タイムが始まった。それも尻すぼみになってしまい、つい後を次ぐ形で言葉を付け足してしまふ。しょんぼりと頷くバーボンに、俺はため息を飲み込んだ。追い打ちはかけられないよ、こんな犬みたいなしょんぼりした姿に。……でもさ。

「……罰ゲームかな？」

「!?」

「ブッフ」

ぼそりといこぼれた呟きにバーボンとスコッチは目を丸くし、ライは耐えきれず吹き出した。腹を抱え背を丸めて肩を震わせるライにバーボンの目尻が吊り上がるのはすぐの出来事だった。仲良しかな？

「——で、聞いているんですか？」

「……聞いている」

せっかく現実逃避をしていたのに、水を差すのは爽やかなイケメンの声だ。爆発しろ、と思いつつ、俺は気持ちだけげんなりと頷いた。表情？無表情ですが？

隣に立つバーボンを横目に俺は辺りに視線を巡らす。豪華なシャンドリアが天井を飾り、優雅に談笑する正装の人々。ご婦人方の色とりどりのドレスの色彩はそれだけでこの広い会場を華やかに彩る。——そう、金持ちが主催するパーティ会場にいる訳だ。会場の外観は立派な西洋屋敷だ。なんでも明治時代に要人を招いての舞踏会を開いていた由緒あるお屋敷で、かの有名な鹿鳴館に似た造りをしてい

た。

会場の天窓からはこの都内でも綺麗な三日月がチラリと見える。現時刻、夜の七時半。このパーティの趣旨は確か、どこぞの会社の高層ビルの完成記念セレモニーだったか。つまりいつものお決まりのパターン、の一つだ。俺、なんでここに居るんですかね？

それは今の俺の格好が理由の一つなんだけどね。腰まである艶やかな黒髪、アイメイクで際立たせた涼やかな目元。身に纏うのは、青のドレスだ。細かい種類までは俺の精神の都合上、カットさせてもらう。総合的に言えば、キリツとした印象のクール系美女に仕上がった。髪はウィッグで、まあかつらである。化粧も手慣れてきたけれど、俺は男だし、どうにも邪魔くさいという気持ち拭えない。世の女性達は凄いと尊敬した。

声も当然、高すぎず、低すぎない大人の女性のモノに変えてある。あまりの完成度の高さにバーボンに完成度高すぎて逆に引く……、と失礼過ぎる眩きを貰ったので無言でそのつま先をこのピンヒールの踵で踏ませてもらった。奴は痛みで悶絶したし、その時隣にいたスコッチは爆笑していた。ざまあみろ。

話は逸れた。事の発端は、昨日に遡る。いつもの如く黙って俺の部屋に踏み込む兄貴からのお仕事を貰って、今日に至る訳だ。仕事の内容は少しばかり特殊だった。いつもの護衛や荷物の運搬とかじゃなく、とある仕事の助っ人をやれ、とな。出来れば、女性が居た方が会場に潜りこみやすい(パートナー同伴が必須らしい)、その上荒事に発展する可能性がある所以对処するだけの力があるのが前提条件。それに見合う女性の組織員は皆忙しく、手が空いていなかった。それで俺にお鉢が回ってきたらしい。ああ、まあ俺護衛の任務の時も必要に応じて変装はよくしていたし、女装だって仕事だったら躊躇いはないけど。助っ人をするその仕事も急に決まった案件だから、余計に人手不足だったらしい。

曰く、組織の末端の人間が裏切り、運よく追っ手を逃れた。研究職だったその男は、追調査の末に発覚したのは情報屋だった事。そして、顔を変え、名前を変えたその元組織の男の取引現場がこの日に行

われるパーティ会場らしい、ということ。そしてその男の特定までは至らず、その候補となる疑いのある人物が二人いる。……今回の仕事はその人物を速やかに特定の後、情報の回収。あくまで情報の回収が優先されるので、標的の生死は問わない。

タイムリミットは取引開始までだ。掴んだ情報によれば取引開始されるのは、午後八時十五分。これから四十五分後までだ。

「それで、私は何をすればいいの?」

「同伴者に接触して、見極めて頂ければ。他はこちらが対応しますから」

「了解。それじゃあ一旦別行動になるわね」

バーボンの話の相槌の後に、俺は首を傾げた。ちなみに先程まで簡単な打ち合わせをしていた。俺の女言葉にバーボンはなんとも言えない顔をしていた。なんだ?やるのか?と視線で問えば、首を緩やかに振られた。違う、と。

「いえ、本当に別人みたいだなと思っただけです。他意はありませんよ」

「そんな事言ったらベルモットの時、もつと驚く羽目になると思うけど?」

内緒話のようにひそひそと小声でのやり取りだ。話に付き合うだけの幾ばくかの余裕はあった。バーボンは俺の言葉に少しため息を零す。

「彼女は年季が違うじゃないですか。……君は、まだ……。いえ、なんでもありません。これは僕が言う事じゃないですね」

不意に途中で言葉を切り、バーボンは苦笑した。自嘲に近いその笑みは、どう声をかけていいか迷ってしまう。何?、なんて気軽に聞いてはいけない気がした。

「……アンタが何を心配しているのかは、知らないけどさ。俺は大丈夫だよ。こう見えて図太いし、頑丈だからね」

「そうですか」

声を元に戻して冗談交じりに軽口を叩けば、バーボンはほんのり微笑みを浮かべた。それはポジティブな意味ではなく、憂いを含む笑み

だった。うむ？まだ足りないか。

「それに、この格好も期間限定だと思えばなんてことないし。……見た目、見苦しくないからセーフじゃない？」

「……ふふっ、なんですかそれ」

な？気にする必要ないし、と俺はこの女装の出来栄に胸を張った。バーボンは目を丸くした後、軽く吹き出した。うんうん。

と、その時耳元で微かな電子音。耳元に付けたイヤークラフからだ。一見するとただの装飾品だが、中身は小型の通信機器となっている。外に待機しているライとの連絡手段だ。ちなみに発信機もついている高性能さだ。なんか探偵バッチを思い出すな、と原作を少し思い出した。ライはこの警備システムにハッキングして監視カメラでの確認及びもしもの為の保険の為に待機している。バーボンは適材適所だと言っていた。……この人ら仲良いのか悪いのかよく分からないな。

ちなみに俺らがこそこそと話しているこの場所は監視カメラの死角だ。会場の隅の方、壁の華、というよりスタッフさんの立ち位置に近い場所だ。ウェイターさんとかさ。

バーボンは勿論のこと、俺も仕事へと意識を切り替える。ピンと張り詰める緊張感のある空気は一瞬だけ感じた。直ぐに一般人に、この人々の談笑の輪に紛れ込まないといけないからだ。

『……取り込み中だったか？』

「冗談は止してください。——で？用件は？」

耳元からのライの声は揶揄いを含む軽い声だ。それに対してバーボンは呆れ気味に返し、本題を促す。まあ、時間の余裕もないからな。『ふむ、そうだな。Cが少し不審な動きをしている。用心する事に越したことはないな』

「了解、留意しましょう。それとAとBは特に問題はありませんか？」
『そちらは特に不審な動きはないな。——スコッチの方も問題なさそうだ』

ライの言葉にバーボンは頷く。視界にはAとBの人物も入っているが、念のために確認しようだ。

今回の仕事に関わる人物は多い。その為アルファベットで簡単に標的名をつけた。Aは今回の元組織員、情報屋疑いの男その一だ。見た目は二十代中盤、中肉中背の平凡な男だ。特徴と言えば、茶色に染めた髪とシルバーフレームの眼鏡だろうか。その表情は穏やかで余裕があり、好青年といった印象だ。ちなみにパーティで明かした身分は「青年実業家」だ。Bは情報屋疑いその二の人物。こちらはAと大体一緒なスペックの平凡な見た目の男。Aと違って黒髪で眼鏡はかけていない。そして神経質っぽさそうな印象だ。現に連れている女性にあれこれと小言を言っている。Cは情報屋の男の取引相手だ。五十中盤の初老の男性で、小太りの体形で背はあまり高くない。白髪染めをしているからか、若干見た目が若く見える。もともと、豪快に笑っている様を見ているとそのエネルギーギツシユな性格もあるのかもしれない。アメリカにある大会社のお偉いさんだとか。詳しくは関係ないので、俺は知らないでおこう。下手に知ると後味も悪いからね。その隣に凛と立つ四十代の女性、彼女がCの同伴者か。かつての美貌を思わせる、つり目の美女だった。あのおっさんには勿体ないくらいだ。

スコッチには会場スタッフの一人として前日に潜入してもらっている。ウエイターの格好を着こなし、するりと溶け込み、他のスタッフ達と問題なく人間関係を構築したらしい。なんだそのコミュ力、と俺はこっそり内心戦慄していた。これがコミュ力カンストか。

さて、あんまりここで話していると逆に目立ってしまう。バーボンを見れば、彼も同じような考えらしい。片手をそつと差し出される。

「お手をどうぞ」

「ええ。エスコート、よろしくね?」

「お任せあれ」

手を差し出すバーボンはまるで映画のワンシーンのように決まっていた。チツ、これだからモテる奴は……、と内心悔しく思いながらも、それをおくびも出さずに差し出された手をとる。うっかり手に力を入れ過ぎないように気をつけるのに精一杯だ。この苛立ちに近い八つ当たりしたい気持ちをどうしてくれようか。……護衛とかで女

装はしても、知り合いに姿を見られるとかなかったものなあ。俺も少しばかり動揺しているのかもしれない。気をつけなければ。

シャンデリアの輝きや人々の活気が眩しい、華やかなホールへと足を踏み入れた。作戦開始だ。

残り時間、四十分と少し。

※※

バーボンとは一旦別れてそれぞれの同伴者を務める女性に話を聞いた。基本、俺は話を聞く方が得意だ。まあ、この変装のおかげでもあるんだけど。まあ、よく化けたもんなど内心乾いた笑いしか出てこない。表向きは物静かな美人となっているからか、そつと近づいてお話し、いいかしら？と小首を傾げるだけでOKだ。ここでのポイントはそつと控えめな微笑みを浮かべる事。同性○となつているから、世間話を幾つか振って、同伴者の話にするりと変えれば大抵は話してくれる。女の人はおしゃべり好きだと相場が決まっているのだ。まあただし同性に限るという注釈が付いてしまいがちだけど。

変装している現在、俺は自分にとある自己暗示をかけている。本来は他人にかける催眠術だが、応用すれば自分にも出来るのだ。欠点はその難易度の高さと、精神的負担の高さだ。まあ、仕方あるまい。俺は表情を変える事が出来るよう、変装という条件のもとに自己暗示をかけたのだ。流石にこの任務をあつた鉄仮面の無表情でこなすのには無理がある。変装をとけば、暗示もとけるシンプルルール。我ながらいい思い付きだと思う。精神力ががりごり減るのはつらいけど。

で、それぞれの話を聞いた結果。先ず、Aの茶髪の穏やかそうな男は、どうやら一カ月前に同伴者の女性と知り合ったそう。彼女の父親が、この高層ビルの持つ会社と取引をしている会社の社長とかで、その縁でこのパーティーに参加。Aも仕事で会社の重役と顔見知り

だったので、同伴者に、という流れらしい。同伴者がいなければ参加できなかったから、直前まで参加に迷っていたらしい。だから一週間前に急に参加を決める羽目になったんだとか。そこかしこに恋のあれこれの話もあったが、大筋としてはこうだ。次にBの話。彼は彼の父がこの会社の重役でその息子である彼が急遽代役を務める事になったそう。彼女はBの婚約者なので必然的に同伴者になった。と。急遽代役を務めないといけなくなったのが、一週間前、と。なるほどなるほど。それぞれ急に参加しても可笑しくはない理由な訳ね。最後に取引相手のCの同伴者の女性にも話を聞きに行ったら、Cにやたらと興味を持たれたので断念した。あのセクハラ親父めツ、と内心舌打ちしておく。くっそ、このドレス露出していないようになっているんだよなあ。足とか、背中とか。

鼻の下を伸ばすCに俺が内心ギリギリしていると、後ろからバーボンが来た。そつと背に手を添えられる。

「失礼。僕の同伴者が何か？」

「いやいや、その美しさを讃えていただけで。それにしても、中々の美人さんですなあ。奥様ですか？」

はっはっは、と腹を揺らし豪快に笑うCに寒気しか感じない。思わずバーボンの腕をそつと掴む。バーボンはこの手を一瞥し、直ぐにこやかな笑みを浮べる。

「いえ。残念ながら、まだ彼女は僕の恋人ですよ。いずれは、とは思うのですけどね」

「おや、これはこれは。お熱い事。羨ましい限りですな」

照れを少し滲ませはにかむバーボンにCは揶揄い混じりに笑う。それを腕を引き、顔を歪ませたのはCの同伴者たる女性だ。

「ちよつと、あなた。失礼ですよ。——主人がすみません。そちらのお嬢さんも平気？この人、すぐ美人だと鼻の下が伸びるんだから」「すまんすまん、怒るな怒るな」

「ふふ、ご夫婦仲が宜しいですね。私は勿論、平気ですよ」

小言を呈する女性にCが情けない笑みで許しを請う。微笑まし気にC夫妻に首を振れば、再びCの同伴者に申し訳なきようにされる。

バーボンが場を辞して、さりげなく彼らから離れる事が出来た。

彼らから充分距離を離れ、周りに聞かれない程度の小声でバーボンに話しかける。

「ありがとうございます。助かりました。安室さんのおかげですね」

「いえいえ。気にしないでください。これもエスコートを務める男の義務ですよ。シズカ」

バーボンは今回「安室 透」の名でこのパーティーに潜入している。対して俺は「黒野 シズカ」だ。見よ、この偽名の雑さを。それだけ今回の準備期間は皆無に等しかったのだ。上の無茶ぶりにいつだって振り回されるのが下っ端のつらいところである。ブラックかな？

それでもって、この「安室」の同伴者として、この「シズカ」は彼の恋人、という役だ。正直聞いた当初は、なんだこの事故、と恐れ戦いた。誰がつて、俺が。今だって鳥肌が立つぐらいだ。今の「私」はシズカ、「俺」じゃない女性だ、と自分に言い聞かせないとやっていけない。

情報伝達は端的に行われるべきだ。バーボンと目が合う。ゆつたりと歩きながら、まるで明日の天気話を話すように気取らずに、サラリと言葉を交わす。

「それで、どう思います？」

「そうですね。本命は殆ど決まっているのでは？ Aは一カ月前に、Bは親から急遽一週間前に決まったそうですよ。Aは背後がなっていないません」

「なるほど。——こちらの話と辻褄が合いますね。Bの後ろはきつちりと固まっていました」

「……証拠は？」

「——とある信頼出来る筋、から」

微笑みながらの会話は頬の筋肉がっらいものがあるが、我慢だ俺。鳥肌と寒気とこの痛みのトリプルパンチであるが、俺は出来る子だからな。端的な情報交換をすれば、本命がすんなりと浮かぶ。すなわち、茶髪で穏やかな雰囲気男性であるAだ。バーボンの信頼できる筋、は本物だろう。なにせ、この人はこの手の情報を見誤ることはな

い。

取引開始時刻まで後二十分を切った。そろそろAとCに動きが出てもおかしくない。俺とバーボンはさり気ない視線で彼らを探すと、そこで俺は気づいた。

「ねえ、安室さん。——彼がいないわ」

「彼？」

俺が袖を軽く引けば、バーボンは怪訝そうな面持ちで小首を傾げる。……にしても、違和感が凄い。女装、は俺に向いていないのかもしれない。

そこで耳元からかすかな電子音——イヤークフからだ——が聞こえる。一気に空気が引き締まる。

『Cならば、先程バルコニーに出ていったのを見たぞ。大方、煙草でも吸っているか、それとも密会でもしているかだろうな』

「——それは何分前のことですか」

『八分前だ。——その後何人かバルコニーに立ち寄っているが、不審な動きはみられないな。スコッチ、どうだった？』

『……おかしいな。あのバルコニーに小太りな男なんていなかった気がしたが……』

「え？」

イヤークフから聞こえるやり取りの締めくくりに俺は思わず聞き直す。C、という男は大柄な方の男だ。隠れるにしても限度があるよな、というかそもそも隠れるような事情なんてそうそうあるものか。俺のそんな思考は突如破られる。

「ぎゃああああああっ!!」

「ッ!?!」

絹を裂くような悲鳴、それは奇しくも先程話題に上がったCのいるであろうバルコニーから聞こえた。軽く息を飲んだバーボンはすぐにそちらに駆け寄ろうとする。が、それを俺は止めた。視界の端に走り去る茶髪の男が見えたのだ。あれは混乱に乗じて逃げる気だ。

「待って」

「!? その手を離してください」

「いや、Aが逃げた。人混みから出口に向かっている」

「なんだって!?!」

咄嗟に掴んだバーボンの右腕はすぐに振り払われる。冷静に事態を伝えればバーボンの顔色が変わった。電子音が耳元から聞こえる。『残念ながらジェネヴァの言うとおりで。こちらからも追うが、君たちも追ってくれ。挟み撃ちといこう』

『こっちはこちらがなんとかするさ。さつき、他の従業員に客の出入りを封じるよう手を回したから、正面玄関じゃなく、裏口から追うことをお勧めするぜ』

ざわざわと周りの人のざわめきに消えそうな音量で情報を伝えてくるライとスコツチに、バーボンは今の優先順位を悟ったらしい。短い舌打ちが聞こえた。

「チツ!! 行きますよ、シズカ!」

「うん」

ガシツと先ほどとは逆にバーボンに腕を掴まれ、走り始めた彼の引つ張られるがまま、俺も全力疾走を始めた。……一瞬、シズカ“って誰のことかと思っただ。やっぱり偽名だとその辺が不便だな、と走りながら思った。

※

立ち戸惑う人々の間を縫うように走り抜け、俺達は「従業員以外立ち入り禁止」という見出しのある扉を躊躇いもなく開けた。もう頭の中にはこの会場内の地図は暗記済みだ。俺はもちろんバーボンやスコツチ、ライだってそうだろう。扉の先には細い通路となっており、監視カメラがあるものの、ライのハッキングにより、一、二分は役立たずになっている。その間に通路を走り抜け、裏口を開けた。

ライからの実況だと、もう標的Aは車に乗り、逃走を始めているらしい。ライが先に追うらしいが、なにせワンボックス車。それも高級機材を積んだ、という注釈付きの車だ。そこまでスピードは出せない

い。

標的は赤いスポーツカーに乗っている、という情報も出た。全力でアクセルを踏まれれば、ライに追跡は不可能になる。ここからは時間との勝負だ。

「乗ってください!!」

駐車場に先についたバーボンが口早に告げ、乱暴に愛車のドアを開ける。白い車体のその車はマツダ RX-7。安室透の愛車として原作では随分暴れまわっ……じゃなくて活躍していた。

頷き一つ返し、素早く助手席に乗る。

俺がシートベルトをかける前にはギョルギョルと凄いタイヤ音を響かせ発進させていた。……前回一緒の任務の時の安全運転とは雲泥の差の荒さだ。

「ライ、標的は今何処に？」

『そのまま北に5km、その信号前だ』

「了解。そのまま無茶しないでくださいよ？その積んである機材がオシヤカになつたら怒られるのは貴方だけではないのですから」

『はは、連帯責任か。——善処しよう』

「はあ。笑い事じゃないのですが……」

車を物凄い勢いで走らせながら、なんとも気の抜ける掛け合いをしている。バーボンもライも、そこに油断や慢心はなく、要は場馴れしているのだろう。というか、バーボンは凄いな。先程会場の駐車場で止めようとした警備員をドライブテクニクだけですり抜けたし。相手もさぞ肝を冷やしたに違いない。なにせ近い位置を減速なしに爆走されたのだから。警備員さんには心底同情してしまう。

「……ジエネヴァ」

「なに？」

前を見据えたままのバーボンに声をかけられる。視線だけを向ければ、バーボンには珍しい険しい表情をしていた。が、それも一瞬のことですぐに常の柔らかな表情に切り替わった。

「いえ、シートベルトをきちんとして、僕の運転にちやんとついてきてくださいね」

「？ うん」

「いい子だ」

バーボンの言葉に曖昧ながらも頷けば、随分好戦的な笑みが返ってきた。うん？あ、そういえば原作でこの人って結構脳筋だったような……。

そんな俺の考えが浮かび上がる前に、グンツ、と加速による負荷が体にかかり、俺は数瞬前の自分の言葉に後悔した。泣きたい。

※※

標的の車はバーボンの卓越したドライブテクニックにより、すぐに追いついた。俺は太ももに仕込んでおいた拳銃ホルダーから拳銃を取り出す。サイレンサーも取り出し拳銃に装着させる。だが、それをバーボンは片手でやんわりと制する。周りを見れば、まだ一般車両が数多くいた。というか、ここ首都高じゃん。いつの間に……。ついでにライの車両も見つけた。黒のワンボックス車。運転席以外は黒のスモークガラスになっていて大変怪しい。

「バーボンってさ」

「うん？」

「前職、スタントマンか何かなの？」

ここまでのドライブの道のりの荒さに俺は半ば本気で尋ねる。バーボンは少し目を丸くして、くすくすと笑みをこぼした。いや、笑い事じゃないんだけど、と俺は半目でバーボンを睨む。

「ふふ、随分緊張感のないことを言うんですね。けれど、どうでしょうね？ジエネヴァのご想像にお任せしますよ」

「あ。これ違うやつだ」

「あはは」

片手で拳銃をいつでも撃てるように、と添えながらの会話は随分和やかだ。少し前の俺なら考えられない程に気負いが無い。バーボンも車のハンドル捌きはそのままだ、表面上の穏やかさは保っている。タイヤのギョルギョルという急カーブの音や車体の激しい揺れがな

ければ、だけど。

そんな少しの穏やかさも、後少しでなくなるだろう。視線で「後少し」とタイミングを伝えてくる。——茶番だ、とイヤーカーフの向こう側は思っているかもしれない。けどライは沈黙したままだ。

螺旋状の道路、高速道路なので、抜かしながら標的の車に迫り、後ろにピツタリとはりついていて。今頃標的の男は気づいたようだ。アクセルを精一杯踏んでいる、加速が増すが、それももう遅い。

ちらりと見えたスピードメーターは百二十辺りを彷徨っている。もう加速のエンジン音のみがこの車中を満たしている。

カウントダウンを心の中で始める。

- 三。——ウインドウが下がり、車中に暴風が吹き荒れる。
- 二。——腕を車外に出し、狙いを定め。
- 一。——ソレに向けて、引き金を引く。

直後、パアッという破裂音と共に前の車体が見事バランスを崩し、耳障りなブレーキ音を響かせる。そして壁へと激突し、停車した。俺は前の車の左の後輪を撃ち抜いたのだ。

バーボンもすぐに近くに停車させた。後ろの一般車両はライのワゴンボックス車が道を塞いだので近づけないらしい。……いつの間に。

クラッシュした赤いスポーツカーからバンツ、と這い出るように若い男が飛び出した。その息つく間もなく、バーボンが間合いを詰め、拳銃を肩間に突きつける。短い悲鳴が男から上がる。

「な、なんなんだ!? あんたらはッ」

「——わかりませんか? 貴方がどれ程馬鹿だろうと、可能性ぐらいは浮かぶものかと思えますが?」

「ッ!? ま、まさか。あの組織の……」

顔を青くして、早口で狼狽える男にバーボンが穏やかに首を傾げる。ヒント、というか答え同然の言葉を告げれば、相手の男も悟つたらしい。その言葉の最後をバーボンは人差し指を自身の唇に当て、シィとジェスチャーをする。みなまで言うな、ということだろう。

「はは、ははははは!! お終いだ、おれは、俺はっ。——くそっ、こっとなつたら……!!」

男がヤケクソ気味に嗤い、懐からナニかを取り出した。バーボンが引き金をひこうと、する前の早業だった。

「このスイッチはな、さっきの会場に仕掛けていた爆弾のモノだ！お前らはどうせ他に仲間がいるんだろ？ おそらくは会場内にもいるはずだ、だってさっき事件が起きたんだからな。——証拠隠滅か、確認の為に、念の為に保険はかけるだろ？」

狂気に満ちた目で男は滔々と語る。そうとも限らないんだけど、今回は正解だな、と俺は冷静な感想が浮かんだ。というか、犯人さんよ、バーボンの殺気がヤバイからさっさと自首してくれない？あ、気づかないんですねソウデスカ。

「その引き金を引く前に俺はこのスイッチを押す。はは、木っ端微塵になつて瓦礫となつたら、さぞ気分がいいだろうなあ？お前の仲間なんて肉片に成り果てて、遺体すら残らないかもな？」

茶髪の優男の上機嫌に話す内容に、バーボンは眉を顰める。狂気に取り憑かれた、その醜悪な表情はもはや見かけの好青年さなんて微塵も残っていない。

面倒だな、と俺はカツカツとヒールを鳴らし、男に近づく。いきなり無言で近づいたクール系美女に男の狂気が少し揺らいだ。まあ、戸惑いますよね。

俺は脳内のとあるスイッチを自己暗示の要領で入れる。——我流暗殺拳、奥義その一。

「ッ、し、シズカ。下がって」

「はは、なんだこの女」

バーボンが険しい顔で俺に命令するが、ソレをスルーする。むしろ、バーボンを押しつけ、男の目の前に立つ。小馬鹿に見下す目の前の男の態度に少しイラツとしながら、足を振り上げ、思いっきりおろした。

ドゴン、と男の後ろの赤い車体が大きく揺れる。男はひゅっと、空気をうまく吸えない音を立てて固まった。

奥義、なんて大げさに言ったが、要は頭のリミッターを極限まで解除した人外染みた怪力による一撃。一時的な上に体にかかる負荷が半端ないからあんまり使わない程度の技だ。今足がめっちゃジンジンするし。とはいえ、ハツタリには凄い有効な技なのでこういう物分の悪い相手には有効だ。

男は己の後ろの凹んだ車体を恐る恐る見た。おや、顔色がかなり悪い。まあベツコリ凹んだ車体なんて、なかなか見れないしね。

シン、と辺りが静まったのを気にせずに俺は茶髪の男の手から起爆スイッチを抜き取る。呆然と放心なんてするから悪い。

「……ねえ、今度はアンタがこうなる番になるかもだけど。——答えてくれる?」

「ヒッ!?!」

「——起爆時間と解除方法、四十秒以内にさっさと答えろよ」

「は、はい」

顔を青から白にまで血の気を失くした男が涙ながらに白状するのを冷めた目で見ると。——そういや、さつき苛立ちのあまり声が元の少年の声に戻っていたのかもしれないな。しかも結構ドスの効いた低い声だったかも……。

バーボンの方を見れば引きつった笑みだった。だいぶ無理していらっしやる。端的に言えばドン引きだ。

だが、それも男の告げた内容によって元に戻った。

え、取引開始から十五分後に爆発? しかもメインホールの近くに仕掛けた、とな?

慌てて携帯で現時刻を確認する。現時刻、取引開始前十分前。ここから、会場まで十五分。つまり、爆弾の発見、解除を十分間でしろと?

なにそれ無理ゲー、とバーボンを見れば、覚悟を決めた顔をしていた。あ。これは戻って自分で解除するつもりだ、と俺でも察した。無言で踵を返すバーボンに、俺も慌ててついていく。そこで耳元の電子音が小さく主張する。え?

『とりあえずここはこちらがなんとかしよう。今、スコッチの方も手

が離せないらしい。——そちらは任せたぞ』

「了解」

短いやり取りの後、バーボンは車に乗り込んだ。俺も後に続く。急発進したマツダ RX-7は滑らかに道路を走る。が、来た道はこの人為的に起こした事故で渋滞を起こしていた。え、通れくない？

俺はチラリと隣に視線を向ける。どうするの？、と。

返ってきたのはにっこりとした笑みだ。うわあ、もしかしなくても、ですか？嫌な予感で内心頭を抱えそうである。

ぐおん、と渋滞して車が立ち並ぶソコへと突撃するようにこの白い車体が急加速する。その直後ぎゅるりと、バーボンが思いっきりハンドルを切った。

うつそだろ、と俺はぐわりと持ち上がる車体の片側に、白目をむきそうになった。タイヤを片側だけ使うとか大道芸じゃねーんだぞ！というツッコミをバーボンに進呈したい。くっそ、俺の寿命を返せ……！三年は縮むわ！

※※

「マジありえない……」

「はは、すみません。あの場ではあの選択肢しかなくって」

がちやがちやと手元のコード群を弄りながら、ぼそりと嘆く。バーボンの方は苦笑を浮かべているものの、反省の色はない。

今、再びあのパーティ会場となった洋館に忍び込んで、無事に爆弾を見つけ、解体中だ。ちなみにみつけるまで五分かかってしまった。つまりのこり五分で爆弾解除をしないとイケないという意味のわからない事態になっている。——更に見つかった爆弾は二個。一箇所二個仕掛けるとかなんなの？と俺はあの犯人の男に内心舌打ちした。ギリギリ歯ぎしりもしてしまいたい。

だから仕方なくバーボンと手分けして一人一つ、爆弾を解除しているわけである。最初解除出来るのか？と目を丸くしていたバーボン

に当たり前だと俺は領いた。組織の英才()教育をなめるなよー、と半ばヤケクソだ。なんなら、地雷原に単身行っても生還出来ると思う。この第六感で。

「まあ、いいけどさ。……うん、こっちは間に合いそう。そっちはどう？」

「こちら問題ないですよ。——そう言えば、スコッチの方は大丈夫でしょうか。あの時の騒ぎ、普通のアクシデント、とはまた違う空気を感しましたし」

パチリ、とコードを手際よく切断しながら、バーボンは会話を続行させた。その手元を見れば、なるほど八割方は片付いているようだ。まあ、こっからが本番なんだね。ほら、赤と青のコードで迷う定番のアレですよ。俺の方はあと一つ、コードを切れば解体終了だ。その赤と青で迷うやつで。うーん、ベタだ。

「——事件か、事故かって話？まあ九割方、事件だろうね。……ねえ、バーボン。アンタは赤と青どっちがいい？」

「やつぱりそうですね。——赤と青？そりゃあ、あ……って、君それコードの話ではありませんよね？」

「バレるか、やつぱり」
「当然です」

話に付き合いながら、俺は唐突に色の選択をバーボンに聞いてみた。ソレに返ってきたのは冷たい一瞥だ。バーボンのじと目とかレアだな、とその鋭い視線に俺は思考を逸らす。

「……大体、苦手なんですよ。その手の話。——映画ではベタでしよう？赤と青で迷うこの手の話」

「まあね。ピンク、っていう変化球も聞いたことあるよ」

「へえ。——でもね、命ってやつは背負ってみると凄い重たいものだ。ソレを突然の判断で、しかも他人任せっていうのはいただけいな、って思ってしまうんだ」

「ふうん」

「ぱちん、と俺は最後のコードを切る。己の第六感を信じれば、百中の俺に死角はない、と内心ドヤ顔だ。」

「聞いてますか？まあいいですけどね。——上手く行けば、確かに美談だろうけれど、いかなかったら誰もかれも後悔してしまうのはどうも苦手なんだ。君も、覚えておくといいよ」

バーボンは淡々と手元のコードを切つて、最後まで迷いなく切つてしまふ。その後の静かな余韻は解体成功を俺達に教えていた。

「何を？」

「——命の判断、その重さと引き受ける覚悟を、さ。……なんてね。さ、帰ろうか」

バーボンの言葉は波風もない、とても静かな声だった。悲しみも、怒りも、嘆きでさえ、深い深い水の底にあるような、そんな得体のしれない感情がそこ垣間見える。

俺の戸惑いを察したのか、バーボンの顔に笑顔が戻る。営業用の、ピカピカの一分の隙きのない完璧な微笑みがそこにはあった。

手元のオフにしていたイヤークフ、通信機をオンにし、バーボンは手短にライとスコッチと連絡を取る。……え？スコッチが事件の解決に貢献した？どうということなの……？

模範解答なんて期待をするだけ無駄だ

組織の地下駐車場。時刻は十八時。バーボンは今夜の任務の同行者を待っていた。腕時計を見ると、もう約束の時間になっている。バーボンの待ち人はそこら辺はちゃんとしていると思っていたのだが。……何せあの若さだ。それで成り上がった苦労はバーボンの想像を絶するだろう。

——コツ、とヒールの鳴らす小気味いい音が近づく。この足音の主は……。

ああ、とバーボンは脳裏に浮かんだ疑問を一瞬で霧散させる。そういえば、そうだった。バーボンは足音の方へと視線を向ける。

カツリ、と鳴らすヒールはシンプルな黒。ひらり、と翻る裾は綺麗な青で、持ち主の凛々しい美しさを存分に引き立てる。白い背中を無防備に晒しているのは、イブニングドレスだからか。編み込み、まとめられた黒髪と化粧に彩られた暗褐色の瞳は元の少年の面影を欠片もなくしている。どこからどう見ても綺麗に着飾った女性だ。

ベルモットから簡易的な指導を受け、彼も変装出来るとは聞き及んでいる。それがここまでの完成度を誇るとは、と苦く思うのはバーボンの身勝手なエゴだ。

「……今日はよろしくお願ひしますね。バーボン」

「——ええ。こちらこそ。ジエネヴァ」

ふわっと微笑みすら浮かべる女性こそ、ジエネヴァだった。最初にその出来栄えを見たのは先日のもので、その時にうっかり口を滑らせた事はバーボンにとっては苦い思い出。……スコッチとライは笑っていたが。スコッチは兎も角ライは絶対許さない。

内心の葛藤なんておくびも出さずに、バーボンは助手席のドアを開け、ジエネヴァを乗せる。自分も運転席に乗り込み、シートベルトを締める。

「そういえば」

「なんですか？」

「私のこと、『ジエネヴァ』じゃなくて、『シズカ』と呼んでください
ね」

「……今から、ですか？」

エンジンの駆動音に掻き消えそうな、思い出したようなジエネヴァの
声にバーボンは律義に聞き返す。そこからの提案にバーボンの眉
間に僅かな皺がよる。

バーボンの怪訝さは声音で伝わったらしい。ジエネヴァの口から
鈴の音のような女性らしい笑いが漏れる。

「ふふ。気分を悪くしたなら、謝りますね。私、スイッチが入るまでが
長いので」

「スイッチ、ね。……演技、としてなら今のままで充分なのは？」

「そう？」

ハンドルを切って、後退からの前進、緩やかに駐車場を後にする。
バーボンは運転に集中するように前を見据える。故に隣に座る人物
の表情を見ない。だが、声が、空気が、彼が微笑み、笑っている事を
伝えてくる。車中という狭い空間ではそれは言葉並みに雄弁だ。

君、笑えたんだね、と皮肉なんだか、素直な喜びなんだか分からない
言葉がバーボンの喉に絡まる。詰まって言葉が出ない、なんて久々
の感覚だった。可笑しな話だ、顔も、姿も、声すらも別人だというの
に。今の彼と話していると、ジエネヴァという少年の存在が曖昧に
なってしまうそうになる。今だって垣間見える仕草の別人さに戦慄
してしまいそうだった。

——この子供はここまで別人になれるのか。

組織の建物から出れば、東都の夕暮れの街並みが見える。西日の眩
しさに一瞬だけ目が眩む。

「……そうですよ。装うにしても、会場に入ってからでいいでしょう
？」

「——ん。わかった。アンタがそういうならそうするさ」

バーボンの内心を知ってか知らずか、ジエネヴァはあつさりと頷く。淡々とした少年の声に、切り替えの早さを知る。演技のスイツチ云々なんて嘘だろう？ そう言いたいのを我慢してチラリとバックミラー越しにジエネヴァの顔を見る。

少しばかり顔色が悪いような、と少し前の記憶をバーボンが反芻する前にジエネヴァの瞳がバックミラーに向けられる。当然、バーボンと視線がかち合う。

「それより」

「！」

目を細められ、少しばかり車中の空気に緊張が走る。BGM代わりにラジオのMCの声が少しばかり白々しく聞こえてしまう。

「前見なよ、前。危ないでしょ」

「——すみません。少し考え事をしていました」

真剣な表情で告げられた常識的な内容にバーボンの肩の力が抜ける。拍子抜けというか毒気を抜かれるというか。

「そうだ。コレ、渡しておきますね」

「なにこれ？ 耳に付ける奴？」

信号が赤になったのを確認した後にハンドルから手を放し、懐から目的のものを取り出す。ジエネヴァに投げてよこせば、すんなりキャッチされ、指で摘まんで物珍し気な視線を向けられる。その仕草はまるで新しいおもちゃを見る子供のようだった。

信号が赤になるのを目視して、バーボンはジエネヴァに視線を向ける。

「イヤークフ、だそうですよ。これは通信機ですので、取り扱いに気を付けてくださいね。くれぐれも壊さないように」

「了解。……というか、俺そんな乱暴者に見えるの？」

「そういう訳ではなく。……君の見た目と実際のギャップは身に染みているので」

「それどういう意味？」

少し前の少女の仮面を脱いだジエネヴァにバーボンが念を押せば、返ってくるのは機嫌を損ねたような言葉だった。勿論、ジエネヴァは

変わらずの無表情に揺るがない淡々とした声のままだ。だから、実際は機嫌なんて損ねていないかもしれないし、この会話に意味なんて見出さないかもしれない。それでもいい、とバーボンは思う事にした。「はは、悪い意味じゃないですよ。——これでも、君が見た目通りじゃなくて良かった、と褒めているんですから」

ジェネヴァがその見た目通りの儂い繊細さだったら、バーボンの中の良心は今頃悲鳴を上げていただろう。ただでさえ、今だって日本で培った良識って奴が匙を投じている現状だ。頭が痛い。現に今顔に浮かべる微笑の八割は苦いものが占めている。

バーボンの空笑いに、ジェネヴァはジト目を向け、

「……………うそだろ、それ」

「ははは」

褒めていないだろ、実際と拗ねたように顔を背けてしまった。バーボンの笑みは余程胡散臭かったらしい。こういう反応はこどもらしくて、バーボンは思わず笑ってしまう。今は任務前だ。こういう葛藤は後でも出来るか。

車の外はいつもの街並みが広がっている。少しだけ垣間見える忙しない生活の様子もいつも通りの光景だ。それは彼の目にどう映るのだろうか。バーボンの脳裏に刹那に浮かんだ疑問は、ハンドルを握り直す頃には消えていた。

青になった信号に、今日の任務がスムーズに行きますようになんてらしくもなく願ってしまうのだった。

※

ざわざわ、と喧騒と例えるには少し足りない賑わいを前にバーボンはため息をぐつと飲みこんだ。煌めくシャンデリアの明かりだけではない、表面上は上品に賑わう人々の輝きが目に眩しい。それが如何に幻に近い偽りだろうと、華やかなで煌びやかなのは事実だ。

空調が完璧な室内は、外の夜になってなお暑い気温なんて忘れてしまいそうなほどに程良い温度に保たれている。招待客の人数の多さ

とそれと比例するスタッフの人数を脳内で浮かべ、視界を通り過ぎる人々を目で追いながら、バーボンは関係ない方向へ思考を反らした。現実逃避している場合か、自分。バーボンは内心自身を叱咤する。

いや現実逃避したくもなるだろ、とバーボンは隣にちらりと視線を向ける。

「——で、聞いているんですか？」

「……聞いている」

作戦直前の確認にジエネヴァの反応は鈍い。目を伏せどことなく憂いある様子は装いも相まって、危うい色香が漂う。バーボンはこの隣の女性の中身がまだ幼さのある少年だと知っているからまだいいが、勘違いする輩もいるだろう。

件の取引があるのは四十五分後。それまでに調子を取り戻してくるといいのだが。とはいえ、バーボンに出来ることはない。励ましさえ、無意味だ。バーボンは内心歯ぎしりをする。

だが、それもバーボンの杞憂だとすぐに思い知る。

瞬きひとつ。それで、それだけで彼のまとう雰囲気がからりと変わる。

柔和な、見た目通りの微笑み。その形だけの唇の動きを見た時、バーボンの背に空恐ろしい予感めいた冷たさが通る。

「それで、私は何をすればいいの？」

「同伴者に接触して、見極めて頂ければ。他はこちらが対応しますから」

「了解。それじゃあ一旦別行動になるわね」

当の本人のジエネヴァといえ、けろりとした態度で頷く。が、バーボンの先ほどの動揺は殺しきれなかったようで、ジエネヴァの顔に怪訝なものが浮かぶ。何？、と問う褐色の瞳にバーボンは軽く頭を振る。いや何も、と。

そんなバーボンの誤魔化しも、嘘つけと鋭い視線が返ってくるだけだった。これは下手に誤魔化すのは下策か。バーボンはほんの少し

の本音を建前に混ぜることにした。

「いえ、本当に別人みたいだなと思っただけです。他意はありませんよ」

「そんな事言ったらベルモットの時、もっと驚く羽目になると思うけど?」

知ってる。ジェネヴァの軽い口調にバーボンは反射的に言葉を飲み込む。

千の顔を^ル持つ^{モツ}魔女と十三歳の子供とを比べるだけ無駄だ。本来ならば。バーボンはそこでため息を吐いた。

「彼女は年季が違うじゃないですか。……君は、まだ——。いえ、なんでもありません。これは僕が言う事じゃないですね」

君はまだ——十三歳のこどもじゃないか。喉に絡みついた言葉は紡がれる事はなく、代わりに誤魔化しが口から零れる。どうしようもない、馬鹿げている。これは捨てるべき感傷だ。隣存在は憐れむべきこどもではなく、黒の組織の幹部に相応しい技量を持つ脅威となる存在だ。先ほど思い知ったばかりだろうか? バーボンは一息吐いて気持ちを切り替えることにする。

「……アンタが何を心配しているのかは、知らないけどさ。『俺』は大丈夫だよ。こう見えて凶太いし、頑丈だからね」

ふいに隣から聞こえてきた声は、ジェネヴァ本来のものだった。その落ち着いた声に氣遣われた可能性がバーボンの脳裏を掠める。

「そうですか」

そんな訳ないか。

唇に浮かんだ笑みが自嘲から苦笑に変わる。バーボンは己の考えに情けなさすら感じていた。

ジェネヴァはバーボンに小首を傾げ、

「それに、この格好も期間限定だと思えばなんてことないし。……見た目、見苦しくないからセーフじゃない?」

ふふんと小さく胸を張る。淑やかな女性の影は引っ込み、そこにあるのは年相応の子どもらしい明快さだ。少々の微笑ましさにバーボンの口元が思わず綻ぶ。

「……ふふつ、なんですかそれ」

笑みが零れたバーボンにジェネヴァは何度も小さく頷く。
まるで、気楽にやろうぜと励ましているように。

※※※

——パリンツ

「きゃあああああつ!!」

絹を裂くような女性の悲鳴に掻き消された微かな異音。それは空耳だったのか。

事件が起きたテラスの近くにいた一人のウェイターは苦く、奥歯を噛みしめた。白のシャツに黒のギャルソンエプロン姿はこの制服だ。

さて、どう動こうか。するり、と自分の顎を撫でて、そこにいつもの無精ひげがない事に落ち着かない気持ちになる。今回の任務に無精ひげはそぐわないか、と事前に剃っていたのだ。今のこの職業に清潔感は必須だ。

腰に付けたインカムの操作をし、回線を合わせ、他のホールの人員に連絡を取る。左耳に付けたイヤホンから聞こえるのは混乱と動揺の隠せない声だ。まあ、一般人の彼らにこれはきついかもしれない。テラスへと繋がる扉は既に開け放たれている。室内の明かりで多少は明るくなっているものの、奥は薄暗い。おしやれを演出するはずだった間接照明も人が倒れ伏すこの場では真逆の恐怖しか感じられないだろう。微動だにしない強張った表情と、肌の色は死人のそれだ。手遅れ、か。

腰を抜かす第一発見者の女性は驚愕の眼差しで目の前を見つめて

いる。——確か、被害者の奥さんだったか。

左耳から聞こえる混乱の声に、二、三言頼み事をする。動揺する相手にはシンプルに伝える方が効率的だ。こちらの方が新人で申し訳ない気持ちが先に立つが非常事態だ、仕方ない。

——警察、救急車を呼ぶこと。

——混乱するお客様方をこの場に留めること。

——従業員専用の通路に少しだけ近づかないように。

最後に告げた言葉に違和感を抱かせないように、細心の注意を払い、「頼れる同僚」を演じる。こちらの思惑通りに、納得の声を上げ、インカム越しの相手はこちらの指示通り動くようだった。

そして同時に現場を荒らさぬように、そつと被害者に近づき、脈とその体温を確かめる。——やはり、手遅れだ。この様子だと死後そんなに経っていないようだが。

と、そこで被害者の首筋に小さな刺し傷が見えた。まるで注射針で傷つけたかのような、小さな穴。——凶器はそれに準ずる何か、か。他に目立った外傷は見当たらない。毒殺の可能性が高いので、経口摂取もあるか。

被害者の周りにはキラキラと光を反射するガラス片が散らばっていた。その付近には少量の液体も広がっている。それ故、すぐに駆け寄って対処が出来なかったのだが。——ワイングラス、に近いものが割れたのだろうか。

そして被害者の倒れているのはテラスの柵にあたる部分だ。薄暗いこのテラスは隅に出来た暗がりにも身を潜めれば簡単に隠れられそうだった。——犯人が隠れられる余地はある、か。

「誰、なの？」

強張った第一発見者である女性の声に脈を計っていた手を離す。

——これは面倒なことになったぞ、と男の脳内で警鐘が鳴り響く。

「……………この従業員ですよ、お客様」

ウェイター、佐藤 光。名前の由来はとあるメーカーのレンジで温

める白米のアレである。米の品種がコシヒカリだったのがいけない。まあそれを言ったら、同僚のバーボンに一撃をくらってしまっただが。やたら重い一撃だった。

——または、コードネーム“スコッチ”。絶対、ここでバレる訳にはいかない。

この後、第一発見者を宥め、テラスから室内へと移動し、隙を見てバーボンらに連絡。従業員専用の通路を使うように、と勧めて、ライが防犯カメラをアレソレして、なんとかバーボンとジエネヴァが会場外に出たようだった。嵐のような忙しさだった。悲鳴からここまでかかった時間はたったの一分、と言えば伝わるだろうか。カップラーメンとて調理が間に合わない慌ただしさだ。

※

「——被害者の名前は千代田 太郎。鑑識によると死亡推定時刻は事件発覚から三十分から十分前。凶器は未だ発見していませんが、恐らく毒物による毒殺。それからこれはあくまで噂ですが、被害者は貿易会社の社長であるものの、その強引な経営方針や私生活に相当恨みを買っているようです」

「ふむ。ご苦労、佐藤君。——それでは皆さん、話をお聞かせ願います」

女性刑事——佐藤刑事か。きりつとした美人の刑事は淡々と現在の情報を簡易的に開示していく。それに頷きを返すのが、恰幅のいい警部だ。日暮警部だ、と最初に名乗った彼は視線をこちらに向け、事情聴取に入るようだった。あまり時間をかけられないのは重々承知の上で、こうしたのだろう。

今現在、会場の空いた客室にスコッチを含めた五人を集めて待機している。会場内にいる客もいまだ動けずにいる。たった三人の例外は別だが。

「待つてくれ。何故我々が？これでは我々が容疑者のようだ」

それに異を唱えたのは、任務上ではB、となっていた男だった。名前は潘ばん 秀成ひでなり。今だって神経質そうにメガネの銀フレームを指先で押し上げている。

「……この会場には数か所に防犯カメラが設置しているのはご存知ですか？幸か不幸か、現場であるテラスの出入り口を映すものもあつた、それで貴方がたにご協力をしてもらっているのです」

「——ッ!? つまり、犯行時刻の前後に我々が映っていた、というのかね?!」

「……残念ながら」

潘の苛立つた言葉に目暮警部が丁寧に説明する。明らかになつた被疑の理由に理不尽さはなく、潘は反論の言葉に詰まる。はく、と口を動かし血の失せた顔を見せる潘を支えるように寄り添うのは彼の婚約者たる女性だ。……たしか、漆谷 すずなという名前だったか。

脳内の情報を整理しながら、打開策を模索する。これは大分まずい状況だ、己も、それにここにはいない仲間である彼らも、だ。それは誰に言われるでもなく、スコツチには十二分に分かつていた。

「——状況整理も兼ねて、皆さんのお名前と犯行時刻のアリバイ、それから被害者との関係も聞かせてください。無論、話しにくい事もあるでしょう。一人一人別室に呼び出しますので、そこで詳しい話を伺いましょう」

無言で引き下がった潘に一瞥してから、目暮警部は中断していた事情聴取を再開する。そして、別室に隔離して一人一人話を伺うようだった。スコツチ、としては頭の痛い話である。もちろん、顔にも口にも出さないが。

「——それには及びませんわ。だって隠すような事ありませんもの。それよりも夫の仇を早く炙り出す方が先決ですわ」

「貴女は……」

毅然とした態度で話の横やりを入れる女性に佐藤刑事が怪訝な顔をする。その疑問にふつと軽い笑みを浮かべ、一礼する。

「失礼。——私は千代田 菊子と申します。夫、千代田の妻でござい

ます。夫であるあの人は一部では悪評が少々囁かれますが、悪人というわけではありませんでしたのよ?」

「少々、ね……」
「ッ」

着物の似合う和風美人、千代田夫人の夫の総評を潘は鼻で嗤った。皮肉気なその反応に千代田夫人は元々キツイ印象の目を更に鋭くさせて潘を睨んだ。対する潘は肩を軽く竦めるのみだ。一瞬で空気が緊迫感で凍る。

「えつと、まあまあ。落ち着いてください。——貴方も、発言には気を付けてください」

「事実、なんですがね。……気を付けますよ、刑事さん」

佐藤刑事は千代田夫人を宥めてから、潘に注意する。それに飄々と返す潘に、少しの違和感を感じる。どうも被害者に少なくない因縁があるようだ。

「……犯行時刻、でしたわね。その時間でしたら、おそらく会場内で知人や友人達と話していましたわ。夫と少し別れてから、発見するまで、あのテラスに近寄った記憶がありませんもの。——あのテラスには、気分転換に参りましたのよ。そしたら……」

そこで言葉を切った千代田夫人は涙をこらえるように顔を覆う。肩を震わせ、思い出すのを拒絶するように頭を振った。近い位置にいた佐藤刑事が無言で千代田夫人の肩に手を添え、近くのソファに座らせた。もういい、ということだろう。

無言で耳を傾けていた目暮警部の目が潘に向く。……まあこの中で突っかかるのは潘のみだし、怪しいだろう。

「貴方の話もお伺いしても?」

「ふん。私の名前は潘 秀成。このパーティーには父の代理で参加した。——言っておくが、私は無実だぞ?被害者とは知人だが、それだけだ。動機にもなりはしない」

「ほう。——それにしては、先程から妙に被害者に思うところがあるようですがね」

「何、彼の悪評判はこの耳に痛い程届いている。それに私の友人も、少

しばかり痛い目に合わされた、というだけの事だ」

横柄な態度を崩さない潘に目暮警部は頷く。相槌を打ちながら、追及を続けるようだ。

「成程、ならそのご友人の無念を晴らす為にという動機もあり得えてしまいますな」

「ぼツ、馬鹿を言うな!! 何故私が彼奴なんかの為に手を汚す必要がある!?!」

「——なんか、ですか」

目暮警部の煽りに激昂した潘はすぐさま己の失言に気づいたのだろう。口元を押さえ、目を逸らした。

「ツ!! ——兎も角、私はやっていない。私の連れにも聞いてみるといい、殆ど行動を共にしたのだからな!!」

「……ええ。彼の言っていることは本当です。会場に入ってから、数える程しか離れていませんし、それも一分かそこらの話ですから」

早口でまくし立てた潘に同意するように頷くのはパートナーの漆谷だ。深窓の令嬢、を体現したかのような風貌の彼女に潘の激昂は少し鎮められる。——大変そうだなあ、とスコッチの胸中に他人事ながらの同情が少し湧く。

「そうですか。——とところで貴女は?」

「私は漆谷 すぐなど申します。彼、潘とは婚約者で、被害者であるあなたとは面識はありません。……精々が噂、程度かしら?」

「……噂、とは?」

淡々とした漆谷の様子に目暮警部は踏み込む判断をしたらしい。噂の全容を問うと、返ってきたのは少しの沈黙だ。言葉を選んでる様子だ。

「……誰々の恨みを買ってるらしい、とか誰それに借金を負わせたらしい、とか。それに……誰かを自殺に追い込んだらしいという——」

「ッ!?!」

一つ一つ、たどたどしくも言葉にしていく漆谷の最後の言葉に血相を変え、立ち上がったのは千代田夫人だ。目を見開き、全身を震わせ

る様はどう見ても異常だ。隣に付き添っていた佐藤刑事も驚いた表情をしている。

皆の視線を一身に集めたのに気付いたらしい。千代田夫人はすぐに我に返り、口をなんとか笑みの形にする。

「……ごめんなさいね。なんでもありませんわ。つい、驚いてしまつて……」

苦しい言い訳をそのままに、千代田夫人はソファに身を沈めた。

口を噤んでしまった千代田夫人に、気まずい空気になりながらも、事情聴取は再開する。

「後はアリバイ、ですよ。私も彼、秀成さんと変わりありません。ただ、あのテラスには近寄っただけなので、私にも犯行は無理ではないでしょうか」

「そうですか。……次は貴女にお話を伺いましょうか」

漆谷の主張を言葉少なに頷いた目暮警部の矛先が、次へと向けられる。次、というのはあの任務ではAとされていた男の同伴者。こちらは先の二名の女性とは一転して華やかな印象の美貌だ。可憐な見た目であるが、決して幼さとは見られない絶妙さは多分化粧技術によるものだろう。男であるスコッチには正直ピンとこないが。

「私は、伊三野^{いさの} 淳末^{あつみ}。父の仕事関係の伝手で、このパーティーに参加したわ。後、被害者とは全く面識はないわね。……噂は少しは聞いていますが、そんなの尾ひれ背びれが付いていて、周りが大げさに言っているだけなのよ。私、噂話あまり好きになれないのよね」

スラスラとよどみなく答えていた伊三野は、そこで言葉を切りため息を吐く。

「まったく、くだらないったら。——で、アリバイでしたっけ？ うーん。正直、あの騒ぎの後、同伴者を探すのに精一杯だったのよね。だから、あまり覚えていないわ」

「それで、その彼はどちらに？」

物憂げな伊三野の話に目暮警部はここにはいない同伴者を問う。それに待ってました、と伊三野は目をきらりと光らせた。

「聞いてよ！ 刑事さんツ!! あいつ、信じらんないのよ！ 結構な事件

だつて言つてんのに、あの下衆野郎、私を置いていきやがったのよ!!」
「ま、まあまあ。伊三野さん、落ち着いて」

「これが落ち着いていられるかつてんのよ!」

伊三野の凄い剣幕に目暮警部はたじたじだ。宥める手も及び腰である。最終的に伊三野は佐藤刑事に宥められ、落ち着いた。頼れる女性刑事だなあ、とスコッチは他人事に関心してしまう。中々面倒な容疑者メンツに現実逃避していたわけではない、決して。

「ごほん、それでは最後にウエイターの貴方に話を聞きましょうか」

どうやらこちらに話は向けられたようだ。スコッチは少し考える。

「俺は見ての通り、このウエイターをしている。佐藤 光。そういや、そちらの刑事さんとは同じ苗字だな。まあだからなんだ、って話だけど。——で、被害者との面識は今日初対面だし、その面倒そうな噂も知らなかった」

ちなみにそちらの刑事、とは佐藤刑事のことだ。いやあ、偶然って怖いな。

「従業員に色々指示をしたのは貴方だと伺っていますか?」

「それは、アレですよ刑事さん。俺、刑事ドラマとか推理小説とか好きでそのセオリーって奴を守っただけですよ」

「セオリーって、君な……」

目暮警部の追及は想定内だ。誰だつてパニックに陥った現場で冷静に指示する新人、なんて疑うに決まっている。

口から出まかせの「設定」を口にすれば返ってくるのは呆れの視線と声だ。はは、我ながらなんか変な設定が生えたとは思っている。口には出さないが。

「それから、アリバイですか。俺はずっと会場内を歩いていたようなものなので、アリバイが成立するかどうか……。このインカムで他の従業員と連絡は偶にとつてはいましたが、それもアリバイ工作だろう、と言われると弱いですし」

「成程。——アリバイの成否は監視カメラの映像を見れば、自ずと分かる部分もあるでしょう。それから皆さんにお聞きしたい事が二、三ありまして」

こちらのアリバイに関してあまり追及はされなかった。とりあえずこれで室内にいる、容疑者全員に話は聞けた訳である。室内が少しばかり安堵に包まれようと空気が緩んだその時、目暮警部が追加の質問を示す。

「まだあるのかねツ!？」

「さほどお時間はかかりませんよ。まず、この三人について知っている方は？」

追加部分に気色ばむのは潘だ。突っかかる彼はもうこれはそういう性分なのではとしか思えなくなってきた。

目暮警部も慣れたのか、さらりとかわし懐から三枚の写真を出してくる。監視カメラの映像から現像したのか、少し荒い。だが、人物の大体の容姿は判別出来る。

「この方々は？」

首を傾げるのは千代田夫人。

「あー!! こいつよ、こいつ! ばっくれやがったのはツ!!」

鼻息荒く一枚の写真を指差すのは伊三野。その指が指し示すのは一枚目の写真だ。

三枚とも年齢層は同じ。二十代中盤の男女だ。

一枚目。茶髪に銀フレームの男。一見穏やかそうな印象の男だ。

二枚目。金髪碧眼に褐色の肌の色男。整った甘いマスクはモデルのようだ。

三枚目。黒髪に茶褐色の瞳に白い肌。大和撫子という言葉が似合
いそうな美人だ。

うん。二枚目と三枚目って荒い画像だけど、バーボンとジエネヴァだ。ほんと。うわあ、しつかり疑われているじゃないか。やばい、これは激やば案件だ。というか、本当にジエネヴァ上手く化けたな!!
内心荒れまくるも、抑え込み、スコッチは冷や汗を流す。

結局、結論は皆よく知らない人、で流れた。伊三野や潘はこの三人に犯人がいるに違いない、と騒いだが目暮警部が首を横に振る。

「なんでよ!?! 今この人達、この会場内にいないんでしょ!?!」

「圧倒的に怪しいのは我々ではなく、彼らだろう!!」

伊三野と潘は声を揃えて目暮警部に詰め寄る。その勢いにたじろぎながらも、目暮警部は引かない。

「言い分は分かりませんが落ち着いてください。……監視カメラの映像には彼らの姿が犯行現場の近くに映らなかつた、なので現状アリバイが成立しているんです。この三人には」

怪しいのは怪しいんだがね、と目暮警部はぼやいた。

「ですので、監視カメラの映像で現場に立ち入ったか、近くに居た貴方方にご協力をお願いしているのです」

目暮警部の目力に押されてか、伊三野と潘は渋々引き下がった。

スコッチはホッと安堵の息を吐く。とはいえ、油断は許されない。

……監視カメラ、か。

伊三野は未だにAの事をぐちぐちと文句を言っていた。A、もとい本名朝霞 英次郎。伊佐野が恨みを募らせなくても、恐らくは今大変な事になっているに違いない。何せ、追手に本物の殺し屋が二人もいる。ライとジエネヴァ。ライもそうだが、ジエネヴァも敵には容赦が一切ない。一瞬の躊躇いすらも。

「それから、こちらも見覚えがある方はいますか?」

思考に沈んでいた意識が再び目暮警部の声に浮上する。こちら、と出して出された証拠品は金色のカフスポタンだ。家紋であろう、茗荷紋の意匠がきらりと光る。

「ッ!?!」

ひゅつと息をのんで真っ青な顔で固まるのは千代田夫人だ。

「どうされましたかな?」

「……な、なんでもありませんわ」

千代田夫人の顔色に気づいた目暮警部の問いに、震えた声が返る。どう考えても千代田夫人に心当たりがあるのは間違いない。

「本当に、ですか?……これは遺体の傍に落ちていたものです。被害者の品ではないのであるならば、これは犯人によるものでしょう。意図的にしろ、そうでないにしても、犯人への手がかりに違いはありま

せん。——もう一度聞きましょう。奥さん、こちらに見覚えは？」
目暮警部の口調は責め立てるものではなく、至って静かなものだった。

「……それは、多分彼のものですわ。——五年前、夫の会社で自殺してしまつた方がおりました。夫は彼のことを大分可愛がつていましたので、私も何度かお会いしたことがありましたの」

千代田夫人は目を伏せ、観念したかのように語り始めた。その声は後悔が滲む、苦々しいものだった。

「それで、見せてもらった事があつたのです」

千代田夫人の人差し指が目暮警部の手元へと向けられる。金の意匠のカフスボタン。

「……自慢の、彼の自慢の宝物なのだ」と

千代田夫人の声が、指した人差し指が僅かに震える。

「そうですね。話して頂いて感謝致します。……それではこれから手荷物検査を致します。皆さん、ご協力ください」

千代田夫人の言葉を受けて、目暮警部は帽子のつばを指で押さえる。一応これで捜査の情報は一通り出揃つた感じなんだろうか。

現時刻二十時丁度。バーボンらと別れてから十五分経過。あちらはどうなっているのだろうか。

※※※

時は少し遡る。

「チツ!! 行きますよ、シズカ!」
「うん」

咄嗟にとつた腕は驚くぐらい細かつた。だが、それに構うことなく駆け抜けていく。時間は待つてはくれない。

※

「バーボンってさ」

標的の車の後ろ姿が目視出来る位置。後少しで終わるのだろう。車中はエンジンの音のみで静かなものだ。

そんな時にジエネヴァから真剣な声が掛けられる。

「うん？」

「前職、スタントマンか何かなの？」

首を傾げれば、くそ真面目な顔で問われた。

……吹き出さなかった己を褒めてやりたい、とバーボンは瞬間思った。それでも口から笑いを噛み殺し切れずくすくすと零れる。微笑ましいやら、なんやら。

「ふふ、随分緊張感のないことを言うんですね。けれど、どうでしょうね？ジエネヴァのご想像にお任せしますよ」

「あ。これ違うやつだ」

「あはは」

会話は和やかだ。思わず笑みさえ自然と零れてしまうほどの。元のハンドル捌きは愛車のスピードと比例して激しくなってくるが、不思議と会話する余裕はある。恐らくは。

ジエネヴァの手は銃に添えられている。いつでも撃てるように、と言わんばかりのソレだ。バーボンだって人の事は言えやしない。けれど場慣れているこの子どもの。

バーボンの胸に不意に苦いものが燻る。命のやり取りに、場慣れ？緊張すらもしない？そんなものが安堵の材料だった、なんて。己が酷くどうしようもなく思える。

イヤーカーフは沈黙を保っている。だが、ライには聞こえている。おそらくは茶番だと思っているだろう。分かっている。組織に人並みの善悪や倫理観なんてもの、一枚の紙よりも軽いものなのだ、と。

そろそろ、か。視線でタイミングを伝えれば、微かな頷きが返って

くる。

標的の車の後ろにピタリとはりつく。標的の車が今更ながらスピードを上げてくるが、もう遅い。メーターを見れば、時速はとうに百二十を超えている。

ジェネヴァがウインドウを開け、暴風が吹き荒れる。風の威力にバーボンは目を細める。

直後。

パアンツという破裂音と共に標的の車体が見事バランスを崩し、耳障りなブレーキ音を響かせる。そして壁へと激突し、停車した。驚くべき早業。そこに迷いや躊躇いすらもなく、ただあるのは磨かれた業のみだ。

まだ終わっていない。車を近くに停車させ、降りる。ジェネヴァも降りるようだ。

チラリと後ろを確認すれば、ライのワンボックス車が道を塞いでいた。あれぐらい距離があれば、一般人にこれからの事を見られずにすむだろう。

クラツシュした赤いスポーツカーからバンツ、と這い出るように若い男が飛び出した。その息つく間もなく、間合いを詰め、拳銃を眉間に突きつける。短い悲鳴が男から上がった。

「な、なんなんだ!! あんたらはツ」

「——わかりませんか? 貴方がどれ程馬鹿だろうと、可能性ぐらいは浮かぶものかと思えますが?」

「ツ!! ま、まさか。あの組織の……」

顔を青くして、早口で狼狽える男に穏やかに首を傾げてみせる。ここまで言えばいくら馬鹿とて分かるだろう。答えを男が口走る前に、人差し指を唇の前にして、シイとジェスチャーで伝える。最後まで言わなくてもよろしい。

「はは、ははははは!! お終いだ、おれは、俺はっ。——くそっ、こうなったら……!!」

男がヤケクソ気味に嗤い、懐からナニかを取り出した。こちらが引き金をひこうとする前の早業だった。

「このスイッチはな、さっきの会場に仕掛けていた爆弾のモノだ！お前らはどうせ他に仲間がいるんだろ？ おそらくは会場内にもいるはずだ、だってさっき事件が起きたんだからな。——証拠隠滅か、確認の為に、念の為に保険はかけるだろ？」

狂気に満ちた目で男は滔々と語る。愚かな。苛立ちが思わず表情に出てしまう。恐らくとても見せられない顔をしているのだろう。後ろにいるジェネヴァが戸惑う空気を感じる。

「その引き金を引く前に俺はこのスイッチを押す。はは、木っ端微塵になつて瓦礫となつたら、さぞ気分がいいだろうなあ？ お前の仲間なんて肉片に成り果てて、遺体すら残らないかもな？」

茶髪の優男の上機嫌に話す内容に、思わず眉を顰める。狂気に取り憑かれた、その醜悪な表情はもはや見かけの好青年さなんて微塵も残っていない。

さて、どうするか。バーボンが思索しようとした時。

カツ、カツ。ヒールの鳴らす音が背後から聞こえる。まさか。

目の前の男の顔も狂気に満ちた顔から驚きへと変わる。

「ツ、し、シズカ。下がって」

「はは、なんだこの女」

動揺で思わず声が揺れる。睨む勢いでジェネヴァに命令するが、聞こえていないかのように振舞われた。その細い身体のどこにそんな力があるのか、バーボンを押しのけ、ジェネヴァが男の目の前に立つ。突然目の前に現れた美女の姿に男が見下す表情へと変わった。ジェネヴァはスリットの深いドレスに気に留めず、白い足を思い切り振り上げる。

ドゴンツ。男の後ろの赤い車体が揺れる。見れば、ドアに凹みが出ていた。ピンヒールの踵ぐらいの穴さえ出来ていたかもしれない。それは無造作に降ろされた華奢な足には到底出せないような威力だった。ぽかん、とバーボンは思わず呆けてしまう。は？今何が起きた？

男は己の後ろの凹んだ車体を恐る恐る見た。顔色がかなり悪い。シン、と辺りが静まったのを気にせずにジエネヴァは茶髪の男の手から起爆スイッチを抜き取る。呆然と放心する男はいまだ心が現実へと対応出来ていない。

「……ねえ、今度はアンタがこうなる番になるかもだけど。——答えてくれる?」

静かな、とても穏やかな声。だが、それは逆に殺意の表れか。ジエネヴァの目が冴え冴えと冷え切っていた。

「ヒッ!」

「——起爆時間と解除方法、四十秒以内にさっさと答えろよ」

息を呑んだ男に追撃するかのようにジエネヴァの声はドスの効いた低い声だ。それは女性、ではなくジエネヴァ本来の少年の声だった。

「は、はい」

顔を青から白にまで血の気を失くした男が涙ながらに白状するのをジエネヴァは依然冷めた目で見る。その目が、そのままバーボンに向けられる。

思わず、浮かべた笑みが引きつった。やはりこの子どもは只者じゃない。

なんて、悠長な思考も男が告げた言葉で霧散する。

は? 取引開始から十五分後に爆発? しかもメインホールの近くに仕掛けた?

お前ふっぎけるなよ、とバーボンは標的の男の胸倉を掴みかかっていた気持ちで一杯だった。だが、それよりも優先させなければいけない事がある。

すぐに会場に戻らなければ。は? ジエネヴァ、君もついてくるのですか?

※※※

時は戻り、再び客室。

一旦、目暮警部達は監視カメラの映像を確認する為に、と別室に行ってしまった。恐らくは警備室へと向かったのだろう。監視カメラの映像を確認できるのはそこだけだ。残るのはスコッチを含む容疑者五人と警備の為に残った警官二人程。名乗ってはいないので警官二名の名は知らない。

ならば抜け出すか。

スコッチは切羽つまった様子でトイレへ行きたい、と警官へと訴えた。脂汗を滲ませ、腹を抱えれば、了承をもらえ、警部に無線で確認をなんていう悠長な言葉を振り切れば、緊急事態故に致し方ない出来事、の完成だ。

自慢の脚力をもつて警官一名を振り切れば、後はこつちのもの。脇道へと逸れ、手近な空き部屋へと身を滑り込ませる。この会場、というか屋敷は無駄に部屋数が多い。暫くは時間稼ぎが出来るだろう。インカムを操作してライへと繋げる。……距離的に繋がれば恩の字だが。

『——なんだ?』

「監視カメラの映像で確認してもらいたいものがある。いいか?」

『了解。現場となったテラスに立ち寄った順番、だろ?』

「流石、ライ。話が早いな」

そう、先程の簡易的な事情聴取で明かされなかった情報だ。流石に部外者な上に容疑者となつてしまったスコッチにはあちらの捜査に首を突っ込む権利はない。

『先ず、標的C……いやここでは被害者、としておこうか。彼がポケットから何かを取り出し顔色を変え、例のテラスへと向かった』

「何か、ね」

『監視カメラの映像は荒くてな、詳細までは分からないが。恐らくは紙片、順当に考えれば脅し文句でも書かれていたんじゃないか?』

ライの解説にスコッチは頷く。

「成程な。それで? まんまと犯人に誘われ、その手に乗った。それか

ら?」

『ここからは十分ぐらいの話だ。十分前、被害者が入り。八分前、標的Bである潘が入り、一分後出てくる。そしてその後、彼の婚約者である漆谷がテラスの入口で潘と合流。どうやら漆谷は一切テラスに出てはいないようだな』

「潘はテラスで被害者と会った、なんて言っていないかったな。ただのいい忘れか、それとも……」

『故意に隠したか、被害者が隠れたかの三択だな。——それから六分前、ウエイターの佐藤がテラスの扉に通るかかる』

「おい、からかうなよ。ライ」

『はは、悪い悪い』

ウエイターの佐藤、で声に笑いが含まれる。それに抗議するようにスコッチが声を尖らせても返ってくるのは軽い謝罪だ。まだその声は楽しそうだ。……そんなに分かりやすかったのかさとう〇ごほん。スコッチは少し反省した。お前の言う通りだったよ、バーボン。

「それで?」

「続きは?」

『五分前、伊三野が入り、二分後出てくる。後は君の知る通り。その三分後、被害者の奥方が入り、一分もしない内に君が入って事件が発覚』
「……うーん。後はその十分の間に身に着けているものが変わった奴がいれば、いいんだが」

『この荒い画像でそこまで分かるはずがないだろう』

「……だよなあ」

まだ一手が足りない。だからこそ、零れた愚痴のような思案はライにズバツと切り捨てられる。正論である。しかし、判断材料が不足しているのは事実である。

「整理するか。——そもそもこの事件の謎は三点。一つ、凶器の形と在処。二つ、被害者の死亡したタイミング。三つ、何故犯人はあんなことをしたのか」

『ふむ。どうやら君には俺とは違う、事件の背景が見えているらしいな』

「——背景というか、気になることがあつてな」

あのテラスに踏み込む前。千代田夫人の悲鳴の前に聞こえたあのガラスが割れるような、そんな異音。それがスコッチの脳裏に違和感という引つ掛かりを覚えさせる。

『ホォー……』

「なんだ？ライ」

『いや存外、真実というのはシンプルなものだ。——君の言っていた、推理物のセオリーというのも存在するし、現実だつてよく言うだろう？』

ライの感心した声にスコッチは首を傾げる。それにライは少しだけ声に笑みを含ませる。しかし、貰えるヒントは貰つておいて損はない。

沈黙でライへ続きを促す。

『“灯台下暗し”。殺人犯だつて人間だ。思わぬミス、想定外の事象、または人の行動。犯人の想定していない痕跡だつてあつただろう。それらを合わせて考えれば答えは自ずと出てくる。……さて、君の頭の中に真実は浮かんできたか？』

「断片、あるいは道標つて奴を、かな」

『上等じゃないか。——朗報だ。使われた毒物はリシン。凶器はやはり針状の何か、らしい』

「成程。で、そんな機密事項どうやって知つたんだ？ライ」

『企業秘密、と言いたい所だが……。何どうという事はない。世の中には盗聴という手段があつてだな』

「おま」

ライのサラツとぶち込まれた爆弾発言にスコッチが言葉を失くす。

『と言つても電話回線ぐらいだが』

「いや普通に問題だろ……」

『問題？』

大した事じゃないだろ、とても言いたげなライに思わずスコッチも素の返しをしてしまう。それに怪訝そうな声になるライにヤバい、とスコッチは我に返つた。

「いや気にしないでくれ。——真実、って奴が分かっただけさ」
『そうか。それは何より』

ならば、後はやる事は一つ。
問題を可及的速やかになくすだけである。

※

「君な、いい加減にしておくれ。——理由はまだ分かる。だが、迷子？
君、確かこの従業員だったんじゃないのかね？」

「ははは、なにぶん俺、新人なもので……」

呆れのあまり敬語のとれた目暮警部にスコッチこと、佐藤 光は乾いた笑みでお茶を濁す。そんな言い訳は更に警部を呆れさせたように盛大なため息を貰う。

ライとの通信を終え、部屋を出たら、この目暮警部以下愉快的な刑事さん達とぼったり出くわすなんてどんなコントだ。佐藤刑事、という美人さんの視線も心なしか冷たい。スコッチは内心嘆きたかった。いや、まあ自業自得なのでその苦言は謹んで聞かせて貰うが。

「それで刑事さん。犯人は分かりました？」

「そんな短時間で分かったら苦労はしない。——一日やそこらで犯人が分かるのはドラマや小説等のフィクションの中だけだろう」

スコッチの問いに目暮警部は苦い顔で答えた。だが、その苦さもすぐになくなり、表情が引き締まる。……無神経だったか、とスコッチの胸の縁に後悔が過る。

目暮警部の目に鋭い決意の光が宿る。

「だが、今手に入る手がかりを取りこぼすつもりは毛頭ない。君らには申し訳ないが、もう少しばかり時間を頂くことになりそうだ」

「どうやら己の杞憂だったか。スコッチはポーカーフェイスの下でホッと胸を撫で下ろす。

「……そうですか。——そう言えば、刑事さん。俺、とある人に少し違和感があります……」

「違和感？」

スコッチの悩みを打ち明けるような声に佐藤刑事が素早く反応する。目暮警部は無言だ。それは邪険というよりは、静観という方が正しい沈黙だった。

「ええ。些細な、引っ掛かりみたいな。腑に落ちないような違和感。……こういうモノが事件のヒントになる。——推理物のお約束でしよう?」

「貴方ね……。現実はその物語みたいに上手くいかないわよ?」

どうせだから生えた設定を生かすような、刑事ドラマに夢見る青年のキャラでスコッチは話を進める事にした。——これからの誘導にはこの方がやりやすい、という判断だ。あとは愉快犯成分が二割ほど。

そんなスコッチの内心を知ってか知らずか、かの美人刑事の佐藤刑事からの視線が冷たい。呆れで敬語がとれてしまっている。まあいいけれど。

「ははは。まあ、騙されたと思って俺の言うとおりにしてみてくださいいよ。……後で詳しい話もしますので」

ここは強引にしてしまった方がいい。……彼らの注目がこの佐藤光に集まってくれば、消えた謎の招待客であるバーボンやジェネヴアの方が曖昧になる。いや曖昧にさせる、と言った方が正しいか。

「君なあ……」

「犯人があの人ならば。——性格上、絶対この手に乗って、のこの姿を現すでしょう」

案の定、呆れ顔のため息を吐く目暮警部。目頭を指で揉む仕草は確実に説教前の前準備だと思っていいたいだろう。

そうはさせない、スコッチは追撃に畳みかける。

思惑通り、目暮警部以下刑事さん方の動きが止まる。まだ容疑者達を集めた客室へは着いていない。だが、その浮かぶ表情ははつきりと戸惑いと困惑を表している。

「な、何を言っているんだね?」

少しだけ揺らす事に成功した。ならば、後はほんの少しの甘言だけでいい。

「……そんな難しい事ではありませんよ」

これでは誰が悪人なんだか。スコッチはほんの少しだけ、ため息を吐きたくなった。

おかしいな、悪いことをしているわけではないんだが。

「まずは会場内のお客様を容疑者以外を帰してください。彼らは無関係者なので。連絡先をひかえるくらいでいいでしょう。——後は刑事さん達に一芝居を打って頂きたいのですが……」

一芝居、の内容を簡潔に二、三言に分けて伝える。

スコッチの神妙な声に、真剣な眼差しに、耳を傾ける価値はあったらしい。

しばしの沈黙の後、目暮警部は帽子のつばを指で掴み少し引き下げる。

「はあ……。分かった、君の案を吞もう。それくらいならば、我々も目を瞑れる。こちらには多少のデメリットもあるが、それも上手くいけば十分に釣りがくるだろうしな」

「しかし、警部！」

目暮警部の了承の言葉に佐藤刑事が食い下がる。

「いいんだ、佐藤君。……これぐらいで犯人が挙げられるのなら、我々も柔軟に対応していかなければならない。そうだろうか？」

「警部……」

目暮警部の苦渋の決断の言葉に佐藤刑事は感銘を受けたような声だった。……ほんと、申し訳ない。捜査に割り込む超絶迷惑野郎で。スコッチの良心は悲鳴を上げそうだ。しかし、これも目的の為だ。致し方ない。何せ仲間の人命がかかっている。

目的の客室に着いた警部達は早速、スコッチのお願いを実行してくれるようだった。

「皆さんにはご協力を感謝します。——実は犯人が判明したので、皆さんはもう帰って頂いて結構です。後日、証言の確認等の協力をして頂きますが、然程時間は掛かりません」

「ちよつと待つてよ！ 私たちは十分当事者よ!! 犯人ぐらい知る権利

はあると思うのだけど」

「そうだそうだ、我々だって充分迷惑をかけられたんだからな。知る権利はあるだろう！」

目暮警部の淡々とした説明に待ったをかけるのは伊三野だ。それに同調するようにわめくのは潘だ。

「すみません。——話は恐らく故人となつてしまった、被害者にとつてもデリケートなものになるでしょう。そんな死体に鞭打つ行為、良識ある皆さんはしないと信じています。……そう心配しなくても後日明らかになりますよ」

「し、しかし犯人がこの隙に逃げたらどうする？」

沈痛な表情で説得する目暮警部に潘はなおも食い下がる。しかし、そんな潘に目暮警部はフツと口元を綻ばせた。

「ご安心を。我々警察はそこまで無能ではありません。そうだね？佐藤君」

「はっ、その通りです」

目暮警部の確認を佐藤刑事は胸を張って答える。そこには揺るぎない自信があつた。

……本当はこんなところで展開、ある訳がないんだけどな。こつそりと壁際に立っていたスコッチは心の中で呟いた。チラリと腕時計を見る。

時計の針は、二十時十五分。何事もなければ、例の取引が行われたであろう時刻である。——さて、この賭けは上手くいってくるだろうか。

※※

誰も居なくなつた会場。事件現場となつた、ベランダテラスに一人の人影があつた。辺りは雰囲気演出する為のライトがほんのりと照らすのみで薄暗い。立ち入り禁止を指す、黄色のテープをその人物は躊躇いなく乗り越えた。そして目的の場所でしゃがみ、何かを探すような仕草をする。と、その時辺りはスポットライトで明るく照らさ

れる。

「ッ!?!」

息を呑んだ。何故、目の前にあの男がいるのだろうか、と。

白のカツターシャツに黒のベスト、ギャルソンエプロン。よく磨かれた黒の革靴が光を反射する。辺りに他の人影はなく、それが余計に混乱を助長させる。

「……少しだけ、疑問だったんだ。何故、犯人はあんな賭けみたいな事をしたのか。だが、それも犯人が分かれば納得したんだけどな」

佐藤 光。ただのウェイターが悠然と犯人である人物の前に歩み出る。言葉を失う犯人の目と目を合わせる。

「――伊三野 淳未。貴方が犯人だ、そうですね?」

「な、なにを言ってるの? 私なんかより、よっぽど怪しい奴ならいるじゃないッ!! ほら、あの潘とかいう奴とか、あんたのいうセオリ―なら第一発見者であるあの奥さんとか怪しいじゃない! そうでしよう?」

佐藤の言葉に伊三野は吠えるように反論する。だが、その動揺は声に如実に表れ、震える。

佐藤は伊三野の言葉に緩く頭を振る。

「……その二人じゃ無理だ。というか、本当は分かっているんでしよう?」

ここに現れた時点でもう既に詰んでいるという事実。言外に告げられた、伊三野は激しく頭を横に振る。今もなお、逃れようと拒絶する。

「違うわ! 大体証拠は何処にあるのよ! それにどうやって? あんたの中途半端な推理じゃ誰だって疑うわよ!」

「――凶器」

「ッ!?!」

ぽつり、佐藤が静かに呟いた言葉に伊三野は顔色を一転して青くさせる。核心をついた言葉だった。

「まあ、認めないのも無理はない。だから、貴方のいう通りに今回の事件を一から説明しようか」

「佐藤は人差し指を立て、宣言するように、あるいは物語を語るように言葉を紡ぐ。」

「まず、貴方は隙を見て被害者のズボンのポケットにとある紙を忍ばせた。あれだけ人がいたメインホールだ。すれ違いざまに接触するのは難なく出来ただろう。誰にも違和感を覚えさせずに」

伊三野の沈黙を肯定として、話を進める。佐藤は顎に手を当てた。思案する仕草で回想する。

「それが、前準備。恐らく紙には、五年前に自殺したという男の事でも書いてあつたんだろうな。被害者には後ろ暗い事もあつたらしいし。——そして、ここからが重要だ」

ここで言葉を切った。そして、少しの余韻を含ませる。

「……この事件の鍵は『凶器』。警察によるといまだ発見に至っていないらしい。針状の何か。さて、この凶器は何処にあつて、何処にいったのだろうか?」

「知らないわよ、そんなの」

「つれないな。まあいい。——ここからは全て俺の推論だ。何せ、俺は監視カメラの映像を見てはいないからな」

「はあ?」

佐藤の言葉に伊三野は理解できないと眉を顰める。

「だが、犯人が何番目にこのテラスに踏み込んだのかは大体分かるし、その大体で事足りる事件なんだ」

「どういう事よ?」

佐藤の煮え切らない言葉に伊三野はけんか腰だ。佐藤は三指を立てた。

「先ず最初。これはあり得ない。何故なら被害者はあの大柄さだ。いくらこの暗闇だつてあの四肢を投げ出した姿勢で発見されないって事はないだろう。それに、この現場はガラス片が散らばっていた。……にも関わらず、被害者の遺体にはついていなかった。この二点で考えられるのは、死亡するまで被害者が故意的に身を潜めていたって事だ」

ほら、そこに丁度隠れられそうな場所があるだろうか?佐藤は自身の

後ろにある壁の凹みを指す。丁度大人の人間の半身は隠せそうな場所だ。

伊三野は悔しそうに顔を歪める。

「脅されていたのかまでは知らないけれどな。——そして最後もあり得ない。俺は奥さんの悲鳴のすぐ後にあの現場に立ち入った。そして、遺体にも触れた。あの体温は死後一、二分のものではあり得ないからな。その時に変な音も聞いたが」

「じゃあ……!」

「それだよ。違和感を覚えたのは。——同時にこれは犯人によるものだろうな、と思ったのさ」

そして三つ目の指を折る。

「三つ目。針状の凶器。犯人は被害者の首筋の動脈目掛けて刺した。首にある動脈は体の中でも見えやすいし、太いからな。丁度良かったんだろう。だから、小さくても良かったんだ。……ところで、貴方のピアス。事件前と後ではデザインが少し違いますね?」

「ッ!?!」

佐藤のわざとらしい敬語の問いに伊三野は咄嗟に左耳を抑える。

「成程。そっちの耳のピアスが、か」

「あんた、かまかけたわねッ!? でもお生憎様。今のところ状況証拠だけじゃない!これじゃ逮捕出来ないわよ」

飛び掛かってきそうなくらいの気迫の伊三野に佐藤は肩を竦める。

「いや、別に?……そうだな、でもだから不安になって回収しに来たんだろう?」

「!?!」

佐藤の言葉に伊三野は目を見開く。

「だから、その部分にあったガラス片を解析すれば毒物が検出出来るし、何なら踏み砕いたであろう貴方のヒールの踵にもガラス片は付いているでしょう。事件前のガラスが割れた音——あれはワイングラスでこれを隠すためのフェイク。ワインを少し入れて、この柵に半分だけ乗せるようにしてバランスをとれば、後は誰かが入って崩してくれるのを待つだけ。……貴方はそこで賭けをした。その崩してくれ

る人が千代田夫人か、それか潘であるかを。そうでしよう?」
「……あいつらが悪いのよ。五年前!私の恋人を惨めに死に追いやつた、あいつらがツ!!」

伊三野は髪をかき乱し、恨みを低い声でまき散らす。そこにはもう初対面を感じた、華やかさはない。

「千代田夫妻はあの人を追い込み、当時親友であった潘はあろうことか、あの人を見捨てたのよツ!! ねえ、貴方に想像出来るかしら?あまり連絡がつかなくなった恋人の、久しぶりの連絡が私への謝罪と愛の言葉を綴った遺書だったって。だから、このピアスに、ガラス製のピアスに私の殺意とあの人の無念を込めてやったの!! 金のカフスボタンはあの人の遺品よ。……わたし、許せなかった。自分も許せなかったけれど、でもツ。それよりも、あの優しい人を、そこまで追い込んだ……周りがとても許せなかったのよお!!」

伊三野の悲痛な悲鳴の如き慟哭は辺りに虚しく響き、霧散する。

佐藤はチラリ、と背後に目配せする。そこには、目暮警部らの刑事達が予め待機していたのだ。……ここからは彼らの仕事だ。いや、この前段階も本当は彼らの仕事なんだけれども。

佐藤 光——否、スコツチの仕事はまだ終わっていない。

※※※

あれからこつそりと抜け出し、ライへと連絡した。そしてこのメインシステムにハッキングしてもらい、バーボンとジエネヴァの画像データを消すようにした。勿論、警察の方も、だ。スコツチの内心は複雑である。

そして、その連絡の時に衝撃的な事実をスコツチは知った。は?ジエネヴァがなんだった?しかも会場に爆弾が仕掛けられていて、間一髪危ないところだった?しかもそれをバーボンとジエネヴァが協力して解除した?はい?スコツチの疑問符は途切れることはない。

今回の任務の全てが片付き、ゆつくり出来たのは日付も変わった午

前一時過ぎ。

バーボンとスコッチの恒例の反省会及び宅飲みだ。ちなみに場所は都内にあるセーフハウスの一つだ。今回は飲まないとやっていけない。いやマジで。

「……という事がありましたね。本当にあの子が心配になりましたよ」

バーボンは言いながら持っていた缶ビールを飲み干す。カン、と缶の底がテーブルにあたりいい音が響く。スコッチは苦笑を浮かべた。

「まあそうだよなあ。あいつ、まだ十三歳だものなあ」

己の十三歳の頃を思い浮かべる。まだ中学校に入りたての初々しかったあの頃を。それに比べてジエネヴァの周囲のモラルの低さと言ったら。スコッチでさえドン引きレベルである。むしろ、あの子の貞操が守られているかも怪しい。いや下世話な話過ぎかもしれないが。

「まだ性認識も危ういのに、女装とか。組織の教育ってどうなってるだ全くと」

「バーボン、口調口調」

「おっと失礼」

バーボンの低い呟きにスコッチはツツコミを入れる。それにバーボンは茶化すように肩を竦めた。

「ま、下世話な話ですけど、あの子の貞操と違って守られてはいるんですよね。というか、自分で撃退しているというある意味正しい話なんですけど」

「強いな」

「過剰防衛ではありますけどね」

「かじょうつ？」

ほろ酔い加減で二人雑談に花を咲かせる。話題に上るのはあの目立つ少年だ。バーボンのぼかした言葉にスコッチは首を傾げる。はて？かじょうとは。

バーボンは頷きを一つ。

「だって、全員もれなくあちらに逝ってしまいましたから」

バーボンはあちら、と人差し指で床を指し示す。それは文字通り床下、とかではなくもつと奥底の話であり。地底、否地獄……、アルコールで鈍った頭でスコッチはそこまで変換してうわあ、と呻く。それは……。

「ロクでもないな」

「まったくです。嫌な話ですよ。——今日、認識を改めましたけど」

あれは被害者とかそんなタマじゃない、バーボンは眉を顰めた。

「バーボン？」

「あの子は強い。……経験に裏打ちされた強さがあり、心も歪みは多少あれど狂っていない。倫理観は真つ当であり、善悪も恐らくキチンと判断がつくんだろう。だけど、その分危うさもある」

「……ああ。まだ、成長途中の子どもだもんな」

どんな人間だって揺らぎやすい時期がある。それは俗にいう思春期とかいう奴であり、今話題にしている少年の年齢に当てはまる。バーボンの表情は沈痛としたものだ。

話題を変えようとして、スコッチはふと思いついた。

「というか、ジェネヴァって近接、遠距離両方戦闘面で得意で、しかもある程度頭が回って、爆弾みたいな危険物の扱いもこなすんだろ？それに変装術まで出来るという器用っぷり」

「何が言いたいんです？」

「これって、テロリストにもなれそうじゃね？」

割と手におえない部類の。

ゾツとした。

「……やめましょう。この想像は誰も幸せになれませんよ」

「おう、そうだな」

二人とも背に走る悪寒にぐったりしながら、この話題を終わらせる。

「一番いいのは元凶がなくなる事なんだけどなあ」

スコッチの心からの言葉にバーボンがほんとそれな、と深く頷いた。

小話　：愚かしさすらも眩い、その感情の名を

組織の施設の中は夏の暑さとは無縁の涼しさが保たれている。冷房にかかる電力はエコとは言えない勢いで、とても地球には優しくないだろう。そもそもこの犯罪組織がそんな地球に対する思いやり、とか言い出した日には地球の滅亡の日なのではないか、と思ってしまう訳だけど。

「ね、暇な時ここに遊びに来ていい？」

そんな夏の暑さに頭をやられたのだろうか。

二回目に彼がこの研究室を訪れた時に言われた。なんでもないことのように。もうその頃には彼の「友達」になっていたから、この突拍子のなさに毒気を抜かれるのも慣れてしまった。

肩まで伸びた銀色が縁取る少女めいた美貌に変化はない。この温度のない無表情は彼の標準装備だともうシエリーは知っている。だからこの発言に他意なんて含まれていない。シエリーはこみあがる動揺を喉の奥に押し込んだ。

「……………あら、なに？ 貴方、貴重な休みも私に会いたいなんて余程寂しいの？——なんて。おやめなさい、そんな時も組織を思い出させる知り合いに会いたいなんて不毛極まりないわ」

前半に揶揄いを、後半に諫めを含めて言い聞かせる。こちらの言葉をこてり、と小首を傾げる様は顔立ちも相まって愛らしい幼さが垣間見える。その瞳がここまで淀んでいなかっただら見た目通りの子どもらしさだと言うのに。

「ん？ そう、かな。寂しいのかな？ 俺。——だっていくら連絡先を交換したってアンタの性格じゃ、あんまり連絡してこないだろう？」

「……………さて、どうかしら？」

全く痛いところを突いてくれる。悪気のない様子の彼にシエリーは、苦い思いではぐらかす。余裕のある笑みを浮かべれば大抵はどうかなることを知っているから。

なのに、彼は。あの無表情が珍しく、眉を下げて、口角を下げほんの少し表情を悲し気になった。

「——ごめん、アンタを困らせるつもりはなかったんだ。どうも、俺にはデリカシーって奴が足りなかったみたいだ」

「……………」

ずるい。淡々とした声が優しい響きになり、こちらに對する親しみを雄弁に伝えてくる。きつとギャップって奴の威力に違いない。だから、ここで言葉が出てこないのは、彼がいけないのだ。

「シエリー？」

「——好きにすればいいんじゃない？ 貴方が貴重な休みをどう使おうと、私には関係ないもの」

「…………うん。好きにする」

折れたシエリーの素っ気ない言葉に、彼の目が緩く細まる。微笑み、まではいかない微々たる柔らかな淡い表情。

あまりに不器用だと思う。けれど、その不器用さが案外嫌いじゃない。

シエリーの“友達”。同じような境遇の彼。

ジエネヴァ。それがシエリーの知っている彼の名前だ。偽りまみれだけど。

※※

ジエネヴァは宣言通り、ふらっと姿を現す事が増えた。一体どこから入り込むのか、シエリーが少し目を離したら、空いている椅子に座って微睡んでいる、なんてざらだ。最初は驚きのあまり怒ったら、「来るって言ったでしょ？」なんて言うものだから。呆れるやらなんやらで。しかもこころなしか、しょんぼりと肩を落しているように見えてしまったのが運のつきだ。シエリーにため息を吐いて許す以外に選択肢がある訳がない。本気で拒絶したい訳でもないし、したら大人げないにも程がある。

いつだったか、そんな風に神出鬼没になったジエネヴァの顔色が悪くなつていく時期があった。まだ夏の盛り頃だったように思う。

「で？言いなさいよ」

「……別に大した事じゃないよ」

研究室にあつたパイプ椅子に座らせ問いただしたらコレだ。シエリーじゃなくても呆れてしまうと思う。どの口が言うのやら。

見下ろした真つ白な美貌は顔色が無さ過ぎて、いつもよりも儂さを増している。目の下に出来たうっすらとしたクマですら美貌を損なわないってどうなってるの？と文句さえ言いたい。こうしてじっくり見るとこの人って色素が少ないのね。それで瞳の深緑が一層際立つて見えて、この澱んだ光のなさに疎む思いをするのだ。まるで、底の見えない深淵を見せられるように。

そんな事はまず置いておいて。目の前の滑らかな頬に手を伸ばす。手が頬に触れるとジエネヴァの肩が少し揺れた。ビツクリしたように目が見開かれる。珍しい事が重なるのね。

「嘘を言わないで。——顔色が悪いわ」

「……うそじゃないんだけど。——最近、夢見が悪いんだ。まるで」

ジエネヴァの言葉がそこで途切れる。目を伏せて、躊躇うその様子に頬に当てた手で撫でて続きを促す。子を宥める母のような温もり、とまでいかないけれどこちらの温もりが少しでも伝わればいい、と思つたが故に。

「ううん。やっぱり、これで充分。——ありがとう。心配させちゃつたかな」

ジエネヴァはグツと奥歯を噛み締め、それからゆるりと頭を横に振る。頬を撫でていたこの手に頭を少し擦り寄せて、離れた。そのぎこちない動きがあまりに不器用で、ドキリとする。

ありがとう、と言うその顔は今までにない程穏やかだった。幼い筈の美貌がやけに大人びて見えて、この胸の動悸が更に激しくなった。いや、気のせいよ、なんて自分に言い聞かせないととてもやっていけない。

「……はやく、元気になりなさいよ。調子狂うじゃない」

「ん。シエリーも、困った時は俺に言つて。俺と違ってアンタは優しいんだから」

「何よ、それ。ふふ」

シエリーの思わず零れた本音にジエネヴァは頷いた。そして、お返しと言わんばかりに出された提案に思わず笑ってしまふ。そっちこそ随分と優しい言葉じゃない。

「いやいや、本気だよ？——優しい奴は、貧乏くじを引きやすいんだ」「ふふふ。——でも心配ご無用。私、そんなに優しくもないのよ」

貴方だからきつとほつとけない。シエリーの、宮野志保にとって唯一の同年代の友達なのだから。そんなズルい奴なのよ、本当は。

※

そんなやりとりもどこか懐かしい。更に季節は進み、今は秋の訪れに足を踏み入れ、夏の名残の残暑が続くそんな日々だ。そんな残暑は早朝には関係なく、爽やかな涼しい空気がこの都会の朝を包む。

時刻は午前五時。

その爽やかさに構うことなく、シエリーは焦ったように足を進める。辺りの人影は疎らだ。とある事情から普段の通勤時間を大幅にずらした事がここで裏目に出てしまった。ああもう、なんでこんな舌打ちしたいのをグツと堪え、早足を更に早める。最悪なことに靴がヒールの高い靴だった。お気に入りだから、と言っている場合じゃなかった。

後ろからネットリとした視線を感じる。ゾツとする悪寒に背を押され、もう早足と言うよりは駆け足になってしまっている。道行く疎らな人々の視線なんて構う余裕すらない。

まだ、まだついてきている。足音は聞こえないからまだ距離があるけれど、それも時間の問題だ。ここからシエリーの職場までまだ五分は掛かる。付かず離れずのその距離は甚振って追い詰めて楽しむ捕食者の余裕だ。

怖い。

けれど、誰に助けを求めればいい？組織の人間なんて、頼れるはず

がないというのに。シエリーの知っている人間は組織の人間しかない。

目の前をバイクが通せんぼするように横づけられる。勢いよくブレーキをかけ、シエリーの目と鼻の先にピタリと停車した。フルフェイスのヘルメットに、シエリーは絶対絶命を知る。情けなくも涙が出てしまいそうだ。

その人物がヘルメットに手をかけ、勢いよく脱いだ。

ヘルメットからさらり、ときらめく銀色。

「え?」

「……シエリー。——その鬼ごっこはアンタの趣味?」

「そんな訳ないでしょう?」

相変わらずの無表情。シエリーはそこで己の勘違いを知り、人知れず安堵する。そして変わらざるの分かりにくい冗談にムツと眉が寄る。

思わず反射的に言い返せば、ジエネヴァの瞳が緩く細まる。だよね、と軽い調子で返された言葉はやはり冗談の延長だ。なんだか一気に緊張が砕けたような気がする。

「じゃあ。——アレ、片付けてもいい?」

淡々と、まるで世間話の延長のように告げられた言葉にシエリーは我に返った。

見れば、ジエネヴァの目は真つすぐとシエリーの背後をとらえている。その瞳の色はいつもよりも暗く、温度がない。

ゾツとした。

あれは人を殺す事を知っている人のものだ。それに気づいてしまった。咄嗟に手が伸び、動こうとするジエネヴァの服の袖を掴む。

「何?」

短く返される声にいつもの柔らかさなんてない。——シエリーにソレが向けられていないのに、この手が、身体が震えて仕方ない。

無言のシエリーに何を思ったのだろう。ジエネヴァはふう、とため息を一つ。

「分かった。——『穏便』に、だろ?アンタと俺の認識にズレはあるんだらうけど、そこは許してよ。それから、ごめん。ちよつと頭に血

がのぼっていたみたい」

いつものジエネヴァだ。淡々と、無表情だけれど、それでもどこか柔らかで優しいそんなシエリーの友達が戻ってきた。袖を握る、まだ微かに震えるシエリーの手をジエネヴァがそつと包みこむ。身長は、シエリーの方がまだ若干高いのに手はジエネヴァの方が大きいらしい。とても温かだ。

ホツと思わず肩の力が抜ける。その時、手を包んでいたジエネヴァの手が解かれた。その手がそのまま、シエリーの肩を掴み軽く引き寄せられる。

「え」

トン、とジエネヴァの腕の中に軽く閉じ込められる。軽い拘束、抱擁。右手がシエリーの背中を支え、左手は腰と背中の間をそつと撫でて、宥めているようだ。

「……成程。殺意は『俺』にだけ、か。変なのを付けられていないし、ひとまず安心かな?」

「な、なな」

耳元で囁かれる静かな声に顔から火が出そうだ。このポンコツとなった口から出るのには意味のない音ばかり。

「うん?——ああ、ごめん」

シエリーの様子に気づいたジエネヴァは、即座に腕を解放する。驚き過ぎてこっちは腰が抜けそうなのに、何その余裕は。シエリーはムツと顔を顰める。

こてり、とジエネヴァの首が傾げられる。

「うん?——俺、発信機や盗聴器とか見つけられるんだ。これってちよつとした特技だよね」

「特技どころかビックリ人間よ、それ」

どこかズレた天然じみたジエネヴァにスン、とシエリーの感情が落ち着く。近づけばそういう類の機器は分かる、と言われ何を感じているのか少し気になってしまう。第六感、とか非科学的な分野の話なのかしら。

シエリーが思考を飛ばしていると、スポツと頭が重くなり、視界が

少し暗くなる。これって、フルフェイスのヘルメットなのでは？

「——デート、しようか。シエリー」

「は？」

突然の提案に返す声が低くなったのは仕方ないと思う。突然何よ。

ジエネヴァの視線がシエリーの背後に投げられる。ああ、そういえば居たわね。嫌な人が。衝撃のあまりその存在を一瞬忘れていた。

多分、ジエネヴァはこのままシエリーを一人にしたくないのだろう。かといって、元凶たる人間の抹消を止められてしまって。それが故の苦肉の策とか？ いやでも、この人って案外愉快犯的な思考もしているのよね……。まあ悪意度は悪戯小僧ぐらいの他愛なさだけど。

悩んでいても仕方ない。一人になりたくないのはシエリーも同じだ。

「……いいわよ」

「ん。じゃあ後ろ乗って」

「え、ええ」

ジエネヴァの後ろに跨りながらシエリーはふと思いつた。でーと。デート、と言ったわよね？ ジエネヴァは。——私、初めてなんだけれど。デート。

「もう少ししっかりと掴まらないと落ちるよ、シエリー」

「きやつ」

ぼんやりしていた所に両腕をジエネヴァに掴まれ、そのまま彼の腹の前に手をまわすように誘導される。恐る恐る彼の服の裾を掴んでいたのがいけなかったようだ。

結果、思い切りジエネヴァの背中に顔を突っ込む事になり、二人の距離はゼロとなる。ピタリとくっついた背の思わぬ頼もしさに、シエリーはもうしばらく頬の熱が引かない事を悟った。

バイクは軽快にスピードを増し、あつという間にシエリーのストーリーを置いていく。

※※

休憩、と隣町の小さな喫茶店に入ったジエネヴァにシエリーは身構えた。根掘り葉掘り聞かれる事を覚悟して。

だというのに。

「ね、どこ行きたい？まだ時間一杯あるし、割と何処でも行けるよ？」
「……………」

言葉を失うとはこの事だと思う。

軽い調子で尋ねてくるジエネヴァは邪気のない様子だ。若干顔色は悪いかもしれない。白というより青白い。それでもいつも通りのままなのは、ジエネヴァの気遣いなのかかもしれない。遠慮しては逆にジエネヴァに悪いだろう。この場合。

ふと、姉の言葉が脳裏を掠める。

素敵な、恋。それは無理かもしれないけれど、ジエネヴァとなら。目の前のシエリーの優しい友ならばその真似事ぐらいなら出来るだろう。彼も許してくれるだろうし、何よりこれが最初で最後かもしれない。

なんの思惑もなく、シエリーの我儘をきいてくれる、なんて。

デートの定番と言えば…………。

「……………ゆうえんち」

「了解。そういえば、遊園地行った事あるの？」

ぽつり、と零れたシエリーの呟きをジエネヴァは拾ってくれた。

「ないわね…………」

改めて考えれば、遊園地で遊ぶなんて子どもらしい幼少期を過ごした覚えはない。ずっと両親のあとを追い続ける半生だった。

「俺も多分ない、かな？」

「なんでそこで自信をなくすのよ？——記憶に自信をなくすには若すぎるとはならない？」

「——だよね」

ジエネヴァの語尾に疑問符が浮かぶ。それに揶揄いを含めてツツ

コミを入れれば、肩をすくめて軽い同意が返ってきた。

「本当に子どもの頃。——憧れたわ。優しい両親に、大好きな姉と一緒に遊園地に連れて行ってもらう。そんな幸福の記憶を」

随分懐かしい記憶。もうその頃の夢見る少女ではなくなっってしまったけれど。

「……本当に俺と、でいいの？他に相応しい人、いるんじゃない？」

ほら、あのお人よしのお姉さんとかさ。注文したコーヒーを飲みながら問われる。自分の前に置かれた紅茶のカップに視線を落とす。茶色の水面にはいつも通りのシエリーが映っていた。

でも相応しい人、ね。思わずくすり、と笑みが零れる。ああ、彼のこというところが嫌いになれないのだ。いくら先程みたいな怖い面を見てもなお。

「あら？てつきり私、楽しませてくれると思ったのに。もう降参してしまうの？——デートに誘ってくれたんだもの。もう少し、自分に自信を持ってもいいんじゃない？」

だって、私貴方の誘いに承諾したのよ？それで後悔すると思う？見くびらないで欲しいわ。

「！」

「なーんて、ね。さ、もう少ししたら行きましようか」

「うん。——ねえ、シエリー」

流星に気取り過ぎた台詞だ、シエリーは恥ずかしさを誤魔化すように手に持ったカップを傾ける。

頷いたジエネヴァは珍しく頬を緩めた様子で。

「アンタ、かっこいい女だね」

「ごほっ」

人が飲んでいるのに爆弾をぶち込む姿勢は辞めてほしい。シエリーは紅茶をむせながら思ったのだった。

※

着いた先はトロピカルランド、という遊園地だった。なんでも東都で最近出来たばかりの遊園地で、中々人気が高い場所らしい。

中世ヨーロッパの街並みを再現したような、絵本の中のファンタジー世界をそのまま具現化したような建物が立ち並ぶ。建物の壁の色合いが柔らかなカラフルさがあつて可愛らしい。やつぱりここは子ども達の夢を再現した国、なのだろう。

チケットをとつて、入場した頃にはもう午前九時を過ぎていた。それでも運のいい方なのだろう。目の前の行列にシェリーは思った。

人々の賑わいに、浮かれた活気に、そして気の抜けるような温かなやり取りにシェリーは別世界に迷い込んだような感覚を味わう。あまりに普段との差がありすぎたのだ。

隣に居るジェネヴァはどうなのだろうか？視線をむければ、眩しそうに、遠い場所を眺めるようにぼんやりした様子だった。

それも瞬きの間だけの話だった。

「シェリー。行こうか」

「え」

するり、となんの躊躇いもなく、右手に彼の左手が絡まる。ぎゅつと柔らかな力で握られた手は心地よい温もりだけを伝えてきた。

「まずは定番から行こうか。——ジェットコースターとかどう？」

「え、ええ。でも、ジェネヴァ。手……」

「それよりも、先に——」

ジェネヴァからの提案なんて頭に入っていない。彼の温もりが強く感じる右手に集中しすぎて、訳が分からなくなりそうさ。

グツと軽く手を引かれ、方向転換がされる。

「やば……あの髪型、間違いない。探偵君達じゃん。——恨むぜ、かみさま」

「ちよつと、しんいちー!! おそいわよー!」

「だからわりーって言うてんだろ」

ぼそつと呟かれた言葉はこの耳に届く前に後ろから聞こえるカッパルの騒ぎ声に消される。何?とジェネヴァに視線を投げれば、返っ

てくるのは曖昧な領きだ。

「いや、うん。まず必要な道具あるんだよ。こういう場所って」

「は?」

「作法だよ作法。いや様式美ってやつ?」

「?」

ジェネヴァの言葉は要領が得ないものだった。珍しい。彼は結構はつきり言うタイプだというのに。

手を引かれて着いた先は遊園地内のショップ。グッズとか売っている、お土産屋さん、と言えはいいのだろうか。

カラフルな品物を物色するジェネヴァは実に手際よく選んでいく。でも、そのセレクトつてもしや……。

思い浮かんだ可能性に思わずじとり、と半目になる。

「ちよつと」

「うん?」

「それ、正気なの?」

「至って真面目だけど?」

思わず冗談でしょ?という響きで確認をとれば返ってきたのはまさかの領き。つまり肯定だ。

彼の持つショップのかごの中にはこのトロピカルランドのキャラを彩ったサングラス、カチューシャ。それぞれ二点ずつ。つまり、私と彼でお揃いって奴をやるらしい。お互いキャラじゃないでしょうに。

分かっていないなあ、シエリー。呆れたようにわざとらしくジェネヴァは肩をすくめる。イラつとする。

「こういう時にしか出来ないからやる価値があるんじゃないか」

「はあ?」

「インパクトがあつて思い出すのに苦労しなさそうだろ?」

初デート記念に、さ。

悪気なんて一切ないジェネヴァの言葉にぐぬ、と言い返す言葉が詰まる。

「ズルい。ここでそれを持ち出すなんて卑怯よ」

まるで、ずっと覚えていたい。そう言われているように聞こえてしまふ。

でも仕方ない。今日一日はそうする、と決めたのはシェリーもだ。「……仕方ないわね。今日だけよ？」

「ありがとう」

それに、ジェネヴァの容姿は良くも悪くも人目を惹きつける。浮かれた格好で、多少まぎれるならば、仕方ないと思おう。まあ、シェリーも大概だという自覚もある訳で。

※

サングラスとカチューシャを付けて、色々と遊ぶのは楽しかった。ここでは黒の組織のシェリー、ではなくただの宮野志保になれたように思えて。それに隣にいる彼も組織のコードネーム、ジェネヴァではなくただの少年でいてくれた気がした。

意外とシェリーがジェットコースター等の絶叫系が平気なこと。

ジェネヴァが謎のプロ視点でお化け屋敷の脅かし方に点数をつけていたり。

二人で見たパレードの光景の楽しいこと。

お昼に共に食べたこの目玉のプレート料理のポリウムに驚いたり。

トロピカルランドの中心の城の中から見たこの夢の国の様子がまさに光の世界そのものに見えたこと。

他にも色々な発見があった。姉の言っていた、恋の美しさも多分こんな日々の中で見える美しさなのだろう。

でも。夢はいつか覚めなくてはいけない。サングラスとカチューシャが外される。

さあ帰ろう、と今日ほとんど繋がっていた右手が解かれた。あ、と間抜けな声がこの口から零れる。

「シェリー？」

「——皮肉なものね。私、今日だけで沢山の夢を叶えた気になっていただけ、いざ覚めるとなると惜しくなる。だなんて」

辺りはもう夕暮れに近い。逆光で輪郭が危ういジエネヴァについて、本音が零れた。まだ、夢の中で居られる気がした。この黄昏時の曖昧さならば、許されるのではないかと。

「……大丈夫。夢は覚める。けどさ、人間って奴は夢を現実に変えてしまいうる奴なんだぜ？」

「！」

それは。貴方が変えてくれるのだろうか。ジエネヴァがシエリーの抱く淡い夢を。ともに。

「ま、次はその夢を現実に変えられる凄惨な奴がアンタの夢を叶えてくれるさ」

「ッ、貴方が！」

咄嗟に声が、言葉がついて出る。そんな、他人事みたいに言わないで。

「次も貴方がいいわ。あなた、じゃないといみがないのよ」

ああ、情けない。次第に震えてしまう声に、もっと涙があふれてしまいそう。おかしいわ、そんなに涙脆い訳ではないのに。感情がここまで昂ぶると悲しくなくても涙が出るなんて初めて知った。

「シエリー？」

何よ、そんな意外そうな顔をしちゃって。首を傾げるジエネヴァに更に感情が昂ぶる。理解してもらえない悲しさと、突き放された怒りで、喉から出る言葉が止められない。

「だって、あなたじゃない。今日いつしよにたのしんだのは。そうでしょう？——分かりなさいよッ」

手を伸ばして目の前のジエネヴァの胸を握りこぶしで叩く。ドン、とシエリーの力いっぱい叩いても揺るがない。そうだ、意外と鍛えているんだ彼は。朝、やむを得ず腰に抱き着いた時に知った事実。

「——怖くないの？」

ぼつり。迷子みたいな、そんな声で問われた。どんな顔をしていたかはシエリーは知らない。俯いていて、彼の顔を見られなかったか

ら。

けれど。

「今更、よ。そんなの」

そう。確かにジエネヴァの怖い一面は怖い。けれど、シエリーは知ってしまった。彼に人の心がある事を。人並み以上の優しさと、暴力を留まる事が出来る理性を。

それにシエリーと同じような孤独を知っている、という事も。

だから、怖いというよりはほっておけない、というのが正しい。

「大体、怖いなら朝の時点できっと逃げていようよ」

「そっか」

シエリーがそうぼやけば、ホッと安堵したような眩きが返ってくる。

「じゃあ、精進する。次、アンタとデートする時今日以上の思い出になるように」

「そうして頂戴」

※

帰り道、行きと同じようにジエネヴァの後ろに跨り、バイクで東都を疾走する。

「いいかもね」

「何が」

ぼそつと呟いたシエリーの眩きはやはりジエネヴァに拾われる。この暴風の中の地獄耳に感心するやら、いつそ呆れるやら。

「バイクの免許よ。このバイク、ハーレーでしよう?」

ハーレーダビッドソン。かの有名なバイクメーカーだ。このバイクはツーリングに適した型番らしい。

「らしいね。——免許取るの?シエリー」

「ええ。そしたら後ろに乗せてもいいわよ?ジエネヴァ」

「ワーカッコイイナー」

「なんで片言なのよ、ちよつと」

投げやりな片言に抱きしめている腕の力を強める。

「やめてほんと勘弁して。おれころされる」

「だれが殺すのよ。だれが」

急にめそめそしだしたジエネヴァに思わず呆れる。これくらいなんてことないでしょうに。そも、組織の中でも腕利きの部類だろうに、ジエネヴァは。

「……シエリーガチ勢って奴がいるんだよ、まじで」

「はあ？」

がちぜい？なにそれ。

後日、シエリーの住居が引越しになったりして、それをジエネヴァが手伝ったりと忙しい日々は続いていった。過保護ね、なんて思わずこぼせば、足りないくらいだよとの言葉が返ってきて笑ってしまった。

泣き言は全て終えてから言うものだ

季節は夏から秋に移り変わり、けれど夏の名残の残暑が変わらぬ厳しさをみせている。窓の外の景色はそれに相応しい、日差しの強さだ。心なしか、道行く通行人達も暑そうだ。

ここは東都のとある場所にある喫茶店。シェリーの務める、組織の会社の近くにある年季の入った穴場的な場所なのだ。店内は年季相応の使い込まれた飴色のテーブルとイスに、骨董品にも等しいレコード再生のジャズなんて流れていて、時間の流れすらゆつたりと感じる。

窓際の奥のテーブル席で紅茶を啜りながら、外へ向けていた視線を向かい側へと向ける。この俺の死んだ目で見られても、ビクともせず逆になつこりと微笑まれる。

穏やかそうな、温和な笑みがよく似合う清楚系美人。あのライと恋人、とかある意味凄い事をしている人である宮野明美さんだ。

「――で、どうなの？ ジェネヴァ君」

ワクワクと好奇心を抑えきれない、邪気のない声で身を乗り出す。おいやめろ、こんな場面、ライに見られたら俺は殺される。多分良くて逮捕エンドだろう。怖い。

そもそもどうしてこうなったのか。思い出すのは十分前の自分の浅はかさだ。シェリーに会って癒された帰り道、とぼとぼと歩く明美さんの背中を見かけた。それではおつておけなく、仕方なく声をかけたらこうなった。ジェネヴァ君じゃない、ちよつとそこでお話しない？ と、まあいつかでみたような展開である。明美さんはあのライと付き合えるだけのコミュ力があるのだ。俺みたいな雑魚のコミュ力とは訳が違う。俺のコミュ力？ 百ある内の五ぐらいじゃね？

閑話休題。そろそろ現実に戻ろう。

「どうって……。何が？ お姉さん」

「隠さなくてもいいわよ。し、ごほん。シェリーの事についてよ」

すつとぼける俺に食い下がる明美さん。どうでもいいけれど、志保って言いそうになったな？ 明美さん。うーん、うっかりさん。とは

いえ……だ。

「——シエリー？」

何かあったつけ？

明美さんは楽しそうな笑みを更に深めた。

「ふふふ。——聞いたわよ？」

「何を？」

意味深に、端的に言葉を連ねる明美さんに俺は短く返す。知りませんね、と。

「あの子とデート、行ったのでしよう？」

筒抜けすぎイ!!

俺の動揺が出たのか、それともカップを弄ぶ手がピタリと止まったが故なのか。明美さんはにこにこ嬉しそうだ。それは自身の言葉の確信を得たからに違いない。——しまった、と舌打ちしたい気持ちで一杯になる。

「……………それはシエリーに直接聞いたの？」

苦々しい気持ちを吐き出すように、渋々口を開いた。流石にここで誤魔化すのは馬鹿らしい。隠すような疚しい事情なんてないし。

「いいえ？ただね、あの子の部屋に遊びに行った時見ちゃったのよね」
「……………」

段々、このにこにことした笑みが揶揄うようなにやにやしたものに見えてきた。俺は無言で明美さんに続きを促す。

明美さんは笑みを苦笑に変えて、

「ふふ、別に揶揄っているわけじゃないのよ？ただ、よかつたなあつて」

「ふーん？」

「それでね。あの子の部屋にある筈もない、遊園地のサングラスとかチューシヤがそつと机の上に置かれていたの。そのキャラクターものを見た時、ピン！と来たわ。——これはジェネヴァ君とのデートに違いない、って」

後は貴方にカマをかけたの、と得意げに推理を披露する。……まあ、凄い観察眼だとは思う。思うけれど——。

「なんでそこで俺？」

「というか、まだあのグッズを捨ててないのか。ちよつと、いや大分可愛いな。でもそれよりも。」

正直、俺の他にも候補はあるだろうと思う。年下かつ、見た目が異性扱いされにくい俺よりも色男はいるだろう。まあ、今のシエリーに手を出すロリコン野郎なんぞ俺は認めないけど。

明美さんは俺のそんな疑問を受けて目を瞬かせる。意外そうな顔で首を傾げた。

「あら？ふふ、意外と抜けているのね。だって、遊園地デートなんて可愛らしいことしてくれる人、この組織にいると思う？」

貴方以外に？明美さんは珍しい皮肉気な響きで挑発的に問う。そう言われてみると……。不意に原作第一話の兄貴とウオツカの姿が脳裏にチラついて吹き出しそうになる。あれは卑怯だろ……。まあアレ抜きで考えれば。

「——バーボン、とか？意外とスコッチとライ辺りなら付き合ってくれそう……」

シエリー限定で。俺としてはちよつと複雑な気持ちだ。

「そのバーボンさんとスコッチさんは知らないけれど。——大くんに関しては、ふふ。私とあの子と三人で、というのが楽しそうね」

嬉しそうに頬を緩める明美さんにマジかよ、とツツコミを入れそうになる。何その気まずいメンツ。シエリーが一方的にライに噛みついて明美さんを独占する光景しか浮かばないわ。

「あー！いっそ、ジエネヴァ君も一緒に来てダブルデートとかどう？」

「勘弁して……」

完全なる地獄絵図である。いや、明美さんとシエリーは眼福なんだけど、あの服装が黒で不審者スタイルが多めのライと一緒にとか、ちよつと。具体的には兄貴達とお出かけするぐらいの難易度だ。つまり難易度ルナティック。爆発四散とかしそう。

俺はその光景を想像してしまい、ぐったりと頭を抱える。俯いたこの耳に明美さんのくすくすと笑い声が届く。いいね、お姉さんは楽しんで。

「——随分、楽しそうだな？」

見事なフラグ回収。——俺死んだわ。

突如降って湧いた第三者の声は艶のあるバリトンボイス。つまり、だ。

「げ」

「あら、大くん」

黒のニット帽に黒い服装。この暑さで多少軽装となろうとも、その貫くスタイル素直に凄いと思う。ジンの兄貴とほんといい勝負。

切れ長の緑の瞳が鋭く俺のみを貫く。し、視線が痛い。一気に空気が重くなったのに、明美さんはけろつとライと会えたことを喜んでいった。流石だ。

「げ、とはご挨拶だな。ジエネヴァ。——それで？人の女と逢瀬を楽しんでいる理由をお聞かせ願いたいもんだが？」

「大くんったら、もう……。とりあえずこつちに座ったら？」

威圧感たっぷりはこちらを見下ろし、問う姿は組織の幹部の風格だ。こんなしようもないところで実感したくはない。

明美さんはそんなライにしかたないわね、と若干嬉しそうに自分の隣に手招く。ライは大人しくそれに従った。これで俺の対面にライと明美さんが座る圧迫面接の如き、図が出来上がった。一人でこの威圧感。勘弁してもらいたい。

「……………大人おとなげないでやんの」

「聞こえているが？」

「聞こえるように言ったんだよ、お兄さん。——少しはお姉さんを見習えば？余裕のない男は嫌われるぜ？」

「——ホォー？」

イラつとしたので、ささやかな反撃をした。聞こえるように言った呟きは当然ライに拾われ、煽られる。ジエネヴァ君は売られた喧嘩は買う主義である。煽られれば煽り返すのが礼儀、と言い返せば、緑の鋭い瞳は面白そうに瞬いた。ちなみにその瞳孔は開いている。普通

に怖い。何その愉悦スマイル。

「——大くん、ジエネヴァ君。喧嘩しないの。ね？」

「喧嘩はしていないさ。そうだろ、ジエネヴァ」

「そうだね。アンタがそう言うんならそうなんじゃない？」

明美さんの宥める声にライの視線の鋭さは和らいだ。はいはい、ご馳走様です惚気はもう結構です、とライの確認に頷く。仲良いのはいい事だと思う。

「というか、俺がお姉さんに何かする訳ないでしょ。——アンタが懸念するような事なんてそれこそ、この瞬間に地球が滅びるぐらいあり得ないよ」

「……接点がるでない組み合わせだからな。邪推するのは仕方ないじゃないか。——これでも心配しているんだ」

「大くん……」

俺の念押しにライは肩を竦めた。前半は俺に、そして後半は明美さんへと向けられる。そこに含まれる温度差が激し過ぎてこちらは風邪ひきそうだ。明美さんは感激したように瞳を潤ませる。普段、クールな恋人からの熱烈な嫉妬(〇)と心配に心打たれたのだろうか。……二人の空気が甘くて、耐性のない俺は砂糖吐きそうだ。

「はいはい、ご馳走様。——俺はもう行くよ。じゃあね」

「ふふ、また話を聞かせてね？」

そろそろ頃合いか。席を立った俺に明美さんは声をかける。その声に含まれる笑みに一切の打算はなく、仕方ないと肩を竦める。

でもまあ、これくらいのお返しは許されるだろう。

「さてね。それは幸運の女神様にでも聞かないと、だね。……それとお姉さんの嫉妬深い恋人の許可が下りてから、かな」

「なっ」

「まあー！」

抑^{からか}揄い半分、本音半分で当て擦りを言えば、ライは面白いぐらい声を失った。ふふん、凶星か、少しは心当たりがあるのだろう。そんなライの様子を明美さんは嬉しそうな声を上げてキラキラとした視線を向ける。

——これ以上は野暮というモノ。邪魔者は退散するが吉だ。馬に蹴られたくはない。

※※

先日回避したはずのフラグが追いかけてくる件について。なんて某掲示板のスレッドが脳裏を掠める。

「先日は世話になったな」

「……嫌味かな？」

いつもの訓練を終えて、汗をタオルで拭い顔を上げたら部屋の入り口にライが立っていた。よくこの部屋が分かったな？ここ、組織でも人の出入りが滅多にない穴場なのに。

開口一番、ライが冗談、舌皮肉染みた挨拶をよこす。つい、反射的に本音が零れてしまう。

「……フツ。これでも不安の芽は早めに摘んでおく性質でね」

「ああ、アンタの可愛い恋人か」

ライの言葉に俺は明美さんの姿を思い浮かべる。確かに彼女はこの組織の中ではオオカミの中に放り込まれた哀れな羊。救いの手がない分、とある宗教の迷える子羊よりも悲惨である。

“可愛い恋人”の可愛い、という部分にライの視線が厳しくなる。そ、そんなに睨むなよ……。

「後はそうだな、あのジンが珍しく面倒を見ている懐刀候補の実力を見ておきたい」

ライは挑発的な笑みを浮かべて、構えをとる。あの截拳道ジークンドーの構えだ。というか、待って。

「は？懐刀候補？何それ」

寝耳に水過ぎて耳が冷たいわ。なにそれ？

「違うのか？」

「違うけど」

多分、という言葉を喉に飲み込み、ライに死んだ目を向ける。はー、勘弁してくださいよ。兄貴の懐刀はウオツカで決まりでしょ。あの働きを俺に求められても過労死しか未来が見えないわ。絶対こき使われる。

そんな意外そうな顔されても困る。俺の慥然とした面持ちに、ライはふむ、と納得の声を上げた。

「些細な行き違い、はどうでもいいな。最年少幹部の実力としても興味がある。それに、言っただろう？」

「何？」

全然些細じゃない上にどうでもよくない。俺のツツコミはライのギラギラとした戦意に吞まれ消える。え、まさか本気で？

「不安の芽は摘んでおく、と」

「羊を守る牧羊犬は大変、だねッ」

俺の暗喩染みた台詞の途中で殴りかかってきた。上段、顔を狙うものだ。それを背を逸らしてよける。おかげで、声が上がってしまった。おい、台詞は遮るなよ。

言葉は無用。拳で語ろうぜ、と言わんばかりにライの攻撃は続く。ボディを狙う拳、掌で受け流せば衝撃で手が痺れる。くっそ馬鹿力め。

というか。

「アンタ、脳筋も大概なんじゃない？」

「ふ、余裕だな。ならば、これはどうだッ」

「ッ!」

ひよいひよい避けながら、悔し紛れの言葉を吐き出せば返ってくるのは鋭い蹴りの一撃。思わぬ速さとそのリーチの長さに、腹にその重い一撃を貰う。咄嗟に後ろに跳んで衝撃を殺したものの、息が零れ、上手く空気を吸い損ねる。これは俺が不利だ。リーチの差、純粋な力の差、条件の差、それにライは俺が手加減をして相手出来る奴じゃない

い。けれど、俺は手加減をしなければならぬ。それは絶対だ。

「……らしくないな。どうした、お前の実力はそんなものじゃないだろう?」

「……………」

声は冷たくはあるものの、その奥底に見え隠れするのはこちらを心配するものだ。恐らく防戦一方の俺に違和感を抱いているのだろう。確かに本来のジエネヴァ君の戦闘スタイルはこうじゃない。

だけど。ああ、まったく、軽く言ってくれる。今結構腹痛いんだぞ。

「……アンタ程の実力者相手だと、生憎と手加減が出来なくてね」「する必要が?」

ないだろ、と挑発してくるライに俺は内心苦笑する。まったく、慣れない事はお互いするもんじゃないな。

「あるとも。じゃないと、死んじやうだろ?」

「ほお?それはどちらが、だ?」

見下ろしてくる鋭い緑の瞳は冷たい。

「そんなの当然——」

あんまり、この顔は見たもんじゃないんだけどな。以前、鏡で練習した暗示なしのジエネヴァ君の笑顔を披露する。唇が吊り上がるのを感じる。瞳に笑みは映らず、それは嘲笑、見下した笑みに違いなかった。

「アンタに決まっているでしょ?」

止めに鼻で軽く嗤ってやる。

空気がピシリ、と凍ったような錯覚。ライは無言だが、肌を感じるピリピリとした殺気から察するに苛立ったようだ。それもそうだろう。誰がこんな一見すると美少女にも見える少年に負かされる、というのか。他人事に言ってしまうえば、俺のこの身体は白い上に細い。つまりはモヤシだ。見た目はな、見た目は。

「……………ホォー？」

たっぷり三十秒の沈黙の後の疑問符。ライの口から出たそれは、言語化するどぶざけてんのか？てめー、である。…………控えめに言っても怒ってらっしやる。普通に怖い。

なーんで俺ってこう死亡フラグみたいなの地雷を進んで踏んじやうかね？まあこの組織って殺伐とした雰囲気標準装備だから仕方ないね。え？俺が喧嘩っ早いのが悪い？いやいやそんな。

と、その時携帯が着信を知らせて震える。お、珍しくグッドタイミングなのでは？

トレーニングウェアのズボンから携帯を取り出し、ライに一時休戦の意で震える携帯を見せて片手を挙げる。ライは呆れたようにため息を吐いて頷いた。

俺もため息吐きたいわ、と携帯の通話ボタンを押す。勿論、音量は少なくして、音漏れを防いだ。

「もしもし？」

『…………任務だ。お前にコレを任せるのは少しばかり癪だが』

耳元から聞こえるジンの声は珍しい事に非常に苦々しいものだ。苦虫を噛み潰したのかな、なんてぶざけた日には俺の命日だかららしいけど。

「——内容は？」

『何、心配するな。お前にはいつもよりも少しばかり暴れてもらうだけだ』

「……………」

兄貴のその心配するな、的な発言俺にはフラグにしか聞こえないんだよなア。今絶賛その死亡フラグの上で地雷上のタップダンスをしているだけに余計にそう思える。

そんな俺の葛藤の沈黙をジンの兄貴がどう捉えたのか。

電話口から微かなため息。

『お前はいつも通りの冴えわたる刃だ。血に濡れた、なんて今更嘆くなよ？——少しは自分の磨き上げたソイツを信じてやってもいいん

じゃねえか』

は？

電話口から聞こえる声は穏やかだった。物騒な言葉さえ気にしな
ければ、少しは自分の実力を信じろという励ましだったのでは？え？
『……チツ、忘れる。血に溺れて錆びつかれても面倒だ。——後は、そ
うだな。同行者に気をつけろ。以前の忠告を忘れるなよ』

俺が衝撃で固まったのをいい事に勝手に話を変え、まるで家を空け
る母親みたいな心配っぷりだった。これがジンの兄貴なのか、と俺が
混乱の極致に至ろうとした時。

『それからもしも、しくじったその時は——』

「？ その時は？」

ジンの声が急に低地を這うような低さになった。それに疑問を持
ち、俺は首を傾げる。混乱の処理がまだ落ち着いていないのだ。

『この俺が始末してやるよ。——光栄に思えよ？』

あつ、ジンの兄貴で合っていましたわ。

ゾツとするような殺気を隠さないこの脅し。間違いない。ちなみ
に俺はこんな脅しで喜べるマゾではないので、苦々しい気持ちで唇が
歪む。

「……………了解」

なんとか絞り出した了承を聞くか聞かないかで通話は無情に切ら
れる。はー、この無表情な鉄仮面じゃなくてもこんなの死んだ目にな
るしかないですわ。でもそうは言っていられないよな、と携帯を閉じ
る。

「ライ」

ライの方を見るとその手元に携帯が握られていた。画面を眺め、珍
しくその表情が苦々しく歪んでいた。いつも余裕の無表情なものにな
る。

「——とりあえず一時休戦、でいい？」

「ああ。その方がありがたい」

そう言いながらライは携帯画面をこちらに見せてくる。

そこには——。

「成程。……次はよろしく？」

「ああ。はあー……俺が一人で馬鹿みたいじゃないか……」

どうやら次の任務はライと二人でこなさないといけないらしい。俺がよろしく、と握手の手を差し出す。それを見てライは頷いた後に盛大にため息を吐いた。その後の小さなボヤキは親切心で聞かなかったことにしてあげた。うん、まあ。明美さんの為に、どうか彼女の周りの不穏分子を見逃せなかっただけの話なんだよね。仕方ない、腹の一撃は許すか。うん。

※※

任務の為に空港へと向かう。アレからざっくりと準備をして、すぐにライの運転する車に乗った。運転するのは黒のシボレーC/Kだ。ただでさえライの隣に座るとか苦行以外の何物でもないのに、先程のアレだ。当然、車中の空気は最悪である。

手持無沙汰にも過ぎるのもあって、以前の懸念事項がふと頭の中をよぎった。ライのスパイ疑惑。ジンの兄貴の言っていた、〃以前の忠告〃とはそのことなのだろう。

ライにとってみれば余計なお世話なんだろうけれど、それでもお節介は焼ける内にしといた方がいい。それにあのお人好しのお姉さんの涙は出来れば見たくないし。

「……アンタさ」

「なんだ？」

口から零れた呼びかけは思い付きの突発さで、頭の中で次の言葉に困る。簡潔な返しは鋭い睨みがついていたからなおさらだ。考えていた内容は消し飛んだも当然だ。さて、どうしようか。

「ジンに嫌われているって本当？」

数秒の空白で考えを絞り出す事を諦め、直球ストレートまではいかずとも近い言葉で聞き出すことにした。ライは果たして勘づいてい

るのだろうか？組織の幹部筆頭であるジンに嗅ぎつかれている、という事実に。

ライはこちらの言葉に目を瞬かせ、逡巡する。ハンドルを握っているからか、視線は目の前、真つすぐを見据えたままだ。

「藪から棒だな。——ふむ。言われてみればそうかもしれん」

凄え、この人。俺は横にいる人を改めて尊敬した。俺だったらあんな殺意割増しの兄貴、早々に心が折れるね。

俺の微妙な尊敬の眼差しに、ライは頭をゆるく横に振る。

「だが、それはあくまで私情に過ぎない。アイツだつて馬鹿じゃないさ。流石に私情を仕事に持ち込む程、愚かではないだろう」

まあ、それはそうかもしれないけれど。俺はライの言い分を聞きながら、内心ため息を吐いた。

兄貴はああ見えて仕事に一切の妥協を許さない人だ。それは他人だけではなく、自身も含まれる。それ故に、そんな子ども染みた真似はしないだろう、というのがライの言い分だ。けれど、それはとある前提込みの話である。

「でもさあ、ライ」

俺は世間話の延長線上、そう聞こえるような軽さで呼びかける。ライは視線だけで先を促した。

「——それ、NOCノックだつて思われていない前提でしょ？」

右手でノックの仕草をして比喻して伝えれば、ライの瞳孔が開く。ピリツと空気に電流が走ったかのような緊張感が満ちる。

——そう、とある前提。それは組織の敵であるか、否か。とてもシンプルで分かりやすいラインだ。ジンは組織の敵に情け容赦しない。憐憫の一片すら与えない徹底を見せるのだ。

「……………ほお？」

たつぷり間を空けての疑問符に俺は冷や汗を掻いた。コレはライにとって特大の地雷だ。けれど、それでも俺は敢えてその地雷を踏み抜くことに決めたのだ。じゃないと、忠告にならない。

「ああ、答えは聞かないよ。俺にとってはそんな事どうでもいいからね。——ただ、アンタは気をつけた方がいいよってだけの話」

「そうか。——大方、証拠も根拠もないただの勘だろう？でなければ、俺はここに居る訳がないからな」

あの男の行動力には恐れ入るよ、なんて的確な分析に俺は余計なお節介だったかなと若干の後悔を抱いた。自然と視線が下がり、足元を見る。

「しかし、尚更不思議な話だな」

「……………何が？」

隣から零れた呟きに短く返す。なんとなく、足元に視線を向けたまま耳を傾ける。

「君だよ。——君はこう言ったな、〃そんな事どうでもいい〃と。それが真実であれば、捨て置くのが正解だ。面倒事にしかならない上に旨味もないそんな与太話を態々本人に忠告する等と——」

そこで言葉を切ったライの視線がこちらに向けられる。強い視線に俺は俯いた顔を持ち上げた。

「随分とお人好しだな？」

ニヤツと口元だけが笑う。しかしその視線は依然として鋭いまま、俺を捕捉している。下手な真似をしたら、噛み殺されそうな程の殺意に近い威圧を感じる。……………これはこちらを試している、と踏んだ方がいいのか。クツソ怖いな。

俺は首を傾げる。

「……………深読みしても何も無いよっ」

「……………」

無言。それは肯定ではなく、否定。ライの瞳はこちらを向いてこないが、それでもこちらの言動を疑っているのは纏う威圧感で容易に知れる。だから怖いって。

ライはアクセルを踏みだし、加速していく。高速道路だからか、スイスイと他の車を追い抜いていく。……………ここで答えを誤ると逮捕エンドか、それともデッドエンドなのか。どちらにせよ、ロクなことになりはしなさそうだ。

「ただ、アンタの恋人さん。あの人を悲しませるのは避けたいな、と。ありふれた親切心だと思ってくれていいよ」

「親切心、ね」

ここで偽りを告げるのは悪手、そう踏んだからこそ俺は本音を話す。だといふのに、ライは意味深な笑みを浮かべた。不敵な笑み、といえば聞こえはいいが、要は威嚇用の笑みだろう。悪党に相応しい、堂々たる悪辣さだ。すごいこわい。一応この人正義の味方の所属なのに。

「悪党の親切とか、レアでしょ。だから頭の片隅にでも置いておいてよ」

「——なるほど。そう言う事にしてあげようか」

この声が震えていませんように、と願いつつ茶化した言葉はライの及第点に採点されたいらしい。ライにため息交じりに頷かれた。

「はいはい」

ライのため息を雑な頷きで流すと信じられない言葉が耳に入った。「……………」というか、君が明美とどういう関係なのか、が知りたいんだがな」

ぼそり、と俺の耳に届くかどうかぐらいの小さな独り言。

えっ。そつちなんです？

俺は驚きで言葉を失くす。え？いやでもまあ気持ちにはわかる。俺も一応ライ、というか「赤井秀一」から見れば立派な犯罪者の一員なわけだし。こんななりをしているけど、男だし。

しかしなあ。明美さんとの関係、ね。うーん。俺としては友達のお姉さん、というのが一番シンプルな例えなんだけどそれはそれでライの地雷を踏みそうだ。かと言って、お姉さん自身を俺の友達、と例えるのもどうかと思うし。

結局ライの疑問に答えることもなく、何事もなく目的の空港まで到着することになった。マジでどうするんだこれ。

※

場所は飛んでアメリカ。USAならびにアメリカ合衆国。隣に突っ立っている黒い不審者スタイルじゃなかった、ライの本拠地たる場所だ。やっべ、今回死亡フラグと逮捕フラグの乱立過ぎなのでは？

飛行機やら電車やら乗り継いでようやくと今回の任務の場所に着いた。ネバダ州の南部にある有名な都市。世界きつての不夜城と名高いカジノ都市、ラスベガスだ。百万ドルの夜景だとかは有名な話だ。並び立つ建物の絢爛なことか。まだ昼間だからまだ大人しいものだが、それでも観光客の騒ぎは多い。酔っ払いで補導されるのはまだ可愛いもので、よく分からない事を喚き散らす者も居た。

とはいえ、それはこの都市のごく一面だ。騒がしくも、賑やかな活気あふれる都市なのだ。

「はぐれるなよ」

「言われなくても」

ライと並んで歩く。今回は変な変装はなしだから俺も普段通りだ。ただ、顔を隠すために、黒のマリンキャップを深く被る。服装はいつもよりもラフなものだ。シンプルなTシャツに黒のスキニーにスニーカーだ。

「今夜の任務の打ち合わせはホテルに着いてからだな」

「了解。……というか、今回の任務の費用考えると結構怖いね」

奴の長いコンパスに合わせ、早歩きで着いていく。ホテル、ね。この辺馬鹿みたいに高いじゃないか。

「君は面白い事を言うな。別に組織の経費で落ちるんだから気にしなくてもいいだろ」

「けいひ」

ライの口から結構衝撃的な言葉が飛び出たので俺の脳が処理落ちする。

「？」

「いやなんでもない。うん、そうだね。組織もそういう運営があつて

こそだものね」

ただ、少々字面が衝撃的だったただけだ。まあ、考えてみれば当たり前なんだけど。こう、腑に落ちないというか。

ホテルはまさかのツインだった。あのベッドが二つの一部屋の奴だ。ライ曰く、空いていなかった、と。まあ世界有数の観光地かつ、任務が入ったのは昨日今日の勢いだ。そりゃあ部屋なんかとれないだろう。むしろツインでもとれただけ僥倖だ。

早めにホテルに入り、明日の任務へと色々と準備をすることにした。時刻は午後一時。ここに来る前に昼は摘まんでいるので、夜はルームサービスでいいだろうという事になった。

「まずは任務の概要を確認するか」

「ライ、もしかしなくても俺の事子ども扱いしてる？」

そんな一から十まで確認する必要はないんだが。

「君の年齢だと充分子どもだと思っただがね。まあ、それは関係ない。俺と君とで齟齬があったら大変だろう？ 何せ、急に決まった事だ。予想できる不備は出来るだけなくしておいた方がいい」

並んだベッドに荷物を広げながらの会話。俺は自分のベッドに腰かけ、ライは近くの椅子を引つ張り出して座った。

ライの淡々とした正論に俺は頷いた。

「確かに。——まずは概要、だっけ。違法カジノ、その地下にて開催されているという裏ファイト。その優勝賞品が少しばかりまずいものだったんだよね」

裏ファイト、とは文字通り人間を闘わせ、その勝敗にて賭け事をする。そして表側との違いは緩い規制にほぼ反則が存在しないという倫理観の欠如。時として人の死さえ出るといって血生臭さ。間違っても軽い気持ちで参加してはいけない。

「優勝賞品は純金で出来た像だ。その価値は時価十億はくだらないという。だが、問題はそこではない。なんでも、その像にはとある仕掛けがあるらしい。情報の入っているマイクロチップ。一センチにも満たないソイツの中には、組織の創立メンバーリストが入っているという話だ」

「……それ、本当なの？」

それは組織としては絶対に外に出したくない代物だろう。

ライは話している間も荷物から出したノートパソコンを起動させ、カタカタとキーボードに指を走らせる。その瞳は画面の文字を追っていた。

俺も話を聞きながら準備を進める。コレとアレが必要で、後方が一の為の用意をしておこう。それから銃は念の為に二丁ぐらいがいいか。

「さあ？ただ、その像の前の所有者は組織の古いパトロンだ」

「——うわあ」

ライの世間話の延長みたいな調子で告げられた情報に俺は頭を抱えたくなつた。一気にそのヤバイ情報の信憑性が増したんだが。

俺は呻き似た声を上げ嘆く。それをライは一瞥し、ため息を吐いた。

「しかし……まあ。そのマイクロチップの中は九割八分、偽物だろうな」

「へえ。なんでまた」

ライの心底面倒臭そうな呟きに意外な気持ちで聞き返す。ライは肩を竦めた。

「何故、か。組織のボスは既に様々な憶測が囁かれている。——君も組織に居るんだ。一つくらいは噂で聞いたことがあるんじゃないか？既にこの世に居ないような死人の名まで挙がるような話だ。そこに一つ候補が増える、と言われてもな」

それは嘲るような、少し掠れた声だった。画面を見つめるライの瞳は忌々しい、と言わんばかりに睨んでいた。まあ、ライはFBIの潜入捜査官だ。組織の中に潜入してもなお、雲を掴むような得体のしれなさな苦い思いもしているのだろう。

それにしても、だ。

「こうして聞いていると組織って……なんか」

「？」

思いついた表現がそのまま口を出ていいのか、俺は暫し逡巡する。

それをライは怪訝そうに首を傾げ、視線で続きを促す。うーん、まあいいか。

「噂好きの集まりみたい、だなんて」

「ブハッ、クツクツク。成程、確かにその通りだな」

俺のボヤキに吹き出したライはそのまま喉を鳴らすように笑う。そんなに涙が出るくらいに面白いか？これ。……いや確かに兄貴達が「噂好き」ぐらいの可愛らしさに例えられたら爆笑もんだわ確かに。

「笑うなよ……」

「ククツ、悪い悪い」

流石に据わりが悪くなった俺がライの肩を小突けば、大して悪びれてない声で愉快そうに返された。おう反省しろ。

ライはわざとらしくごほん、と空咳を一つ。

「話を戻そう。任務の決行は明日。何せ今回は準備期間がほぼないに等しいときたもんだ。組織は余程我々に死んでほしいと見える」

皮肉気な笑みがライの仏頂面に浮かぶ。その笑みのまま、ライは続けた。

「こんな作戦と言えないモノをよく実行しようと思えるな、君も。まあ、俺も人の事なぞ言えないが」

「仕事だから仕方ないさ」

ライの辛辣な皮肉に俺は肩を竦めるしかない。それに俺はこんなところで死ぬつもりなんて欠片もない。

「仕事だから、ね。まあいい。それよりも、この作戦の要は――」

「当然、俺が適任でしょ」

「分かっているのか？」

ライの言葉を遮り、主張すれば返ってくるのは鋭い睨みだ。それに当然、と頷いてやる。分かっているだろう、とライの盛大なため息がこの静かな一室に存外大きく響く。失礼な。

「大丈夫。アンタはしくじるような奴じゃない。こう見えても、俺は時間稼ぎは得意な方なんだ」

「しかし……」

俺が軽い調子で言ってもなお、ライは渋る。ライの中のジエネヴァ君は先の一件で、実力がイマイチ信用出来ないらしい。まあ気持ち分かる。

「言ったでしょ。——俺は意外と腕つぶしが強い方なんだ。〃手加減〃しなくていいって言うなら尚更ね」

「……存外、君は生意気なんだな」
「!?」

俺の自信たっぷりに見せかけた発言にライは複雑そうな顔になった。ライの手が俺の頭をぐしゃぐしゃと乱雑に撫でまわす。否、力が強くて一種の攻撃かと疑うところだった。

というか、ジエネヴァ君の生意気さがなければ組織で生き残れませんって。ある程度の根性がないと組織の過酷な教育()は耐えられない。あと可愛げがないって大切だ。

ライの手が頭から離れる。あまりの事に目を回す俺が見たのはライの複雑そうに歪んだ顔だ。先程よりも感情が顕著だった。瞳に一瞬揺れた感情はなんだったのか。不快、憐憫、憎悪。そのどれもであり、その実どれでもないような曖昧さ。

だがそれも泡沫のような一瞬だった。すぐにいつものライに、冷めた顔に戻る。

「分かった、そこまで言うなら任せよう。君の言う、〃手加減〃とやらない本来の実力にも興味がある事だしな」

「……………そう期待される程ではないと思うんだけど」

ライの試すような言葉に俺は小さくぼやく。

「なんだ？」

「いや、なんでもないよ」

幸いにも俺のぼやきはライの耳に届くことはなかったらしい。しれつとすつとぼけておく。

それにしても、だ。

「ジエネヴァ。これが問題の会場の見取り図だ。警備の交代体制も見せておく」

ライが俺にノートパソコンの画面を見せるように向ける。そこに

は、立体的に再現されたカジノ施設、その内部の詳細と警備員の配置情報に交代時間と予想される警備ルートと分かりやすく図解されていた。おお、随分ハイテクだ。よし、ある程度覚えた。

「成程。ま、アンタがしくじらなければ俺には必要のない情報なんだけど」

「言ってる」

今回の作戦は至ってシンプル。俺が大会で会場の注目を集める。その際にライがメインコンピューターにハッキングして組織の欲しい情報を抜き取る。出来れば俺が優勝して優勝賞品である純金の像も頂いてしまおう。出来ればとか言っているが、これは確定だろう。それぐらいの欲張りな話だ。どこの我儘幼女なのか、とあれもこれも欲しがるとか組織つて馬鹿なんじゃないか。つまり、俺はこの大会で優勝しないと人生のお払い箱でお陀仏つて訳だ。具体的は兄貴にズドン、とされてお終いである。つらい。

※※

ざわざわと観客のさわめきが薄暗い観客席から聞こえる。観客席は一階と二階に分けられ、二階部分はVIP対応となっているようだ。中央に配置されたプロレスやボクシングで使うようなロープが張ってあるリングはこれからの血を待ちわびるような真白だ。スポットライトで照らされ、その白が余計際立って見える。

そのリングの様相は異様、の一言に尽きる。まるで猛獣を閉じ込める檻のように頑丈な金網が四方を囲み、その上限は天井と繋がり、参加者をリングから意地でも出さないぐらいの気迫を感じる。審判は場外である、その金網の外に居ることから試合の壮絶さが予想できそうだ。一階の観客席だって普通のプロレスらのソレよりも隔離する

ような空いた距離だ。

参加者への身体検査は驚くほどおざなりだった。滅茶苦茶怪しいこの格好だっというのにぎっくりと拳銃などの銃火器を調べるぐら이다。勿論、隠し持った拳銃二丁は無事である。え？いいのか？

俺の番が来たようだ。『ジエネヴァ』の名のままに登録したので分かりやすくいいと思う。偽名を使うならどれでもいいでしょ、と作戦前にライに言えば分かりやすく頭を抱えたのを思い出す。そんなにダメかねこれ。

アナウンスに従い、会場へと足を踏み出す。

花道、と言われるリングまでの道を歩き、観客からの歓声を身に受ける。けれど、その声に明るさはない。これからの惨劇を待ちわびる、どこか仄暗さを感じさせる興奮の声だ。胸糞悪い話だという感想しかない。

耳に付けた小型の無線機は、ライと繋がっている。先の任務でもつけた一見イヤークフに見えるオシヤレさんな無線だ。そんな無線機から時折ライの仕事の進捗を知らせてくれるわけだ。それが終わるまでは俺は派手に暴れなければならない。この会場、全ての視線を集める勢いで。

リングにたどり着いて、ロープを跳躍して飛び越える。スタツと姿勢よく着地すれば、既に挑戦者を待っていた対戦者が待ち構えていた。がちやり、と背後から鍵の閉まる音も聞こえる。周りを囲う金網の扉を南京錠か何かで施錠したのだろう。命乞いをする敗北者が逃げないように。正に文字通りのデスマッチ、用意周到な事だと呆れてしまう。

「おいおい。こんなひよろっこいのが対戦相手?! 冗談だろう! こんなの踏みつぶしてすぐ終わっちゃう。なア? お前も今だったら命乞いを聞いてやってもいいんだぜ?」

身の丈は二メートルは超える長身。そのうえその体は筋肉が張り詰め、今にもはち切れそうな具合だ。まるで生きる仁王像。その様相を呈した対戦相手がなにやら喚いている。

今の俺の格好は膝下まで長い黒のロープを纏い、素顔もフードで隠

した不審者感満載なものだ。イメージとしては黒魔法使い、もしくは闇魔術師ぐらいの怪しさだ。ローブの下は隠し武器が少々あるぐらいだ。よくこんな怪しい奴を前にそんな挑発が出来るな？

うーん、隙だらけだ。これで生死をかけた戦いとか言われても鼻で嗤ってしまいそうだ。まあ、以前の俺なら膝が笑ってしまいうだろうが。

「……………お喋りはもういい？」

「あ？」

問いかけて、一瞬。俺は足を踏み出し、距離を詰め、その無防備な鳩尾に一撃。掌底を叩きこみ、筋肉のリミットを外した一撃は見えない弾丸に等しい威力。この一撃の衝撃は少々特殊で体内で小爆破が起きたように弾ける暗殺拳。

「ガハッ!!」

二メートルを超える巨体が少し浮き上がる。体重百キロは優に超える巨漢は血反吐を派手に吐いてドサツとリングに倒れ伏せる。返り血もこの身には掛かせない。

巨体が浮き上がった時に会場がざわめく。え？この力が人外染みている？そんな馬鹿な。空手都大会優勝者がもつとやべー事しているだろ、多分。

うん。我ながらいいい仕事っぷりだ。ちゃんと「手加減」も出来たし。大体全治は――。

「――三か月」

ぼそつと呟いた独り言は、はくはくと魚みたいに悶える対戦相手の耳に届いたらしい。

その厳つい顔に浮かぶ表情は絶望、悲哀、嘆願といった悲痛なものであり、こちらを恐怖で見つめるその眼差しに先程の威勢は感じられない。うん？

「ゆ、ゆるしてくれ」

俺の足元に縋り、死に物狂いで懇願する巨漢。凄いシユールな光景だ。何せ奴と並ぶと俺は凄いいちびに見える。さぞちぐはぐな光景に見える事だろう。というか、だ。

「……なにを今更。アンタだって、散々甚振いたぶつてきたんだろ？弱い奴の命乞いに価値なんてあつたか？——価値なんて見出さなかつただろ？」

つまりはそういうことだ。

見下ろしながらの俺の言葉に足を掴んでいた力が抜ける。それを幸いに俺は囲んでいる金網越しに審判に話しかける。

「おい、終わっただろ」

「え。し、しかし原則——」

早よ終わらせや、と審判の男に凄めば、返ってくるのはごによごによとした頼りない声だ。つまり、死人が出ないと終わらない？言わせるか。

「はっ？」

俺にこれ以上仕事させんの？と短い声にドスを利かせる。それに青ざめ、審判はたまらず声を上げる。

「しよ、勝者、ジエネヴァ!!」

呆気ない終わりにシン、と水を打ったように会場が静まり返る。だが、五秒後、割れんばかりの拍手喝采。ブラボー、とお祭り騒ぎに近い叫びさえ聞こえる。

それに辟易しつつ、俺は選手控室に戻る。無線から聞こえるため息。

控室は意外にも一般的なものだった。六畳程度のこじんまりとしたもので、選手一人一室の個室だった。トーナメント戦なので次まで三十分の空きがある。

『君な』

「何？」

ライの呆れた小声に合わせて俺も短く返す声は小さなものだ。

『……………少しばかり。——いやなんでもない。それよりも君の方は大丈夫か？』

「うん？——アンタも通信越しとはいえ分かつただろ？余裕さ。まあ、それで慢心なんてしないけれど」

ライの沈黙に色々と言葉が飲み込まれた気がしたけれど、それを流

し心配の言葉に頷く。俺の勝気な言葉に無線越しのライが小さく笑う。

『それは頼もしい話だな』

『まあね。——それよりもアンタの方はどう?』

『こちらも順調だ。とはいえ、この施設の膨大な情報から目的のものを一から探るのは少々骨が折れるがね』

ライの仕事はハッキング。ライには珍しい仕事だが、本人曰く出来なくはないとのこと。まあライのバックにはFBIがついている。本人に出来なくとも得意な奴の手は借りれるだろう。何せここは日本でなく奴のホームのアメリカだ。……まあ俺がそんな詳しい内情なんてライに聞ける筈がないんだけど。

「怪しいところは全部覗いていくんだっけ?」

『そうだな』

ハッキングしてからざっくりとメインコンピュータの中を検分、その上で守りが嚴重なところを片っ端から確かめていく。

現実的に見ればこの作戦の成功率は高くないのだろう。何せこの脳筋ぶりだ。凝った作戦が時間足らずで出来ないなら力でゴリ押しするという振り切れぶり。

こうして見てみると俺らって——。

「ものの見事に脳筋だね、俺らって」

『確かに』

この呆れた呟きにライは喉の奥で笑った。

まだこの作戦は中盤戦だ。

※※

トーナメント戦も終盤。大体五戦目ぐらいだ。時間はトーナメント戦が始まって四時間は経つ頃で俺としてはもう帰っていいかなと遠い目をしてしまった。初戦の次はボクサーの男でバーボンと同じ戦闘スタイルか、と納得した頃には相手をリングに沈めてしまった

し、その次も大して変わらず。やだ俺強すぎ、なんて茶化す事も出来ないくらいに相手との差が実感できてしまった。例え相手が隠しナイフやら催涙スプレー、果ては高威力スタンガンを使おうとも、俺には一切届かなかった。おかげで相手の全治を予想する虚しいゲームがはかどることはかどること。

対戦相手はこんな裏ファイトなんて出るくらいに落ちぶれてしまっているがその根本はスポーツ格闘技なのだ。俺みたいに最初から人殺しの道具としての拳を磨いたわけではない。立っている土俵が違う。勿論、スポーツ格闘技が弱いなんて事はない。ただ、目的が違うのだ。

相手に勝つ、その定義が違う。命を奪う事が大前提なジェネヴァ君の戦闘スタイルは一撃必殺、人体をどれほど簡単に、簡潔に、的確に、正確に破壊できるかという一点に絞ってしまったものだ。それがどれほどの外道なのか、一般人だった俺の価値観では目を覆いたくなるぐらいだ。けれども目を逸らしても現実が変わらない。なら、正面からぶつかるしかないじゃないか。馬鹿な俺はそれしか方法が分からないのだから。

そんなシリアスに思考が浸っていられるのも、最終戦のチャンピオン戦までだった。

審判の男の紹介はこうだ。

「これまで数々の猛者を葬ってきた王者。この命がけのデスマッチにて百戦百勝の男が挑戦者を迎え撃つ！かつて空手世界チャンプとして輝いた伝説の男、上空 強次郎!!」

黒帯を締めた白の道着の男が既に構え、ギラギラと戦意を迸せていた。年の頃は二十代後半から三十代前半だろう。つまり現役格闘家、なわけだ。つまり、え。

空手。それは某名探偵少年の原作では、無双を意味する格闘技だ。都大会優勝者である女子高校生だって凶悪犯に圧勝してみせる、というチートっぷり。高校生でありながら世界を股にかける空手家青年の実力はもうヤバいの一言だ。瓦だけでなく大理石の柱だって彼の拳は粉碎するレベル。怖い。

つまりあの京極さんの大人版、と考えればいいのか？この目の前の人は。世界チャンプ、って言ってたし。え、マジで？

リングで呆ける俺に容赦なく上空の拳が迫る。

『ジエネヴァ!!』

「ッ!？」

耳元から聞こえたライの焦りの一喝に正気に戻り、間一髪拳を回避する。一発目から顔面を狙うとかほんと怖い。

「流石だ」

にやつと好戦的に嗤う上空はそのまま俺の顎を狙う上段蹴り、躲されると踵落としを決めてきた。早い、と焦りつつバックステップでその強撃を躲す。上空の踵はリングにめり込んだ。ひえ。

「どうしたどうしたア!! 先ほどまでの鮮やかさはッ!激しさはッ!!

このような……ものではッないだろう!!」

内心慄く俺にお構いなしに上空は拳のラッシュを仕掛けてくる。

こちらを挑発する言葉は拳と共に荒げ、激しくなっていく。

全ての回避よりは、ここは一、二発分を受け流した方が体力の消費はない。そう判断した俺は掌で受け流し、中国拳法の構えで受け流した腕をそのまま引いて投げ飛ばす。

ただし、それは一秒の中の世界の話。観客には目にもとまらぬ攻防に見えたのだろう。歓声と口笛によるコールが大きくなる。くっそ、お気楽な。

投げ飛ばされた上空はなんとロープの上に余裕の着地。ロープの弾性を利用し脅威の跳躍、二メートルも超えたそれはスポットライトで俺の視界から一瞬眩む。

その一瞬の隙を相手は見逃しはしなかった。

「ハアアアアアアッ!!」

「ぐうッ!？」

跳躍からの滑空。俗にいう“ライダーキック”を綺麗に上空は決めて見せた。空中を切り裂くが如く鋭い一撃は俺の腹に吸い込まれる。咄嗟にバックステップを踏むものの、威力が、勢いが桁違いだ。この細い身体は九の字に折れ曲がり、リングの真ん中からロープまで

吹き飛ぶ。

あまりの衝撃に一瞬意識が眩む。

ロープがたわみ、跳ね返す。それは再び上空のいるリングの真ん中まで弾き返す程だった。再び奴の拳が握られているのを、眩む意識の中に辛うじて認識する。

このままでは死――。

それは半ば反射だった。

「な、何!？」

上空の狼狽える声がぼんやりと聞こえる。ずり落ちそうなフードを空いている方の手で直し、上空の拳を抑えている方の手の力を強める。ぎり、と抜け出そうとする上空の力と抑え込む俺の力で拮抗し、音が鳴る。

頭の中のリミッターがどこか外れた気がした。このまま力を込めてしまえば、上空の選手生命がなくなるんだろう。粉碎し、肉の塊になるまで握りつぶす。それも一つの選択だ。

けれど、欠片程の理性が、良心がそれに否を唱える。ああ、そうだな。

腹を狙って放たれた上空の拳を解放してやる。拳を手で押さえ握りこむとか、もう御免だ。何せ手がジンジンと熱をもち痺れるように感覚がない。

俺にはこういう甘さがお似合いだ。

「――まあアンタの一発分は返すよ」

拳を握り、頭のリミッターを解除、そして限界まで力を発揮させた拳は上空の顔面に食い込む。

そのままあり得ないほど吹き飛んだ上空はリングの隅、ロープの下で気絶していた。

そうだな、奴の全治は――。多分顎の骨が逝っただろうし。

「……二か月」

誰も聞いていないだろうけどここまでやったんだし、と呟く。ちなみに俺は上空のあの一撃であばらが一、二本は逝ったので暫く安静しなければいけない。……安静、出来るといいな。ほんと。

「勝者、ジエネヴァ!! この年若い新しい王者に皆さま拍手を!!」

審判の男でさえ興奮を露わにマイクを握る手を強め、新しい勝者を声高に叫んだ。その興奮は伝染し、会場内が拍手喝采に包まれる。

ああ、漸くこの仕事も八割方終わるのか。そう嘆息しようと肩の力を抜いた。

「では、優勝賞品の授与を——」

審判の男の言葉の途中、言いようのない悪寒が項を撫でる。否、これは悪寒というよりは、直感に似た閃きであり予感だ。

瞬間、パシユツと空気を切り裂く凶弾。スポットライトの光を僅かに反射する弾丸を辛うじて視認した。この人並み外れた動体視力で辛うじて分かるくらいだ。果たしてこの会場内に気づいた者がどれ程いたのか。

それはライフルによる射撃だった。

「ッ」

皮膚を切り裂かれ、鮮血が舞う。

『チツ!! オイ、大丈夫かッ』

イヤーカーフから聞こえる、焦りの声に俺は唇だけで笑う。それは微か過ぎて微笑みにすらならない掠れ切ったものに違いない。通信の向こう、電子音のノイズが混じるその焦りの声に演技の色はない。おいおい、アンタ恋人のお人好しが移ったんじゃないか?なんて軽口すらきけやしない。

でもまあ、焦るなよ。これだって——。

「——計画の内だろ?」

ぽつり、独り言に近い小声をライへと向ける。そして懐から準備していたモノを取り出した。手の中に納まる球形、それを瞬時に地面に叩きつけて発動させた。

ボン、と閃光と共に勢いよく煙が視界を埋め尽くした。

さて、これからが俺の仕事の独壇場。腕の見せ所なわけだ。

張りぼての見栄は大人の必需品だ

There is nothing either good
or bad, but thinking makes it
so.

(物事によいも悪いもない。考え方によって良くも悪くもなる)

Shakespeare

己の恋人を一言で表すとすれば、「善良なる一般人」だと思っていた。ライにとっての「善良」は守るべき対象であり、平和の象徴であった。良く言えばお人好しの彼女は組織のような悪を触れさせるべきではないだろうし、出来れば何も知らないままで居て欲しかった。

何も知らないまま、ライに騙されていてほしかった。

あの温かな笑みは、無垢なまま美しいままであって欲しかった。ライにとって、本来ならば到底関わりあわないような、ソレがとても好ましく、愛しかったから。

それが如何に傲慢で愚かであったのか。

人知れず流す涙。隠れて涙を流す、そのか細い背中を見た時の衝撃は忘れられそうにない。彼女は何も知らない訳ではなかった。勿論、ライの本職がピタリと当てられる訳ではないだろう。けれど、それでも感じ取れるものがあつたのだ。

己の恋人が、恋人の仮面を被った裏切者である事を。愛しい者が己を利用して、だなんて全く何処の三流シナリオなんだか。それはもしかしたら女の勘って奴なのかもしれない。

彼女は、明美は騙されている訳ではない。ライに騙されていてくれているのだ。

それを悟った時の心境はとも言葉に出来たものじゃない。これ

ほど己の愚かしさを恨めしく思ったことはない上に、決定的な間違いをまざまざと突き付けられた。

けれど、それでもなお彼女を掴むこの手を離せないのだから救えない。今更だ。今更手を離し、恋人の座から降りたとて、ライが組織に正体をばらすような失態を犯せば彼女は無事ではすまないだろう。あの組織はそこまで甘くない。皮肉なことに徹底した制裁があるからこそ、あの組織は成り立っている。そのせいで裏切り者に事欠かないのはとんだお笑い種だ。

毒を食らわば皿まで、とこの日本の諺にある。そうだ、それを承知でここに居る。綻びが命取りならば、そうならないように繕うのみだ。ライは腹を括った。

愛しい女の優しい嘘に騙され、騙し通す事を。恋人と繋がる手を相手から突き放されることがなければ繋いだままでいよう。

全てが物語の通りの綺麗事だけじゃなくてもいいじゃないか。多少の瑕きずはこの世のどんな愛だつてある。

※※

女心と秋の空。

そんな慣用句がライの脳裏にふと思い浮かんだ。

季節は秋の始まりを告げ、煩わしいだけだった夏の風物詩の蝉の鳴き声が種類を変えてヒグラシの物悲しい声に変わる頃。

その日のライは珍しく予定に穴を開けていた。今の顔であるライとしての仕事は夜に一つ、隠し持つ捜査官としての仕事は他の捜査官の報告待ちで今日はなし。つまりは午前中は完全なる休みとなった訳だ。

休み、となったのは日付の変わる頃だった。ここはライの恋人である明美との時間にあてがうべきか。最近仕事の忙しきで疎かになっていた恋人へ挽回を考えなくてはならないだろう。いくら彼女が優しくても、疎かにする理由にはなり得ない。それをライは承知してい

た。

恋人、という立場を言い訳に使うような愚かな男にはなりたくはない。

だが、間が悪かった。ライが恋人へと携帯で連絡をしようとしても中々捕まらなかつた。留守電を告げるアナウンスを流す画面を思わず睨んでしまったほどだ。

日頃の行いは悪い方ではない筈だが……、とライは内心ぼやく。否、潜入の為とはいえ、こんな犯罪組織に身を置いている。その時点で充分「悪い方」になるだろう。成程、お天道様とやらも案外節穴ではないらしい。ライの口元に皮肉な笑みが浮かぶ。

とりあえず、手持無沙汰も過ぎることだ。たまには健康的に目的もなく歩くのもいいだろう。そんな軽い気持ちでライは街中の人込みへと足を踏み出した。

そこから少しして、冒頭の眩きへと戻る。

こじんまりとした古い趣の喫茶店。古いカントリー風の内装から恋人が好きそうな店だな、と何気なく視線を店内へと巡らせると問題の光景を見つけたのだ。

窓際の四人掛けの席に向かい合わせに座る二人組。一人はライの恋人である宮野 明美だ。温和で柔らかな雰囲気彼女の彼女のその顔に楽し気な笑みが浮かんでいる。ライにはここ数か月で一番の笑みに見えた。もう一人、彼女の向かい合わせに座る人物。それがライにとっては何題だった。銀色の髪に深緑の瞳。今は少女めいた美貌だが、それも時間の問題だろう。少年というのはあつという間に成長していくのだ。

ジェネヴァ。それが、ライの恋人と何故か一緒にお茶なんぞ楽しんでいる少年のコードネームだ。

接点なんてなかつた、はずだ。ライは混乱する頭が一瞬で回転を始める。だが、脳裏に刹那の光景が思い浮かぶ。ラーメン屋での一幕。確かその時ジェネヴァは明美と会った、と言っていた。その時は一度だけの偶然なのだろう、と聞き流したが、もしかしたらライの知らない繋がりがこの二人にあるのかもしれない。

そこまで脳が弾き出した計算結果を飲み込む前にライは喫茶店の扉へと手を掛けた。そして躊躇いなく開ける。案内をする店員へ、待ち人が待っているはずだ、と言葉少なに足を迷いなく進め、件の二人の席の前で足を止める。くすくす、と軽やかな恋人の笑い声にライの眉間に知らず皺がよる。ああ、訳もなく苛立たしい。腹が煮えつくように熱くなる。

「——随分、楽しそうだな？」

腹に溜まった苛立ちをそのままに二人に——特にジエネヴァに向けて——言い放つ。我ながら大人げない、とは思うがそれでも言わずにはいられなかった。

「げ」

「あら、大くん」

あからさまに嫌そうな反応のジエネヴァにライの睨みも鋭くなる。そんなに疚しい事情でもあったのか、と。ライの心情がそのまま威圧となり、辺りの空気が重くなる。だが、そんな空気を気にせずにライの最愛の恋人は嬉しそうにこちらを見上げた。

「げ、とはご挨拶だな。ジエネヴァ。——それで？人の女と逢瀬を楽しんでいる理由をお聞かせ願いたいもんだが？」

一応、釘を刺しておこう。労せず纏える威圧をそのままにジエネヴァを見下ろし、問いかける。恋人の浮気を疑っているわけではない。だが、ジエネヴァの方はどうだろうか。恋人の欲目もあるだろうが、明美は気立てよし、器量よし、更には恋人を一途に想う健気さもあるいい女だ。惚れない道理があるだろうか？……年の差なんて数年もしない内に気にならなくなるに違いない。

「大くんったら、もう……。とりあえずこつちに座ったら？」

そんなライの恪気を察したかしないか、明美は微笑みを浮かべてラ

イを己の隣に手招く。断る理由はない、ライは大人しく明美の隣に座る。相対したジェネヴァは若干居心地が悪そうだ。……相も変わらぬの無表情だが。

「……………大人げないでやんの」

ぼそり、と呆れたような呟きがジェネヴァの口から零れる。それにライの片眉がピクリ、と跳ねる。安い挑発だ、と分かっているが苛立たしいのは変わらない。

「聞こえているが?」

「聞こえるように言ったんだよ、お兄さん。——少しはお姉さんを見習えば? 余裕のない男は嫌われるぜ?」

「——ホォー?」

だから敢えて挑発か否か、を暗に問いかける。ライのそれをジェネヴァは挑発的に返してくる。その言葉にはライの愠気が分かっている上に煽りも含めて余裕を持って、ときたものだ。思わずライの口元に戦意が煮詰まった笑みも浮かぶ。はは、コイツめ。

とその時。

「——大くん、ジェネヴァ君。喧嘩しないの。ね?」

柔らかな、耳触りのいい声が穏やかに響める。明美のそれはまるで日だまりのような棘のなさで、ライは思わず肩の力を抜く。いつの間にか腹にあつたあの苛立ちは消えていた。

「喧嘩はしていないさ。そうだろ、ジェネヴァ」

「そうだね。アンタがそう言うんならそうなんじゃない?」

ため息を吐きたくなるのを堪えてライがジェネヴァに確認するよう言葉を投げる。勿論、そこには同意するだろの意を添えて、だ。ジェネヴァはそんなライに投げやりに頷いた。なんだ、その惚気は結構ですみたいなしよっぱい反応は。

「というか、俺がお姉さんに何かする訳ないでしょ。——アンタが懸念するような事なんてそれこそ、この瞬間に地球が減じるぐらいあり得ないよ」

ジェネヴァは呆れたようにこちらに念を押す。それは先程刺した

釘への呆れ、に違いなかった。こころなしか、お兄さん俺の年齢知ってるでしょ？という副音声まで聞こえてきそうだ。

確かに、らしくない自覚はある。大人げないのも百も承知だ。けれどライにはそこで領けない理由がある。

「……接点がるでない組み合わせだからな。邪推するのは仕方ないじゃないか。——これでも心配しているんだ」

「大くん……」

本音八割、建前二割ほど。肩を竦めて、軽口で誤魔化ながら。それを思わず吐露すれば、ジエネヴァは呆れを深くし、明美は感激に瞳を潤ませた。明美には恋人までの経緯もあり、年上のプライドもあり、今までこんな心情を明かしたことはない。だからだろう。こんな言葉一つで喜ぶのならば、己の小さなプライドなんて早めに捨てるべきだった。ライの胸が小さな悔恨と恋人の愛への実感で疼いた。

「はいはい、ご馳走様。——俺はもう行くよ。じゃあね」

「ふふ、また話を聞かせてね？」

すっかり蚊帳の外になつたジエネヴァがやれやれと言わんばかりに立ち上がる。それに明美が笑みのまま声をかけた。その声に滲むのは家族へ向けるような、温かさだ。まるで弟にむけるような邪気のなさだ。

ジエネヴァもそれを分かつたのだろうか。肩を軽くすくめて、

「さてね。それは幸運の女神様にでも聞かないと、だね。……それとお姉さんの嫉妬深い恋人の許可が下りてから、かな」

「なっ」

「まあー」

とさらつと爆弾を投下した。軽い冗談、に似たソレを鼻で嗤って受け流せなかつたのはまさか己に心当たりがあつたというのか。しつとぶかい、だと……？

ライの滅多にない動揺に明美の瞳はキラキラと輝く。恋人のそんな期待に満ちた瞳を無下に出来る筈はなく。ライが無様にも狼狽えている間にジエネヴァはするりと店の出口へと身を滑り込ませた。あつという間の身のこなしにライは唾然と後ろ姿を見送ってしまった。

た。

くいつとライの腕を軽く引つ張る感覚。腕を掴むことはせずに服の布地を少しだけ引つ張る、そんな可愛らしい事をするのはこの場で一人。ライの愛しい恋人だけだ。

「大くん……」

しよぼん、と明美は怒られる前の子犬のような顔をした。そんな顔をするな、と優しい言葉をかけて、甘い対応でも出来れば百点満点の恋人なのだろう。

しかし、ライにそんな器用な真似は出来ない。照れとプライドと、その他もろもろで思い通りにいかない事が常だ。ああ、全く恋とは度し難く、愚かになる毒なのか。それが全く嫌ではない所が更にどうしようもないと思う。これまでの色恋とは勝手が違い過ぎる、なんて我ながらどうしようもないボヤキも内心出てしまう。

彷徨っていた己の手をテーブルの上の明美の手にするりと絡ませる。

「！」

「……これから時間はあるか。前に観たがっていた映画があっただろう？」

争いをしらぬ、細い指先だ。手荒れもない、その白い手はライにとっては平穩の象徴のように思えてならない。すり、と指の腹で懐けば、びくりと怯えたように震える。つれないな、なんてライはくつりと笑う。

ちらり、と横目で恋人の顔を盗み見れば可哀想なくらい顔を真っ赤にして固まっていた。いつまで経っても初心だ。それが可愛い、なんて口が裂けても言えやしない。

「……明美？」

どうした、なんて意地悪だろうか。ライはにやけそうになる口元を堪えて首を傾げる。映画、一緒に観に行くだろうか？

「……………うん」

小さな小さな返事は思いのほか甘く聞こえる。機嫌が回復したらライはこの喫茶店に来た時の苛立ちなんてすっかりと消えていた。

それはそれとして、後で手を回さないといけないだろう。あの子ども
もの思惑とその脅威度の把握も両方でできれば言う事はないんだが。

※※

組織には殺戮人形、と呼ばれる子どもがいるらしい。組織が一から
育て上げた忠実なる機械人形^{オートマトン}。それが今度コードネームを貰い、本格的
に仕事をこなすようになるという。

これがライがジエネヴァ当人に会おう前に聞いたおおよその噂だ。
随分悪趣味な事だ、と眉を顰めたものだった。

実はジエネヴァに故意に会うのは難しい。神出鬼没であり、その活
動場所も謎に包まれているからだ。故にライはジエネヴァに毎度偶
然に会うことに多少の驚きを感じていたし、噂よりも人間味があつて
むしろ安堵していた。

だが、それはライ個人で彼と関わるのが前提だ。そこに明美が加わ
るとなると正直領けない。目に見える幼さで誤魔化されてはいけな
い。見た目の線の細さはまやかさであり、その本質は恐らく別にあ
る。

組織の闇は確実にあの子どもの根幹を、精神を蝕んでいる。それは
倫理観の少しのズレだったり、価値観の決定的な違いだったりするの
だろう。それがライの愛しい彼女にとって致命的ではない、なんてど
うして言い切れる？それにジエネヴァの背後にジンの影がちらつく
のも不穏だ。

悲劇の起こった後からでは遅い。一般人の明美では逆立ちしたつ
て、ジエネヴァに勝てやしないだろう。抗うことすら出来ないかもし

れない。それを考えるだけでライの背は冷たい予感で冷えて仕方ない。

暗くなる思考をそこで一旦打ち切る。何はともあれ、行動あるのみだ。思考を重ねるだけで何かが変わるほど、この世界は易しくはない。

現時刻は午前十時を少し過ぎた頃だ。

ジェネヴァと初めて出会ったあの施設の廊下を歩いていた。更に施設の奥、人影一つ見当たらない区画まで足を進めていた。ジェネヴァと会うために心当たりを当たってみようという考えからだ。会えれば僥倖、会えずともこの謎多き組織の更に謎めいた場所に何があるのかが分かればそれでいい。元来、状況をポジティブに捉えるのは得手だとライは思っている。

さて、この扉の先に何が出るのやら。ここ、日本では藪をつついて蛇を出すという。多少の荒事なんぞ、ここでは当たり前の日常だ。だから、蛇が出ようと鬼が出ようとライにはどうでもいい。

目の前にある無機質な金属製の扉に手を掛ける。指をかける取っ手の横にあるスイッチを押せば、微かな駆動音の後に扉が開かれた。随分、不用心な事だと呆れてしまう。

まさか、一番最初に当たりを引くとは思わなかった。

扉の先には、汗を拭うジェネヴァの姿があった。どうやら訓練は終わってしまったらしい。——出来ればその訓練を見ておきたかったんだが、とライは室内に足を踏み入れ、壁に寄り掛かる。

ジェネヴァがいつ気づくか、なんて愚問だ。部屋に入ってすぐに、その淀んだ緑の瞳がライを胡乱げに見やる。ライの想定通りだった。

「先日は世話になったな」

先日の明美とジェネヴァの喫茶店での光景が不意に脳裏に蘇る。それでつい、声に棘があったのかもしれない。ジェネヴァの淀んだ瞳がこちらをじとり、と捉える。

「……嫌味かな？」

汗を拭い、静かな様子で返すジェネヴァは至って通常運転だ。今の今まで身体を動かしていただろうに、息一つ乱さない。その静かな声

にはこころなしか、うんざりしたような響きが潜んでいる気がした。

「……フツ。これでも不安の芽は早めに摘んでおく性質でね」

「ああ、アンタの可愛い恋人か」

こちらの軽口に応じるようにジエネヴァの口調も軽い。が、可愛いとは聞き捨てならない。ライの視線も自然と鋭くなる。

「後はそうだな、あのジンが珍しく面倒を見ている懐刀候補の実力を見ておきたい」

何はともあれ、この子どもを知るにはこれが丁度いいだろう。実力も、思惑さえも上手くすれば把握できる。正に一石二鳥だ。ライは挑戦的な笑みを浮かべ、截拳道の構えをとる。

しかし、当のジエネヴァといえは、だ。

「は？懐刀候補？何それ」

鳩に豆鉄砲。それが似合うような、ジエネヴァにしては珍しい驚きようだった。なんだ？ライは些か興をそがれながらも首を傾げる。

「違うのか？」

「違うけど」

気持ちのいいくらいの即答。若干、ジエネヴァの淀んだ深緑が更に沈む。おや、そこは自信ありげに実力を誇示しないのか。少しばかり意外ではある。

ふむ？だが、まあ……。

「些細な行き違い、はどうでもいいな。最年少幹部の実力としても興味がある。それに、言っただろう？」

ああ、この子どもは何も分かってはいない。ライは自分の戦意を煮詰めていく。アドレナリンが、心臓から全身に巡るこの血潮がドクドクと熱くなるのを感じる。

「何？」

不愉快な短い声にライが言うことは一つだけだ。

「不安の芽は摘んでおく、と」

「羊を守る牧羊犬シエバードは大変、だねッ」

余裕の軽口を叩くジエネヴァの台詞を遮り、殴りかかる。身体をそらし躲すジエネヴァの声が上ずる。まあ元よりこの一撃が当たると

は思っていない。

畳みかけるように攻撃を続けていく。鳩尾を狙った拳は掌で受け流された。ほお、これも防ぐか。ライは少しばかりこの戦闘に違和感を抱き始めた。おかしい。噂を全て信じる愚か者ではないが、それでも無視できない矛盾だ。

「アンタ、脳筋も大概なんじゃない？」

ジエネヴァの口は相も変わらず余裕だ。ライの感じた矛盾、は気のせいという事なのか。

「ふ、余裕だな。ならば、これはどうだッ」

それを見極める為に拳から蹴りへとシフトチェンジをする。リーチの長さはライにとっては大きなアドバンテージだ。手加減なんて端からしていない、そんな重い一撃はジエネヴァの腹を綺麗に抉る。咄嗟に受け身、後ろに飛んでダメージ軽減をジエネヴァは図るがその口から苦し気な吐息が零れた。

見た目の子どもらしい細身に若干の罪悪感が湧く。

「……らしくないな。どうした、お前の実力はそんなものじゃないだろう？」

「……………」

思わず投げた心配と煽りにジエネヴァの俯いていた頭がピクリと揺れる。

「……アンタ程の実力者相手だと、生憎と手加減が出来なくてね」「する必要が？」

ないだろ、とライは挑発を続ける。ジエネヴァの声は思ったよりもしつかりとされていて、上げた顔に先程のダメージはもう露ほども窺わせない。

「あるとも。じゃないと、死んじやうだろ？」

「ほお？それはどちらが、だ？」

ジエネヴァの減らない生意気さに自然とライの視線も冷たくなる。この子どもは、こうでもしないと立っていられない。大人を頼らず、庇護を期待せず、むしろ逆に見えていることだろう。この子どもにとって恐らく大人は庇護してくれるモノではなく略奪者だ。

「そんなの当然——」

それはライの推測を裏付けるような表情だった。ジェネヴァの整った顔が醜悪に歪む。他者を心底軽蔑するような、虫ほどにも思っていない冷たさを凝縮したような嘲笑。容姿が整っているからこそ、その悪辣さが浮き彫りになるのだとライは初めて知った。

「アンタに決まっているでしょ？」

止めと言わんばかりに鼻で嗤われる。

ピシリ、と空気が凍ったような錯覚。じわりと勝手に滲む殺気はライとしても抑えきれるものではなく、また抑える気もない。

正直に言おう。イラっとした。ジェネヴァは底の見えない実力者なのは、コードネームを持つていることから明らかだ。だが、客観的に彼を見てほしい。少女めいた美貌の顔、白い肌は生気が無さそうな透明感で、すらりと伸びた手足は細い。当然それらを支える胴体も細い訳だ。つまりはライからしてみればひよろっこい坊主。冗談にしても、もう少し笑えるものにしてもらいたい。

「……………ホォー？」

思わず低くなる疑問符。お前、ふざけているのか。

ジェネヴァはこちらの不機嫌なんぞ気にせず、ズボンのポケットから震える携帯を取り出し、こちらに片手を挙げて見せてくる。一時休戦の意だろう。随分自由なことだ、ライは呆れたため息を吐いて頷いてやる。

「もしもし？」

「——内容は？」

合間合間に聞こえるジェネヴァの声は淡々としている。相手は誰か、なんてライが推理していると胸ポケットに入れていた携帯が震える。暇なことだ、と内容を確認するとそれはジェネヴァとの任務を命じるものだった。俺の苦労は一体……、とライは徒労感に襲われる。というか、先程のジェネヴァに対する挑発行為はほぼ無意味となった。何故ならこれからの任務の方が探るのにはうってつけだ。

ライが胸に滲む苦みと格闘しているとジェネヴァの電話は終わるらしい。……気のせい、かもしれないが了解と頷くその声は何処か硬

い。……滲むのは苦さ、か？

「ライ」

ジエネヴァからの声にライは視線を携帯画面から彼の方へ向ける。

「——とりあえず一時休戦、でいい？」

「ああ。その方がありがたい」

大人な対応をしてくれる、というジエネヴァにライは携帯画面を見せる。そこには任務を任命する簡易文章が並んでいる。穴を掘って埋まってしまうたい、という気持ちは初めて味わう。

「成程。……次はよろしく？」

「ああ。はあ……俺が一人で馬鹿みたいじゃないか……」

ジエネヴァがよろしく、と握手の手を差し出す。それを見てライは領いた後に盛大にため息を吐いた。その後の小さなボヤキはジエネヴァの耳に届いていないと信じた。

そもそも一番大切な事が聞き出せていない。

ジエネヴァと明美の接点に、その関係性。家族にむけるような温かな笑み、なんてそう滅多にお目にかかれるようなものじゃない。

分かっている。これはあまりに醜い嫉妬だ。あまりに大人げない上にジエネヴァにぶつけるべき感情ではない。割り切れない理由なんて百も承知だ。

※※

己の愛車のハンドルを握り、目的の空港を目指して高速道路を走る。隣に座るのは無表情のジエネヴァだ。あの締まらない終わりの一幕の後、気まずい思いもしながらも各々任務の準備を終え、急ぎ足でこの車に乗って今に至る。飛行機の子ケツトが運よく取れた事をここは喜ぶべきか。しかし、この強行軍に等しい準備期間のなさはこのからの任務の難易度を意図的に上げているようだった。それを指示したジンの意図が気になる。アイツはジエネヴァを腹心に育てたい訳ではないのか？まさか暇つぶしのように軽く使い潰されると

いうのか。この薄暗い業界ではあり得ない話ではないから困る。

「アンタさ」

「なんだ？」

思惑に推測。足りない情報に悔しく思うもいつもの事だ。

突発的なジェネヴァの声に内心驚きながらも視線だけを一瞬向ける。本当に珍しい事だが、あのジェネヴァが少し躊躇うように言葉を選んでいようだ。余白のような数拍の沈黙が彼の葛藤でもあるんだろう。

「ジンに嫌われているって本当？」

ライは驚きで目を瞬く。

逡巡していた割に言葉選びが随分幼い。恐らくは本当に聞きたいことは別にある。ふむ、ならばこの問いにそう身構えずともいいか。ライは数秒で思考を巡らせ、口を開く。

「藪から棒だな。——ふむ。言われてみればそうかもしれない」

俺にはどうでもいい事だ。ライにとってジンは厄介な宿敵に近いものだが、宿敵にどう思われようとも何処にも響かない。あの冷たい敵意に多少は思うところはあがるが。

本音を素直に口にすれば、隣から感じる視線に微妙な尊敬が混じる。今視線を向ければ、あのどんよりした緑も少しはマシになっているかもしれない。

何を馬鹿げたことを、ライは己の脇道に逸れた思考に緩く横に頭を振る。

「だが、それはあくまで私情に過ぎない。アイツだつて馬鹿じゃないさ。流石に私情を仕事に持ち込む程、愚かではないだろう」

ライから見たジンという男は分かりやすい悪役のような男だった。冷酷にして、無慈悲。トリガーハッピー並みに銃の引金を引くことに躊躇いはない。制裁する際のジンの手際の良さはFBI古巣でも語り草だ。

だが、仕事に対する妥協は一切ない男でもある。信頼、とは違う感情だがライはその点だけは認めているのだ。否、犯罪組織の幹部だからもう少しヘマをしてくれないか、と思ってもいる。

「でもさあ、ライ」

ジェネヴァの声は世間話をするような軽さだ。ライはまあそんな事はないと知っているから、一瞥のみ投げかけ次を促す。さて何を聞かされることやら。

「——それ、NOC^{ノック}だって思われていない前提でしょ？」
は？

流石のライも度肝を抜かれた。なんだって、と驚愕の感情のままジェネヴァに視線を戻した。

右手でノックの仕草をするジェネヴァはいつもの無表情だ。そこにライを貶めようと計略を巡らす暗さも何も浮かんでいない。何を考えているのか。

一瞬で車中の空気に緊張感がピンと張る。場合によっては強硬手段をとるしかあるまい。

だが、落ち着け。ライは己にそう言い聞かせる。ジェネヴァの人となりも然程知らないライは推測しか出来ないのがとても歯痒い。けれど、確実に言える事が一つ。

これはライの耳を傾ける為の一種のブラフだ。そも、確実な証拠があれば、裏切者への制裁は前述の通りジンの耳にいればよい。それだけである男は大手を振ってライを始末にかかるだろう。

「……………ほお？」
だから、ライが返すのはたっぷりの含みの疑問符のみだ。それですと。

何か言えるんなら言ってみろ。ライの疑問符の裏の言葉を言語化するならきつとこうだ。ジェネヴァにもそれが届いたのだろう。

「ああ、答えは聞かないよ。俺にとってはそんな事どうでもいいからね。——ただ、アンタは気をつけた方がいいよってだけの話」

ジェネヴァの口から出るのはそんなお節介な言葉だ。若干口調が早いのは、焦りか。まあ好き好んで敵を作るほど馬鹿ではないか。

「そうか。——大方、証拠も根拠もないただの勘だろう？でなければ、俺はここに居る訳がないからな」

あの男の行動力には恐れ入るよ、とライは皮肉で言葉を締めくくつ

た。隣から感じる気配は微かな困惑、か。少なくとも、ライへの敵意はなしか。

「しかし、尚更不思議な話だな」

「……………何が？」

ジェネヴァの敵意がないのがライの口を軽くしたかもしれない。素直な疑問の言葉はジェネヴァに短く返される。どうやらこのまま話をしてくれるらしい。

「君だよ。——君はこう言ったな、〃そんな事どうでもいい〃と。それが真実であれば、捨て置くのが正解だ。面倒事にしかならない上に旨味もないそんな与太話を態々本人に忠告する等と——」

少しかだけジェネヴァに視線を向ける。逃げられる、なんて思わないことだ。ライはこの少年から投げかけられる謎を余す事なく暴いてやろう、とさえ思っている。ジェネヴァが踏み込んだ場所が悪かった。

宿敵に向けるような鋭い視線をジェネヴァにくれてやる。そこでようやく俯いていたその顔がこちらに向けられる。

「随分とお人好しだな？」

ニヤツと口元だけが笑う。さて、どう出てくる？ 鋭い視線をそのままにライはジェネヴァを捉える。容赦？ そんなもの犬にでも食わせておけ。ライの地雷を進んで踏んだ、ジェネヴァ自身を恨むがいい。

ジェネヴァは首を傾げる。無表情からは何も読み取れやしない。

「……………深読みしても何も無いよ？」

「……………」

運転の為に前を見据えるが、ライは無言を貫く。それで納得すると思っているのか。

そんなライの無言の威圧にジェネヴァがどうとつたのか。

「ただ、アンタの恋人さん。あの人を悲しませるのは避けたいな、と。ありふれた親切心だと思ってくれていいよ」

そこで明美の名を出すのか。ジェネヴァの声に悪意はない上に、嘘の気配もない。ライは生来の推理好きが高じて嘘の気配を読むのが得意だ。しかし、だ。

「親切心、ね」

思わず口元に好戦的な笑みも浮かぶ。先程の言葉が本当なら、この少年にとつて似合わない親切の行き先はライの恋人である明美だ。しかもご丁寧なライの地雷をぶち抜いて、忠告を忘れないようにさせている。随分、献身的なことじゃないか。

「悪党の親切とか、レアでしょ。だから頭の片隅にでも置いておいてよ」

「——なるほど。そういう事にしてあげようか」

ジエネヴァの的外れなフォローの言葉にライは一気に毒気が抜かれる。そこじゃない。いや、正確に言えばその善意も信じられなかったりするから正解は正解なんだが。ジエネヴァの言葉に頷く言葉のため息も混ざる。

「はいはい」

ジエネヴァのおざなりな相槌はこの話題が終了したことを告げる。

これ以上の追及は無理、か。

「……………というか、君が明美とどういう関係なのか、が知りたいんだがな」

ぼそり、とライの口から本音が零れ落ちる。ハッと我に返った時は既に遅い。覆水盆に返らず。音に乗せた言葉はしまえる訳がない。

だが、ジエネヴァから特に反応はなく、聞こえていなかったらしい。ほっと安堵する気持ちが芽生える。

ハンドルを握り直し、運転に集中することにする。

ライはどうも愛しい恋人である明美のこととなるとカツとなりやすい。彼女からは大人の紳士的な男と見られているが、その実態はみつともないこの様だ。

そんなに明美の事が大切なのか。ライの逆鱗に触れるかもしれない、その危険性を冒してまで守りたいほどに。

隣のジエネヴァの横顔を横目で見る。銀色の髪に縁取られた少女めいた美貌は無表情であっても人目を惹くだろう。それこそ、あと数年経って青年まで成長すればどうだろう。どんな色男に成長するやら。

それにジエネヴァは組織の中でも普通の感性に理解がある方だ。あのジンと比べてみたら一目瞭然だろう。己は普通となれなくとも、それに寄り添えるだけの情はある少年だ。かと言ってこの組織でコードネームを持つている事から善人とは言えない。だから、だろうか。ライの胸に巢食う焦燥がいつまでも晴れないのは。

※※

アメリカのネバダ州、カジノ等の娯楽施設で有名なラスベガス。観光で有名なこの都市は騒がしくも賑やかな活気ある所だ。だが、その分観光客のトラブルは尽きないどころか、下手をすると洒落にならない犯罪にも巻き込まれやすい。やはりいくら飾り立てようともここは欲望渦巻く場所だ。金が絡むと人間は大抵ロクな事になりはしない。

空港からここまで時間はかかったものの、大した事件も事故もなく辿り着く事が出来たのは僥倖か。こういう職業だと幸先が良い等と素直に喜べないのが難点だ。この任務中の拠点となるホテルにはこの人混みの中を進まないといけないのか、とライは目の前の往来を眺め内心うんざりした。何分地味に上背がある分見通しが良くなり、人混みの果てのなさが実感できて嫌になる。タクシーを拾う程でもない、十分程度の道のりだ。

通り過ぎる人種の豊かさならば、普段活動している日本よりも優っている。まあアメリカのお国柄、と言い換えてもいいかもしれない。ただ、その中であつても隣にいる少年は人の目を惹きつけていた。見下ろす少年は帽子を被っているのにも関わらず、にだ。まあ、お世辞にも今の自分は堅気には見えない、とライは自覚している。……こうして立っていたら現地警察に職質されてしまいそうだ。ライは己の強ち外れそうにない予測に頭が痛くなりそうだ。少し急ごうか。

「――はぐれるなよ」

「言われなくても」

足早に足を進める。とは言えライも大人と子どもの足のコンパスの違いは十分に分かっていて。それ故の言葉に返ってきたのは生意気な声だ。元気そうで何よりだ。

「今夜の任務の打ち合わせはホテルに着いてからだな」

「了解。……というか、今回の任務の費用考えると結構怖いね」

これからの予定を告げると、ジエネヴァが不思議な事を言ってきた。何を言っているのやら……。思わず呆れ顔をしてしまう。

「君は面白い事を言うな。別に組織の経費で落ちるんだから気にしなくてもいいだろ」

「けいひ」

ライはそのままぞんざいな言い方で言い捨てる。ジエネヴァの小さな口から出たのは意外にも幼さが残る言い方だ。そんなに衝撃的な事を言ったつもりはないんだが、とライの眉が自然と寄せられる。「？」

「いやなんでもない。うん、そうだね。組織もそういう運営があつてこそだものね」

突然正気に戻ったかのようにジエネヴァは早口で取り繕う。……追及してもいいが、ここは拠点であるホテルに行くことを優先した方がいいだろう。本当の職を思えば、ここで職質されたなんて笑い話にもならない。精々が酒の席でのジョーク止まりだ。

※

拠点となる部屋はツインだ。こうも準備に時間が足りないところという弊害があるのだ、とまぎまぎと教えられた。いい教訓になったと思わなければやっていられない。まあ本来の仲間への交信手段なんて電話以外にも色々ある。潜入なんぞ危険の高い任務だ。気軽、という訳にはいかないがそれでも見つからない抜け道は用意しておくのが定石だ。

ライは隣で荷物を広げるジエネヴァを後目にこちらも明日への本番への準備をしておく。……というか、君そんな物騒な物を隠し通して空港を通過出来たな？一応手荷物検査やらX線検査やら一通りやるんだが。そんなライの微妙な思いに気づいたのか、ジエネヴァの深緑の瞳が手元からこちらへと向けられる。

「まずは任務の概要を確認するか」

「ライ、もしかしくなくても俺の事子ども扱いしてる？」

こちらの提案に返ってくるのはまるで子ども扱いしてくれるなどむくれる反抗期のガキみたいな主張だ。声は淡々としているが、一度そう見えると若干不機嫌に聞こえるのだから人間は不思議だ。

「君の年齢だと充分子どもだと思うんだがね。まあ、それは関係ない。俺と君とで齟齬があったら大変だろう？何せ、急に決まった事だ。予想できる不備は出来るだけなくしておいた方がいい」

確認作業、というのは案外馬鹿に出来ない。こういう基本を疎かにして死ぬような人間はこの裏社会じゃ道端の石ぐらいに珍しくない。ジエネヴァはそこまで言わなくても分かったようだ。軽く頷かれる。

話をする為か、ジエネヴァは一旦荷物を広げる手を休め、ベッドに腰掛ける。ライもそれに見習い、椅子を引つ張り出して座った。声や表情は分かるがそこまで近くない距離で話を続けることにする。

「確かに。——まずは概要、だっけ。違法カジノ、その地下にて開催されているという裏ファイト。その優勝賞品が少しばかりまずいものだったんだよね」

ジエネヴァの言葉にライは頷く。裏ファイト、なんてぼかさされているがその実態は死傷者が出ようとお構いなしの血に濡れた催しだ。その勝敗に金を賭け、稼ぐ。実にシンプルなシステムだがリング上で戦う者らが問題だ。どいつも脛に傷を持つような奴らばかりだ。中には凶悪殺人犯も居るといふ噂だ。無論、FBIでもどうにか取り締まろうとしているが如何せん奴らのバックが厄介極まりない。どうにかならないものか、と頭を抱えているところに今回の件だ。ジエネヴァには悪いが、ライにとっては渡りに船。ジエネヴァと共に奴らの賭場を引つ掻き回し、警察が乱入出来る口実が出来れば上等だ。奴ら

は何処を叩いても埃が出る。決定的な物的証拠を掴めば、逮捕も容易いだろう。要は底う隙なんぞ与えなければ良い。

「優勝賞品は純金で出来た像だ。その価値は時価十億はくだらないという。だが、問題はそこではない。なんでも、その像にはとある仕掛けがあるらしい。情報の入っているマイクロチップ。一センチにも満たないソイツの中には、組織の創立メンバーリストが入っているという話だ」

「……それ、本当なの？」

ライの口から出る説明にジエネヴァの反応は懐疑的だ。真つ当な反応だ、と思いつつライは己の荷物からノートパソコンを取り出し起動させる。作戦を実行する上でジエネヴァに覚えてもらいたいものがあつたのを思い出したからだ。

ジエネヴァは胡散臭そうにしながら、荷物の整理を再開させた。その細い手首に似合わない拳銃二丁をどうする気なのか、とライは真面目に考えてしまう。まさか、会場に持っていくとか、か？

「さあ？ただ、その像の前の所有者は組織の古いパトロンだ」

「——うわあ」

ノートパソコンに視線を戻し、文字の羅列を眺めながらライは端的に情報を述べる。組織発足時に近い時代からのパトロンでもう代替わりさえしている名家だ。パトロンは続けているものの、代替わりで知識と認識が欠けたのだろう。組織はよりによってそれを手放すとは、と今頃歯噛みしているに違いない。今回の任務がそのパトロンの抹殺ではなく、手放した財宝の回収となったのが吉となるか凶となるか。

そんなライの端的な言葉にジエネヴァは何処まで悟ったのか。とても嫌そうな呻き声を出された。いや、表情が無表情なのが結構シユールに見える。ライはため息を一つ吐いた。

「しかし……まあ。そのマイクロチップの中は九割八分、偽物だろうな」

「へえ。なんでまた」

ライの素直な所感を言えば、首を傾げられた。なんでって言われて

もな、ライは肩を竦める。

「何故、か。組織のボスは既に様々な憶測が囁かれている。——君も組織に居るんだ。一つくらいは噂で聞いたことがあるんじゃないか？ 既にこの世に居ないような死人の名まで挙がるような話だ。そこに一つ候補が増える、と言われてもな」

「そうだ。だから、ライはここに居る。組織の謎に関わった人間がどれ程犠牲になったのか、目の前の子どもに懇切丁寧に説明してやりたかった。無駄だからやらないが。ここまで来るまでにライはそこそこの犠牲を出して、組織の地位を獲得した。血塗られたこの手も、愛しい女を裏切る罪悪も、ライの覚悟の上の結果だが、それでもと思ってしまう。こんな簡単に真相が掴めたなら、と今更詮無き事を考えてしまう。」

ライのそんなどうしようもない心が声に、それか表情に滲んでしまったのだろうか。ジェネヴァが言葉を躊躇うように口を何回か開く。

「こうして聞いていると組織って……なんか「？」」

まだ躊躇うジェネヴァにライは怪訝な気持ちで視線で先を促す。いいぞ、言ってもと。

「噂好きの集まりみたい、だなんて」

「ブハッ、クッククック。成程、確かにその通りだな」

ジェネヴァのボヤキがライの腹筋に直撃した。ライの脳裏に浮かぶのは宿敵ジンだ。そんなソフトなジンなんぞ目にした日には正直爆笑するしかない。あのジンが、だぞ？ 笑わずにいられるか。思わず涙が出てしまいそうだ。

「笑うなよ……」

「ククッ、悪い悪い」

いつまでも喉で笑うライに痺れを切らしたのか、ジェネヴァがライの肩を小突く。笑えるものは仕方ないだろう、と思いつつもライは軽く謝罪する。

とは言え、脱線してばかりでもいられないか。ライは気持ちを切り

替える為に空咳を一つ。

「話を戻そう。任務の決行は明日。何せ今回は準備期間がほぼないに等しいときたもんだ。組織は余程我々に死んでほしいと見える」

言葉に皮肉を込めてライは酷薄な笑みを浮かべる。

「こんな作戦と言えないモノをよく実行しようと思えるな、君も。まあ、俺も人の事なぞ言えないが」

「仕事だから仕方ないさ」

ライの皮肉もジェネヴァには少しも響かないようだ。軽く肩を竦められた。必ず達成出来る、という過信でそうなのか。それとも、仕事ならば命なんて惜しくないからこうなのか。まあどちらにせよ、ライがやる事には変わりはない。

「仕事だから、ね。まあいい。それよりも、この作戦の要は——」

「当然、俺が適任でしょ」

「分かっているのか?」

俺がやろう、というライの言葉が出てくる前に遮り、ジェネヴァの当然といった態度で名乗り出る。思わずライが鋭い睨みで問えば、返ってくるのは分かっていると頷きのみだ。こいつ、分かっているだろう、というライの盛大なため息は存外この静かな部屋に響く。

自然とこの静かな一室に重い空気が漂う。それをジェネヴァはどう捉えたのか、軽い調子で頷かれた。

「大丈夫。アンタはしくじるような奴じゃない。こう見えても、俺は時間稼ぎは得意な方なんだ」

「しかし……」

ジェネヴァの軽口を聞いてもなお、こちらの不安は一掃されない。むしろ、そこではいそうですかと頷けるのならばライの本職は別にあっただろう。つまり、ライの倫理観はこれでも人並みにあると自負している。ジェネヴァの実力を測ろうとした先の一件がどうにもライに引っ掛かりを感じさせる。これでいいのか? と。

なにしろ。今回の任務の「荒事」を担当する、と言っているようなもので。

「言ったでしょ。——俺は意外と腕つぶしが強い方なんだ。手加減

“しなくていいって言うなら尚更ね”

ライの目の前の子どもが “強がり” を言う。そうしなければ生きていられない子どもだ。勝気なこの言葉が、それを裏切るような無表情がその残酷さをライに突き立てる。

まざまざと見せつけられるような気がした。

まだ、十三歳くらいの子だ。ライの妹——否、赤井秀一の家に来てきた幼い妹がもうこれくらいになるだろう。同い年か、一つ年下の子だ。そういえば、妹も同じようによく勝気な事を言っていたような気がする。今となつては可愛らしい意地の張り方をしていて、近所のやんちゃ坊主と喧嘩をしていたのだったか。そんな事を考えていたからか、ほんの一瞬だけジェネヴァに妹の面影を重ねてしまった。ああ、本当に子どもなのかという実感と言葉に言い表せない類の感情がライの喉を詰まらせる。

「……存外、君は生意気なんだな」

「!?」

わしやわしや、と雑に目の前の銀色の頭を撫でまわす。力加減なんでものはあまり利かせていない乱雑さに、撫でられるジェネヴァは混乱しているようだ。

このすました顔の子どもの年相応の反応にライは撫でる手を離す。この子どもに地獄を見せているのは汚い裏社会の大人達だ。否、救う手を持たない時点でライもその汚い大人に分類されているのだと思う。これからもきつとライはこの子どもに手を差し伸べることはない。何故なら他に優先しなくてはならない命が他にあるからだ。全てを救える、と豪語出来る程ライはもう理想に酔えない。ああ、まったくもってやりきれない。

ライは喉にせり上がる感情をグツと飲み込み、感情を平面に整える。これでも一瞬で取り繕うのは得意な方だ。

「分かった、そこまで言うなら任せよう。君の言う、“手加減”とやらない本来の実力にも興味がある事だしな」

「……………そう期待される程ではないと思うんだけど」

ライの倫理観を抜きにすれば、ジェネヴァの申し出はまさに渡りに

船で都合がいい。だからライは軽く煽るような事を言えば乗ってくるだろう、そう思った。だが、予想に反して、ジェネヴァはぼそつと何事か呟く。

「なんだ？」

「いや、なんでもないよ」

まさか不安なのか？ライの声のない問いをジェネヴァがあっさりとは否定する。……まあここで心配をしても意味がない。ライはジェネヴァにノートパソコンの画面を向ける。

「ジェネヴァ。これが問題の会場の見取り図だ。警備の交代体制も見せておく」

事前のハッキングで収集出来た情報をジェネヴァに共有する。これ以上の情報収集は相手側に気づかれてしまいうリスクが高く、断念した。こういう事前情報があるのとないのでは成功率と生存率が断然違う。

ジェネヴァは数回頷き、その深緑の瞳で一通り辿る。深く読み込むでもなく、ただ一回目を通す確認作業のみで納得したようだ。……まさかこの十秒足らずで覚えたというのか。ライは内心の戦慄を表に出さないように抑えた。

「成程。ま、アンタがしくじらなければ俺には必要のない情報なんだけど」

「言ってる」

ジェネヴァの生意気な言動にライはため息を吐きたくなった。良くこの生意気さで生き残れたものだと思心ささえ覚える。

明日の仕事は古巣との連携が重要になってくる。ライに要求されるのは首尾よく任務をこなし、ジェネヴァにライと古巣の関係を悟らせないことだ。少しでも疑念を持たれたら、ライの人生は物理的に終わるだろう。それにライを招き入れた恋人、明美も危ない立場になるという事になるかもしれない。それだけはなんとしても避けなければならぬ。

「——ライ」

「？」

いつの間にか荷物整理を終えたジエネヴァが室内にあつた冊子を手でライに歩み寄る。

「ルームサービス、どれがいい？」

……そういえば、夕飯時といつてもいい時間になっている。壁掛け時計は夜の八時を示していた。ジエネヴァの手の冊子には、西洋の肉料理やら中華、果てはアレンジ寿司などバリエーションが無駄に豊富だった。こころなしか、わくわくとした様子のジエネヴァにライは毒気を抜かれる。呑気な上にマイペースだ。

「好きにすればいいだろ。何故俺に聞く？」

「？アンタは食べないの？——まさか携帯栄養食だけ、とか言わないよな？」

「はっ。」

ライの投げやりな言葉にジエネヴァが信じられない、と言わんばかりの圧になる。なんなんだ……。

そもそも。

「食事なんて腹にたまればそれでいいだろう？ 適当に選んでおけ」

「うわあ……」

ライの言葉にジエネヴァが言葉を失う。本当になんなんだ。

「——まさかそれ、お姉さんにも言つてないよね？ 手料理とかさ」

「当たり前だろ。惚れた女の手料理をまずいなんて言う男は男じゃないな」

「うへえ……。惚気か」

まあ明美の料理は家庭的で大変美味なんだが。ライの隠れた本音を言う前にジエネヴァがうんざりしたような声を上げた。ほお、そんな声も出せるのか。

ちなみに頼んだルームサービスを食べたジエネヴァが日本にしきりに帰りがつたのが笑えた。曰く、ホームシックだそう。早すぎる上にそもそも君の故郷は日本じゃないだろうか追及すべきところが多すぎて言うに迷う始末だ。まあ言わなかったが。

※※

この任務においてライの役割は二つに分かれている。一つは言わずもがな、この組織としての顔としてのものだ。ジエネヴァと組んで、組織が握りつぶしたい情報の回収とその媒体である純金の像の奪取だ。そしてもう一つ、ライの隠された職であるFBIとしてのものがある。それがこの違法カジノの捜査だ。動かぬ証拠を掴み、強制捜査の後押しをすること。つまりは狸の尻尾を掴むことだ。

相手は経済界の重鎮など、政治界にも太いパイプを持つ権力の持ち主だ。下手な証拠で手を出してもトカゲの尻尾切りをされるか、最悪こちらが権力に握りつぶされかねない。そういう意味では今回の件はFBIにとって、渡りに船で都合の良い話だった。その為ならば、多少の悪は目をつぶると上司にさえ言われてしまう始末。それだけ、今回の相手は害悪だということだ。人の命を賭け事に、金に換えてしまう。一体いつの時代の趣向なのか、とライは内心吐き捨てた。

今回ジエネヴァが荒事を引き受けたので、ライはFBIとしての仕事としての比重を重くできる。――本部にいるハッキングが得意な仲間のバックアップを受けながらの情報戦は門外漢であるライでも勝利出来る難易度で容易いものだ。というか、ほぼその本部の仲間の力によるものだ。そいつからの指示に従いながら、ジエネヴァの動向も見守る。

ライの左耳に付けたイヤークフは優れた通信機だ。見た目だけならばただの装飾品にしか見えない程で、こういう秘された任務ではうってつけとも言える。ただ、ライから言わせてもらえれば何故通信機に洒落た要素が必要なのか理解に苦しむところだが。

カジノの内部を大まかに言ってしまうと、地上から見えるカジノホテルは五階建てであり、見た目は近未来を意識したビルだ。近代建築で著名な建築家によるもので、ラスベガスでも五指に入るであろう場所である。そのカジノホテルには一般には知られていない地下の部

分があり、その階数は地上と同じく五階。その最下層が今回のジェネヴァの戦舞台、裏ファイトが開催されるフロアとなっている。階数が下になればなるほど、フロアは広く、複雑に設計されている。まるでネズミ捕りだな、と他人事みたいな感想がライの胸中に浮かんだ。

小型のノートパソコンはFBIとの仲間との連絡とこのカジノの監視カメラの映像が映し出されている。チャット形式で一方的にFBIの仲間から情報が流れていく。それを目で追いながら、ライはこのカジノの中を慎重に攻略していった。監視カメラの映像を一瞬だけ偽の映像に切り替え、その間にライは移動する寸法だ。その為はこの建物の警備体制の詳細を手に入れた。そしてその内容は既にライの頭に叩き込まれている。

FBIの仲間からの情報によると、ここの心臓部とも言うべきメインコンピューターは、その回線を外とは一切繋いでいない上、操作は直接行う必要があるようだ。そしてその位置も当たりを付けている、と。

今の時刻は夜の九時を指そうとしている頃。——といっても蛍光灯を切らさない、この建物の中には夜の実感もあったものじゃない。体内時計と腕時計が指す時刻が、ライに現実の時間を教えてくれる。まだ、目的地まで遠い。ライは近くの誰も居ない客室に身を滑り込ませ、ジェネヴァの動向を見ることにする。左耳から、初戦のアナウンスが聞こえる。リングゲームをあのままの「ジェネヴァ」のままにしていたのが頭が痛かったのが思い出された。彼の動向を見守るのは、今回の任務はあの線の細い身体にはきつかるう、と心配しての事もあった。何せ対戦相手は歴戦の格闘家や札付きの悪ばかりだ。命なんて一瞬の油断だけで、あっさりと消えるだろう。

そんなライの心配は刹那の間だけだった。監視カメラの粗い画像に映るのは黒のローブを纏うジェネヴァとその対戦相手だった。牢獄のような悪趣味なリングは見ていて胸糞悪くなる。倍近くある体格差にライの心配が顔を出したが、それも一瞬の事。

『……………お喋りはもういい?』

左耳から聞こえるジェネヴァの抑揚の欠けた声の一拍後、あの細い

身体の何処にそんな力があるのかと疑う一撃が繰り出された。相手の巨体がジエネヴァの一撃に耐え切れず、軽々と浮き上がる。血反吐を吐き、リングを沈む巨体を見下ろすジエネヴァは強者の風格だ。

まさに瞬殺。ライの脳裏にジエネヴァの“手加減”という言葉が思い出された。なるほど、確かにライは“手加減”されていたのだろうと思う。ジエネヴァの戦闘スタイルは恐らく“一撃必殺”を地で行くスタイル。攻撃特化の諸刃の剣に他ならない。それを防戦に変更したのだ、だからあの時の違和感という名のジエネヴァの弱さがあつたのだろう。

ライがそんな思考に沈んでいる間にイヤーカーフの向こう側では話が進んでいく。ジエネヴァが淡々と対戦相手に余命宣告をし、相手が慈悲を乞うのを無慈悲に切り捨て、止めを刺さずにさっさとリングから降りていく様を。

——えぐい。それは相手に止めを刺さないのをジエネヴァの見えない慈悲によるものなのか、ライが判断に迷うくらいの温度の無さだった。ライは一応、ジエネヴァの意外と人らしいところを不本意ながら知っている。それを加味しても、あまりに声に、行動に温度が感じられなかった。

かつて聞き及んだ噂が、まざまざと突き付けられる。組織の忠実なる機械人形^{オートマトン}。それが彼、ジエネヴァなのだ、と。

ジエネヴァは選手控室に戻ったようだ。画面の奥の彼は吞気にも部屋の中を物色している。その様はまるで探検する子どもだ。とても先程と同一人物に思えない。ライの口から自然とため息が零れる。

「君な」

『何?』

ライの小声に合わせるジエネヴァの短い声は至って普通だ。

「……………少しばかり」

手段がえぐくないか? と窺める言葉が寸で止められる。組織としては、ジエネヴァの行動は少しも責められるものではない。あの

場所において、アレは普通なのだ。だからライは話を逸らす事にした。くそつたれが。

「——いやなんでもない。それよりも君の方は大丈夫か？」

『うん？——アンタも通信越しとはいえ分かっただろ？余裕さ。まあ、それで慢心なんてしないけれど』

ライの確認にジエネヴァが少し得意げに告げる。淡々としていても、その口調がジエネヴァの機敏を語る。謙遜さえないソレはまるで褒められたい子どものようだ。その年相応さにライは小さく笑う。

「それは頼もしい話だな」

『まあね。——それよりもアンタの方はどう？』

「こちらも順調だ。とはいえ、この施設の膨大な情報から目的のものを一から探るのは少々骨が折れるがね」

嘘は言っていない。ただ、情報を浚うのはライの本来の仲間であり、大変なのは目的地まで地道に行動するという点だという事だ。画面に流れる文字列が次を促すので、ライはこの客室から出ることにする。目的地は地下五階。奇しくも、派手に注目を集めるジエネヴァと同じフロアだった。

『怪しいところは全部覗いていくんだっけ？』

「そうだな」

——正確にはライの仲間が、だが。ライはジエネヴァの声に適当に相槌を打つ。ジエネヴァから見れば、随分泥臭い仕事に見えるかもしれない。あの子どもは組織の教育を受けているからか、案外器用だ。

『もの見事に脳筋だね、俺らって』

左耳から聞こえるジエネヴァの声は呆れている。それが随分しみじみと実感のこもったもので妙にライの笑いを誘った。

「確かに」

「違う、とライは喉で笑った。」

※※

左耳から聞こえるジエネヴァの様子は控えめに言っても物騒の一言に尽きる。あの子どもの実力は否応なくライの目に入った。それはあの子どもと言う「手加減」がまだ効いているのかもしれない。相手は死んでいないのだから。だが、相手をほぼ一撃で沈め、その命の価値を計るかのように静かに宣告していく様子は異様だ。暇つぶしのような軽さで余命宣告なんて、残酷の一言で済む話ではない。相手がどんな卑怯な隠し玉を使っても、素手で刈り取っていく姿はまるで死神だ。……素手でこれだけ戦えるのなら、相応の武器を持てば更に危険だという事にもなる。ライにはもう、ジエネヴァが子どもには見えなかった。黒の組織幹部。それもライが出会った組織の人間の中でも五指に入るぐらいの手強さだ。

ライの目的地である、メインコンピューターのある場所。それは警備網が厳しい所であり、それでいて見逃してしまいそうな場所であらねばならない。ライの仲間が目を皿にして見つけた場所は表向きはVIPルームだった。要人の為の一室である筈のその部屋は使用履歴が明らかに作為的だという。要は使用しているように見せかけて記録を改竄していた。これは罠か、当たりかの二択だろう。ライの間はソレを当たりと読み、ライも賛成した訳だ。まあ罠であつても問題は無い。ライとて荒事は慣れている上にむしろ得意な方だ。

監視カメラの画像を改竄している、十分に警備員を伸してそのVIPルームの入り口の適当なところに縛って転がしておく。意識はしばらく戻らないだろう。警備員、といつてもそこは組織の幹部のような殺しのプロな訳でもない。ライにとっては赤子の手をひねるくらい簡単な作業だった。

室内はVIPルームに相応しい豪華な装いだった。足音すら吸い込む仕立ての良い絨毯も、照明器具一つとっても芸術品のような粋を集めたような品の良さが分かる。偽の部屋にここまで金をかけるとは金持ちの考えは分からないな、とライの心に呆れが浮かぶ。

その金庫に仕掛けがあり、指示に従い手際良くギミックを解除して目的のメインコンピューターを取り出す。USBメモリに情報を

抜き出す作業の待ち時間、手持無沙汰もあってライの視線が手持ちのノートパソコンの画面に映る。小窓に小さくなった監視カメラに映るジエネヴァの動きが固まっている。左耳から聞こえる情報は対戦相手が元空手の世界チャンプである事くらいだ。そういえば、暴力事件絡みでチャンプになった直後に消えた幻の空手家がいるんだっただか。ライのおぼろげな記憶はそれくらいだ。

——なんだ？

ライがその不可解さに眉をしかめる前にその対戦相手が動いた。

固く握られた正拳突きがジエネヴァに迫る。そのまま顔面にその拳がめり込めば、いくらジエネヴァとてただでは済まないだろう。――

——だと言うのに、当のジエネヴァはただ茫然と棒立ちしたままだ。まさか、そのまま喰らうつもりか？

「ジエネヴァ!!」

『ッ!』

思わず上げてしまったライの焦りの声にジエネヴァが正気を戻したように動いた。相手の拳を紙一重で避けたジエネヴァは距離をとるようだった。

……何がジエネヴァの動きを鈍らせているかは知らないが、このまま放置しておくのは得策ではないだろう。ライ個人の感情を抜きにしても、あの子どもを死なせるのはあまりに下策だ。何しろ、あの子どものバックにはジンの影がちらつく。まあ今更、常に死を纏うあの男が子ども一人の命にどうこう言うとは思えないが。そんな人並みの情があるようには到底思えない。

こういうジエネヴァの不安定さが子どもらしい年相応さで、ライの心を複雑な苦みが過った。どうせなら躊躇しなくらいの強さと悪辣さがあればまた話が違っただろうに、と。舌打ちする時間も惜しい。仕方ない、とライは今だけ腹を括ることにした。手元を見ればUSBメモリへのコピーが終わったところだ。ノートパソコンのキーボードに指を滑らせ、仲間にFBIこちらの仕事を終えた事を伝え、一つの仕事を依頼する。それに了承がすぐに返ってきた。

ならばすぐにこの部屋を出て、行動しなければならぬ。ジエネ

ヴァならば心配要らないだろう、と冷静に思う自分に心の何処かが別の警鐘を鳴らしていた。ライは、そういう己の警鐘を信じる事になっていた。

※※

最短距離を心掛け、急いで試合会場に足を踏み入れた。ライが辿り着いた時には決勝戦の決着がついていた。左耳から聞こえるジェネヴァの決勝の様子は大分手こずっていたようだがなんとか辛勝出来たようだ。このまま優勝賞品を授与できれば任務の目的の八割が終われる。檻に囲われたリングで正に優勝賞品の授与を審判の男が執り行おうとしていた。……己の杞憂か、とライが肩の力を抜こうとした時――。

きらり、とジェネヴァを狙う凶弾が光を弾いた。あの弾丸の角度、監視カメラか……！

『ッ』

「チッ!! オイ、大丈夫かッ」

弾丸はジェネヴァの肩を掠ったらしい。短く息を呑む音がライの左耳のイヤークラフから聞こえる。警戒を怠った自分に舌打ちをした後ジェネヴァに安否を確認する。

ライの左耳に返ってきたのは掠れきった吐息だ。ほんの微かに笑みを含んだソレにライが目を見開いた。

『――計画の内だろ?』

続いて聞こえた勝気にも聞こえる言葉の意味をライが飲み込む前に、ジェネヴァが懐から煙幕弾を発動させる。途端に会場がパニックを起こし、我先にと客たちが出口に押し寄せる。それと同時に黒幕も慌てたのか、ジェネヴァがいる檻の中のリングに向けて銃弾が乱射される。が、すぐにジェネヴァの反撃が飛んできた。すなわち、拳銃による狙撃。ジェネヴァの狙撃は正確に監視カメラを撃ち抜いていく。どうやら相手の目を先に潰していく作戦らしい。――ここでライに

求められるのは……。

ライの頭はすぐに答えを弾き出す。ジェネヴァがいるのは鍵の掛かった檻の中だ。しかも広さは狭く、あれではジェネヴァでもすぐに命がなくなる。しかも南京錠は内側からの破壊は難しい。檻が邪魔をしているからだ。だからここで求められるのはその解錠。

ライはすぐに懐から拳銃を取り出し、五発撃ち抜く。その全てが檻を施錠する南京錠へぶち当たり、破壊することが出来た。事前にこの会場の設計図を知っていたから撃ち抜けたがこの煙渦巻く不透明さでは事前知識なしでは一発たりとも当たらなかつたに違いない。

カシヤン、と金属が地面に落ちる音が小さく響く。

『流石、ライ』

ジェネヴァはすぐさま檻から身体を滑り込ませるようにして出てきた。

ライのすぐ横を風のように通り過ぎる間際。

「……………これからどうするつもりだ？」

「俺に任せて」

ライの問いに言葉少なに答え、あつという間にジェネヴァの背が消えていった。……………正直に言おう、凄く不安だ。主に相手の命的な意味で。

とそこでライの手元のノートパソコンの小さな通知音が聞こえた。この煙い状況でノートパソコンの画面はとても読みづらいが、仕方ない。次への改善点が決まったな、とライは内心ため息を吐いた。ノートパソコンから見えるFBIの仲間からの言葉は、ここに現地警察が踏み入る事が書かれていた。すなわち速やかに退散しないと逮捕されるぞ、と。ライの事はギリギリ庇えるが、恐らくジェネヴァは捕まればそのまま檻の中だろう。……………ふむ。

更にジェネヴァが監視カメラを破壊しながら進んでいる事も情報として伝えられる。その為、姿は確認できていないとも。——どちらが脳筋なんだか。

仲間から送られてきた今のジェネヴァの位置予測へとライは急ぐことにした。

と言つても、同じ地下五階。同じフロアだ。すぐに追いつくだろう。そんなライの思いも裏腹に足止めと言う名の警備員共がライの行く手を邪魔をする。それを苛立たしく排除しながら急ぐ。一人一人の実力は大したことがないが、如何せん数が多い。

結局ジェネヴァに追いつくまでに十分も掛かってしまった。現地警察はもう建物内に入った頃だろう。後十五分もしない内にここにも足を踏み入れる。

ジェネヴァがいるだろう、室内にライが足を踏み入れる。

「あれ？——早かったね、ライ」

ライにそう言つて歩み寄るジェネヴァの手には優勝賞品の純金の像が握られていた。そしてよく見れば、その足元に無造作に転がるのは黒幕の男だった。無様に床に転がっていないければ品の良い老紳士、といった容姿の男だ。……今は見る影もないが。

「……ああ。ジェネヴァ、そいつはどうした？」

ライが「そいつ」と指したのは黒幕の老人だ。——死んではいないよな？と言外に含ませたのライの確認にジェネヴァが小首を傾げた。

「うん？ああ、コイツ？——ちよつとお仕置きしたけど、生きているよ」

「そうか」

果たしてジェネヴァの言う「お仕置き」とライの思うその定義と同じかは疑問が残るがここで掘り返しても意味がない。まあこの老人に散々苦しめられた人々がいることを思えば、これくらいは当然だろう。むしろ命があるだけ幸運だ。

「ん。それで、アンタがここに來たつて事は外が騒がしいのと同様あるの？」

「……………これだけの騒ぎを起こしたんだ。警察が踏み入つてもおかしくないだろ。さっさとずらかるぞ」

「ん」

マイペースなジェネヴァにライは君な、と少し小言を言いたくなつたが寸前で飲み込む。さっさとこの任務を終わりにしたかつたから

だ。

部屋の外はバタバタと騒がしい足音に満たされている。途切れ途切れに警察がどうの、と伝え聞く事が出来た。どこまで警察がこの施設を攻略できたかは知らないが、この騒乱に紛れてさっさとおさらばするに限る。ライのそんな提案はジェネヴァの領きによつて、決定された。

※

いくら騒動で混乱していても警察の目を掻い潜るのは容易ではなかった。ジェネヴァの機転とライの仲間の援護がなければ、今でもあの違法カジノの建物の中で立ち往生していたに違いない。

違法カジノの上階、ホテルの五階から他の建物へとワイヤーを使つて渡り、離れて今ようやくと仕事が終わつた実感が湧く。ジェネヴァのあのローブの中はどうなっているのか。拳銃二丁にこのワイヤー、それに煙幕弾。あの様子ではまだ隠し持っているだろう。

六つの建物をワイヤーで渡り歩くというアクティブさに流石のライも疲れを感じざるをえない。懐から煙草を取り出して火をつける。

腕時計の時刻は午前四時。空はまだ夜空の様相だが、後少して朝日がこのラスベガスを照らすだろう。この騒がしい一夜も終わる。

ふう、と一息を吐くライを横目にジェネヴァは建物の屋上、コンクリートに座り込む。つかれた、と小さくこぼす姿は傍から見てもぐつたりとしてしまっている。まあ、ジェネヴァはライよりも今回動いたのだから、その疲れも当然だ。

「それって美味しいの？」

ぽつり、と呟くように零れたジェネヴァの疑問をライは頭の中で反芻する。おいしい？何が、とまで考えて己が手の中の煙草に辿り着く。ああ、煙草が美味いかどうか。

吸つた事がない子どもからすればさぞ疑問だろうな、とライは少し

愉快な気持ちになった。

「君にはまだ早いだらう。これでも食っている」

確かこの辺にあつたか、とライは微かな笑いと共に胸ポケットに入れておいた飴玉を取り出し、ジェネヴァに投げてよこす。

「なにこれ」

ジェネヴァはキャッチしたものを怪訝そうに見入る。ちなみに味はリングゴ味だ。ジェネヴァくらいの年頃はこれくらいがちょうどいい。

「見ればわかるだろう？甘くて美味しいかもしれないじゃないか」

「……………もしかしなくてもコレ、アンタの恋人から貰ったものじゃないの？」

ライの言葉にジェネヴァは沈黙の後、呆れたようにぼやいた。……存外鋭いな、とジェネヴァの観察眼に感心する。

「まあな」

「しかも、煙草ばかりで身体に悪いからとか言われて」

「…………」

「——凶星か」

まるでライと恋人とのやり取りを見ていたかのように的確なジェネヴァの言葉にライは沈黙を選ぶ。じとり、としたジェネヴァの視線が痛い。恐らく、明美の厚意による飴を譲るなんて、という軽蔑だ。意外とジェネヴァはライの恋人である明美の肩を持つ。それが親愛か、それとも慕情によるものか、ライには判断がつかないが。

ここでもう少し踏み込むべきではないか。ライの脳裏にそんな案が浮かぶ。ここで燻つてもいい事はないし、はつきりさせた方がこちらとしても対策が立てやすい。例え誤魔化されてもそれはそれでジェネヴァの真意が少しは分かるだろう。

「…………君はやけに明美の肩を持つんだな」

「？」

「君と明美に接点はないはずだが…………」

ライの言葉にきよとん、と首を傾げたジェネヴァだが、ここまで言えば流石に悟つたらしい。なるほど、と眩き少し思索する。

「アンタ、意外とお姉さんの事本気なんだな。——と、そこで怒るなよ？分かるだろ、こんな組織に身を置いていれば本気の惚れた腫れたの話は珍しいって」

そこで言葉を切ったジエネヴァは、その軽口を潜め、真剣味を帯びさせた。声は更に淡々と、冷たい響きへと変わった。

「アンタには前に言ったか。——表側と裏側。その領域の話。あのお姉さんは表側の人間でしょう？なら、超えないようにしないと」

線引きされた領域を、そうジエネヴァは抽象的な答えを出した。ライは黙って視線で続きを促す。それだけじゃないだろう？と。

ジエネヴァはため息一つして、渋々口を開いた。

「仕方ないな。じゃあ、もう一つヒント。……俺さ、出来ればあの人達は優しい世界に居て欲しいんだ」

あの人“達”？複数形のソレにライは怪訝さに眉を少しひそめる。ジエネヴァは少し迷ってから、言葉を連ねる。

「手を汚さず、罪に怯えず、命の危機に焦燥を抱くこともない。出来れば、そんな日常が望ましいでしょ。あの人達は優しすぎるから」

どこか遠くを見るような目で達観したように静かに言葉を重ねるジエネヴァは大人びている。それは人生の辛酸を舐めて生きている者の顔だった。

「ま。今の俺じゃ残念ながらそこまでは難しいんだけどさ」

パツと声の調子を戻したジエネヴァが切り替えるように話を終わらせた。ジエネヴァの言うあの人達、とは誰を指すのか。一人は明美で間違いない。だがもう一人は？……二人を繋ぎそうな人物。という事は明美の身近な誰かだ。そういえば、明美の妹がジエネヴァと同じような年ごろじゃなかったか。そこまで考えたライはまさか、とジエネヴァに目を向ける。

「お前……」

言葉を失うライにジエネヴァが人差し指を自身の口に当て、シイと黙るようにジエスチャーをする。

「——そうやって暴こうとするの、アンタの悪い癖だぜ？秘密は秘密のままの方が綺麗だって決まっているんだ」

「……生意気な餓鬼だな、君は」

こみ上げる苦いものを噛み潰す気分でライがぼやけばジエネヴァがふふん、と鼻を鳴らした。

「上等な部類でしょ?」

「フツ、よく言う」

淡々としながらも得意げなジエネヴァにライは乱暴に頭を撫でた。この子どもにはまだ子どもで居てもらいたいものだ。

「そういえば、誤解は解けた?お兄さん」

そう悪戯染みた問いをするジエネヴァにライは頭を抱えた。それはライの嫉妬染みた誤解を正しく理解しているという事であり、軽く死にたくなってくる。

「……忘れろ」

「ん。ま、お菓子一つで手をうってあげるよ」

もうライがジエネヴァに嫉妬することはないだろう。ジエネヴァが明美に抱く情は正しく親愛である事を十二分に理解したからだ。

とりあえず、日本に帰る前に本場アメリカのカラフルで蛍光色なお菓子をジエネヴァに奢ってやる事をライは決意した。嫌がらせ?大げない?ライはジエネヴァの要求に手早く応えているに過ぎない。

ひとまずはこの厄介な組織の幹部は様子見だ。ライはそう結論を先送りすることに決めた。

誰かを救いたければ、偽善だと蔑まれても自己満足に
嗤え

「ひどい顔ね」

シエリー専用と化している研究室に踏み入れて視線が合つての第一声がコレである。人の顔を見て呆れた、と言わんばかりのため息も一緒だ。相手がシエリーじゃなければこの美少女○フェイスの何処がひどいのかと喧嘩を売ってしまいそうだ。

「……久しぶりに会うのに、最初がそれって酷いね」

俺は開けていた部屋の扉を閉めつつ、肩を竦める。先日 лайとの任務から二週間が経った。残暑厳しい夏の名残が消え始め、秋の色が深まり街のそこかしこに秋の風物詩が並べられている。食欲の秋、芸術の秋、読書の秋等の謳い文句は商売上手な店頭を見ればいくらでも実感できるだろう。と言っても、この研究施設の無機質な白一色の壁が常のここには季節感もあつたものじゃないが。今が昼時を過ぎた昼間の二時ぐらいだから、思考も緩むのか。平穩を象徴するような柔らかな日差しは緊張を緩めるものだから質が悪い。

あの濃い内容だつた лайとの任務で擦りきれそうな精神を回復するべく、シエリーの顔を見に来たというのがここに来るまでの流れだ。それで開口一番に先の台詞である。俺、地味にシヨックだ。シエリーさん、この顔が嫌いなんです？

「……別に、顔の造形の事を言っているんじゃないわよ。貴方、酷い顔色をしているわ。体調が悪いのなら、大人しくしていることね」

この無表情にもしよんぼりしたオーラでも滲んだのか、シエリーがぼつが悪そうな表情でぼそぼそと早口で呟いた。うん？

「貴方の仕事は体が資本なんだから、死にたくなければ自分を大事に
しなさい。……何よ？そんなに固まって」

「いや、まさか心配してくれるとは思わなくて……」

「ツ!! ……ともだちだもの。しんぱいくらいするわ。——ほら、そこに座りなさい。今コーヒーを淹れるわ」

シエリーの言葉通りに俺は驚きに身体を固まらせた。まさかシエリーにそこまで心配してもらえとは思っていなかったのだ。今の関係は俺が一方的にシエリーに“友人関係”を押し付けている。そういう感覚でいたから尚更。

だからついぼろりとこの口からこぼれた心配、という言葉にシエリーははく、と真つ赤な顔で無音で口を動かした。それから拙い言い方で、ぼそりと続いた言葉は紛れもないシエリーの本物の心で。照れ隠しでそつぽを向かれた背中がどうしようもなく眩しく見える。は、と意味もなく盛大に息を吐きたくなる。なんだこの感情。これが噂の尊みという奴なのか。胸が苦しくて、この鉄仮面もつられて赤くなりそうだ。

と、そこで俺は左手にぶら下げていた手土産の存在を思い出した。そうだった。この前のラスベガスに行った帰りに買ったお土産だ。お茶うけに、と選んだお菓子数点。直前のライに奢ってもらったアメリカの砂糖菓子で味覚が死んでいたから少し自信がない。あの時の俺はいつも以上に心が死んでいた。ライの野郎いつか絶対仕返ししてやる、と内心震えながら誓っている。ちよつとしたトラウマだあれは。

シエリーに言われるままにいつものように椅子に座ると、紙袋からお菓子を出してみる。こうしてみるとちよつと選ぶのが多かったかもしれない。クッキーにチョコレート、マシユマロに飴細工。彩り豊かなそれらを並べれば殺風景な机の上があつという間にファンシーさを増した。ふむ。

「ちよつと。——いくら女の子が甘いお菓子が好きって言っても限度があるわよ。それに、私そんなにお菓子は食べない事になっているの」
そう言いながら、苦い顔でコーヒーを差し出すシエリーに俺は頷く。ですよねー。

「これ、お土産なんだけど、確かに多かったね。ごめん、シエリー。——お姉さんと半分こしておいてよ」

「お姉ちゃんど？」
「うん」

俺の提案にシエリーは首を傾げた。それに肯定すれば、納得したように相槌を打たれる。

「そうね。その方が利口だね。——貴方、自分の分はあるの?」

「……………おれはしばらくあまいものはいいかな」

「何があつたのよ…………」

シエリーの素朴な疑問に俺は遠い目で答える。そんな俺にシエリーはいつそう呆れるように呟く。それに目を逸らした。言えない、アメリカ本場の蛍光色かつカラフルなお菓子の威力が凄くて、とは。レインボーカラーはあかんやろ、と回想でさえ白目をむきそうだ。

話題、話題を変えよう。そう考えを切り替えて、いつもの質問をすることにした。

「それでアンタの方は変わらない? 困ったこととか、さ」

「ないわよ。——そんなにトラブルに巻き込まれないから安心しなさいな」

「……………そう?」

シエリーは涼しい顔でお土産のクッキー缶を開ける。花の形をした缶は見た目が可愛らしいから選んだ奴だ。あの時は味覚と心が死んでいたから全部見た目と勘で選んだんだよな。

シエリーの簡単な答えに俺は首を傾げた。そうでもないと思うんだよな。俺、この施設に忍び込むように通っているから、偶に遭遇する。シエリーが悪漢に絡まれている所に。悪漢というか、俺と同じ実行部隊の組織の男なんだけど。まあ空気が凍るよね。ロリコン^{クッソ野郎}死すべし慈悲はない。まだシエリーさん十五歳(多分)なんですよ? ……ダメだ、美少女な上に憂いを含んだ雰囲気美人さに磨きをかけてるわ。成程、モテるのは納得だな。

「そうよ。それに、なんだかんだお節介な誰かさんが守ってくれているから大丈夫よ」

「ふーん?」

涼しい顔でクッキーを摘まむシエリーのいう「お節介な誰かさん」って明らかに俺の事ですよね? ……頼られているのは嬉しいけれど、その分心配だ。シエリーは俺みたいに実力行使で拒めないか

ら。俺も組織の中では細い方だけど、シエリーはその上に行く。全体的な細さは変わらないかもしれないけど、これは男女の骨格の差なのだろうか。

決めた。俺の噂がいくら物騒になろうとも構うものか。これからはもつと実力行使をしてシエリーを守ろう。せめて、この組織に彼女がいる間は。シエリーの監視役という大義名分もあるからな。

「じゃあ、アンタの期待に応えてもつと頑張るよ」

「……ちよつと！——冗談よ。危ない事はやめてちよつとだ」

「なんのことかな？」

内心の誓いを上辺の冗談にして眩けば、シエリーの鋭いジト目がこちらを睨む。まったく、こういう時の勘は鋭いんだから少女とはいえない女は恐ろしい。

シエリーのジト目を受け流して首を傾げれば、大きいため息が返ってきた。

「ばか。……何処に友達の危機を望む女がいるのよ。こちらの事も考えて欲しいものだわ」

シエリーは困ったように、目を伏せた。

そんな優しいシエリーだからだよ。なんて口が裂けても言えないな。シエリーを守ろうとするのは俺の勝手な理由故だし。そもそも、この友情だって俺の自分勝手さ故だ。シエリーが胸を痛める価値もない、そんな自分勝手さだ。

俺は知っている。シエリーの優しいところも、冷たく見えて家族思いの温かさがあるって事も、友達を大切に出来る優しい女の子である事も。原作という紙の上の出来事で、事前に。だから、これは自分勝手な事情だ。

※※

上辺だけの平穏が上滑りするような日常がここ数週間過ぎている。

なんか、組織の中の空気がピリピリと殺気を帯びているような気がするのだ。もう季節が秋の終わりに近い。後一か月もすれば冬になるだろう。街の街路樹だって紅葉の鮮やかさは散り、寒々しい木肌が晒されている。まあ今の時間は夜だから街路樹もなにもないんだけど。この都会では星空が綺麗に見えるのかもない。

「どうした？ ジェネヴァ」

「……スコッチ」

今日の任務は珍しくスコッチと二人であたった。内容は法に触れる物品の運搬で組織の仕事では簡単な方だ。そんな仕事を終え、ぼんやりと夜空を見上げていたからだろう。スコッチが不思議そうに問いかけてくる。

ここは東都から少し離れた寂れた町の港の倉庫だ。連なるように立ててある倉庫の一つが組織の持ち物で偶にこういう運搬の取引とかに使われる。ちらほらと立ててある街灯では全てを照らし切れず、俺とスコッチは暗闇の中立っていた。俺は夜目が利く方だからこの暗闇の中でも特に困ることはない。

「なんだ、仕事で疲れたか？ まあ、子どもはもう寝る時間だしなあ」
「……子どもは寝る時間って。まだ十時でしょ。それに、子ども扱いしないで」

地味に続いていた奇妙なランチタイムのおかげでスコッチとは結構気楽に話せるようになった。本当はいけないのだろうけど、制限時間が来るまではいいんじゃないかと甘える事にした。

「で、どうしたよ？ 悩みがあるなら聞かせ？——何、お兄さんからのささやかなお節介だ」

「自分から『お兄さん』呼びは胡散臭いよ、スコッチ。ま、大したことないよ」

「はは、胡散臭いは酷いな」

スコッチの親切に俺は軽く茶化す。それに笑みを返すスコッチは大人だ。ライやジンの兄貴も見習ってほしいくらいだ。

スコッチの気安さに少しばかり口が緩んだ。

「……些細な悩みだよ。答えの決まり切っている、そんなどうしよう

もない悩みさ」

悩みがあるのは本当だ。シエリーに関する悩みだ。シエリーの真つすくな、柔らかな信頼を貰う度に嬉しさと後ろめたさがある。今だけは、と前置きをしておかないとこの手にあるこの友情すら手放してしまいそうになる程だ。……この前実感してしまったからだろうか。

「……………なんか、感慨深いものがあるなあ。そっか、おまえがね。——まあ人生の先輩としては、さ。そんな悩みでも悩む事に意味があるんだぜ？その「決まり切っている答え」だって悩んでいる内に変わっている事だってあるもんだ」

俺の曖昧な言葉にふむふむ、と頷いたスコッチはしみじみと呟いた。そして打って変わって真剣に、真摯な答えをくれた。なによりその言葉には実感の伴う重みがあった。こんな年下の曖昧な悩みにも真剣に答えてくれるスコッチは間違いなくいい奴だ。……間違いようもない、表側の人間だ。

「——ありがとう。そうだな、まだ答えは先でいいかな」

「ああ。精一杯悩んだ方がいい。あがける内はそうした方が賢明だ。案外、思いもよらない所から幸運が降ってくることもあるしな！」

二カツと太陽のように笑って締めくくったスコッチに俺は冷めた一瞥をおくる。

「……………なにその果報は寝て待て、ぐらいの幸運待ち。ダメでしょ」

「えー？意外と真面目だねえ。ま、それはそれとして、帰ろうや。俺もうくたくただよ」

俺のダメ出しに大きさに肩を竦めたスコッチは倉庫の傍に駐車している車の方に歩き出す。コミカルなくらいの軽い嘆きに俺も頷いた。

「スコッチは少し緩すぎなんだよ。——帰るのは賛成、俺もお腹すいたし」

「おーじゃあ、俺が奢ってやろうか？つーか、一人で食べる飯程まずいものはないし、一緒に食おうぜ？」

「……………俺とご飯なんて食べて何が楽しいんだか」

俺のボヤキに嬉し気な声でスコッチは誘ってくる。俺の心からの疑問にスコッチはからからと笑った。

「楽しいさ。——というか、まずい飯じゃなければ上等なのさ」

「よく分からないな、その理論」

「よく言われる」

スコッチの自己理論に俺は首を傾げた。スコッチは軽い笑みでそんなこちらの様子に頷いた。

つらつらと話していたらいつの間にか車の前だ。黒の国産車はスコッチなりの配慮なのかもしれない。というか、ドイツの雨蛙を乗り回す兄貴達が可笑しいのか。

スコッチの運転する車の助手席に乗り込む。シートベルトを締めた後にふと、脳裏に疑問が浮かんだ。

「なあ、スコッチ」

「なんだ？」

「最近、組織の空気が慌ただしいんだけど、何か知らない？」

それは軽い気持ちだった。明日の天気を確認するぐらいの気楽さと言つていい。

「……さて、ね。どうだろうな」

だから不意に聞こえたスコッチの硬い声に反応出来なかった。地雷を踏んだか、と焦って視線を向けた時にはもう普段通りのスコッチの姿だった。気安く、にこやかな、陽気な男。お手本のような明るさだった。

※※

先のスコッチの一件から数日後の事だった。夜の任務帰りの帰り道、組織の施設に忘れ物を思い出した。その施設への近道をゆっくり歩いていた時にスコッチの姿を見かけた。というか、鉢合わせしてしまった。

「あ」

間抜けにも思える声を出したのはどちらだったのか。ピタリと動きを止めた俺とスコッチの動きが再び動き出したのはスコッチの背後から聞こえてくる追跡者の慌ただしい足音だ。

その距離予測、百、七十、五十――。

バタバタと近づくと足音で予測を立ててもなお、スコッチは動かぬままだ。ここは細いビルとビルの狭間にある道で横道なんてない。前に俺がいるし、後ろからは追手だ。前門の虎後門の狼、という絶体絶命の状況なんだろう。……追われているその事情はまるつきり分からないけど。うーん、仕方ないか。

「こつちに」

「は？」

俺は半ば強引にスコッチの腕を掴んで走り出す。コイツ信じられない、みたいなスコッチの視線を背後にビシバシ感じたけど構っていられなかった。

東都のこの組織の施設の近くはもう俺の庭みたいなものだ。ちよつとした近道から、人の通らぬビルの狭間を使った裏道まで網羅してある。今回はスコッチの腕を引いているから人目のつかない近道を通り、廃ビルの屋上まで逃げてきた。俺の後ろでは全速力で走らされ、息を切らすスコッチの姿がある。まあ、ジエネヴァ君めっちゃ足早いから仕方ないね。

ここなら少しは話す時間も稼げるだろう。

「……スコッチ。アンタ、なんかしくじったの？」

俺としては軽いジャブのつもりだったけれど、スコッチにとっては違うようだ。その唇が歪に歪む。

「……ははっ。しくじる、しくじる……ね。まあ、近いか」

スコッチらしくない、渴ききったその歪な笑みに俺は嫌な予感が募る。え？まさか、あの日じゃないですよ？

「？……アンタの事情は聞かないでよくよ。――聞くとアンタを助けられなさうだからね」

「助ける、だって……？」

俺の親切にスコッチの目が見開かれる。そうしてみると猫目に見

えるのが少し可笑しく思える。俺自身、自棄になっっているともいう。「そう。なんだかんだ、アンタいい奴だからね。ここで見捨てると後味が悪すぎて眠れなくなりそうだし」

「は？」

「俺、こう見えても仕事以外は穏健派だから。——この手を貸してあげるよ。猫の手よりは役に立つよ」

目を見開いたままのスコッチに俺は手を差し伸べる。正直、コレがライとバーボンの仲を決定的に違えさせた、スコッチのNOCバレの件なのかは分からない。けれど、手助け出来るのであれば、俺に迷う理由はない。多少のリスクよりもスコッチの命の方が重いに決まっているからだ。——一般人だった俺の心に親しくなった知人の死は些か重すぎる。

「……その提案に乗るには、少しばかり……否、結構怖いな」

俺の差し伸べた手を見て、スコッチの眉は困ったように下げられる。その声は掠れていて、緊張の度合いの強さを伝えてくる。信用……される筈がない、か。

けれど、ここでそうですかなんて言えるはずがない。この差し伸べた手を退けたくない。

「なんで」

「何故？そりゃあ、その提案には一つ欠けているものがあるからさ」

「——かけている？」

俺の硬い声にスコッチはやれやれと諭すように言った。その言葉を反芻すると頷かれる。

「そう。この俺を助けたって君になんのメリットもない。これがどれ程異常なことなのか、分かるか？」

そこでスコッチは少し自嘲の笑みを浮かべ、

「——どんな裏が隠れているのか、邪推するのも無理もない話だと思わないか？ま、散々味方方面していて、どの口が言うのかって君は思うんだろうけどな」

嘲るように言い捨てた。そこには自傷するような、自分の傷を抉る痛々しさが滲んでいる。

「……別に俺を信じなくてもいいよ」

ぽつり。咄嗟に喉を飛び出た眩きは、思ったよりも鋭くなつてしまつた。

「ッ」

「アンタは俺を利用すればいい。俺は俺なりのメリットがあつての行動だし、それをアンタに説明してやる時間も義理もない。だから、俺は勝手にアンタを助ける。ただ、それだけの話だろ」

はく、と言葉が出ないスコッチに畳みかけるように持論を展開させる。要は、悪党特有のポリシーって奴だから気にするなという事が言いたかつた。

「——ッ!! そ、れは。……君は自分が何を言っているのか分かってるのか!?!」

それは咄嗟の怒りに違いなかつた。スコッチがギリツと奥歯を噛み締めてから吠えるような声で詰る。それは他ならぬ俺を心配している言葉だろう。リスクが高すぎる、なんてお優しすぎて泣けてくる。

けれど。

「分かっているさ。……俺は悪党だ。——悪党の利点を一つ教えてやろうか」

スコッチは少し俺を勘違いをしている。だから、それを正そう。

「悪党っていうのは、自分で命の価値を決める。だから、命の賭けどころは間違えやしないのさ」

まあ、間違えた奴はもれなくあの世逝きだからいないだけ、ともいう。それをスコッチに言つてやる義理はないから言葉を言い切つた。ここで死にはしない、と伝わればいいが。

「——ッ、君は」

「!! 待って」

スコッチの口が何事かを紡ぐ前に俺の耳は微かな音を拾う。それは、さながら死神の足音であり、招かれざる客の訪問を告げる鐘の音に違いなかつた。

スコッチの言葉を遮り、背後にある屋上の扉を振り返る。——勢い

よく振り返った俺の尋常じやない様子にスコッチも口を噤んだ。

ギイと錆びついた扉が軋んで開かれる。黒い靴、ズボン、コート。どれもが漆黒のソレに俺の警戒レベルが跳ね上がる。この不審者スタイルに心当たりが二人程いるからだ。どっちも今の俺らには死亡フラグだが、やべー奴と超やべー奴の二択だったら前者の方がまだマシだろう。どの人間に聞いてもその答えの筈だ。

月明かりに照らされたのは黒のニット帽に長い黒い髪。やべー奴の方だったか、なんて俺は場違いにも安堵した。ジンの兄貴が超やべー奴に決まっている。拳銃は躊躇いがないわ、拳句の果てに軍用ヘリすらも引つ張り出してくるんだぞ。怖い。

スコッチを背後に庇う俺を見て、黒髪の男——ライの眉が不機嫌そうに跳ねる。

「……やれやれ。まさかお前が出てくるとは、な。——獲物を横取りする為に目を光らせていた訳か」

その片手には拳銃が握られており、その銃口はヒタリと俺に向けられている。……一応、銃弾を防ぐ為に袖口に忍ばせている暗器を掌に落とす。相手に気取られないように、自然な動きに紛らわせて。

「よこどり?」

「そうだ。元々、その男に用があつてな。お前に邪魔されるとは思わなかったが」

ライは常と変わらぬ様子だ。だが、それは目で見える表面だけの話だ。こちらまでピリピリと伝わる緊張感は殺気と同様の鋭さを感じる。……ここで引くわけにはいかない、か。

ちらり、とスコッチに視線を向ければその顔色は青ざめている。だが、その瞳には決意を秘めている強さがあった。……まるで、死地に赴く兵士の顔だ。

「……スコッチの方はアンタに用はないみたいだけど」
「つまりはそこを退く気はない、という訳か」

ライの最低限の確認に頷く。鋭い視線を受けても逸らさずに見つめ返す。視線を逸らしたが最後、俺は銃弾に撃たれ身動きを封じられる。最悪死も覚悟しなくてはならない。

「そうなるね」

「これが組織の任務だとしてもか？」

「くどい。——今、ここに居る俺は『ジエネヴァ』としてじゃない。俺個人としてここに居る。これがどういう意味を持つか、分からない程愚鈍な訳じゃないでしょ？」

「ホォー？」

ピリピリと肌で感じる圧が強くなる。それはもはや緊張感ではない。こういう闇に身を浸していなければ滅多にお目にかかることはないだろう、本物の殺気だ。すなわち、今明確にライは敵になった。俺がスコッチを庇う事がそこまで致命的であるらしい。ま、当然か。「アンタは犯罪者おれらの流儀は知っているだろう？——来いよ、ライ。アンタがスコッチをどうこうするって言うのなら、先ずは俺をどうにかしてからにしま」

「先日のように無様な様を見せたのか？……あの時本気ではなかったのはお互い様だ。俺の本気をあの程度と思われると困る」

「ふーん？」

殺気立つ俺とライにスコッチは口をはくはくと開閉を繰り返す。言葉も出ない、という状態はこういう事を言うらしい。

「ジエネヴァ。——やめろ。俺の為にそんな事をする必要はない。今からでも手を引け」

「……アンタ、前俺にこう言ったよな？」

「は？今はそんな事言っている場合じゃ——」

尚も言い募るスコッチに俺はその言葉を遮るように口を開く。

「『人生後悔出来るうちが花』だって。ここで俺が引いたらアンタがそれを実行出来ないかもしれないじゃないか。——言い逃げなんて、出来ると思うなよ？」

「ッ!？」

スコッチの顔は見れないから表情は分からないが、それでも息を呑む音は聞こえた。震える吐息は驚愕を伝えてくる。

「……お涙頂戴の人情劇か。虚構のような滑稽さで泣けてくるな」

「——露ほども思っていない癖に」

淡々とライが棒読みで形だけの同情をしてくる。というか、棒読みもさることながら言っている内容も軽く失礼だ。煽るのもいい加減にしるよ？

ここでライが拳銃を撃ってくる可能性は低い、と踏んでいい。サイレンサーもついていない拳銃の銃声はここに野暮な外野を呼ぶに等しい。そしてこの猫の額ぐらいの手狭な屋上に余計な手駒を増やしても邪魔なだけだ。……銃を撃つなら余程の危機がないとない、だろう。多分。

案の定、ライはその拳でもってこちらに殴りかかってきた。咄嗟に掌で弾く。横からの力を加えることでその軌道を逸らした。というか、本当に手加減してないって冗談はよしてくれ。

拳を避けられたのはライの想定内らしい、拳銃を握っている方の手で銃の持ち手の角を使って流れるように殴打してくる。俺の蟀谷こめかみにぶち当たる前に何とか片手で受け止める。が、そこは大人の、それも相当鍛えている力。咄嗟の苦し紛れの防戦は威力を多少は殺しはしても完封はならず。

「ッー」

ガツと鋭い衝撃が俺の脳を揺らした。衝撃でぶれる視界にヤバいと焦る。

「ジエネヴァッ!?!」

スコッチの焦った声に飛びそうな意識をなんとか繋ぎとめる。ここで意識をなくしたら冗談抜きで死ぬ……！ギリッ、と気合で軋む奥歯で現実感を手繰り寄せる。

だが、それでも体勢を崩し、足元がふらつく俺は無力だ。

「あぐッ!?!」

俺の首がライの片手に掴まれ、身体が浮き上がる。ライの大きな手で俺の細い首を掴むのは造作もない。ぎり、と掴まれた手に籠る力に生命の危機を感じる。が、その表層の焦りよりも奥底が囁く。反射でライの手を引き離そうと抗う手の力がこもった。

——これは頸動脈を押さええる力が強い。すなわち意識を落す方に比重を置いたものである、と。

「ッ!？」

僅か一秒にも満たない刹那。そこまでの思考は脳に飲み込まれる前に、本能に行き着く。どうすればいいのか、生き残れるのかが、鮮明に身体に伝わってくる。迷いは、ない。俺はライの手に縋っていた手の力を一気に抜いた。

がくり、と俺の手と身体は力なく垂れさがるのみになる。

「悪いな。——こちらもあのジンに言われては、退けなくてね」

「やめろッ!! その手を離せ!」

意識が落ちる、その寸前。俺を持ち上げるライの腕にスコッチが飛び掛かる。

「邪魔をするな」

「くっ」

俺の安否を気にして中途半端な力しか使えないスコッチと手加減なんて欠片もしていないライの力量差は残酷なまでに圧倒的だ。ライがスコッチを反対の手で簡単に打ち払う。体勢を崩し、スコッチは力なく尻もちをついた。

「ッ!」

だが、それでも。ライはらしくもなく、体勢を僅かに崩す。俺を掴む手の力は緩まないのは流石だが、俺はもう既に行動に移していた。

というか、この死亡フラグも結局は兄貴によるものかよ……!! と腹が立って仕方ない感情も込めて、ライの脇腹に鋭い蹴りをお見舞いしてやる。リミッターが外れかかっていたその蹴りはライの身体を壁に叩きつける程の威力だった。酸素が足りないから威力がいつもの半減だが。

「ぐッ!？」

俺の方も受け身は取れず、べしやりとコンクリートの床にうつぶせに倒れる。げほげほと咽せ、空気を精一杯吸い込む。……まじで死ぬかと思った!と若干涙目だ。

「ジエネヴァ、大丈夫か?」

「げほ、ん。へいき。——さ、これで形勢逆転だ。大人しく、したがってもらおうか。ライ」

スコッチが心配するようにこの背を擦ってくる。それに俺は領き呼吸を落ち着けて、地面に転がるライの拳銃を拾った。そしてなんとか立ち上がり、ライに拳銃の銃口を突きつける。撃つ気は欠片もないけど。

「くッ……」

憎々し気に睨み上げてくるライはまさしく手負いの獣の気迫だ。近づいたら殺されそうである。なんでこんなに殺意が高いかね。無茶なことは言わないんだが。

とそこでカンカン、とここに駆け上がってくる足音が聞こえてくる。勿論、俺だけじゃなく、スコッチやライにもぼつちり聞こえるくらいに焦った音だ。

「！」

三者三様に緊張が走る。スコッチは絶望を滲ませ、ライは逆転を狙う闘志を秘めさせている。俺はと言えば、この後に来る人物に心当たりがあった。まだ気が抜けないとか勘弁してもらいたい。

「……役者はもう一人、か」

俺はぼそつと誰にも聞こえないくらいにぼやく。手に隠し持った暗器を、扉が開け放たれるタイミングと同時に撃ち放つ。ここまであからさまの足音だとタイミングを計るのなんて朝飯前だ。

「……ッ、スコッチ！——って、危なッ」

扉を吹き飛ばす勢いで開け放ったのはバーボンだ。らしくもなく息を切らして、焦っている様子だ。まあその顔すれすれに俺の放った暗器が飛んだから驚いたようだが。

「アンタにも手を貸してもらおうよ」

「は？ ジェネヴァ!? それにスコッチとライも。一体、これは……」

あまりに混沌とした状況に流石のバーボンも一目で状況把握とはいかないようだ。そろそろ、俺の目的を話しておかないとまずいか。主にライの視線の殺気が鋭すぎて、気温の低さとは別の寒気が先ほどから襲ってきている。

「……俺の目的はただ一つ。ここにいるスコッチを助けることさ」

「——何を企んでいる。いえ、企むのはいいですが、その口からジンの

耳に伝わらないなんて、信じられると思っただけですか？」

バーボンは俺の言葉を聞くなり、鋭く睨んできた。冷たい眼差しで正論を告げてくる。結構ぐさつとくる。そんなに悪党の親切が信じられないか？否、信じられないか。そりゃそうか。世知辛い。

「思っていないから、こうして実力行使した訳だけど……」

「まさか。そのライもそうやって……？」

「そうだと云ったら？」

俺の言葉にバーボンは壁を背に座り込むライのその理由に思い至つたらしい。まあ、大体はあつているし、と領けば信じられないと言わんばかりの顔になった。というか、理解不能、とそのイケメンな顔に書いてある。失礼すぎる。

「………僕は君のそのスコッチを助ける動機が理解できない。君にとって彼は別段、大切な身内でも、恩人でも、ましてや友人という訳でもないだろう。命懸けで助けるには些か重みにかける、そんな関係性でしかない筈だ。なのに、君はメリットすらないそんな慈善行為を破綻するリスクを重ねてやり遂げるといふ。……君には申し訳ないが、君のそんな理由のない親切が恐ろしく思えてしまうのです」

沈痛の面持ちで、懺悔するようにバーボンは言い募った。ええ？俺未遂とはいえ、アンタに凶器を投げつけたんだぜ？当たらない自信はあつたからの行動だったけど、それでも、そんな謝られる覚えはないんだけど。ライとバーボンの反応を足して二で割つたら丁度いいのかもしれないな、と少し思う。両極端だ。

「……俺が何をやろうと、どうしようとも、アンタを安心させる確たる証明をするのは無理だと思う。だから、アンタらは腹を括れ。覚悟を決めな。——俺の掌で踊らされるのを利用する勢いでこの手をとれ。……バーボン、アンタは友を助けたいんだろ？」

「!!」

バーボンを焚きつけるように俺は手を差し伸べた。バーボンの目が見開かれる。

「俺らは、この場のみの共犯者だ。……ここには組織の幹部四人もいるんだぜ？怖いものなしだろ？」

俺が軽口を叩けば、バーボンの強張った口元が緩んだ。

「……背後からのフレンドリー^{味方}ファイア^討が怖いですね」

「それは言わない約束だろ。——スコッチとライもそれでいいだろう？」

「はあ……。もうお前、滅茶苦茶すぎるだろう。でも、ま。ありがたいな、ジエネヴァ」

バーボンの的確な言葉に俺は呆れたため息を吐く。スコッチとライに今更ながら、確認をとれば、スコッチは項垂れてしまった。が、切り替えが早いスコッチは次の瞬間には太陽のような笑みを携えて俺に感謝を伝える。

「……ライ？」

反応の返つてこないライにもう一度呼びかければ、ジト目で睨まれてしまった。

「……仕方ない。今回だけだ」

「充分だよ」

ライの渋々とした承諾に頷けば、心底複雑そうな顔をされた。

「君は長生き出来そうにないな」

「ライにだけは言われたくないんだけど」

ぼそつと言われた不吉な予告に俺は本音を返す。俺の言葉にライの視線がこの首に向けられる。もしや手形が残ってしまったのか。

「……悪かったな。それ」

「俺もアンタの脇腹を思いつきり蹴っちゃったから。お互いさまじゃない？」

「そうか」

ライのぶつきらぼうな謝罪に俺は頭を横にふる。こういうのは、喧嘩両成敗で謝る必要がないものだ。両者ともに命の危機を承知で戦うのも、この業界ではままたることだからだ。いちいち気にしていたらそれこそ身がもたない。

「ジエネヴァ、ライ。作戦会議しますよ」

「ん」

「ああ」

その舞台裏に救いはあるか

「最近、ジンの動きが怪しい。近々、鼠狩りをするのかもしれない」
「……そうか。——俺達に出来る事はせいぜいが息を潜める事か」
「そうですね。悔しい事に、今の我々には足りない事が多すぎますからね」

力も、情報も、時の運さえも未だ足りないと自覚できてしまう。
バーボンはそこで握りしめていた震える手を見つめた。スコッチは苦笑を少し浮かべる。

「そう気を張るなよ。張り詰めすぎて、糸が切れちまったら大変だろ？」

「緊張の糸が？」

スコッチの気負いのない笑みにバーボンも口元を緩める。返す軽口に険がなくなつたのをきっかけに室内の空気の重さが軽くなる。

「ああ。後は心の糸、がな」

「はは、心の琴線って奴かな」

「おいおい、人のボケを真剣に返すなよ。恥ずかしいだろ」

「ははは、悪い悪い」

不穩の影はおそらくこういう何気ない所から始まっていたのだろう。後に思い至っても疾うに遅いのは承知でそれでも後悔してしまう。

「ったく、お前はノリがいいのか悪いのかちよつと分からないよな。バーボン」

ああ、この時に気づけたならば、と。

「それはお前もだろ。スコッチ」

これはスコッチである、一人の愚かな男のどうしようもない話だ。

※※

それは運がよかったのか、もしくは悪かったのか。未だに迷っている。

時刻はもう既に深夜を迎えている。東都の繁華街から少しばかり離れたビルの狭間。近くに組織の施設の一つがあり、都内とはいえ地味に治安が危ぶまれる。万が一、組織の闇を一般人が目にしてしまつたらその末路は抹消一択という物騒さだからだ。

季節の変わり目に差し掛かり、秋から冬へと空気を変えている。吐く息こそ白くはないが、どこか肌寒い。それが夜ならば尚更厳しい。だが、今はどうだ。スコッチはそんな寒さなんぞ感じてはいなかった。厚着をしている訳ではない。……ただ、ただ前へ、ここではない何処かに行かなければならない。スコッチの背を押す焦燥をなんと表せばいいのだろうか。分かりたくはない。この足を今は止めるわけにはいかないからだ。

スコッチは思考を別の所に飛ばして、今の緊張感を和らげようとしていた。過剰なソレは今命取りだと長年の経験で知っていた。――遺書のようなメールを親友に送った後だからだろうか、妙に現実感がない。

だから、目の前に現れた銀色の髪に対応が遅れた。思考が上滑りしていた上に、彼の気配は無に近い。華がある見た目とは裏腹な、闇に溶けるような瞳がこちらを見据える。

ジェネヴァ。それが目の前の少年のコードネームだ。早い話、組織での同僚であり仲間となる。

「あ」

なんとも間抜けな声は果たしてどちらのものか。時間が止まったような錯覚が暫し漂う。バタバタと後ろから迫る追跡者の足音で止まっていた両者の動きが再び動き出す。

この状況は限りなくまずい状況だ。この目の前の少年の脅威はもう既に幾たびの任務で垣間見ている。アレに勝てるか？スコッチの自問に答えは返ってこない。勝てるかもしれないし、勝てないかもし

れない。——そして、この局面はその曖昧さで勝負に出てはいけない。それだけは確かだ。

ならば、後ろに逃げるか？同じ組織の人間でも目の前の少年よりは御しやすいだろう。銃弾の一、二発は覚悟の上なら逃げることも可能だろう。

スコッチの葛藤の含む思考は五秒、それぐらいだったように思う。だから、目の前に棒立ちしていたジエネヴァから伸びてきた白い手に、掴まれた力の強さに咄嗟の判断が遅れた。

「こつちに」

「は？」

端的に告げてスコッチの手を引くジエネヴァに迷いはない。

スコッチのこの時の心境をシンプルに表すところだ。

マジか、コイツ。

スコッチは目の前の小さな背を茫然と見るしかなかった。

——何故ならばこの時点で「スコッチ」は組織にとつての敵。

狼に紛れ込んだ鼠、NOCの烙印を押された「裏切り者」だったからだ。

※※

時を遡って数週間前。

表向きの平穏はどうかカタチになっているが、水面下は不穏の波が騒がしい。気が抜けない日々にはバーボンと共に息を潜めていたそんな日常の一部だった。噂ではジンが組織に紛れ込む鼠の情報を掴んだと伝え聞く。誰がその不幸な槍玉に上げられるのか、と戦々恐々としていた。

そんな中、そのジンから下された任務がジエネヴァと二人で挑むモノだった。内容はなんてことのない、少し法に触れる物品の運搬だ。

組織の所有する倉庫での取引も含んだソレは確かにジエネヴァ一人では不安が残るだろう。決してジエネヴァの実力不足という話ではなく、向き不向きの話だ。見た目だけなら、儂い雰囲気少年だ。そんな彼に後ろ暗い取引で相手を威圧するというのは、武力行使以外に手段がない。手間と時間を天秤にかけて、それならば、という判断だろう。ジンの思惑としては、ジエネヴァの社会勉強も兼ねているかもしれない。こんな物騒且つ教育に悪い社会勉強もないと思うが。

任務自体はあっさりと終わり、いざ帰ろうとなった時にジエネヴァの足が止まったのに気付いた。スコッチの後ろを静かに歩いていたジエネヴァはその瞳を虚ろにして夜空を見上げていた。

今は夜だが、この寂れた町の外れにある倉庫だ。当然街灯も数が少なく、照らす力も何処か弱い。薄暗い闇に、ジエネヴァの銀髪が仄かに月明かりを弾く。整った顔に浮かんでいる筈の無表情が、夜の暗闇に吞まれ判別が難しい。

「どうした？ジエネヴァ」

「……スコッチ」

思わずかけてしまった呼び声にジエネヴァの顔がこちらに向く。と言つてもいまだ暗い闇に、顔色さえ分からない有様だ。

静かに返った声が頼りな状況に少しだけ心配になつてしまう。スコッチにとつてジエネヴァはまだ子どもだ。本来なら庇護対象になるべき子どもが大人の都合でそこから外れている。その現状が堪らなく悔しい。

「なんだ、仕事で疲れたか？ まあ、子どもはもう寝る時間だしなあ」「……子どもは寝る時間って。まだ十時でしょ。それに、子ども扱いたくないで」

軽口の中に潜んだ心配はジエネヴァにすっぱりと切られる。何処となく拗ねた物言いのジエネヴァにスコッチの口元が無意識に綻んだ。この少年と強引にランチタイムの共有をバーボンは企みままと交流の機会を持った。それが実を結んだかは知らないが、いつの間にか、無表情で温かみのない人形みたいな少年が人並みの感情を垣間見せるようになった。

スコッチにはそれが少年の、ジエネヴァの成長のように感じられて嬉しく思ってしまう。

「で、どうしたよ？ 悩みがあるなら聞け？——何、お兄さんからのささやかなお節介だ」

「自分から “お兄さん” 呼びは胡散臭いよ、スコッチ。ま、大したことないよ」

「はは、胡散臭いは酷いな」

そのままお節介を焼けば、ジエネヴァから中々厳しい指摘が飛んでくる。それに苦笑を浮かべれば、返ってくるのは呆れたため息。

「……些細な悩みだよ。答えの決まり切っている、そんなどうしようもない悩みさ」

だから暗闇から聞こえてきた、苦悩に染まった小さな声にスコッチは驚いた。暗闇に目が馴染んできたがいまだ、ジエネヴァの表情が遠い。多分、いつもの無表情なのだろうな、と推測しながらの会話だっただけに驚きは一入だ。

だって声の主は “あの” ジエネヴァだ。無表情、無感情、虚無を煮詰めたような瞳の、あの少年からの途方に暮れたような、迷い子のようない。

「………なんか、感慨深いものがあるなあ。そっか、おまえがね。——まあ人生の先輩としては、さ。そんな悩みでも悩む事に意味があるんだぜ？ その “決まり切っている答え” だって悩んでいる内に変わっている事だってあるもんだ」

——恐らくは年相応な悩みだ。スコッチのそれなりな人生の経験の勘がそう告げる。微笑ましいような、苦しいような複雑な思いだ。そんな思いでしみじみと呟き、それから人生の先達として精一杯の答えを口にする。実際、十代の頃の悩みはどれも悩む事に意味があった。それが成長の糧となる事もあったし、時には失敗だって良薬となる。正に良薬は口に苦し、まあ目の前の少年に許される “失敗” が極端に少ないのがとても心配だが。

「——ありがとう。そうだな、まだ答えは先でいいかな」

ジエネヴァの口から静かな、それでいて穏やかな声が零れる。どう

やらスコッチの答えは彼に少しは響いたようだった。少しだけ安堵する。

「ああ。精一杯悩んだ方がいい。あがける内はそうした方が賢明だ。案外、思いもよらない所から幸運が降ってくることもあるしな！」

ニカツと笑って締めくくれば、ジエネヴァから心なしに冷めた視線が返ってきたような気がした。

「……なにその果報は寝て待て、ぐらいの幸運待ち。ダメでしょ」

「えー？意外と真面目だねえ。ま、それはそれとして、帰ろうや。俺もうくたくただよ」

案の定、呆れたような言葉がジエネヴァから出てくる。それに大きさに肩を竦めて、駐車してある方向へと歩き出す。コミカルなくらいの大きさに嘆いてみれば、ジエネヴァも仕方なさそうに足を踏み出す。——スコッチの本音としてはこの薄ら寒い暗闇から一刻も早く、この子どもを連れ出したかった。そうすれば、表情が分からないなんてこともないだろう。

「スコッチは少し緩すぎなんだよ。——帰るのは賛成、俺もお腹すいたし」

「おーじゃあ、俺が奢ってやろうか？つーか、一人で食べる飯程まずいものはないし、一緒に食おうぜ？」

「……俺とご飯なんて食べて何が楽しいんだか」

ジエネヴァのボヤキにこれ幸いと飯に誘う。温かな光の下、まともな料理を食べれば暗い思考なんぞ消し飛ぶつてものだ。それを受けたジエネヴァのぶつきらぼうな呟きに、思わずスコッチはカラカラと笑う。

「楽しいさ。——というか、まずい飯じゃなければ上等なのさ」

「よく分からないな、その理論」

「よく言われる」

スコッチの理論にジエネヴァが首を傾げる。元より肯定なんて期待はしていないから、スコッチは軽く笑う。

つらつらと取り留めもない事を話していれば、車の前までたどり着いていた。黒の国産車は組織の所有車だ。任務のためのソレは他の

ネームド達が乗り回す外車と比べて目立ちにくくて、使い勝手がいい。

運転席に乗り込んで、シートベルトを締める。エンジンをかけ、サイドブレーキを下げる。隣ではジエネヴァがシートベルトを締めていた所だった。

「なあ、スコッチ」

「なんだ？」

まるで天気確かめるような気楽さにスコッチも気負いなく返す。さて、と安全運転に務めますかね、とアクセルを踏み込もうとした。

「最近、組織の空気が慌ただしいんだけど、何か知らない？」

——脳裏に先日、バーボンと交わした会話が蘇る。

ジンが、ジエネヴァの裏に潜む影の男が裏切者を炙り出そうとしてる。白々しい、なんて。

ギリ、と知らず噛み締めていた奥歯を緩めた。スコッチは上手く繕えただろうか。

「……さて、ね。どうだろうな」

気安く、にこやかな、陽気な男。お手本のような明るさを。

※※

ジエネヴァの手に半ば強引に引かれ、走らされ、辿り着いた先は廃ビルだった。距離はそこまで離れていないその場所は曲がりくねった路地裏の片隅にあるような存在感の薄い建物だ。成程、ここならば確かに灯台下暗し、多少の時間ならば稼げるだろう。

ビルの屋上は月明かりだけが頼りだ。街の騒がしい明かりが何処

か遠く感じる。

そんなことを息を切らしながら、スコッチは思考を巡らす。酸素が足りない、苦しい。だが、手を引いて先を走っていた当の本人はケロリと涼しい顔だ。ジェネヴァは相も変わらざるの無表情でスコッチを眺め見る。息一つ乱さないなんてどんな鍛え方をしているんだ、なんてスコッチは理不尽さに嘆きたくなった。

「……スコッチ。アンタ、なんかしくじったの？」

お前が、お前がそれを言うのか。

「……ははっ。しくじる、しくじる……ね。まあ、近いか」

目の前の子ども後ろにはジンの影があると言う。この状況は、そのジンの手によるものだ。裏切者には制裁を、死を、惨たらしい屈辱を。何度も聞いているだろうに。素知らぬ顔でそんな事を聞くのか。そう思ったらスコッチの喉から唾いがこみ上げてきた。

「?……アンタの事情は聞かないでおくよ。——聞くとアンタを助けられないそうだからね」

「助ける、だって……?」

ぎよつと目を見開く。ジェネヴァの真意を探ろうとその無表情を見つめても、目に見える変化はない。

「そう。なんだかんだ、アンタいい奴だからね。ここで見捨てると後味が悪すぎて眠れなくなりそうだし」

「は?」

「俺、こう見えても仕事以外は穏健派だから。——この手を貸してあげるよ。猫の手よりは役に立つよ」

ジェネヴァは穏やかな声で手を差し伸べてくる。……その手が悪魔の手に見えて仕方ない。端的に言えば、恐ろしい。

スコッチは震える唇を一度噛み、どうにか綻ばせる。と言っても、どう足掻いても引きつった歪な笑みにしかならない。これが善意でも悪意でもどちらにせよ、ロクなものじゃない。なんて皮肉なんだろうか。

「……その提案に乗るには、少しばかり……否、結構怖いな」

スコッチの口から溜まった苦みが零れた。

目の前に差し伸べられた手がピクリ、と揺れる。だが、なおその手が下げられることはない。

「なんで」

「何故？そりゃあ、その提案には一つ欠けているものがあるからさ」

「——かけている？」

ジェネヴァの硬い声に、分かるだろう？と諭す。拙い反芻にスコッチは頷いた。

「そう。この俺を助けたって君になんのメリットもない。これがどれ程異常なことなのか、分かるか？」

思わず、口元に自嘲の笑みが浮かぶ。

「——どんな裏が隠れているのか、邪推するのも無理もない話だと思わないか？ま、散々味方面していて、どの口が言うのかって君は思うんだろうけどな」

我ながら酷い事を言っている自覚がある。あれほど、親切ぶってわざとなれば掌を返す。これではジェネヴァを利用しようとしている組織と同じだ。くそつたれが。

「……別に俺を信じなくてもいいよ」

ぽつり。静かな、けれども鋭さを隠しもしない声だ。ジェネヴァのそんな言葉にスコッチは言葉を失った。

「ッ」

「アンタは俺を利用すればいい。俺は俺なりのメリットがあつての行動だし、それをアンタに説明してやる時間も義理もない。だから、俺は勝手にアンタを助ける。ただ、それだけの話だろ」

酷い話だ。はく、と空気を吸い損ねた音でスコッチは呻く。ジェネヴァはこちらを少しも顧みずに淡々と持論を展開させている。

それはただの自暴自棄のようであり、自己犠牲のヒーローの理論であり、ただひたすらに不器用な子ども足掻きに違いなかった。その何処を見ても悪意なんてないだろう、そんなむき出しの言葉の刃

だった。

いまだ、ジェネヴァの手はスコッチの前に差し出されたままだ。とても。とても、酷い話だ。こんなのは陳腐で三流作家だって匙を投げる酷いシナリオだ。

——道具のように利用すればいい。アンタは気にする必要なんてない。これは、自分勝手な、そんな親切だ。

ジェネヴァの声なき言葉を聞いた気がした。

それは、子どもでなくても。一人の人間の尊厳を無視した酷い話だった。性質の悪い事に、この子どもは道具そとうになるのに慣なれてしまっている。慣れて、しまっている。

「——ッ!! そ、それは。……君は自分が何を言っているのか分かってるのか!?!」

咄嗟の怒りはスコッチの自我を焼いた。獣のように吠える、詰る。目の前の子どもに言っても無駄なことを、それでも言わないといけなかった。誰が、こんな惨い事を当たり前にした。そうさせている自分が情けない。

「分かってるさ。……俺は悪党だ。——悪党の利点を一つ教えてやろうか」

ジェネヴァは穏やかに、諭すように言葉を繰り出す。悪党、なんて子どもが言えばごっこ遊びの延長のような微笑ましきがある筈だ。それが、彼にはない。事実だけに聞いているこちらに刺さるモノがある。

「悪党っていうのは、自分で命の価値を決める。だから、命の賭けどころは間違えやしないのさ」

迷いすらない断言ははっきりしていた。それはまるで、その「命の賭けどころ」がここである、と言っているように聞こえてしまう。確かにスコッチは自決するつもりではある。ここで命を絶てば、潜入している親友の命を、安全を守れる。だが、だからといって道連れを増

やすつもりなぞ一つもない。ましてや、目の前のまだ幼いと言える命なんて。

「——ッ、君は」

「!! 待って」

ジェネヴァを窘めようとした言葉は、彼の張り詰めた緊張に遮られる。どうやら異常をいち早く察知したようだ。残念ながらスコッチの耳には何も聞こえなかったし、感じなかったが。

ジェネヴァが勢いよく振り返り、屋上の入り口である錆びた鉄扉を睨む。尋常ならざるその様子にスコッチも口を噤むしかなかった。一体、何が。その疑問もすぐ解ける。

ギィ、と錆びついた音を立て、その扉がゆっくりと開かれる。この閉ざされた退路もない場所に現れる闖入者。つま先から頭の先まで黒の男。スコッチの同僚にして、凄腕のスナイパー。

ライ。その男が拳銃を構え、その銃口をジェネヴァに照準を合わせている。

「……やれやれ。まさかお前が出てくるとは、な。——獲物を横取りする為に目を光らせていた訳か」

スコッチを庇うように躍り出たジェネヴァを見て、ライの眉が不機嫌に跳ねる。

「よこどり？」

「そうだ。元々、その男に用があつてな。お前に邪魔されるとは思わなかったが」

ジェネヴァの簡素な返しにライは律義に頷く。その成り立つ会話は表向きこそ穏やかだが、雰囲気不穏だ。否、不穏なんてものじやない。この張り詰めた殺気にも等しい緊張感は、この均衡状態がいつ崩れるものか分からない不確かさでもあった。

とそこでジェネヴァの冷静な瞳がスコッチに向けられる。一瞬のそれは平素の温度だ。この一触即発の空気でも一つの揺らぎもないらしい。

「……スコッチの方はアンタに用はないみたいだけど」

「つまりはそこを退く気はない、という訳か」

ジエネヴァは変わらぬ声でライの最低限の確認に頷く。とても銃口を向けられて命の危険がある人間の反応に見えない。日常会話のように淀みがない。

「そうなるね」

「これが組織の任務だとしてもか？」

「くだい。——今、ここにいる俺は『ジエネヴァ』としてじゃない。俺個人としてここにいる。これがどういう意味を持つか、分からない程愚鈍な訳じゃないでしょ？」

ジエネヴァが若干苛立たし気に、鬱陶しそうに答える。ジエネヴァの宣言は下手をすれば組織を敵に回す、ともとられかねない危険な発言だ。

案の定。

「ホオー？」

ピリピリと肌で感じる圧が強くなる。息苦しいまでのそれはもはや緊張感ではない。こういう闇に身を浸していなければ滅多に目にかかることはないだろう、本物の殺気だ。

「アンタは犯罪者の流儀は知っているだろう？——来いよ、ライ。アンタがスコッチをどうこうするって言うのなら、先ずは俺をどうにかしてからにしろ」

「先日のように無様な様を見せたいのか？……あの時本気ではなかったのはお互い様だ。俺の本気をあの程度と思われると困る」

「ふーん？」

おいおいおい。スコッチを置いてけぼりにして、バチバチと火花を飛ばさんばかりに殺気立つ二人に冷や汗を掻く。煽り合いを通り越して、これは殺気の殴り合いだ。喧嘩、なんて生易しいもんじゃない。いわば殺し合いの前のつば競り合いに等しい。

スコッチからすれば理解が追いつかない状況だ。何故、ジエネヴァはここまでスコッチを庇うのだろうか。正義感？同情？それとも今までの交流の末の気まぐれか？どれも正しいようで外れのように思える。

「ジエネヴァ。——やめろ。俺の為にそんな事をする必要はない。今

からでも手を引け」

「……アンタ、前俺にこう言ったよな？」

「は？今はそんな事言っている場合じゃ——」

慌ててジエネヴァにとり繕うように言えば、ジエネヴァは端的に返す。は？この緊迫した状況で何を、と言い募るスコッチを遮り、

「〃人生後悔出来るうちが花〃 だって。ここで俺が引いたらアンタがそれを実行出来ないかもしれないじゃないか。——言い逃げなんて、出来ると思うなよ？」

勝気に、ここで負ける気はないと言い切る。不覚にも、目の前の小さな背が大きく見えてしまう漢気だ。……随分前に戯れに言っただけの台詞を引用されたスコッチの衝撃と言ったら、筆舌に尽くしがたい。思ったよりもこの少年は人の話をきちんと聞けて、それを大切にしまい込む性質であるらしい。なんで、ここでそれを知る羽目になるかね。

「ッ!？」

息を呑み、受けた衝撃を呑み込もうとするも失敗する。情けない。

「……お涙頂戴の人情劇か。虚構のような滑稽さで泣けてくるな」

「——露ほども思っていない癖に」

スコッチが後悔を噛み締める間にも無情にも時間は流れる。

ライの淡々とした煽りにジエネヴァが冷たく返す。呟きに等しい小さな声であってもこの狭い屋上では充分に聞こえてしまう。

ジエネヴァが仕掛けるよりもライの方が動きが早かった。ジエネヴァに殴りかかってくる。その特殊な構えは截拳道だったか。対するジエネヴァは最低限の動きで受け流す。掌を使って、相手の力を利用する動きは柔術にも似ているが、違うだろう。——恐らくは中国拳法、又はその亜流だ。ライは初撃を避けられたのは予想通り、とも言ういたげに流れるような動作で二撃目を放つ。拳銃を握った方の腕を振りかぶり、その拳銃のグリップの底でジエネヴァの^{こめかみ}蟬谷を強打せんと振り貫いた。ジエネヴァが咄嗟の反射で出来たのは片手による庇いだてだ。それは大人の全力にはあまりに儂い。威力は多少は殺したのか、けれどそれすらこの一撃には無意味だった。

ガツとジエネヴァの頭が衝撃で揺れ、身体もふらりと力なく前に倒れそうになる。

「ジエネヴァアッ!？」

思わず上げた声にジエネヴァが反応した。飛びそうな意識を何とか繋ぎとめたのか、足元をふらつかせ、それでもどうにかその足で立っている。アレは、脳震盪の症状か。まずい。

「あぐッ!？」

ライの無骨な手がジエネヴァの細い首を無造作に掴む。ジエネヴァの口から苦し気な呻きが上がる。ぎり、と音がしそうな程に強い力がその手に込められている。ジエネヴァの白い手が己の首を掴むライの腕に縋りついて足掻く。

「ッ!？」

ジエネヴァの口から音のない息が零れる。最期の吐息のように、その白哲は苦悶に満ちている。まるで死期の近い人間だ。否、じきにそうなるだろう。

がくり、とその頼りない手が、細い身体から力が抜ける。死に絶えたように、少年の身体はくたりと力ない。

瞬間、スコッチの頭の中が真っ白になった。そこにはジエネヴァ、という少年を生かす事が正しいのか、なんて葛藤は皆無だ。ここで命を見捨てるようなら、そんなことが出来るような男ならばそもそもスコッチの本職は別にあっただろう。

「悪いな。——こちらもあのジンに言われては、退けなくてね」

「やめろッ!! その手を離せ!」

スコッチはたまらず、ライのジエネヴァを掴んでいる腕に飛びついた。

その刹那、ライの切れ長の瞳が一瞬見開かれるのをスコッチは確かに見た。

「邪魔をするな」

「くっ」

だがジエネヴァの安否を気にして中途半端な力しか使えないスコッチと手加減なんて欠片もしていないライの力量差は残酷なまで

に圧倒的だ。ライがスコッチを反対の手で簡単に打ち払う。体勢を崩し、スコッチは力なく尻もちをついた。……強すぎるだろ。

「ッ！」

だが、それでも。ライはらしくもなく、体勢を僅かに崩す。

瞬間、ジエネヴァが牙を剥いた。銀閃の如く鋭い蹴りがライの脇腹に刺さる。無理な体勢での一撃の割に威力が重く、ライの長身がいつも簡単に吹き飛んだ。ライが壁に叩きつけられ、鈍い音をたてる。

「ぐッ!?!」

ジエネヴァは受け身を取り損ねたようでぐしゃりとうつ伏せで倒れ伏す。げほげほと咽るその背中にスコッチは慌てて駆け寄る。

「ジエネヴァ、大丈夫か?」

「げほ、ん。へいき。——さ、これで形勢逆転だ。大人しく、したがってもらおうか。ライ」

スコッチが背を擦って、ジエネヴァの呼吸が落ち着いた。そしてジエネヴァはライの落とした拳銃を拾い、その銃口を突きつける。それは先程と逆の凶になった。

「くッ……!」

憎々し気に睨み上げてくるライはまさしく手負いの獣の気迫だ。鋭すぎるその瞳にこもる殺意の強さは視線だけで人を殺せそうだ。怖い。そしてそれを真正面で受けている筈のジエネヴァの顔の涼しいこと、否この鉄仮面は常の表情だった。

とそこでカンカン、とここに駆け上がってくる足音が聞こえてくる。——己だけでなく、この場に聞こえるぐらいに忙しない音だ。これは、考えるまでもない。組織の追手の音だろう。

「!」

三者三様に緊張が走る。

ジエネヴァが扉が開かれる瞬間に何かを投げるように手を振り貫いた。——きらりと月光を弾く金属の光が一瞬見えたことから、小さなナイフか何かだろうか。

「……ッ、スコッチ!——って、危なッ」

扉を吹き飛ばす勢いで開け放ったのはバーボンだ。らしくもなく

息を切らして、焦っている様子だ。ジエネヴァの放った武器がその顔すれすれに飛んだのに、その勢いは落ちる。というか、当たらなくて良かった。ジエネヴァならば、そこから辺計算済みなのかもしれないが、スコッチの心臓には悪い。

「アンタにも手を貸してもらおうよ」

「は？ジエネヴァ!? それにスコッチとライも。一体、これは……」

あまりに混沌とした状況に流石のバーボンも一目で状況把握とはいかないようだ。ジエネヴァは頓着せずにマイペースに話を続ける。

「……俺の目的はただ一つ。ここにいるスコッチを助けることさ」

「——何を企んでいる。いえ、企むのはいいですが、その口からジンの耳に伝わらないなんて、信じられると思っっているのですか？」

ジエネヴァの真意の計れない言葉を聞くなり、バーボンの瞳に険しい光が宿る。冷たい眼差しと同等の声で相手を威圧する。

ジエネヴァはそれでも揺らぐことはない。無表情でこてり、と小首を傾げた。

「思っていないから、こうして実力行使した訳だけど……」

「まさか。そのライもそうやって……?」

「そうだと云ったら?」

ジエネヴァは端的に言葉を発する。それにバーボンの瞳がまさか、と見開かれる。どうやら、壁に力なく座り込むライの様子にその原因をジエネヴァに見出したようだ。……なんか少し誤解が生じてないか? バーボンの言葉がまるでジエネヴァが情け容赦なくライを甚振った、ぐらいのニュアンスなんだが。しかもジエネヴァの圧勝的な。まさかな。

バーボンの顔が理解不能、と言わんばかりに歪む。わかる、とスコッチは内心同意した。この状況意味わからないよな。というか、ジエネヴァの真意がよく分からない、というのが正しいか。

「……………僕は君のそのスコッチを助ける動機が理解できない。君にとって彼は別段、大切な身内でも、恩人でも、ましてや友人という訳でもないだろう。命懸けで助けるには些か重みにかける、そんな関係性でしかない筈だ。なのに、君はメリットすらないそんな慈善行為を

破綻するリスクを重ねてやり遂げるといふ。……君には申し訳ないが、君のそんな理由のない親切が恐ろしく思えてしまうのです」

沈痛の面持ちで、懺悔するようにバーボンは言い募った。……俺らみたいのには、善意と恩を疑い、踏みにじるような行為に躊躇いがどうしても出てしまう。心が、良心って奴が悲鳴を上げる。目の前の少年の経歴の一端を知っている身としては、心が痛いのも当然だ。……これが純度100%の善意だったら胃に穴が開いてしまいそうだ。いっそ、悪意があつてほしいと身勝手にも思ってしまう。そこはバーボンにとつても同じだろう。

「……俺が何をやろうと、どうしようとも、アンタを安心させる確たる証明をするのは無理だと思う。だから、アンタらは腹を括れ。覚悟を決めな。——俺の掌で踊らされるのを利用する勢いでこの手をとれ。……バーボン、アンタは友を助けたいんだろ？」

「!!」

ジェネヴァの揺るがない、淡々とした声がバーボンに向けられる。差し伸べられたジェネヴァの手にバーボンの瞳が見開かれる。——こんなの十三歳の子どもが決めていい覚悟ではない。利用され、利用するような殺伐とした関係をよしとするなんて。

「俺らは、この場のみの共犯者だ。……ここには組織の幹部四人もいるんだぜ？怖いものなしだろ？」

それでもジェネヴァが前を向く。軽口を含めてバーボンに伝える。——これが、精一杯の誠意なんだ、と。信じる、とは言わないのがジェネヴァの誠意のカタチだ。

バーボンの口元が綻んだ。

「……背後からのフレンドリー同ファイア士が怖いですね」

「それは言わない約束だろ。——スコツチとライもそれでいいだろ？」

「はあ……。もうお前、滅茶苦茶すぎるだろう。でも、ま。ありがとな、ジェネヴァ」

気づけば、己の口元も笑みを浮かべていた。

とりあえずはこの手をとつてもいいんじゃないか。スコツチは腹

を括ることに決めた。ここまでお膳立てされたんだ。生きていくことを、諦めなくてもいいと言われたような気がした。

※※

「——ヒロ？」

「おー」

ここは東都の郊外に建つマンションの一室。秘密裏に借りている部屋は、もしもの時の保険に備えた部屋だった。その為、生活感は最低限であり、部屋に積まれた未開封の段ボールたちの上の埃がその歳月を語っていた。

スコツチ、否もうその男は便宜上死んだ。元通りの、諸伏 景光 “に戻ってもいいのだろう。その証拠に親友からの呼び声が懐かしいあだ名だ。潜入してからの年数は少ないのに随分昔のように感じる。

親友、降谷 零の声に気だるげに景光は返す。今日は沢山衝撃的な出来事があり過ぎてもう泥のように眠ってしまいたい。まさか己で遺品整理なる事をする羽目になるなんて何処の誰が思うだろうか。少なくとも景光は予想できなかつた。

「変装、そろそろ解いたらどうだ？落ち着かないだろ」
「……そうだな」

零の言葉に頷く。今、景光の顔は生まれ持ったものではない、別人の顔だ。目じりの曲線の柔らかな、穏やかそうな善人の青年の風貌だ。猫目に似た目じりのきつい景光の顔からは随分正反対の顔立ちの癖して、どことなく面影があるような気がする。そんな絶妙な変装

だった。これは、ジエネヴァが『今できる範囲』の変装術だという。彼が言うには道具が足りないとか言っていた。

それを景光はべりつと剥ぎ取った。特殊メイクの変装は、早い話変装マスクを身に着けるようなものだ。こういうと雑に聞こえてしまいかもしれないが。

「さて。——どうしたものかな」

「——どうするも何も。もう俺は職場に戻れない。……そうだろう？」

「それは……。ああ、そうだな。その通りだ。だけど、ヒロ。お前がそれで諦めるような奴か？ 違うだろ」

零の思案する言葉に景光は嘆息するように吐き捨てた。それに言葉を詰まらせ、けれど観念したように零は頷いた。だが、それは同調するような肯定ではなく、焚きつけるような激励だ。

今日は何度己を情けないと思えば気が済むのだろうか。景光はグツと握った拳に力を籠める。違うだろ。そこで、指を啜えて眺めるような、そんな情けない所までは堕ちてはいないだろう？ 俺は。

「……そうだな。ああ、そうだ。この日本を守る、というのは一つだけのカタチに拘る必要なんてないよな。——なあ、零^{ゼロ}。お前の協力者、とかどうだ？」

「立ち直りが早いな。……そうだな。すぐには無理だろうが、なんとかなるだろう」

景光の提案に零の口元がにやりと歪む。まあ悪い笑顔。

「俺の戸籍やその近辺は？」

「……まあ、僕は生憎と違法捜査も辞さない性質でして」

最低限の確認に、この親友は中々ギリギリな発言を返してくる。おいおい、その口調バーボンの奴じゃねえかよ。否、最近増やした『探偵 安室 透』のつもりかもしれない。どっちでもいいが。

「責任は取るしな、お前」

「はは」

景光の呆れた声に渴いた笑いが返ってくる。否、ここは笑う所じゃないだろう。

ということとは、だ。

「……掃除するか」

「そうだな」

景光が言い出したことだが、そこで嫌そうな声を出すなよ親友。面倒なのは分かるが。

※

掃除をしながら、手を動かしながら雑談に興じることにする。と言つても、話題は今日のアレである。だから、この方がいいだろう、景光はそう判断した。

「なあ、バーボン。ライは結局どっち側だったと思う？」

「……意外ですね？ 僕はてつきり、ジェネヴァの方を聞いてくると思いましたが」

埃は上から掃除するべし。その教えの通り、景光は脚立を引っ張り出し、カーテンレールの上やら、エアコンの上の掃除やらを始めていた。バーボン、と呼ばれた親友の順応は早い。もうバーボンのノリで答えてくる。その手元は荷ほどきで忙しないが。

「……話を聞く限り、ジェネヴァは恐らく黒だ。アレが潜入捜査官のやり方な訳ないだろ」

そもそもジェネヴァは未成年だ。何処の世界に子どもスパイがいるというのか。そういうのは漫画だけにしてほしい。

「まあ、そうですね。——ライはジンの反応と今回の件から鑑みるに、黒に近い灰色。もしくは白に近い灰色、でしょうか。確証がないだけに、断言は出来ませんね」

ここでいう、黒は組織、白は潜入捜査官という簡略さだ。バーボンは複雑そうな顔で推論を述べる。ただ、珍しい事に歯切れが悪い。

「そうか？ お前、あの後ジェネヴァに言われていたじゃないか。ライ

と不仲を演じるように、とか」

「まあ。アレはリスクの分散をしていたにすぎません。仮にライの不始末でバレそうになっても僕らまで繋がらないようにという、気休めですよ」

「——それだけか？ライが、俺達と同じ立場だとすればしつくりくると思うがな」

景光の言葉にバーボンは推論を重ねる。だが、それにしてはやる事が遠回りというか、面倒だなと思ってしまう。

「確かに。——けれど、ジエネヴァがどうしてその情報を知っているのですか？僕らですら、知らない情報だと言うのに？」

これ以上、あの子が脅威的だと、恐ろしい可能性を増さないでほしい。そうバーボンの胡乱げな目が言っている。景光はそれには同意する。確かにな。

「どれ程重ねても、所詮は推論の域を出ず、か」

「推理をする者の宿命ですね。僕らは証拠なしに、結論は出せない」

景光の重い呟きにバーボンは頷く。

「冤罪は御免だしな」

「その通り」

軽口で返せば軽い調子で頷かれた。

今日一日で、スコツチという男は死んだ。諸伏 景光という男も殉死するのだろう。だが、それでもこの命は続いていく。生きていれば出来る事がある。そんな当たり前な事実が、漸くここで思い出せただけで上々だ。

例えば別の名を名乗ることになろうとも。この顔に別人の被り物をしようとも。この声を切り捨てようとも。それでもここに宿る志が死ぬことはない。

それだけでまだ歩けそうな気がした。

元来、景光という男は前向きな性質だ。

まずは当面の偽名を考える事から始めよう。

後日、佐藤 光という自称敏腕アルバイターが東都の米花町にある喫茶店に勤めることとなる。流石に元社畜にニートはつらい。

喫茶店の名は“ポアロ”といい、名探偵の名前なんて縁起がいいなと早速気に入る訳となる。

更に付け足すならば、その二年後に小さな名探偵が陰ながら活躍する時となって、ジエネヴァというコードネームの少年が元気に働く自称敏腕アルバイターの姿を見て頭を抱える羽目になるのはまだ遠い未来の話だ。だって、彼の顔を考えたのはそのジエネヴァであり、教えたのも彼だ。当然、その正体にも秒で気づく。気づかない愚鈍さとは無縁だった故に。

親愛を知らぬ獣が絆されるものか

あの衝撃の一夜から早一週間。表向きは穏やかに日々は過ぎていく。スコッチの裏切りは水面下での動揺はあれど、すぐに収まった。そう、組織では別段珍しい話ではないのだ。あの時にお問い合わせ、バーボンとライの仲間意識に亀裂を入れると見せかける計画は思ったよりも上手く実行されている。噂では、スコッチを始末したライをバーボンが逆恨みしている、とか見当違いな事が囁かれている。事実はまだもう少し複雑なものな。

時刻は午後七時半を過ぎた頃。夕飯時の時間で、俺は今日は食べたものを食べようと朝から楽しみにしていた。

目の前にぐつぐつと煮えたぎる鍋の様子を食い入るように見つめる。カセットコンロの上に置かれた土鍋の中に白菜や長ネギ、えのき、豆腐、豚肉が沸騰による泡で揺れている。煮えていい匂いが漂い、食欲を刺激する。キムチ鍋の香辛料特有の刺激臭もただただ美味しそうという感想しかない。最近寒くなってきたから鍋の季節だな、と思いついたが吉日。その日の夜には鍋の準備が出来て実行してしまった。それにここ暫くジエネヴァ君が成長期なのか、やけに腹が減るのだ。まだ十三歳だし、伸びる可能性は無限大だ。

「おい」

目の前の不景気そうで凶悪なお顔がなければなお良かったのにな、と俺は聞こえてきたド低音の方へ渋々視線を上げる。そこには今日も今日とて眉間に盛大な渓谷を刻む、我らが兄貴の姿があった。ちなみにこうやって我が物顔で我が家に上がり込み、夕ご飯を食べるのは珍しくなくなってきた。毎週のように居るんだものな、この人。

その暑苦しい黒のコートは脱いであり、インナーのタートルネック姿になっていた。そして、その長い銀髪は頭頂付近で一つに纏めて結つてある。所謂ポニーテールだ。ちなみに食べる時に一々髪を掻き上げる兄貴の姿に俺がキレて無理に結んだ結果だ。ラーメンやら汁物系で一々そんな事やられたら少しは苛立ってしまうのも無理はないと思う。それが今ではスムーズに結ばせてくれる。まあ大人げ

ない抵抗は良くないと思う。というか、その長い髪は地毛だったんかというのが当時の衝撃だ。え？カツラじゃないの？マジで？

「……何？ああ、鍋ならもう少し待って」

後五分は煮たい、と俺はおぎなりに兄貴の声に返す。今日は平穩に過ぎた一日で気分がいいから終わりもそうあつてほしい。

「そんな事を聞きたい訳じゃねえんだが……。——確かに、お前にはどうでもいい話かもしれないな」

「ふーん？俺には関係ない話？」

兄貴の若干呆れた声に、俺は締めはやっぱり雑炊かと考えながら深く考えずに口にする。

はあ、と目の前からこれ見よがしに吐かれたため息。ダイニングテーブルで向かい合わせに座っているので聞こえない訳がなく。……なんなの？と視線を鍋からもう一度兄貴に戻す。

「……まあドチビだから腹いっぱい食って伸ばせよ」

「は？喧嘩なら買うけど？」

可哀想なものを見る目でド失礼なことをぬかす兄貴に言い返したのはほぼ反射だ。思わず低い声になった俺に兄貴は首を緩く横に振る。

「そんなくならない喧嘩は御免だ。事実を突かれて怒るガキの相手をするのは疲れるしな」

「……で？」

兄貴の息をするように出てくる煽りには乗らずに出来上がった鍋から兄貴の分をよそる。それで元々なんの話なの？と手渡しついでに促す。それを受け取る兄貴の顔は複雑そうだった。何その苦虫を噛み潰したような、理解しがたい何かを見るような顔は。とりあえずそのしかめっ面は止めてほしい。

「……時々お前が大物なのか、ただの馬鹿なのか分からない時があるな。——まあいい。お前、この男は知っているな？」

「大物に決まっているでしょ。——で、知っているも何も。何度か一緒に任務をこなしたし、覚えているよ」

俺は兄貴が机の上に滑らせた写真を手に取り、頷く。というか、ジ

ンの兄貴の煽りスキルの高さには脱帽ですわ俺キレそうなもの。

手の中の一枚の写真の写りは悪いものの、そこに映っている人物の顔の判別くらいは付く。如何にも呆れました、とため息と一緒に答えを口にする。

「スコッチ」。——よくバーボンやライとも組んでいるんだっけ」

「ああ、よく知っているな」

「で、そのスコッチがどうしたって？」

俺の答えは及第点に届いたらしい。簡潔なその領きにそれで？と続きを促す事にする。どうせ、この兄貴の事だ。ただの世間話程度で写真まで出てくるものか。これは恐らくは——。

「どうやら俺の推察は正しいらしい。」

兄貴の、ジンの瞳がこちらの促しに冷たく細められる。いや、そんな圧を出されても鍋を食べながらだと凄じ締まらないのが困る。——俺を笑わせにくるのは止めてくれ。

「——ソイツは組織の裏切者だ。先日ライに始末させて、もうこの世には居ないがな」

「へえ？」

「それで？ソレが俺になんの関係が？」

「彼奴はサツサと始末したらしい。——が、それがどうにもな」

「仕事が早いのはいい事じゃないか。そうだろう？」

腑に落ちないらしい兄貴は未だその眼光を鋭くして気を張り詰めている。この話の流れはまずいな、と俺は軌道修正することにした。だって必殺仕事人並みの始末効率兄貴の望みの筈だ。兄貴自身だって「疑わしきには罰を」とか言ってさっさとあの世送りにしているしな。

そんな俺の言葉が気に入らないのか、兄貴の眉間の谷がいつそう深くなる。怖い。

「……まるで霞を掴まされたようで、気に入わねえ。彼奴がサツサと始末しちまったせいで、裏切者の古巣も分からない。今更何処の狗だとして、組織の敵になるとは思えないが……」

成程。スコッチの所属も、更に言うなら身元も分からないから気に

くわない、と。まあ、実際ソレが分かってしまったら、組織の手による密偵がどうこうするのだろう。危ない危ない。……そんな事をされてしまったら、原作前に組織の傘下に警察組織が屈するとかバッドエンドもいい所の展開になる可能性もあったのか。怖。

「……まあ、兄さんはライが気に入らないからそう思うのかもしれないけど。問題のどちらかが片付いただけでもいいじゃない。よく言うでしょ、二兎を追う者は一兎をも得ずって」

「ハッ、よく回る口だな。まあ確かに漁夫の利にしては上出来か。獲物を得られぬ猟師ほど悲しいものはないものなア？」

「そういうこと」

こちらの説得が効いたらしい。兄貴の不機嫌そうな顔に悪そうな笑みが浮かぶ。口端だけを吊り上げて笑うその笑みは流石堂に入った悪党ぶりだ。まあ、実際兄貴はその悲しい猟師、その人になっている訳だけど。口に災いあり、言葉にしない方がお利口だ。

「ん、おかわり要るでしょ？」

「ああ」

そろそろ頃合いだろ、と兄貴の空いた器にもう一度キムチ鍋をよそる。……この人結構食べるの早いんだよな。かといって食べ方が汚いという訳じゃないのが救いだけだ。

ふと、そう言えばと思いついたことが口を突いて出た。ぽろり、と。

「兄さんって、煙草止めたの？」

「あ？」

こちらの思い付きにギロリと睨みが返された。怖い。あ、なんでもないですもぐもぐするのに戻ってくださいほんと。あまりの迫力にそうやって撤回しよう、と、俺の口が開く前。

「……別に偶々だ。今吸う気がしねえだけの話だろ」

「……………」

「それよりもジエネヴァ。冷蔵庫からビール取ってこい」

「は？」

「ここに来た時に入れておいたアレだ」

衝撃的な発言で固まる俺に兄貴はおざなりに短いお使いを命じる。

は？今日来た時に冷蔵庫でがさごそしているな、とは思っていたけどまた酒いれてたんかい。俺は賢いからそのツツコミを口にすることはないが。

俺は大人しく指示に従い、冷蔵庫からビール缶を幾つか取り出して兄貴の前に置く。コン、と木の机を叩く涼やかな音が響く。

「はい。というか、ビールとか珍しいね」

「ん。まあな。気分が悪けりや酒も不味くなる。それで高い酒は勿体ないだろう。——というか、お前。そのなりじや煙草も酒も女もまだなんだよな？」

「……何突然」

ビールを受け取った兄貴が突拍子もない事を言う。まだ飲んでいないのにもう酔ったのか兄貴さんよ。

「いいや？……酒ぐらいなら、あと二年、か？」

それぐらい経ったら合法だよな、とか兄貴の口から意味不明な発言が続く。おい、ここは少年誌だぞ。そんな訳あるか。というか神妙な顔して天然ボケな発言を続けるのは止めてほしい。こつちはツツコミの手を抑えているんだぞ。この手がツツコミの衝動のあまり震えそう。

「なんの話なの？」

「何、上手い酒の飲み方を教えてやる話だ。……煙草で硝煙を誤魔化すような男になるより、お前は上手い事やるのだろうしな」

「……二年、って俺まだ十五歳の計算だけど？」

「充分だろう」

兄貴の言葉に俺は呆れて返す。それをものともせず、ケロリと返す兄貴は流石だ。まあそれで怯むような小悪党なら原作も二十年を越す連載を続けてはいないだろう。

「はあ……」

「そもそも今教えてもいいくらいだ。お前は知らないかもしれねえが、この業界じゃ酒や女を用いた罫は珍しくもない。それに掛かっちゃもう哀れな贄も同様にな」

「ふーん？」

要はハニトラとかのやべー罨への耐性は早めにつけておけ、ってことか。その点ならジエネヴァくんは結構問題ないと思うんだけどな。そもそも俺を捕まえられるようなやべー奴ならそんな小手先の罨なんぞ使わずともいいくらいに化け物クラスだろうし。

「女の方は……。まあシェリーが居るんだろうし、心配は要らねえか」「いやシェリーはそういうのじゃないんだけど」

よそつた鍋の具材をもぐもぐ咀嚼しながらの会話は我ながら下品だ。というか、全体的に兄貴が悪いと思うんだけどな。何度も言うけど、ここは少年誌の世界だ。あまりレーティングを上げるような発言はしない方がいいと思う。どうすんだよコレ。

というか兄貴のシェリーと俺は恋仲的な発言に我慢できずについ否定してしまう。俺の否定に兄貴の目が面白そうに眇められる。はは、こいつ思春期だな、みたいな微笑ましい反応は切実に止めてほしい。俺とて羞恥心ぐらいいはある。何が悲しゆうて実兄に性事情をあけすけにしないといけないのか。

「ほお？この俺の耳にもお前のシェリーに対する献身は聞こえるのにか」

「なんのことやら」

「随分、甲斐甲斐しく守っているそうじゃないか。まるで、騎士^{ナイト}気取りの振舞いだそうだが」

「なんのことやら」

「困うなら早めにしておけよ。あの手の女は羽化するのも早いからな」

「ナンノコトヤラ」

俺は某青鳥のboatの如く、棒読みを繰り返す。しらばつくれるともいう。

流星にここまで続くと俺にも分かってくる。このクソ兄貴は俺を擲擲っているのだ、と。というか十三歳の少年に困え、とかえぐい発言は止めろ。お前はセクハラオヤジか。

「羽化した蝶はさぞ美しく羽ばたくのだろうなア？」

ひらひらと。兄貴の目が愉悦に笑みのカタチに細まる。その目が

言っていた。

その美しい蝶の羽を手折るのはさぞ気分がいいだろうな、と。ぶちり。

「——シエリーに手を出したら、いくらアンタでもぶち殺す」

理性の鎖は断ち切られ、その衝動のままダン、と箸を机に突き刺す。衝撃でカセットコンロ諸共鍋が揺れ、少し零れる。しーん、と静まり返った室内に静かに響く鍋の沸騰の音はシユールだ。

怒りで妙に感情が冷え込む感覚がする。頭に血が上っているのに、どこかそれを冷静に見る自分が居る。そして目の前の敵を如何に効率よく潰せるかを計算し尽くすのだ。

だって、俺は知っている。あの原作という紙の上でシエリーとジンのやりとりも。あのシエリーの怯えようは尋常じゃない。つまり、あの時点で何かあったのではないか。ジンがシエリーの心の柔らかい所を傷つけるような、何かが。それが今再現される？ふぎけるなよ。

普段だったら絶対しないだろう、あのジンに殺気の込めた視線で一瞥してやる。もし人を視線で殺せるなら、今殺しているだろう。そう思えるぐらいのモノだった。

「……ッ、ククッ」

ブフツ、と間の抜けた音が兄貴の口から聞こえる。笑いを堪えるのに失敗した、そんな空気の抜けた音が。

は？

「クハハハ！ それで自覚がないとは笑わせるな。——そう睨むな。冗談に決まっているだろう？それに前言った通り、俺は割り切れない女は抱かない主義だ」

「……それって割り切れるようになったら抱ける、って事だろ」

爆笑、ぐらい珍しく笑うジンの兄貴に俺は複雑な気持ちで言い返す。ふぎけんな、そんな曖昧な定義信用できるか。

「ククッ、成程な。だが、それはないだろうよ」

「なんで」

「——それが分からねえようならまだ早いって事だ。馬に蹴られて死ぬ間抜けにはなりたくはねえしな」

「はっ。」

可笑しくて仕方ない、と兄貴は喉を鳴らすような笑い声を零す。……発言の内容は兎も角、俺が揶揄われたのは確かなようだ。——シンプルにキレそうである。ふざけんなヒヤツとしただろ。

「青いな。——まあ、仮にフラれても気にするな」

「おっさんみたいだよ、兄さん」

発言が、とマイペースな兄貴にツッコミを入れておく。これくらいの意趣返しぐらいなら許されるはずだ。俺は机に刺さった箸を抜き去る。げ、机に穴が開いたじゃないか、おのれ兄さん。

「今のお前に何を言われてもな。——後、ベルモットにはそういった意味では気をつける。奴の十八番は女の色香を使った甘い罫。美しい蝶かと思つて追いかけてみれば、自ずと奴の張つた罫に足をとられちまうなんて事になる。アレは外がわだけ見れば美しい蝶かもしれないが、その実態は狡猾な蜘蛛と言つたところか。ククツ、絡じよろうぐも新婦は恐ろしいな」

「……流石の俺でも兄さんの女をとる訳ないよ……」

兄貴に愉快そうに忠告をされる。その内容にドン引きしながらも、どうにか絞り出した言葉は我ながら笑えないモノだ。というか、そうなる可能性の方が低いだろう。いくらベルモットだつてシヨタコンなんてことは……あるね？ そう言えばあしゆじんこうの名探偵くんにご執心なんだっけ？ ベルモットさんの本来の年齢を考えると、小さくても大きくても両方ともアウトだ。なんてことだ……。

「アレは俺の、つて訳ではない。——そうだな、お前に分かりやすく言えばその場限りの付き合ひってものもある。大人つて奴は色々逃げ道を考えるのに必死なんだぜ」

「虚しいものだね。——そんな付き合ひなんて」

しかも爛れている関係だ。俺が口出しするような話でもないが。思わず苦言を漏らしてしまったが、そういう付き合ひもあるのだから。うん。俺のいない所でやってくれ。

この苦々しい思いが鉄仮面から漏れ出たのか、兄貴がまたブツと吹き出す。

「クククツ、お前も案外ロマンチストだな。その純情とやらがいつまで保つのやら……」

「まさか兄さんに言われるとは……。というかほつといて」

ロマンチストの代名詞さんがなんか言っている。更にドン引きしながら、ぼやいた。いつの間にかクツクツ、と密かに笑っていた声が止んでいた。

「ああ。まあ好きにやるといいさ。恋は盲目、愛は愚昧の見る夢か。

——それにつける薬なんぞ、人類は未だ発見できていない事だしな」

「……だとしたら、俺には過ぎた夢のような気がするけど」

「そうか？」

それにしても、お前。兄貴は唇だけで言葉を紡ぐ。だが、その後の言葉は動きが微か過ぎて読唇術でも読めやしない。

「何？」

「いいや、何も。ほら、残りも片付けるぞ」

とはいえ、鍋の残りなんて三分の一も残っていない。ここは締めを追加するべきか。

※※

食べ終わった後、洗い物をしながら、ふと疑問が思い浮かんだ。

「というか、兄さん。俺に酒を飲ませるって、最初何から勧めてくれるの？」

「あ？」

「兄さんの選ぶ酒って結構度数高いだろ？」

今手に持っているビールは別にして。そう問えば、返ってきたのは鼻で笑う音だ。うーん、普通に態度悪い。

「ふん。最初に呑む酒なんぞどれでもいいだろ。そもそもお前、家系的に言えばそれなりに耐性がある筈なんだしな」

雑。兄貴の大雑把な言葉に釈然としない気持ちを抱くも、うん待てよと引つ掛かりを覚える。え？家系？そう言えば、他の血縁の話なんて一度たりとも出た事ないな。ジエネヴァくんの記憶に聞いても音沙汰なし。無言だ。

「ふーん？家系、ね」

「ああ。揃って酒飲みばかりの屑だが」

屑っしておいおい。あまりの言い草に俺は呆れた目で兄貴を見る。なんだ？と当人は素知らぬ顔だ。悪いなんてこれっぽちも思っていないお顔である。

でもまあ。

「悪党の血筋なんて、ロクでもないか」

「そうだな。——この世に残っちゃいねえしな」

わあぶらつくじょーく。俺の眩きに返ってきたのは中々に反応のしづらい言葉だ。え？血縁関係皆全滅なんです？まあ薄々そうなんじゃないか、とは思っていたけど……。

「最初はやはり、俺の名前の酒でも飲んでみるか？それともウオッカか、案外シェリーなんて面白いかもしれないねえな」

「……せめて何かで割ろう。ほら、炭酸水とか」

「薄め過ぎて、ジュースにならなきゃいいんだけどな」

最初から度数の高いものをセレクトしやがる。シェリーならまだしも、ジンやウオッカなんてストレートで飲んでみる。急性アルコール中毒になるわ。

俺の内心の慄きなんぞ兄貴に軽く嗤われる。この野郎。

「なら、カクテルとか。缶で色々売っているでしょ。飲みやすいの」

「はあ？アレは酒じゃねえだろ。お子様向けのジュースだあんなの」

はいアウト。少年誌にあるまじき発言である。どんなにアルコール度数が低くてもお子様向けの酒はない。ここ日本ではそうなのだ。そんな葛藤を含む発言も信じられねえ、と兄貴に切って捨てられる。

「うわあ……」

「ああ。でもお前。カクテルでも、レディーキラーには気をつけろよ」
ドン引きする俺に兄貴の忠告が刺さる。思い付きの軽いソレは、そ

の突拍子のなさでこちらの意表をつく。

「はっ。」

「—— 一見飲みやすい、女が好むような甘ったるい酒だ。その飲みやすさとは裏腹に度数のえげつなさで沈めるのさ」

「え、怖」

ビールを呷りながらの説明は口調こそ軽いものの、その内容のえぐさにドン引きである。今日は何度ドン引きするんだろうか、俺は。

「ああ。だから、気をつけろよ。その中にはジューズみたいな見た目と味の奴もあつたりするからな。——今度、味見で舐めるくらいさせしておくか」

「ええ……いいよ、そこまでしなくても」

兄貴の意外な面倒見の良さをこんなしようもないところで発揮されて思わず困惑してしまう。遠慮もしたくなるというものだ。なんか裏がありそうで怖いし。

「そう言うな。——俺もアレらの甘さは苦手だが、付き合ってやると言っている。素直に頷いておけ」

「そういうの余計なお世話って言うんだよ。——俺、不用意に飲み物や食べ物を買って食べたりしないよ?」

「はあ……」

俺の遠慮の食い下がり兄貴の顔が面倒臭い、と響められる。しかもその後盛大なため息も追加だ。コイツ、なにも分かっていないと言外に言われたような気がして思わずムツとしてしまう。

「……好きにしろ。お前なら平気だろ」

雑。急に雑になるの止めてくれないかな。まあいいけど。

ひらひらと片手を振って話を終わらせる兄貴に、仕方ないかと最後の洗い物を終わらせる。ほい、とな。

「銃の事といい、身の安全に頓着しないのはどうかしている……」

「銃?」

ほそり、と聞こえてしまったのは仕方ない。何せ兄貴が座っているダイニングテーブルと洗い物を片付ける台所は距離が近い。普通に

話ができるレベルだ。

拾った言葉の反芻に、兄貴の手にあるビール缶がべこりとへこむ。だから怖いって。

「……このベレッタのように、決まった武器がある訳じゃねえだろ？ お前」

机の下から普通に取り出したのは、兄貴の拳銃ベレッタM1934だ。元はイタリア軍ご愛用の銃だ。ベレッタ社が作った銃だからその名前らしい。その銃の良さは故障の少なさと手入れの簡単さ。要は普段使いの良さだ。その分の短所もある。片手操作の出来ないセーフティと軍用銃としては威力の弱い所。ま、威力は護身用なら十分なくらいだから関係ないけれど。

でもまあ、ジエネヴァ君に限って言えば、そういう愛用の武器を作らないのには訳がある。

「……俺、変に癖をつけてはいけないって事で色々拳銃を変えて使っていたんだよね。その辺の事情なら俺より兄さんの方が知っているだろ？」

要は組織の教育方針って奴だ。確かに偏った武器を使っている警察やらに足がつく可能性もある。なので、俺としては現状維持で不便はない。

「ああ。そうなんだが」
「？」

「チツ、なんでもねえよ」
「そう？」

急に苛々し始めた兄貴に触らぬ神に祟りなし、で適当に流す事にする。今日は結構兄貴と話をしたような気がする。いつもはこんなには話さない上に任務の話が八割を占める悲しさだ。家族ってなんだっけ、と哲学染みた考えになってしまいそうになる。いや別に深刻な悩みじゃないけど。むしろ秒で忘れるわ。

時計を見ればもう夜の九時だ。明日の任務は早朝五時に起きないといけない。いつもより幾分か早いけど、もう寝てしまおう。

「おやすみ、兄さん」

「もう寝るのか。流石ガキだな。——そう睨むな。おやすみ」
「ん」

余計な事しか言わない兄貴にジト目を向ければ、返ってきたのは緩い苦笑だ。珍しく、おやすみと返されたことに存外悪い気持ちはしない。今日はまあまあいい夢が見れそうだ。

原作前（二年前）

意図しない救済に意義はあるか

び、び、びと規則的に聞こえる機械的な音は果たして、なんだろうか。浮かぶのは心電図か、爆弾かなんて我ながらベタな想像だ。

その合間にパチン、パチンという切断音も聞こえる。この音の感じからして針金とか、そういう類を切つていそうだ。

「……持てる者に持たざる者の気持ち分かる筈がないか」

幼い声だ。だがそれにしてもその声に温度がない。返ってきたのは確か、罵倒だったかそれとも焦りの声か。分からない、聞こえない。

「へえ？——終わった、ね。安心するにはまだ早いんじゃない？」

これは誰の声か。誰に向けた声なのか。少なくとも、これは俺に向けられた言葉じゃない事は分かる。しかし、聞き覚えがあつた筈の声だ。少年の、中性的で静かなこの声に。

「アンタは覚えておいた方がいいよ。——例え、見た目が変わらなくても、それが日々のルーチンワークなんだとしても」

そこで言葉が切れる。少しの間が空いた。

「悪意はアンタの想像を超えて、変化していくのだから」

ああ、どうして。

どうして、なんて今更な問いに答えはない。

夢に理性を問う方が可笑しいのだから。

せめてこの幼い声の向けた先に居た誰かが今も生きていればいい。

※※

人間の手の大きさは決まっている。腕が届く範囲だつて定まつて

いて、出来る事だつて限られている。それは人間ならば、覚えがあるであろう一つのジレンマだ。

暗くなりがちな思考は、眠さと疲れのせいか。机の上で腕を枕に背を丸めて眠るから疲れが取れないのも納得だ。自業自得。でも眠い。うとうとと沈む意識は、額にこつんと当たる小さな衝撃に戻る。ん？　そう言えばここは……。渋々と目を開けて、顔も腕の囲いから出す。

「どうしたの？　随分お疲れじゃない」

ぼんやりとしたこちらの反応に、この部屋の主のシエリーがクスリと微笑を浮かべた。……なんだ天国か。って違うここはシエリーの私室と化した研究室だ。何度もお邪魔して、その度に好きに過ごさせてもらっている。今となつては俺の絶好の息抜きの場所だった。

疲れのあまり、僅かな休憩時間に無意識に忍び込んだようだった。我が事ながら大分引く。兄貴のことをとやかく言えへんで俺。

こつんと額に当たったのは小さな箱だったようだ。手に取つてまじまじと見てみる。値札シールが貼っていないし、可愛らしいキヤラクターものが印刷された包装紙は雑貨店で販売されている物だろう。中身は何だろうか。そつと振ってみればかさごとという振動でなるほどわからん。

「ふふっ」

「？　何？」

俺が検分している様子が可笑しかったのか、シエリーが吹き出す。ただし、笑い声は軽やかでささやかだ。その口元にいつものような皮肉のような無理はない。そんなシエリーの笑みは珍しい。思わず固まってしまう。

「だって、なんだか初めておもちゃを貰う猫みたいな様子で。可愛ら……んんツ、じゃなくて面白くて。——安心して。それ、つい先日姉と一緒に作ったクツキーだから」

「かわいいって。俺、これでも男なんだけど……。まあいいや、クツキーありがと」

上機嫌なシエリーに浮かびかけた苛立ちもすぐに消えて、素直に礼

を告げておく。なるほど。この可愛らしいチヨイスは恐らくお姉さんのモノか。となると、コレと同じようなものが今ライの手元にあるかもしれないというある意味地獄絵図いやシニール？いやギャグシーンが繰り広げられているのか。写真とってぜひ宮野家アルバムに収めて頂きたい。ライはそこで地団駄でも踏んでおけ。え？ライへのヘイトが高い？まさかはは。

でも、よかった。シエリーが楽しそうで。俺のちっぽけな努力も報われるっていうもんだ。

「それで？」

「ん？」

ほっこりしていた俺は頬杖をついたシエリーの問いに反応が遅れる。それで、とは？

「——疲れの原因よ。また悪い夢でも見たのかしら？」

「え。いや、なんでもないよ。ただ、仕事が忙しいってだけの話で」

「……そうなの？」

少しだけ憂いを含んだシエリーの確認に、最低限の言葉で答える。うん。嘘はついていない。心配性のシエリーはそれだけでは納得しないようだ。うーん、客観的に見て十三歳の少年が過労死さながらの疲労っぷりをみせるのは良心が痛むのだろう。とはいえ、俺の抱える背景全部は話す訳にはいかないし。仕方ない。

「この時期は特別仕事が入る季節なんだ。——浮かれた空気っていうのは多少の仄暗い話を見えなくしてしまうからね。誰もが忙しいから他人にまで目がいかないっていうのも大きいし」

「そう……」

このぼやかし誤魔化し作戦はダメなようだ。案の定シエリーさんが先ほどよりしょんぼりしてしまっている。俺の馬鹿野郎が！

この時期、というのこのクリスマス商戦の頃のことだ。この都会を闊歩すれば、イルミネーションの一つや二つ目に入り、必然と腕組むリア充が視界に入る地獄の季節ですよ。なおホワイトクリスマスは響きと見た目はロマンチックだが、社会人だと降雪量に冷や冷やしてしまう世知辛さ。なんでかって？そりゃあ通勤手段に響くからです

よ社畜さには涙が出てくるね。

「つまり、リア充は滅びろってことだよ」

「!? は?」

やけくそ気味に言ったキャラ崩壊もいいところな発言はシエリーの意表をつく事に成功した。見ろよ、あのきよとんとしたお顔。……おれってほんとうにばか。ジェネヴァ君は絶対こんな事言わない。……というかあの子はほとんど喋らない無口で喋れば生意気なことしか言わない子だからなほんと闇。

「そんな訳だからしばらくはここに来れないから、何かあつたらすぐに連絡して」

「……はあ、心配性ね。まったく」

「そう?ちなみにワンコール入れるだけでいいから。——すぐに来てあげる」

ため息を吐くシエリーに構わずに念押ししておく。気分はまるで家を一週間空ける母親だ。

「……猫なのか犬なのかどっちかにしてほしいところね」

「うん?」

ぼそつとなにやらぼやくシエリーに首を傾げれば、晴れやかな笑みが返ってきた。

「いいえ。ま、善処するわ」

「それってつまり、NOってことだよね」

ニュアンス的には、とシエリーに責めるように睨みつけてしまう。それにふふ、と笑い声が返ってくる。余裕の態度だ。

「努力はするんだからいいじゃない。それに簡単に事件に巻き込まれるほどトラブルメーカーじゃないわ。お生憎様ね」

余裕の表情のシエリーに、俺の喉まで出かかった「それフラグ」という言葉は呑み込まれた。——この世界、下手に言葉にすると実現しそうなところあるしな。下手なことは言わない方がよろしい。

なににせよ、だ。

「そうだとしても、ちゃんと助けは呼んでよ。——間に合わない、なんて愚を犯すつもりなんて一つもないから」

「頼もしいのね。騎士^{ナイト}さん」

「……………茶化さないでよ」

「ふふ」

折角、人が真剣に決意したというのに。シエリーの軽やかな笑いに、ついむくれてしまう。更にくすぐすと続くシエリーの笑いは外の寒さにも負けぬ、春の陽気のような温かさだった。

脳裏に蘇るのは、つい先日呆れた兄貴の言葉だ。明美さんの監視の目を少し緩めるのと、シエリーとの交流を制限させないという提案はもう呆れられた。曰く、「馬鹿か？」と。恐怖で縛りつけているのにお前は何も分かっていない、と要約すればそんなお小言と共に凶悪な眼差しも添え物としてされた。真剣に要らない。——まあそんな兄貴の言い分を俺は「飴と鞭って言うでしょ」と慣れない嘲笑を含めて言い返した。俺の嘲笑○の完成度はライにて効果のほどは証明済みだ。美少年の笑みなのにこれ如何に。そんな俺の虚勢が見透かされたのか、否か。兄貴は鼻で嗤った。

——なら、使い処を間違えるなよ？

そんな事、言われなくてもとつくに知っている。

※※

あれから月日はさらに流れ、世間はお正月明けのどうのという話でニュースをにぎやかす。少しすれば成人式に関するニュースに話題を変えるのだろう。新たな年明け、というのは未来を思わせて人々の

顔を少し明るくする。俺に明るいニュース？ねーよそんなもん。せいぜいがジンの兄貴からのお年玉で拳銃チャカというブラックジョークが飛び出たくらいだ。なんだ？黒の組織では銃弾なまりだまがお年玉なのか？斬新すぎる……。

今日も今日とて組織の楽しいお仕事の話だ。本日の予定はいつもの後ろ暗いところのある要人の警護である。後ろ暗いというか、所謂ヤのつく自由業といえれば分かるだろうか。そのトップの警護なんだが、今日の深夜に急に決まった任務なので概要しか伝えられていない。なんでも裏切った組員に背後からグサツとナイフで一突き。どうにか一命は取り留めたものの、昨日の今日で誰から命を狙われるか分かったもんじやない、と。それで裏社会で有名○な黒の組織でも要人警護成功率ナンバーワンである俺にまで話が回ってきたという顛末だ。え？別に俺の腕がこの組織でナンバーワンな訳じゃないし、話盛り過ぎで困る。

とはいっても命令には逆らえない身の上だ。お仕事、と言われれば大抵のことは熟さないといけない。そうしないと生き残れないという世知辛い事情があるからな。涙が出そう。

その警護対象者が入院しているのは、米花中央病院というらしい。米花町の中でも大きな病院で緊急搬送で受け入れたとな。ほうほう。すつごい行きたくない。だって米花町だけ？名探偵しゅじんこうくんの居る嵐の中心地ですよ。原作前だって油断ならない死地に違いない。……何せ俺の所属が所属だ。世界を裏で牛耳る勢いのやべー反社会的勢力。そんなの地雷中の地雷でしょ。

しかも相手の注文でその組長さんの孫娘に変装して他の護衛の組員の目も誤魔化さないといけない。設定としては心配で見舞いに来た孫娘、とな。へー……しんどい。

時刻は既に午後の二時を超えている。俺はもうその孫娘に変装して組長の病室で一人静かに部屋にあったパイプ椅子に座っていた。流石に個室だから、少し室内は広めだ。室内は心電図と呼吸維持装置の音で規則正しい音で保たれていた。うーん。普通に暇だ。カーテンもこの経緯では開けられないし、外には厳つい護衛の人らがいる。

その人たちに“お嬢”呼びされると俺の大事な精神的な何かがすり減るし……。

それに、だ。俺はこの部屋に入って、少し違和感を覚えた。否、違和感というよりこれは……。項をビリビリと刺激する、何か。直感よりもさらに奥が囁く。命の危機を、その警報を。

だからパイプ椅子に座りながら、不自然じゃない程度に室内を見渡していた訳だが特に不審物は見当たらない。そもそも入院したての病室だ。更に言うなら重傷者という注釈がつく。だからこの病室内は殺風景だ。治療の為のものしか置かれていない。……後はベッドの下、か？

誰の目もないのを確認してからベッドの下を小型のペンライトで照らす。持っててよかつた七つ道具。便利便利。そんな中、うつすらと積もる埃の中目立つ正方形の箱。……コレか。振動が伝わらないように、そつと細心の注意を払って箱を引っ張り出す。げ、着ていたワンピースの袖が汚れた。ま、いつか。気にするなんて俺の柄じゃないし。

どうにか引っ張り出したその箱を持っていた七つ道具というかピッキングツールで開ける。ドライバーとかは常備しているのだ。

そして、そこには爆弾が鎮座していた。耳をすませば、心電図とは違う間隔で電子音を刻んでいる。幸いにも爆発するまでまだ猶予はありそうだ。それに俺には爆弾を解体する心得がある。俺というかジエネヴァ君の経験が、というべきか。うへえ、しかもこの爆弾水銀スイッチを起用していやがる。……確か原作では水銀レバーとか言われていたんだっけ？少し記憶に自信がない。

この水銀が入った筒の玉が線に触れるとドカン、となる悪意の一品である。しかもよくよく見ると遠隔操作も可能そうな作りだ。……なるほど、気に入らない事があれば手元のスイッチでドカン、とな。怖い。

しかし、爆弾か。原作ではよく劇場版でお馴染みの爆発だ。それは爆弾だったり、火事からのガス爆発だったりする訳だが……。よく爆発するアニメという印象がある。しかも作品によつては連続爆破事

件なんてこともあつたりして……。ん？まさかこれも連続爆破事件なんてことは……ないよね？はははそんなマンガじゃあるまいし……。

ってここ少年誌の世界じゃねーか。自分の思考にノリツツコミをしておく。え？コレ俺が解体した後、他の場所に仕掛けていた爆弾がドカンとかありませんよね？そんな事になった日には後味悪すぎて一生眠れなくなるレベルなんだが。トラウマ確定。

まあ、確認する手段がない訳じゃないし、ここで出し惜しみをする意味はない。携帯に目的の人物への番号を手早く打ち込む。そして、声を少女のものから自分自身のものに戻して、と。

コール音は二回ほどで相手に繋がる。

『——君か。ご用件は？』

電話口の相手は少し訝いぶかしむ声だ。普段俺から電話なんてする訳がないから、そのリアクションも納得だ。用件は、と硬い声が先を急かす。こちらとしても優雅に世間話をする柄でもないのでサクツと本題に入る事にした。

「前に保留していた『貸し借り勘定』、まだ有効？」

『……………ええ。大丈夫ですが、何をやらせるつもりですか？』

もったいぶらずに切り出した出だしは思いの外深刻ほかに受け止められて、こちらとしては困惑してしまう。え、何そのシリアスボイス聞いたことないんだが。

「——バーボン？」

思わず、電話口の相手の名を確認してしまう。

『なんですか』

返ってきたのは変わらずの素っ気ない尖った声で、それがバーボンらしくないと思ってしまう。バーボンの演技力の高さは原作ではお馴染みだ。好敵手の彼が出てくるとそれも崩れるが、余程の事情がない限りは崩れることはないと言っている。……これは踏み込むと地雷かな。

「いや、なんでもないよ。——やってほしい事は大した事ない確認作業だよ」

『確認作業、ですか』

バーボンの声に皮肉めいた笑いが混じる。ん？

「そう。……警視庁あたりに爆弾の爆破予告、届いていない？あれば、その詳細を知りたいのだけど」

『ッ!? 何故、君がそれを……?! いや、それよりも何故僕にそれを聞くのですか』

バーボンの声は驚愕と焦燥に揺れていた。動揺が問いの直截ちよくせつさに現れている。その癖、その声には黒幕を問い詰めるかのような緊張に溢れていた。んん？

「……何故知っているか、と言われても……。俺の目の前に爆弾があるからだし。アンタに聞いたのは」

そこで言葉を区切る。どう言えば、誤解が少ないのだろうか？という躊躇いだ。けれど、そう言えば誤魔化そうとすればするほど深読みされる世界でもあったよな、と原作を思い出したのでそのまま口にすることにした。

「アンタが腕利きの情報屋だっと思ってているからだよ」

うん、嘘は言っていない。まあバーボンの警戒する気持ちも分かる。スコッチの一件が後を引いているんだろう。悪いな、完全な味方ムーブが出来なくて。

『探り屋も情報屋も然程変わりない、という事ですか。——いいでしょう。そういう事ならば協力を惜しみません。それでタイマーの猶予はありそうですか?』

自嘲めいた笑いの後、驚く程あっさり了承がもらえた。電話口の向こうにもこの忙しい電子音は聞こえているらしい。猶予、って言われて俺は肩を竦める。

「なかつたら、悠長に電話なんてしないさ」

『それもそうですね』

軽口はさつくりと切られ、では少しお待ちください、と電話が切られた。——これは待つていれればいいのだろうか、素直に待つていられる程俺はいい子じゃない。この病室内には仕事の護衛対象も呼吸維持装置を付けて、心電図をどうにか刻んでいる状況だ。つまりここで

しくじれば、ここに居る人間は勿論、この首も物理的に飛ぶって訳だ。笑えない。

いい加減床に座るのもこの見た目的おじょうごまに悪い気がする。一応、純和風お嬢様という見た目なものな。野郎の夢は壊してもいいが、姿をお借りしたご令嬢のイメージは壊してはいけない。これ大事。

脳内に爆弾解体の手順を浮かべてみる。爆弾の出来は素人と玄人の中間といった印象だ。ただ、詰め込まれた悪意は百点満点というか。——これ造った奴は性格悪いだろうなあと思ってしまう。言ったが最後、おまいう、とかツツコミがかかりそうだが。普通この重病人が集められている病棟に爆弾仕掛けるか？見た感じ爆発したら周囲十部屋は消し飛ぶ威力なんですけど。病人には優しくしろ。入院患者には子どもも老人も居るんだぞ。

解体する為の器具をスカートのベルトから引き抜く。仕事だから女装も致し方ないけど、暗器とか便利道具とか仕込むの毎回苦労するんだよな。見た目を保つのに色々あるんですよほんと。女の子の見た目を維持するのって凄いい苦労なんだな（他人事）。早く背が伸びて大人にならないものか。そしたら組織も女装なんて言い出さないだろうに。

と、そこでバーボンからの連絡を携帯の微振動が知らせる。ワンコールで出る。

『貴方の読み通り、もう一件の爆破予告が警視庁にあったようですね。幸い、そちらの方は対応可能な人物が対処しているようですが……』
「そう。——で、なんか懸念事項でもあるの？」

耳元で語られるのは不幸中の幸い、と喜んでもいい筈なのに電話口の向こうの声は硬い。こういう時は大抵トラブルがあったと見ていい。この場合、バーボンが分かりやすい、というより今の俺の神経が研ぎ澄まされているせいなんだけど。爆弾、という危険物ですっかり仕事スイッチが入ってしまった。いや、別にいつもの仕事が杜撰な訳じゃないけどさ。

『——爆弾の中のセンサーの一つが。タイマーの他に犯人の手元のスイッチ一つで爆発するだろう、と。恐らく、君の方の爆弾もそうなっ

ている。そうですね?』

バーボンの強張った言葉に、ああと合点がいった。

「なるほど。つまり、こつちとあつち、両方同時に解除する必要がある。そういう訳か」

なるほどなるほど。どつちか片方早く解除してしまうと、遅い方を爆発させちゃうぞ☆という事か。はは過激派じゃん。やっぱり性格が悪いなコレ設置した奴は。

『——ツ!! 軽く言いますが』

「軽くないよ。——なあバーボン」

電話口でこの声が軽く聞こえたらしい、バーボンが低い声を出した。が、それを遮る。耳元の沈黙は話を聞いてくれるらしい。

——端的に言おう。

「どうせアンタの事だから、そつちの爆弾処理している奴と電話、繋いでいるんだろ? 俺に代わってくれない?」

俺は今、怒っている。

※

シンプルにキレそう。

と内心の怒りは爆弾解体の原動力にして、速やかに解体した。バーボンから変わった電話の向こうの相手は何やら警察関係者にしては口が悪いお兄さんだった。専門用語?とか意味分からない回路の話とか久々に頭をフル回転したせいで、頭が沸騰するかと思つた。幸い、両方大体造りは一緒だったらしく、話はそこまでこじれなかった。あちらさんは観覧車に仕掛けられたせいとか、水銀レバーはついていなかった。それぐらいの違いだ。

爆弾解除し終えたら、即通話を切っておいた。原作の警察関係者も大体ヤバイ。これ常識。切れ者刑事とか偶にるので、悪の組織幹部

としてはあまり関りたくない存在だ。

それにしても観覧車に爆弾を仕掛けるとか今回の犯人はリア充撲滅委員会の会長かなにかか？そこはギリ許容できても、病院に爆弾を仕掛ける屑はアカンやろ。……しかも、観覧車の爆弾に爆破ギリギリでヒントをやるとか屑の見本市か？後出しは卑怯でしょ。まあ犯罪者の俺が言えた事じゃないけど。

無差別に散る命の数を思えば俺が犯人を始末してもいいんだけど、それは流石にバーボンに止められてしまった。正論で諭す姿は流石警察って感じだ。おかげで俺の沸騰した頭もマシになった。

で、頭の冷却も兼ねてこうしてお外を歩いている訳だ。

先日の爆弾騒ぎから三日しか経っていないから、ニュースではその話題で持ちきりだ。年明け早々の犯罪にしては殺意が高いもんな。流石に天下の米花だつて翌日ニュースを流して終わりという訳ではないよな。安心した。……でもまだ犯人は捕まっていないんだよな。

考え事をしながら歩いていたらいつの間にか、駅前から近くのデパートの前まで来てしまった。確か、このデパートは去年の暮れに開店したばかりなんだよな。ニュースでおすすめ食レポとか言っていたっけ。

取り留めもない思考をしていたら、目の前の人のジャケットのポケットからジッポライターが落ちた。イライラしている様子のその人は気づく様子もないから親切心から拾ってその人の肩をポンと叩く。

「あ？」

うわがら悪。

勢いよく振り向いたジッポライターの落とし主はしかめっ面で低音のコンボをきめてくる。これ、普通の中学生どうきょうしやだったらビビっているレベル。もしかしてお兄さんどうきょうしや裏社会の人間か。

「落とし物。はい、コレ」

「ああ。……悪い。怖がらせたな、ボウズ」

用件を簡潔に告げて落とし物を差し出せば、しかめっ面がぼつの悪そうな顔に変わった。サングラスにあちこち跳ねる天パであろう黒

髪、猫背気味に気だるげにしているも妙に様になっている。サングラスを外さなくても分かるイケメン具合ってヤバいな。

素直に詫げる事が出来るなんて、出来た人間じゃないか。大人だな、見習うべき。

「いいって。——アンタの性分ってやつでしょ？ならいいさ」

「お前、いい奴だな」

気にしないで、と告げた言葉はほっとしたような安堵で受け止められた。サングラスの天パさん（仮）は感心したように何度か頷く。——ところで、お兄さんのその声とつても聞き覚えがあるんだが……。具体的にはこの前の爆弾騒ぎの解体作業の最中に話した覚えがあるような……。

「そんなことはないよ。——じゃ、俺はこれで」

「まあ待て、って。——お前、俺の声に聞き覚えは？」

やべーことに気づいて三十六計逃げるに如かず、とくるりと向きを変える。が、それを肩を掴まれ阻止された。阻止した本人は、一気に剣呑な声色になる。それは疑心というより確信に満ちた行動だ。——つまり前回の俺の事がバレている。激やばなのでは。

「……………」

あまりの事態に冷や汗が垂れる。今の俺の服装で顔を隠しているのはこのコートについているフードぐらいだ。……控えめに言っても詰んでいるのでは？今年の俺の運勢は大凶か？

人の目があるからやりたくないけど、ここは仕方ないか。実力行使をするしか……。

およそ三秒。思考に費やした時間で、覚悟を決めて拳を握りしめる。

——パァンツ!!

「ツ!!」

空気を切り裂くような鋭い炸裂音に手首を掴まれる力が抜ける。だがそれに構っている余裕なんてない。振り切つて、背後を振り返

る。つい、反射で袖から掌に暗器を落としてしまったのは、愛敬だ。
「どうかこの冷や汗って第六感の方かよ!? ささやか過ぎて分かんわ!

「きやー、わーだの周りの悲鳴に逆に冷静になっていく。いやだつて、これつてさ。」

目の前に広がる紙吹雪。デパート前にある植木の前にあるいかにもなビツクリ箱が設置してあってそこからおあつらえ向きにピエロが飛び出ている。アレが元凶か。

「要は子ども騙しもいいところな悪戯だったのだ。炸裂音が大きかったからビビっちゃったけれど。少し恥ずかしい。周囲のまばらに上がった悲鳴がなんだそんなものか、という安堵に変わっていつて掃けていく。」

と、紙吹雪の中に紛れる紙片に気づく。なんだこれ。ちぎったA4用紙のような。爆発で粉々になったのかね。とりあえず、空中に舞うそれらを手早く回収する。幸いにも八、九ぐらい拾ったらそこそこカタチになったし。残りは多分、隣に居た柄の悪いサングラスのお兄さんが持っていることだろう。

「なあ、アンタ」

「……………」

サングラスのお兄さんは二つの紙片を握り締めて、尋常じゃない様子だ。サングラス越しでも目つきがヤバいのは何となく察せられる。……やっぱこの人堅気かたぎじゃないのかな。

「——の野郎……ッ!!」

「……………大丈夫?」

「っ、あ、ああ…………」

呪詛でも吐き捨てるような唸り声にさり気なく心配するふりをしてその手元を覗き見る。

お兄さんの手の力で皺になっているが辛うじて読める。そこにはこう書かれていた。

『——私はすべてを知る者。見通す者。さて、勇敢なる警察官よ。君

に再戦を願おう。無粋な野次馬を呼べば君の目の前のデパートは吹き飛ばすぞ』

うわあ。これ原作お馴染みの展開じゃんか。え？俺ここに居るのまじくないか？

ちなみに俺が集めた紙片はよく分からない数字の羅列だ。なんだこの暗号数学世界選手権でも開催しようってか。ふざけんな眠くなるだろ。

内心ドン引きしていると頭にぽんと温もりが置かれる。目線をあければ、サングラスのお兄さんが苦笑を浮かべていた。頭の上の温もりは彼の手のひららしい。ん？

「悪いな、ボウズ。用事が出来ちまった。さっきの話は忘れてくれよ」「え？」

「手、な？」

おてて？

今の自分の体勢を思い返せば彼の手元をのぞき込む為に、その背中を掴んだ我が手。距離が近いのも減点対象だ。オワア、事案だコレ。未成年だからセーフかもしれないけど俺的にはセウトだ。あかん。そりや苦笑も浮かべるわ。

白目をむきながら、すぐさま手を離して距離をとる。両手を顔の近くまで上げて無力アピールも忘れない。

「ごめんなさい……」

罪悪感まじまじの謝罪を言っておく。言葉にしておくのは大事だよな。

俺の一連の不審者ムーブをきよとんと見守っていたお兄さんはそのまま俯いて肩を震わせる。お？

「ククッ、そんなに気にするなよ。——ガキが大人に頼るのなんて当たり前なんだからよ」

「は？」

「大丈夫だ。こんなふざけた事をしやがる奴はすぐにとっちめてやるからな。任せろ」

「はっ！」

ん？お兄さんちよいとお待ちよ。もしかして俺がこの悪戯に怯えるいたいけな子どもに見えたのか？……いや、この儂げフェイスじゃその勘違いも仕方ないか。

今更ながら自分の美少女顔を実感してしまい、しよっぱい気持ちになる。

それでもって俺が拾った残りの紙片も流れるように回収された。いやいいけどさ。

「後はこの暗号か……。いや、それは歩きながらでいいか」

「いや、でもさ」

「あ？なんだよ」

今にも敵陣地であるデパートに乗り込もうとするお兄さんに俺は待ったをかける。いや、爆弾がどうのつて話だから時間勝負なのは分かる。けれど、これ一人で解決するのは厳しいような気がする。脳裏に巡るのは頭が痛くなる例の数字の羅列だ。A4用紙の四分の三は埋め尽くす暗号。あれの意味するところは――。けれど確証がない。「チツ、言うことないならもう行くぜ。時間がねえんだよ、こっちはまごつく俺に付き合ってもらえない、と背を向けて歩き出してしまった。足が長いとそのコンパスも長いのか、早いし。

「おや？黒野くんじゃないですか。こんなところで何を？」

「バ……ッ！いや安室さん」

手をこまねいている俺の肩を掴んだのは良く知る人物だった。金髪に褐色の肌に青い瞳のイケメン。奇遇ですね、なんて白々しく笑うその顔に思わずコードネームが口を出そうになった。危ない危ないここには推定一般人(?)の天パサングラスお兄さんがいるってのに。普通にダメだしピンチじゃん。

いや、待てよ。

「……俺に話しかけるってことは、アンタ暇だね？」

「は？」

言葉を失うバーボン否、安室さんに俺は頷き腕を引っ張る。暇って言ったよな暇だよなよし。小走りで不機嫌な天パの背中に追いつく。

「お兄さん」

「だからなんだよ、俺はこの売られた喧嘩を——」

俺の掛け声に不機嫌顔で振り返った。が、不機嫌の勢いは途中で失速する。何故かぽかんと間抜け面を晒すサングラスのお兄さんに一応紹介しておく。

「こちら、探偵の安室さん。超強力な助っ人だから、よろしく」

断られるのは面倒だからもう勢いで言い切らせてもらう。畳みかけろ、と安室さんの脇腹を肘で小突く。

「こんにちは。はじめまして。探偵の安室 透です」

「あ、ああ……」

にっこりと安室さんは人の良さそうな笑みを浮かべて、柔らかな挨拶をする。営業のお手本のようないい笑顔である。けれど、それを受け取る側は衝撃を呑みきれないようなぎこちない返事だ。……もしかしてお知り合いとか？いやでも世間そんな狭くないしまさかだろ。それともバーボンの顔面偏差値の高さに怯えているとか？心配しなくてもサングラスのお兄さんもイケメンだから大丈夫だよほんと嫌になるね。

「そう言えば、まだお兄さんの名前、聞いてないね？」

正直呼びにくくて仕方ない。脳内でという注釈がつくけれど。

「……俺は松田。松田 陣平だ」

「そう。よろしく、お兄さん」

衝撃から立ち直ったのか、サングラスのお兄さん改め松田さんは自己紹介してくれた。声が嫌々過ぎるが。こちらもよろしくと返せばため息を吐かれた。

「おい、それじゃ名前聞いた意味ないだろ」

「意外と細かいところを気にするんだね、お兄さん」

「ほっとけ」

「はいはい、二人とも。——本題に入りましょう」

松田さんとの言葉のキャッチボールは安室審判のストップに終わらせられる。が、安室さんの声に思いつきり顔を顰めたのは松田さんだ。ん？

「げ。お前それ」

「何か？」

「イエナンデモ……」

松田さんのしかめっ面は安室さんの笑顔の圧に消えた。やっぱりこの二人知り合いなんじゃ……。いや気のせいだなははは。

本題、という言葉に松田さんは手に持っていた紙片をベンチの上に並べていく。幸いにもデパートの入り口の端にベンチが設置してあった。近くにある自販機からお茶を買っておく。喉渇いたし。

「……自由かよ」

「気にしないでください。彼、ああ見えてもまあまあな人材なので」

「はあ？お前、何言って」

松田さんのボヤキにドライに答えるのは安室さんだ。淡々とした返しに松田さんが喰ってかかる。

「脱線しちゃダメでしょ。——で、暗号並べ終わったんだ？」

「お前が言うな。——ああ。やはり数か所欠損があるのは痛いな」

安室さんが口を開く前に二人に割って入れれば、松田さんの呆れたツツコミが刺さる。まったくもってその通りで耳が痛いな。

松田さんが指摘した“数か所ある欠損”とはちぎった紙片を合わせても埋まる事のない穴だ。普通に考えれば、あのふざけたビツクリ箱に入っていた紙だし、悪戯程度とはいえ火薬を使っていた仕掛けだ。むしろこれぐらいで済んでよかったとも言える。文章は読めし、欠けているのは大量の数字の内の数個に過ぎない。

「……違和感がありますね」

「やっぱりあんたもそう思うか」

安室さんの神妙な呟きにすぐに同意が重なる。まさかの同意先は松田さんだ。

「ええ、火薬で散り散りになった割に、紙に焦げた跡がないのが一つ。そして、紙片の大きさが統一感があり過ぎる。——ここまで揃えば、この暗号の書かれた紙片が人為的に千切られた、と考えるのが妥当でしょう」

「つまり、数字の欠けも犯人の意図するところって訳か」

安室さんの指摘通り、ベンチに広げられた紙片は偶然と思うには作為的で無理がある。そして膨大と思える数字列の欠けが犯人の意図するところだとすると結構面倒臭い事態だ。松田さんもそう思い至ったのか、呟く声は苦いものが混じっている。

数字の暗号で有名なのは、あのポケベルの暗号か。携帯電話のボタンのかな変換の奴に似ているが、目の前の数字列で変換しても意味不明だ。換字暗号で有名なシーザー暗号やらヴィジユネル暗号の応用も駄目だ。規則性はあるように見えるが、意味が分からない。否、よく見ると139・6……とか35・6……とかが散見される。もしかして、これ二つの暗号を使っているのか？例えば一つの暗号は場所を示し、もう一つは解除についてのヒントとか。そう考えると、文章の方はポケベルで変換可能っぽい、か？

場所についての数字は、アレか。

「これ緯度と経度、みたいだね」

「！」

思い付きを口にすれば、目の前の二人が閃きを得たように目を見開く。あーこれアニメだったら背後に雷鳴背負ってるよ絶対。ピシャーンてな。

「——なら、後は」

「シーザー式暗号の応用！」

安室さんが意味深に呟いたのを松田さんが被せる。二人とも少年のように屈託のない様子だ。うわ、仲いいねお二人さん。そっかポケベルじゃだめか。ふーん。

そのまま安室さんによる解説が始まる。が、ここで省略。

数字の欠けは緯度経度の並びとシーザー式暗号の区切りだった。どうやら犯人からのヒントだったらしい。——というか、それが答えだとまづくないか？

「なあ、これが本当だとさ」

「ええ」

どうか否定してくれ、と祈りに近い気持ちで不安要素を言葉にする。穏やかな相槌は安室さんだ。

「爆弾、三か所ない？」

暫しの沈黙。

すん、と目の前の大人二人が揃って真顔になる。何その顔どういう気持ちなの？

「そうだな」

「ですね」

だよなー、揃って頷かれた肯定に俺はあちやーと天を仰ぎたくなつた。

しかも暗号解読して分かった爆発予告時間が後一時間ちよいつて、なんなの。今日俺の命日かなにかか？そろそろ俺怒つていいかな。

「そうは言っても、爆弾解除のプロがここにいるから平気だろ。——お前らはもう帰っていいぞ。解散な解散」

ここにいる、と自分の胸を叩いた松田さんはさらつと解散な、と立ち上がる。暗号の紙片は彼のジャケットのポケットにねじ込まれた。いやそれ一応証拠品だろ。

「は？ちよつと待ってください」

「安室サンもお疲れ様。——ここからは俺一人で充分だ」

ぎよつと目を見開いた安室さんに松田さんは慇懃無礼な軽口で別れを告げる。少し間を空けて、告げられた松田さんの決意はその眼差しと同じように真摯だった。

あまりの気迫に安室さんは言葉を失ってしまったようだ。

一人で、って。あれか？あの犯人の脅迫文の「警察官」という指名つてもしかしなくてもこの人のことで、この人は律義に責任もしくは喧嘩を売られたと感じて、犯人の思惑に乗っちゃうという展開なのかコレ。

「いや駄目でしょ」

この場を去ろうとした松田さんの背に思わずツッコミの手を入れてしまう。

「あ?」

振り返った顔はイケメンがしちやいけない部類の凶悪さがあった。やっぱ警官じゃなくてヤのつくご職業だつてこの人。つい最近その職業の人に会ったばかりだけどそっくりだよこのドスの利いた声。

「アンタがどんな神業を持っていたとしても。——絶対」なんてこととはないし、防護服もないんじゃないやプロだなんて息巻くのもある意味無意味だと思わない? しくじったらおじやんだもの。それなら手が多い方がいいだろ」

幼稚園児に聞いても返ってくる答えは一緒だと思う。そんな単純で簡単な道理だ。

「はあ? お前何言つてんだよ。手が多いもなにも。——その優男は百歩譲って手を貸せて言える。が、お前は駄目だ」

こちらの言い分を松田さんは呆れたように、言い聞かせるように諭してくる。きつぱりと言い切るそれは大人と子どもの明確な線引きのように思えた。

「俺が子どもだから?」

「よく分かってんじゃないか」

確認の問いは大げさな頷きで返された。成程。

安室さんも松田さんの言い分に成程と頷いていた。ただし、その成程は俺をハブる事への肯定だ。おい俺が中途半端で降りるわけがないだろ、目覚めが悪い。

「なあ、アンタの最初の問いに答えようか?」

「は?」

「アンタの声に聞き覚えがあるか、つて奴」

「は?」

何言つてんだコイツつていう不信感を前面に押し出したような間抜け面に俺は笑つて○あげる。まあこのゲス顔というか嘲笑はジェネヴァ君の鉄仮面で唯一生きる表情だから仕方ないね。

「あるよ。アンタの声に聞き覚え。——爆弾の解除方法、結構話せたでしょ?」

駄目押しに、前回の爆弾騒ぎへの関わりを匂わせてやる。どうだ、これで分かるだろ?俺を巻き込んでも問題ないって。勿論、問題解決したらさっさと逃げるけど。

「……マジかよ」

「マジだとも。——安室さん、アンタもやるだろ?」

「ええ。ここまで乗り掛かった船です。今更下船しようだなんて言いませんよ」

「マジか……」

マジか、と頭を抱える松田さんに俺は頷いてやる。ついでに安室さんに継続するか、問えば返ってきたのはにつこりした笑顔。ああ、最後まで居てくれるってか。心強いな。

そんな俺らのやりとりをもう一度マジか、と松田さんがドン引きする。お?そんなドン引きする内容じゃなかった気がするが。

「じゃあここは三手に分かれますか」

「は?」

「うん。集合場所は犯人がいる場所でもいいでしょ」

「ええ」

「え」

さっさと役割分担を割り振る安室さんに頷いて集合場所も確認しておく。松田さんが戸惑っているのが如実に伝わっているが、時間的にも構っている余力がない。幸いにも彼はここから一番近い場所担当だ。俺?一番遠い場所ですけど?」

「じゃ解散」

「ご武運を」

「フリーダム過ぎんだろおい」

※※

俺の暗殺スキルでは当然、人混みをすり抜ける術と気配遮断スキルが極まっている。足の速さなんて言わずもがなだ。

だから爆弾解除はなんにも問題ない。——問題は犯人の居場所だ。ここで犯人の脅迫文を思い返そう。

『——私はすべてを知る者。見通す者。さて、勇敢なる警察官よ。君に再戦を願おう。無粋な野次馬を呼べば君の目の前のデパートは吹き飛ばすぞ』

私はすべてを知る者。見通す者。犯人の言葉だ。

これは単純な言葉遊びだ。デパートに三か所仕掛けられた爆弾の監視が容易で、なおかつ挑発した警察官への監視も出来てしまう場所。

流し目でデパートの監視カメラを確認する。あんまりまじまじ見たら犯人に気づかれてしまうからだ。

ここまで言ってしまうえば、分かるだろう。そう、犯人は監視カメラのその奥。警備員室にいる。このデパートは珍しく、警備員室があるそうだし。実際爆弾が仕掛けられているのはデパートの共用スペースだった。専門店とかレストランはまた管轄が違うのだろう。

問題は動くべきか。爆弾を解除しながら、考える。

不意に先日の爆弾騒ぎの時に覚えた不快感が蘇る。何故あんなに腹が立ったのか、なんて愚問だ。

——渴望する程焦がれて、けれど手が届かないモノがあんな奴に壊される。

脳裏にあのシェリーの微笑みが蘇る。それが俺の預かり知らぬ所で害される可能性があるのなら、丁寧に潰す必要がある。——爆弾騒

ぎだの銃撃戦とかいうスケールの大きいドンパチは組織だけでいい。俺が心労で死んじやうだろ。

そうこう考えるうちに爆弾の処理は完了した。わざわざ、爆弾を人目のつかない非常階段の踊り場に運んだ甲斐があるってものだ。これもセンサー関連を念入りに確認して遮断して無力化したからひとまずは安全だと思っつていいだろう。

……ここで帰ればいいんだけどなあ。このままバックレてもいい気がしてきた。安室さんと松田さんでなんとかなるって。過剰戦力でしょ。いや、ダメか駄目だよな。

「不安の芽は摘んどかないと、ね」

問題は間に合えばいいんだけど。安室さんは多分そういう想定で動いているのだろうし、間に合うかどうかは五分五分だ。

——危険分子に危険分子をぶつけるような愚かさはあの人には無縁だ。

この非常階段から行ける、裏道を通れば間に合うだろうか。……走れば大丈夫だな。伊達に組織で裏道やら抜け道を駆使して神出鬼没を演じていない。

つまり、通気口うらみちは俺にとっては慣れたものって訳だ。

※

通気口の入り口からどうにか天井裏を匍匐前進で進んでいく。辺りは配線や埃が目立つ他は何もない薄暗く狭い隙間だ。埃は後で払えばいいか、なんて思考を飛ばしながら、目的地に近づいていく。警備員室はデパート一階の端にある。駐車整理もしないといけない関係上だろう。お、ここか。

下の明かりが漏れているところを見つけ、ここが通気口が繋がっている場所かと当たりをつける。外すのは問題ないが、下の様子をまず

は窺^{うかが}うべきだ。

ここは警備員室の真上らしい。沢山あるモニターとその前に置かれた机と椅子。つか、机の上がごちゃごちゃと片付けが出来ていないにも程がある。と、それよりも犯人の様子だ。

「——もう止^よせ」

「うるさいうるさい!! てめーが悪いんだ! 四年前の爆破事件も、この前の奴だつてツ」

もう始まつている。松田さんが冷静に対応するほど、犯人が激昂するという悪循環が出来上がっている。

犯人は警備員の格好をして、部屋の本真中に陣取っていた。その手には諦め悪く、起爆スイッチが握られている。松田さんと安室さんは警備員室入り口で膠着状態に入ってしまったようだ。

——起爆スイッチなんて無意味、なのになんで制圧しないのだろう。二人の実力ならこの犯人瞬殺だろうに。

俺のそんな疑問はすぐに消えた。

「そんな事をして何もならねーだろうが。お前の相棒だつてもう自供して罪を償うつて言っているんだぞ」

「ツそんな事よりも、あいつをすぐに解放しろツ!!」

「チツ」

まさに聞く耳を持たない犯人の様子に松田さんが鋭く舌打ちし、足を一步踏み出す。

「動くなツ! 一步でも動いてみる! ここで首を斬つて死んだつていいんだぞ」

自分の首にナイフを突きつけて喚く犯人。松田さんの顔が盛大に顰められる。成程、自決してやるぞつていうアピールでこの膠着状態なのか。安室さんも松田さんの前だからなのか、機を窺っている様子だ。

室内の犯人と松田さんの距離は五メートル程。ふーふーと荒い息を繰り返す犯人の興奮状態を見るに、やりかねない話だ。まあ、変に刺激して方が一があつたら大変だしな。

仕方ないなあ。

こつそり、この目の前の棒を外す。手持ちで使えそうな奴を取り出し、それを犯人の頭上に落とした。

がこんつ！

見事、お茶の入ったペットボトルが犯人の頭にヒットする。やったぜ。

すかさず松田さんが犯人を取り押さえる。ナイフを持った腕を肘固めで固定し、犯人を地面にすぐに沈める。肘固めからの足払いの流れがあまりに自然だ。隙のない犯人への拘束は流石だ。痛そう。

安室さんは涼しい顔で弾き飛ばされたナイフをハンカチで拾って、回収していた。

「離せ！」

まだ芋虫みたいに足掻いて、抵抗する犯人のガッツは凄い。お前マジ？空気が読めないにも程があるだろ。見ろよ、あの松田さんの殺気。この人、冷静に見せかけて実はブチギレてんど。怖い。

かつり。喚く犯人の目の前に安室さんが立つ。上からじや表情はよく分からないな。

「おや？お気楽な方だ。——自分が被害者になる可能性を除外するのは、随分自信があるとみえる」

安室さん、否この声色はバーボンのものだ。穏やかなのに、どこか仄暗さを感じさせる。多分表情はここにこしている事だろう。彼の前にいる人間は内臓を撫で上げられる薄寒さを感じるはずだ。

「は？…どういう……」

「組織大海を知らない貴方かえるは可哀想ですね。——せいぜい、檻井戸の中の束の間の平穩に感謝しててくださいいね」

「お、おい……」

バーボンが只者じゃないと気づいたのだろう。犯人である男は継るようにバーボンを仰ぎ見る。ここまであからさまにされたら、どんな愚鈍な人間だって気づく筈だ。

「貴方はどんな死に方をするのでしょね」

楽しみですね、なんて平然と嘯くバーボンを見上げる犯人の男は果たしてどんな顔をしていたのか。がくり、と力を抜かして抵抗をやめた犯人を松田さんがなんとも言えない顔で立ち上がらせる。

「お前な……。まあいい。今回は正直、助かった」

「いえいえ、この程度なんてことありませんよ」

「じゃ、またな。俺はコイツを連行しねーといけないからな。——アイツにもよろしく伝えてくれよ」

「分かりました」

松田さんが犯人の男を連れて出ていった。扉が閉まる。

静寂が室内を満たす前に、安室さんが上を見上げる。

「そろそろ、降りてきては？」

「ん。……本物の警備員さんは無事かな」

下へ、と促す安室さんはもうバーボンの顔をしていた。穏やかで、どこか冷酷な一面を持つ組織の人間。その顔に。

俺の懸念を聞いたバーボンは瞬きを一つした。なにその意外そうな顔。

「本物の警備員は無事ですすよ。ここに来る前に解放しました」

「ふうん？」

「さ。長居は無用ですし、移動しましょう」

「了解」

お茶のペットボトルを回収し、部屋を出るバーボンの背を追いかける。

にしても、俺にとっては今回の件は正直なんのこともなんだかさっぱりだ。ここまでの経緯いきとつというか、経過がさっぱりなんだよな。興味は正直薄いんだけど。

※※

あの後、バーボンが向かった先はデパートの近くの小さな公園だ。もう日が暮れようという時間だ。辺りは夕暮れでオレンジに染まる。幸い、俺とバーボンの他に人影が見当たらない。気配もしないから多少物騒な話をして大丈夫だろう。

道すがら、ぽつりぽつりと語られたこれまでの経緯。俺と別行動になってから明らかになったそれらはあほらしいものだった。すべては四年前に遡る。二つのマンションに仕掛けられた爆弾事件。爆破を未然に防いでみせた二人の警官。その一人が松田さんだという。そして逮捕に至らなかった犯人が次に企んだのが前回の爆弾事件。あの観覧車と病院に仕掛けられた事件だ。今度こそは、と意気込んでいた所に俺の横やりもあつて不発に終わってしまった。そしてその事件の犯人は二人組の男で片方は松田さんが逮捕していたという。つまりデパートで捕まった犯人は逆恨みと八つ当たりという最悪なコンボでこんな理不尽な事件を起こしたのだ。なんという阿保らしさ。もう少し命のありがたみを味わって生きろ？

「それにしても意外でした。最後を僕に譲って頂けるなんて」

「それはそうでしょ。俺、仕事以外は穏健派だし」

公園に設置されたベンチに腰掛ける。バーボンも隣に倣うように座り、ぽつりと呟く。それに何を今更、と頷いてやる。ああ、ペットボトルのお茶も飲んでおこう。

バーボンがやらなかったら、最後の脅しは俺がやっていただろう。テロリストとはいえ、未遂犯だ。きつと数年後には出てくる。何食わぬ顔で、名前を変えて、履歴も誤魔化して、社会に溶け込んだに違いない。だから釘を刺す必要があつた。反省もしていない愚かさだ。松田さんが居たから少し面倒だが、口を塞げないこともない。バーボンはこういう俺の不穏さを指して、言っているのだ。

よく我慢出来ましたね、と。

「……穏健派、ですか」

「俺はね、バーボン。これでも命の重みを考えてたりもするんだよ」

「……………」

バーボンの沈黙が、その視線の鋭さが続きを促す。それに軽く頷きを返した。

ああ、分かっている。今更誤魔化したりはしないさ、と。

「俺は、出来れば表側の奴らの平穏がそのままであればいいって。不相応にも願ってるんだ。——俺が、その一因にならなければいい」

そうだ。俺は、出来ればテロリストなんかごめんだし。人殺しだつてお断りしたい。悪党なら、相手がくそ野郎だからこそどうにか罪悪感を噛み殺す事が出来るに過ぎない。

「……一考しておきましょう」

「なんだかんだ、アンタ律儀な奴だよ」

「その台詞、そっくりそのまま君に返すよ」

バーボンの呆れた声に俺は肩を竦める。俺が律義な訳ないでしょ、と。

「そう言えば、ずっと疑問だったのですが……。ジエネヴァ、彼といつの間に関り合っただのですか？」

「は？松田さん？今日初対面の筈だけど？」

「そうですか……」

バーボンの疑問に素直に答えれば、腑に落ちないという感じに考えこまれてしまった。え？怖いんだが。

お茶のペットボトルが飲み終わったので、キャップを閉める。

「何かあったの？」

「……彼は学生時代の知人なのですが、先程メールで不思議な事をきかれました」

「ふーん？」

相槌を打ちながら空になったペットボトルを公園に設置してあるかご型のごみ箱に投げようと振りかぶる。距離は十メートル、余裕だろう。

「曰く、四年前の爆破事件に関わっていないか」

かこん、とペットボトルが縁に当たって跳ね返る。

は？よねんまえ？

ぎよつとしてバーボンの顔を見る。

至つて真剣な顔だった。冗談なんか一かけらもありはしない。

「……………」

「まあ、彼には人違いと言つておきましたが。——もし本人なら『変化した悪意の忠告、ありがとう』と伝えてくれと言つていましたよ」

バーボンの声は穏やかだった。おそらく表情も穏やかなのだろう。視界に自分の靴をおさめてぼんやりと思う。冷や汗が止まらない。

「……………知らないね」

「そうですか」

バーボンはこちらの否定を想定内と頷いた。では、これから仕事があるのか、とあっさりと言つて去つていった。

まざまざと蘇るいつか見た夢の内容。

足元が崩れる感覚、というのはきつとこういうのを言うのだろうか。我ながら実感するのが遅すぎる。

のろのろと入り損ねたペットボトルを拾い、ちやんとごみ箱に捨てる。

ついでに手をにぎにぎと開閉させる。指は思い通り動いた。少しだけ歪に皮が厚いところがある、未成熟な手のひらだ。武器を握りなれていた、手のひらだ。

思い出せる限りの、前の俺とは似つかない手だった。

違和感の除けぬ、そんな他人の手だった。

意図の不明な救いの手に慈悲を期待するな

がやがやと賑やかな居酒屋。勤め先から割と近いその場所はここ
のところの松田のお気に入りだ。何より飯が美味しい。忙しい独身男
の実情なんぞ所詮はこんなもんだ。顔の良さは仕事の忙しさと性格
の尖りで相殺される。悲しいかな世の中。

居酒屋の座敷席で同期の男と二人、遅めの夕食をとっていた。ビー
ル一杯だけの酒精は明日への活力だ。その同期の男の名を萩原 研
二といい、松田とは警察学校からの腐れ縁で友人の一人だ。

「そんで？なーんで、今更異動届なんて出したのよ。陣平ちゃんは」
見た目のチャラさと同等の軽口で、何度目かの疑問を萩原は突い
た。この萩原という男は見た目は女好きの優男だが、意外と気遣い屋
だった。松田はそれにまたか、と顔を顰めた。ちなみに今日の夕食の
から揚げ定食への箸は止めない。

「別にいいだろ、そんなの」

「よくないっつーの。俺とお前で他部署からなんて言われているか、
知ってるか？」

「知らね」

「爆処のダブルエース」、期待のルーキーってな」

素っ気ない松田の返しに、萩原は前のめりで説明する。大ぶりの萩
原のリアクションに元々機嫌の悪い松田は鋭い眼光で萩原の行儀の
悪い箸を睨んだ。箸で人を指すな、行儀の悪い、と。視線に気づいた
萩原はばつの悪そうな顔で引っこんだ。

「……もうお前一人で大抵どうにかなんだろ。っーか、どうにかしろ」

「おーぼー！陣平ちゃんったら、冷たいのね。しくしく」

「酒に酔ったか、水でも被ってきたらどうだ」

「ひでえ!!」

松田の言い分の雑さに萩原は芝居がかった仕草で嘆いた。おい手
でしなをつくるな気色悪い、という気持ちを含めた松田の冷たい視線
に萩原はひでえ、とげらげら笑う。本当にコイツ素面か？きつめの洋

酒とかキメて来てないよな？

「そもそも、〃ルーキー〃って感じでもないしな」

「そう？まだまだ、俺はぴちぴちの若さだつて自負してんだけど」

「若い奴はぴちぴちを自称しねえんだよ、諦めな。——それに刑事部に異動を決めたのは個人的な気持ちだからな」

「ん？それはどういふ……」

友人同士のじゃれあいからトーンを落とした松田に萩原は首を傾げた。萩原にとって松田程この爆発物処理班の仕事に誇りを持った奴は見たことがない。そんな松田が〃個人的な気持ち〃という曖昧な表現を使う事に疑問を覚えたのだ。

「お前、四年前から変わったよな」

「そうか？」

突然の松田からの指摘に萩原は疑問符で返す。そんなに変わった覚えはなかったからだ。

そんな友人の様子に松田は一度頷いた。変わったさ。

「勿論、いい意味で、だけどな。前みたいに実力に驕る事はなくなったし、現場での慢心もなくなった。いい意味で慎重になった」

「……松田あ、俺もしかして貶められてんの？それとも褒められてんの？」

俺どう反応していいかわかんない、と困った顔で頬を搔く萩原に松田は少し笑った。

「一応褒めてる。……四年前、防護服すら着なかったお前が爆弾を無事に処理できた一件以来だな。萩が変わったのは」

「……そんなに劇的だった？つか、変わらない方が可笑しい出来事だし……」

四年前。その一言で通じる二人はそれぞれ複雑そうな顔になった。松田は感慨深さで、萩原は当時の黒歴史を思い返しての苦さだった。「その時の犯人も捕まっちゃいないし。……最近の凶悪犯罪はテロまがいの爆弾騒ぎも起きたりしやがる」

「そうか……」

「ま、一番の決め手は萩みたいに前に進んでみたかったんだよ。俺は

俺なりに、な」

松田のやつと吐き出した移動理由に萩原は暫し茫然とした。松田も少し気恥ずかしさからか、色男の間抜け面だなという揶揄いも飛ばせなかった。なんだこれ。

「そうかーいやあ、陣平ちゃんならどこでもやっていけるって思ってたんだよネツ！」

「手のひら返しが鮮やか過ぎるだろ……。もはやドリル」

すぐになつこにこの笑顔でサムズアップする萩原に松田は冷静なツツコミを入れてビールを呷る。だから話すのが嫌だったんだ。コイツ秒で調子に乗る。……仕事の時はそんなことはないんだが。

「……でも気をつけるよ、松田」

「あ？」

「悪意はお前の想像を超えて、変化していくのだから」

急に真剣味を帯びた友人の声に松田は目を眇めた。萩原はそのまま続ける。

「恩人からの受け売りなんだけどな」

「……恩人、っていうと人形みたいな綺麗な顔立ちの自称・幽霊くん、か？」

「まあな。ってか、よく覚えてたな。お前の前でそれ言ったの一回だけだった気がするけど」

萩原の「恩人」という言葉に松田はすぐに思い当たった事を言った。それに萩原はまいったな、と肩を竦めた。

忘れるはずがないだろ。松田は内心舌打ちした。アレは四年前。二つのマンションに爆弾を仕掛けられ、萩原と松田でそれぞれの爆弾を担当した事件だった。片方は無事、松田が解除したものの、防護服を着ていなかった萩原の解除した爆弾が再び起動するというアクシデントがあった。それは犯人の悪意だった。手元のスイッチで制限装置自体を再稼働させ、残り少なくなった制限時間に絶望させるという悪質さがあった。それをどういう魔法を使ったか、萩原は無傷で生還した。爆弾のタイマーは残り一秒で本当に首の皮一枚の紙一重だった。その事件から一か月したある日、酒を浴びる程飲んだ萩原は

泣いた。己の無力さを嘆く慟哭だった。あの日、四年前の事件で何があったか詳しくは知らない。嘆く酔っ払いの口から出た断片だけを知っている。けれど、それが萩原を変えたのは確かだった。言わせてはいけない事を、残酷なことを言わせてしまった、と萩原は涙をこぼしたのだった。

その時の萩原の恩人の特徴が人形みたいな顔立ちの自称・幽霊くんという訳だ。銀色の髪に少女めいた顔立ち、その小さな体には不釣り合いに暴力の影が覗いていた。例えば顔の青あざ、袖からちらりと見える腕に巻かれた包帯。年の割に大人びた、達観した物言い。そして、爆弾を瞬時に解体する技術。一瞬目を離れた隙に姿を消す隠密技術。松田は話を聞いた時、アニメか漫画の話かこれ？と判断に迷ったぐらい現実味は薄かった。萩原のあの後悔の慟哭がなければ今も信じなかっただろう。しかも十にも満たない子どもだったって言うじゃないか。

「……その恩人くん、生きてりや今頃中学生ぐらいか？」

「そうだな。今度会ったら、礼の一つは言いたいところだけど」

「お。それはいいな。俺も言うかな」

「なんで会った事のない陣平ちゃんが言うんだよ」

つか、なんていうの？萩原の半目の当然の疑問に松田はニツと不敵に笑った。

「そりゃあ、悪友殿を助けて頂きありがとうございます。って真面目に言ってるよ」

「ぜってえヤメロ」

※※

ところ変わってバーボンは悩んでいた。少し前に同じ潜入捜査官

のスコッチこと諸伏 景光がバレて、死線をくぐり抜けた一件があった。あの一夜の事はなるべく思い出したくない。まあそれはいい。親友の首が物理的に飛ばなくてバーボンとしても悪くはない結末だった。これだけは感謝をしてもいいと思える。が、同時に問題を抱え込むことになった。

ジェネヴァ。あの一夜の勝利者、組織の最年少幹部にして知れば知るほど底の見えない子どもだ。降谷 零としての本音としては子どもなのだから今すぐにも保護したい気持ちもあったのだがそれもあの一夜を知るまでだ。

今となつては、いつ起爆するか分からない不発弾に接する気分である。弁解するならジェネヴァの行動を全て受け入れてどっかかり腰を据える度胸のあるやつなんぞ滅多にいないだろう。ジンとかどうなつてんだアイツ。バーボンは思い出した不愉快さに舌打ちをグツと我慢した。

ジェネヴァのアフターフォローは親切だった。むしろ親切過ぎて怖いぐらいだ。バーボンとライの不仲という設定もそうだし、スコッチの変装も後日紙袋とUSBメモリを渡された。紙袋には変装マスクの材料（しかも材料の販売先もいくつかメモされていた）、USBメモリにはジェネヴァお手製の変装技術講座が丁寧に解説されていた。その講座の出来は全くの素人だったスコッチが一月ちよい経った最近で習得できたぐらい凄かった。なんだあれ。僕も習いたいぐらいだ。

そんなお節介を焼いてもなおバーボンに何も聞きやしない。普通、ここで王手と言わんばかりに問い詰め、いいように利用するのが定石だろうにとバーボンは呆れた。最近では僕はもしや生餌にされているのか？ と疑心暗鬼になりそうだった。が、それもNOCを炙り出すには下策だ。世界のスパイや捜査官は味方同士つて訳にもいかず、どちらかというと敵の敵ぐらいの認識だ。間違つても味方にはならない。そんな面倒な世界が現状だった。

それよりも今か、バーボンは思考を切り替える。今は仕事の合間、

表側と裏側の情報を纏めていた。目につきにくい駐車場の端に止め、ワンボックス車のハッチバックドアを開け細々とした機材から漏れ出る音から必要な情報を抜き出している最中だ。その中に警視庁の無線がある。お昼のニュースを聞く感覚での盗聴はとても褒められなものじゃないが、潜入捜査の立場上、デカい事件が起きた時に知りませんでしたとは言えない。悲しい。

ノイズ混じりの音声は、爆弾事件を知らせる。情報は錯綜さくそうしているようだ。ふむ、そういえば同期の友人の松田がこの前刑事部に異動したんだっただか。アイツがいるなら恐らく爆弾騒ぎもなんとかなるだろう。腕と頭のキレはバーボンも素直に認める男である。なら、この無線もしばらく切ろう。

と、その時バーボンのジャケットの胸ポケットから振動が伝わった。携帯電話の着信だ。発信者は、と目で追って確かめてバーボンは慌てた。は？なんでここで。急いで情報を垂れ流す機材共を止め、録音だけはしておく。ジエネヴァにはとても聞かせられない内容だった。

「——君か。ご用件は？」

『前に保留していた「貸し借り勘定」、まだ有効？』

電話に出てすぐに切り出されたジエネヴァの切り札にバーボンは苦い気持ちになる。あれを引っ張り出すという事はこちらも相当リスクを覚悟せねばいけない。というか、それ以前にジエネヴァはバーボンを口実なしで好きに出来る切り札をもう一つ有している。

——バーボンもスコッチと同じ「NOC」じゃないか。

この一言で王手として最低限の体裁は保たれる。だが、それは打たないし出さない。ジエネヴァ当人は知らん顔だ。

「……………ええ。大丈夫ですが、何をやらせるつもりですか？」

『——バーボン？』

思ったよりも声に心情が現れたらしい、バーボンは耳元で聞こえる不思議そうな呼び声に舌打ちしたい気持ちで一杯だった。……………白々しい。

「なんですか」

『いや、なんでもないよ。——やってほしい事は大した事ない確認作業だよ』

王手を隠して、昔のことを引つ張り出してまで言う事がソレか。バーボンは嗤いだしそうになった。愉快、というより不愉快さで、だ。

「確認作業、ですか」

『そう。……警視庁あたりに爆弾の爆破予告、届いていない？あれば、その詳細を知りたいのだけど』

はあ？

ジェネヴァの予想だにしていな一撃にバーボンの頭は揺らされた。ジェネヴァが出てくるって事はやべー事件に他ならない。それこそ、国を揺るがすテロの類であつても驚かないぐらいだ。このままバーボンが何もしなかつたら、国民が、同胞が、友人が死ぬかもしれない。空回りした頭がそこまで吐き出すのに要した時間は僅か二秒だ。

「ッ!? 何故、君がそれを……?! いや、それよりも何故僕にそれを聞くのですか」

『……何故知っているか、と言われても……。俺の目の前に爆弾があるからだし。アンタに聞いたのは』

そこで一旦ジェネヴァの静かな声が切られる。バーボンは何を言われるか、心臓から血の気が引く奇妙な感覚を味わっていた。人はソレを恐怖心という。

『アンタが腕利きの情報屋だつて思っているからだよ』
は。

耳元で紡がれる、案外子どもっぽい満足気な様子にバーボンの肩の力が抜けた。この子のこういうところ、ほんと勘弁してほしい。

しかし、まあ情報屋、か。ここまでくると清々しいものがある。自嘲の笑みも自然と滲む。

「探り屋も情報屋も然程変わりない、という事ですか。——いいでしょう。そういう事ならば協力を惜しみません。それでタイマーの猶予はありそうですか?」

『なかつたら、悠長に電話なんてしないさ』

「それもそうですな」

では少しお待ちください、と電話が切る。そしてもう一台のプライベート用の携帯を取り出す。こちらの番号を知っている者は限られていて、その一人が今回の事件に関わっているだろう人物だった。

こちらの番号だったらアイツは絶対出る。松田、と登録した番号を押して、コール音に耳を澄ませる。一、二、三。

『あの世からの電話にしちや随分出来過ぎているな』

「馬鹿を言うな、松田。——手短に言う。今、爆弾事件を扱っているな？」

電話の相手、松田の茶化す声にバーボンは、否瞬時に降谷 零の顔になつて確認する。降谷にとつてもはや確信すらあつた。

一拍後、電話口からのため息。

『……ああ、その通りだ。流石、公安。鼻の良さは突き抜けてるな?』

「お前ほどじゃないさ。——で、状況は?」

『状況は、まあ悪いな。俺は爆弾を解体している最中なんだが、犯人の野郎が狡い真似をしやがってな』

茶化しに乗らない降谷の真剣さに松田は折れた。聞かれたことを素直に答えてやる。どうせ時間までやることもない。

「狡い真似?」

『ああ。犯人曰く、俺の所とは別にもう一つ爆弾を仕掛けたらしい。爆弾を解除するともう一個の方をドカンと吹き飛ばすんだと。……慈悲でもう一つの爆弾の在処はこちらが爆発する寸前に知らせられるらしいぜ』

「それで、今その時間を待っているわけですか」

『情けねえけどな』

松田の説明に降谷は納得するように頷いた。なるほど、幸か不幸かジェネヴァの気まぐれが役に立ったわけか。……本当に気まぐれだったらいいんだが。

「松田、もう一つの爆弾の在処は分かっている。——少し待ってくれないか?」

『……あ？ああ、いいが』

通話をそのままに、携帯を脇の機材の上において、仕事用の携帯でジエネヴァにかける。……これは一つの賭けだ。

電話はワンコールで出る。早いな、と降谷からバーボンに気持ちを切り替えた。

「貴方の読み通り、もう一件の爆破予告が警視庁にあったようですね。幸い、そちらの方は対応可能な人物が対処しているようですが……」
『そう。——で、なんか懸念事項でもあるの？』

バーボンは今の緊張が声に表れていない事を祈りながら報告する。対するジエネヴァは至って自然体だ。この子の感情が乱れる場面なんてこれまでにあっただろうか。

「——爆弾の中のセンサーの一つが。タイマーの他に犯人の手元のスイッチ一つで爆発するだろう、と。恐らく、君の方の爆弾もそうなっている。そうですね？」

『なるほど。つまり、こつちとあつち、両方同時に解除する必要がある。そういう訳か』

話が早すぎて、バーボンもビククリするレベルだ。なるほどこれが以心伝心か、ゾツとする。

それにしてもジエネヴァの声があまりにも軽くて、気が負いがなさすぎる。死んじやう……と絶望した様子になるよりかはマシだけど。本当に分かってます？

「——ツ!! 軽く言いますが」

ちよつと緊張感を、ですねとバーボンが説教染みたことを吐き出す直前。

『軽くないよ。——なあバーボン』

耳元で紡がれる静かな声が、今はどうしてこうも冷たく感じるのか。バーボンは無意識に息を潜めた。ジエネヴァとの付き合いが短いバーボンでも悟った。

『どうせアンタの事だから、そつちの爆弾処理している奴と電話、繋いでいるんだろ？俺に代わってくれない？』

あ、これは相手死んだ。犯人はきつとジエネヴァに殺されるんだろうな、と冷静に推測できるぐらい声に殺意が紛れていた。こわ。

意図せずに思惑が達成された時はどういう顔をしたらいいのか。バーボンはしよっぱい顔をしてそつと二つの携帯のスピーカーをオンにした。勿論、周囲への警戒は怠らせずに。

※

かくして爆弾は無事解除され、死傷者ゼロ、負傷者ゼロで事件は一応幕を閉じた。一応、という言葉は足したのはまだ犯人が捕まっていないからだ。それでも二人組のうち、一人は拘束してあるのだから、もう一人も時間の問題だろう。ニュースで犯人逮捕を騒がないのは、犯人を迂闊に刺激しないための情報規制をしたからだ。なにせ、今回の犯人は四年前に一度爆弾騒ぎを起こしており、反発の予想がつかなかった。下手に刺激をしたら、警察に捕まった相棒を助ける為にもう一度爆弾騒ぎを起こすかもしれない。それも、大規模のテロを、だ。四年前だって犯人を逃がしたせいで暫く模倣犯もどきの悪戯、脅迫状の対処にでんてこまいだったときく。――警視庁では今度こそ速やかな犯人逮捕に燃えている事だろう。

流石のジエネヴァももう関わらないだろう。今回は彼の気まぐれが上手い事いい方向へ事件を導いたから良かったけれど、組織の教育方針を見ているとその逆も想像が容易い。爆弾？それなら他の場所に放置して高みの見物でもしようか、とか。はー、ほんと組織ってそういうところがある。主にジンの考えがそうだ。

そんなことを考え、久しぶりの非番にバーボンは気楽に街を歩いていた。偶に、こうして活気ある街を散策したくなる。――垣間見える人々の平穏な生活が、降谷 零の職務の根本を思い出させるからだろうか。日本を守りたい、という至極シンプルかつ、難儀な志を。

そんなことを考えていたら、視界に信じられない光景が飛び込んできた。まだ距離があるから見間違いかもしれないけれど、友人とジェネヴァが何やら話しているような……。友人の姿は遠目に見ても腐れ縁故か、判別が可能だ。友人の松田はなかなか特徴ある人間だから。ジェネヴァの方もコートフードを被っているけれど、ちらりと見えた銀色の髪とあの淀んだ瞳にその可能性が跳ね上がる。ついでうか、二人とも距離が近くないか？おい松田、ソイツやベー奴なので離れませんか？頭を撫でている場合じゃないんですけど？可愛らしい顔している子どもだと油断していると刺されますよ？本気で。

内心の混乱をグツと胸の内に抑えて、二人の元にバーボンは駆け寄る。こんな急いだのは、犯人確保の時以来だ。ちなみに学生時代の百米トル走の自己記録は十秒。それ並みには俊足が出せたと思う。

バーボンがジェネヴァの元へたどり着いた時には松田はデパートへと背を向けて歩いて行ってしまった。しかし、ここまで来てジェネヴァに声をかけないという選択肢はない。

乱れがちな息をこっそり整えて、ジェネヴァの肩を掴む。

「おや？黒野くんじゃないですか。こんなところで何を？」

「バ……ッーいや安室さん」

がば、とこちらを振り返りジェネヴァはバーボンの偽名を呼ぶ。というか、バってなんですか？バーボン、なら許しますがバ力だったらぶん殴りますよ？

「……俺に話しかけるってことは、アンタ暇だね？」

「はっ」

何言ってるんだ？コイツ。

こちらの了承をとらずに腕をむんず、と掴んでジェネヴァは引つ張る。その有無を言わせない態度にバーボンは流された。しかし内心に溢れる嫌な予感が止まらない。え、何やらせる気なんです？

「お兄さん」

「だからなんだよ、俺はこの売られた喧嘩を——」

ジェネヴァに呼び止められた松田はこちらの姿を認めるとぽかんと動きを止めた。数年ぶりの再会がまさかこんな締まらない場面と

は誰も思うまい。

「こちら、探偵の安室さん。超強力な助っ人だから、よろしく」

巻き込む気満々のマイペースなジェネヴァは勝手にバーボンこと安室を紹介している。しかもぽかんと未だ固まっている松田を見て、勝算を読んだのかこちらの脇腹を肘で小突いてくる。畳みかけろ、ということか。はいはい。

仕方なしにバーボンは安室の顔になる事にする。

「こんにちは。はじめまして。探偵の安室 透です」

「あ、ああ……」

にっこり。営業用の安室の笑顔を松田に安売りしてお辞儀する。折り目正しい、理想的な好青年を演じた安室に松田は衝撃を受けたようだった。歯切れ悪い領きが返ってくる。まあ警察学校の降谷 零しか知らなかったら衝撃かもしれない。

「そう言えば、まだお兄さんの名前、聞いてないね？」

この子は空気を読まないのか、わざとなのかどっちなんだ。ジェネヴァはのんびりと松田に名前を尋ねる。それに松田は少し考え、口を開く。

「……俺は松田。松田 陣平だ」

「そう。よろしく、お兄さん」

松田の声は嫌そうな、苦い声だった。そんなのに頓着しないジェネヴァの様子に思いつきため息を吐いていた。お疲れだな、松田と安室は他人事に構える。

「おい、それじゃ名前聞いた意味ないだろ」

「意外と細かいところを気にするんだね、お兄さん」

「ほっとけ」

「はいはい、二人とも。——本題に入りましょう」

他愛ない掛け合いをする二人に安室は割って入る。安室の本音を言わせてもらえれば、ジェネヴァと松田は出来るだけ近づいてほしくない。なんていったってジェネヴァはいつ爆発するか分からない不発弾なのだ。……その能力を正しく使えればどれだけ頼もしいか。無理だろうけれど。

だが、安室の柔らかな仲裁に顔を顰めたのは意外にも松田だった。
「げ。お前それ」

「何か？」

につこり。しかめっ面に笑顔十割増しで応えてやる。なんか余計な事言ったら、な？分かるだろ。そんな笑顔の圧に降谷を知る松田に伝わったらしい。

「イエナンデモ……」

うん、よろしい。物分かりの良い松田の答えに安室はにっこりしておく。ちなみに外野になったジエネヴァは無言で引き気味であった。言っておきますが性格の個性だと貴方もどっこいですよ。

本題、という言葉に松田は手に持っていた紙片をベンチの上に並べていく。ビックリ箱が小爆発して出てきた紙片、か。幸いにもデパートの入り口の端にベンチが設置してあった。近くにある自販機からお茶をジエネヴァは買っていた。その様子を視界の端に留めつつ、松田の手元を安室は見守っていた。……ふむ、暗号か。

「……自由かよ」

「気にしないでください。彼、ああ見えてもまあまあな人材なので」

「はあ？お前、何言って」

ジエネヴァのマイペースさに苦言を零す松田に一応フオローをいれておく。組織の人間である前提を知っている安室の言葉は存外冷たく聞こえたらしい。松田は手元から視線を上げ、安室を睨んだ。そこには子どもを巻き込む勝手を憤る真つ当さがあった。安室はそれに敢えて応えない。否、応えようがないが正しいか。

「脱線しちゃダメでしょ。——で、暗号並べ終わったんだ？」

「お前が言うな。——ああ。やはり数か所欠損があるのは痛いな」

ペットボトルを片手に戻るジエネヴァに緊張が緩む。松田は呆れながらジエネヴァに構ってから、暗号の考察に戻る。安室も考察に思考を戻した。巻き込まれたからには早く解決するしかない。

松田が指摘した「数か所ある欠損」とはちぎった紙片を合わせても埋まる事のない穴だ。普通に考えれば、悪戯程度とはいえ火薬を使っていた仕掛けだ。むしろこれぐらいで済んでよかったとも言

える。文章は読めるし、欠けているのは大量の数字の内の数個に過ぎない。……否、これは違うか。この「欠け」こそ犯人の意図だとしたら？

疑問符はすぐに確信に変わる。

「……違和感がありますね」

「やっぱりあんたもそう思うか」

松田もそう思ったらしい。返ってきた同意に安室は口を緩ませた。やはり数年ぶりでも鈍らない友人の推理力は嬉しい。

「ええ、火薬で散り散りになった割に、紙に焦げた跡がないのが一つ。そして、紙片の大きさが統一感があり過ぎる。——ここまで揃えば、この暗号の書かれた紙片が人為的に千切られた、と考えるのが妥当でしょう」

「つまり、数字の欠けも犯人の意図するところって訳か」

しかし、そうだとしたら厄介である。

安室の解説に松田も当然確認するまでもなく考えつく。このA4用紙を埋める大量の数字が犯人の暗号なのだとしたら、数字の欠け程度のヒントで答えを探すのは骨が折れる。何せ、犯人の気まぐれの法則性が隠れている可能性もあるからだ。そうなると地道な法則探しになってくる。肩が凝る作業だ。

「これ緯度と経度、みたいだね」

「！」

降ってきたジェネヴァの思い付きと脳裏に走る電撃のような閃きに松田と顔を見合わせる。お互いに同じ閃きを得た事を悟る。

「——なら、後は」

安室の確信めいた呟きに松田は悪童めいた笑みになった。

「シーザー式暗号の応用！」

一瞬だけ学生時代に戻ったかと錯覚する感覚だった。が、それはあつという間に脇に置かれる。安室はそのまま暗号の解説を続けていく。が、時間がないので概要のみだ。数字の欠けは緯度経度の並びとシーザー式暗号の区切りだった。どうやら犯人からのヒントだった。

説明を終えれば、ジエネヴァの顔が珍しく顰められていた。

「なあ、これが本当だとさ」

「ええ」

深刻そうなジエネヴァの声に安室は穏やかに相槌を打つ。

「爆弾、三か所ない？」

ジエネヴァは気まずそうに呟いた。

暫しの沈黙。

思わずスン、と表情が落つこちる。近くの松田も奇しくも同じような表情になっていた。アイコンタクトでせやな、と賛同する。なお、ジエネヴァの前じや言えないが、めんどくせーという大人の脱力が含まれている。特に安室は実に数か月ぶりの非番が終了したので尚更だった。非番なんてなかった、いいね？

「そうだな」

「ですね」

大人二人虚無顔で領けば、ジエネヴァがそつと距離をとった。なんですか、無言でドン引きとか失礼すぎる。

「そうは言っても、爆弾解除のプロがここにいるから平気だろ。——お前らはもう帰っていいぞ。解散な解散」

ここにいて、と自分の胸を叩いた松田はさつと立ち上がる。暗号の紙片は彼のジャケットのポケットにねじ込まれた。おい、証拠品。警察官としていかななものか。安室は後で説教することに決めた。

てか、解散？爆弾が三か所あるこの状況で？正気か？

「は？ちよつと待ってください」

「安室サンもお疲れ様。——ここからは俺一人で充分だ」

振り返ることなく去ろうとした松田に安室は思わずストップをかける。友人だからこそ分かる。コイツ、本気で一人で解決する気だ。この一匹狼気質が稀に発動するから松田は厄介だ。しかも頑固である。

それを知っているだけに安室は言葉に詰まってしまった。この頑

固者の考えを変えらるとなるとそれ相応の準備が必要である。

「いや駄目でしょ」

先ほどからずっと黙っていたジエネヴァが動いた。ジツと真つすぐ松田の目を見つめている。

「あ？」

ジエネヴァの静かな、けれど咎める声に松田の背が揺らいだ。そしてそのまま振り返る。振り返ったその顔は控えめに言ってもブチギレていらつしやる。中学生の不良程度なら裸足で逃げ出すレベルだ。ちなみに松田は警察学校ではヤクザをギャン泣きさせた伝説を持つ男である。

「アンタがどんな神業を持っていたとしても。——“絶対”なんてこととはないし、防護服もないんじゃないやプロだなんて息巻くのもある意味無意味だと思わない？しくじったらおじやんだもの。それなら手が多い方がいいだろ」

けれど、対峙する相手がこのジエネヴァじゃその程度なんの障害にもなりはしない。平常運転の無表情で松田を煽る。煽っている、んだよな？多分。

まあ、あのジンと話す頻度が高ければ並みの悪党面には耐性がつくのが道理だ。なるほど納得。

「はあ？お前何言ってるんだよ。手が多いもなにも。——その優男は百歩譲って手を貸させて言える。が、お前は駄目だ」

松田は額に青筋を浮かべつつ、ジエネヴァに言い聞かせるように論じていた。きちんと真つ当に大人として子どもを危険にこれ以上巻き込まないように線引きしている。

ジエネヴァの実力を知っている身としてはそんな真つ当な心配は出来ないけれど。安室は友人の姿に目を細めた。

「俺が子どもだから？」

「よく分かってんじゃないか」

ジエネヴァの簡潔な確認に松田は大げさな頷きで返した。清々し

いぐらいはつきりしている。安室も成程、と頷いた。正直、このままジエネヴァだけが抜けて貰った方が胃の負担が少ないのは確かだ。

ジエネヴァはふむ、と手を口元に当てて考えるそぶりをみせる。

「なあ、アンタの最初の問いに答えようか？」

「は？」

「アンタの声に聞き覚えがあるか、って奴」

「は？」

どうやら安室知らない二人だけが分かる事情があるらしい。その簡潔な問答は松田の茫然とした顔に、ジエネヴァの余裕が不穏だった。……どうも嫌な予感が安室の背を撫でる。

ジエネヴァの整った人形みたいな無表情が、崩れた。それは悪辣、その一言が似合う嘲笑だった。造り物めいた美貌が崩れているというのに、それでもなお悍^{おぞ}ましくも美しい。

「あるよ。アンタの声に聞き覚え。——爆弾の解除方法、結構話せたでしょ？」

他者を圧倒する悪党の姿でジエネヴァは決定打を放った。十三歳にはとても見えない堂に入った悪役顔だ。……やっぱり組織の人間なんだな。

この時の安室の衝撃と言ったら、一言ではとても語り尽くせないものだった。ちなみにコイツ、バラしやがった、という戦慄と怒りが八割を占める。

ジエネヴァは松田に前回の爆弾の解除を協力した（つまりは裏社会の）人間だと盛大に言い放ったのだ。ははは、笑えない。

「……マジかよ」

「マジだとも。——安室さん、アンタもやるだろ？」

あまりの事に頭を抱えた松田にジエネヴァは満足気に頷いた。安室に投げる確認は茶目つきじみしていた。そこにもう悪党の影はない。やれやれ、ここで降りるわけがないでしょう。

「ええ。ここまで乗り掛かった船です。今更下船しようだなんて言い

「ませんよ」

「マジか……」

安室がにつこりとジエネヴァの確認に乗つかれば、松田は更に頭の位置を下げてしまった。頭の上の問題もとい、頭痛の種が大きくなってしまったらしい。気持ちは分かる。

さて、松田も納得したことだし問題解決といきますか。

「じゃあここは三手に分かりますか」

「は？」

「うん。集合場所は犯人がいる場所でもいいでしょ」

「ええ」

「え」

さつきと安室が提案するとジエネヴァは素直に頷く。置いてきぼりの松田は放っておいても理解して行動するので放置しておく。

「じゃ解散」

「ご武運を」

「フリーダム過ぎんだろおい」

事が決まれば、ジエネヴァはさつきと担当の場所に走っていった。

まあ、彼の場所はここから一番遠い場所だ。

ジエネヴァの走り去った背中が見えなくなつてから、げんなりと疲れていた松田に安室は歩み寄った。

「おい、降谷。テメエ、ありやあどういう事だ？」

「……すみません。彼に関しては話せることがあまりなくて」

ギロリ、と睨んできた松田に安室は苦笑して話せることだけを答える。きつと松田にはこれだけで事足りるはずだ。

「ふうん？成程な。……とびきり厄介つて訳かい。まあ、いい。俺はあっち行くからな」

「ええ。では、また」

安室の思った通り、きちんと察した松田は嫌そうな顔のまま自分の仕事へと駆け出して行った。

さて、安室も任された仕事はこなさないといけない。走って爆弾の在処へと急いだ。

※

爆弾も解除し、犯人は警備員室で警備員に化けていると推理した安室はさっさと警備員室に向かった。その途中で松田と合流して、更衣室にて本当の警備員も解放した。

「——で、まだついてくるのか？」

「勿論。ここまでできて帰るような薄情な男に見えるんですか？」

胡乱げな松田の視線に心外な、と安室は大げさに嘆いてやる。今は従業員専用通路を二人で走っている最中だ。後一分で目的の警備員室に着くだろう。……犯人の命の為にジエネヴァよりも先に辿り着かないといけない。

「……………つたく、好きにしろよ」

「ははは」

根負けした松田に思わず安室は軽く笑う。なんだかんだこの友人は優しい。

警備員室の扉を松田が開け放った。——豪快だな。

「ッ、なんなんだ!?! お前らは!」

「何を今更。——指名したのはそっちだろ。『勇敢なる警察官』、だよクソ野郎」

堂に入った押し入りに目を白黒させる犯人の男——警備員の制服を着た中肉中背の平凡そうな男だった——に松田は吐き捨てた。サングラス越しでも分かる眼光の鋭さなのだろう、と松田の背後にいた安室は推察した。その証拠に犯人の膝が恐怖で笑っている。

「なんのことが分からないな。——それより君たち、ここは従業員以外立ち入り禁止だよ?」

「……更衣室。奥から三番目のロッカー」

往生際の悪い犯人に松田は一步近づく。ゆっくりとした足取りはさながらチエツクメイトを宣言する騎兵のようだ。

松田の端的な言葉に犯人の唇が震える。更衣室の奥から三番目のロッカー、そこには本物の警備員が押し込められていた。もう全て看破している、と犯人も悟ったのだろう。

「——ッ、それ以上近づくなッ!! 近づいてみる、ここで死んでやるかなッ!! そうしたら世間様が許さねえに決まっているッ」

追い詰められた犯人は懐から素早くナイフを取り出し、自分の首に突きつける姿は小物の王道過ぎて松田と安室は呆れてしまう。マジか、今時そんなしよぼい奴なかないぞ、と。

「——もう止せ」

「うるさいうるさい!! てめーが悪いんだ! 四年前の爆破事件も、この前の奴だつてッ」

松田は仕方なしに説得を始める。犯人の男は幼児退行のように駄々をこねていた。が、極度の緊張と興奮で息の荒い様子を見ていると本当に死にかねない。こうなれば膠着状態だ。安室はいつでも動けるように心構えをしておく。

今の時代は人命を尊ぶ価値観だ。それが爆弾を仕掛ける人間だとしても、爆発はしていない現時点では然程罪に問えない。故にこの犯人の人命はまだ尊ばれるものだった。警察官が守るべき国民だ。今はまだ。

「そんな事をして何もならねーだろうが。お前の相棒だつてもう自供して罪を償うつて言っているんだぞ」

「ッそんな事よりも、あいつをすぐに解放しろッ!!」

意味が分からない事を喚く犯人はパニック状態だ。

「チッ」

松田も埒が明かないと悟ったのか、舌打ち一つして足を一步踏み出す。

「動くなッ! 一歩でも動いてみる! ここで首を斬って死んだつていいんだぞ」

自分の首にナイフを突きつけて喚く犯人。

駄目か。こうなれば、多少手荒な事をして仕方がない。安室は松田に合図を送ろうとした。

その時。

がこん、とまるでひと昔のコントみたいだに犯人の頭にペットボトルが直撃した。日本茶の500mlペットボトル。持ち主の顔が一瞬、安室の脳裏を掠める。

すかさず松田が犯人を取り押さえる。ナイフを持った腕を肘固めで固定し、犯人を地面にすぐに沈める。肘固めからの足払いの流れが自然で、警察学校の時より腕を上げたなど安室は感心した。

安室は床に転がったナイフをハンカチで拾って回収する。

「離せー」

未だ芋虫みたいに足掻いて、抵抗する犯人は馬鹿なのか。すぐに拘束している人間の顔を見上げて欲しい。今ならヤクザをギャン泣きさせたやべー顔が見られると思う。

まあ、松田としてもこんな小物に殺されそうになった上に四年前の友人の危機の原因だと知っているのだからその怒りも一入ひとしほだろう。

かつり。わざと靴音をたてて安室は犯人の前に立つ。

「おや？お気楽な方だ。——自分が被害者になる可能性を除外するのは、随分自信があるとみえる」

かわいそうに。ひっそり犯人を憐れんで安室はバーボンの顔を被る。……上に潜んでいるジエネヴァは恐らくこれくらいやらないと降りてきてしまうだろう。こちらを見上げる犯人は目を見開いていた。

につこり、とバーボンの顔で微笑む。目が笑っていない、暴力の匂いの拭えぬ裏社会にとつぷり染まった人間の笑みである。

「はっ…どういっ…」

まだ理解出来ない犯人はポカンと間抜け面を晒している。

「組織大海を知らない貴方かえるは可哀想ですね。——せいぜい、檻井戸の中の束の間の平穏に感謝しててくださいね」

「お、おい……」

本当に可哀想に。貴方は所詮、小物に過ぎない。知ったところで、選択肢なんてないぐらいの残酷なまでの差がある。バーボンの頭上に潜んでいる人間はその類だ。その癖に人間らしいところがある

のが救いか否か。

一つだけ言える事は、これから被害者になる可能性に怯えないといけないという事だ。ジェネヴァの目にこの犯人の顔は映っただろう。ジェネヴァは決して仕留め損なわない。やると決めたら絶対だ。

それを少しは感じたのだろう。犯人の顔がこちらに縋るような、渴いた引き笑いになっている。

「貴方はどんな死に方をするのでしょうね」

楽しみですね、なんて平然と嘯くと縋るように見上げていた犯人の頭ががくり、と力が抜ける。絶望、という類の表情を浮かべていた犯人の男に多少同情するが、これも因果応報だろう。他人の命を軽く見るならば、自分にもそのリスクを考えて行動するべきである。そうではなくては、否そうしていても容易くこうして踏みにじられるのだから。

一部始終を見守っていた松田がなんとも言えない苦い顔で犯人の男を立ち上がらせる。

「お前な……。まあいい。今回は正直、助かった」

「いえいえ、この程度なんてことありませんよ」

「じゃ、またな。俺はコイツを連行しねーといけないからな。——アイツにもよろしく伝えてくれよ」

「分かりました」

松田と短いやりとりをして、そのまま犯人を連行する背中を見送る。安室は扉が閉まるのを見守ってから上を見上げた。

「そろそろ、降りてきては？」

「ん。……本物の警備員さんは無事かな」

促せば、すぐにジェネヴァが天井から降りてきた。身体についた埃を払いながら、意外にも本物の警備員の安否を確認してくる。君、そんなこと気にするのか。

「本物の警備員は無事ですすよ。ここに来る前に解放しました」

「ふうん？」

「さ。長居は無用ですし、移動しましょう」

「了解」

ペットボトルを回収するジエネヴァを背にバーボンは部屋を出た。

一応、説明というか情報共有は大切なので。

そこでプライベート用の携帯に松田からのメールが届いた。ざつと目を通す。へえ？成程、ね。

※

デパートから出て、人がいない寂れた公園まで足を運ぶ。道すがら、ぽつりぽつりと事件の概要をジエネヴァに説明していく。まあ、バーボンが知るのには概要ぐらいで松田の方がもう少し詳しく説明出来るのだろうが。幸いにもジエネヴァはそう興味がないみたいで、概要だけでも納得したように頷かれた。

辺りはすっかり夕暮れでオレンジに染まっていた。子どもものいな公園の夕日が染まる様はノスタルジックな哀愁を感じる。これも遠い子どもの頃の記憶故か。

気になった事があったのでジエネヴァに聞いてみる事にする。答えないならそれでいい、ぐらいの他愛なさだ。

「それにしても意外でした。最後を僕に譲って頂けるなんて」

「それはそうでしょ。俺、仕事以外は穏健派だし」

公園に設置されたベンチに腰掛けるジエネヴァにならない、バーボンも座る。そして疑問を投げかければ、返ってきたのは何を当然という呆れだった。バーボンは穏健派か、と苦笑みを浮かべる。ジエネヴァはバーボンの反応に頓着せずに残ったお茶を呷った。

よく言う。バーボンがあの場合で犯人に釘を刺さなければ自分でやっていた癖に。それはきつと言葉だけでなく、拷問まがいの暴力に発展する可能性があった。いくらバーボンとて目の前でいきなり拷問もしくは鮮やかな暴力を前にしたら精神がすり減る。命までは奪

わない、とは思うがああのジンの行動が教育方針だと微妙だ。

「……穏健派、ですか」

「俺はね、バーボン。これでも命の重みを考えてたりもするんだよ」

「……………」

へえ。

沈黙でバーボンはジエネヴァに先を促す。ジエネヴァは軽い頷きで返す。誤魔化しはしない、と言われたようだった。

「俺は、出来れば表側の奴らの平穏がそのままであればいいって。不相应にも願ってるんだ。——俺が、その一因にならなければいい」

ジエネヴァはいつもよりも、そつと呟いた。独白、誰に聞かせるでもない胸の内にも似た小さな声だった。どこか頼りない声はまるで年端のいかなない子どもようだった。否、子どもであるべき年齢なのだ。それが大人の汚い都合で強がらないと、強くあらねばならない。ひどく、それが残酷に思えた。

この子どもは今、狭間にいるのか。大人と子ども。正常と異常。善悪。このまま、大人になれば組織の望む姿になるのだろう。あのジンのような、お手本みたいな悪党の姿に。

ぎゅ、と手に力を込めた。バーボンは無力感に握りこぶしに更に力を込めた。

「……一考しておきましょう」

「なんだかんだ、アンタ律儀な奴だよ」

「その台詞、そっくりそのまま君に返すよ」

ようやく絞り出した言葉にジエネヴァが軽口をたたく。それだけで今だけは救われるような気がして、バーボンは内心呆れた。そして、君は凄いなと肩の力が抜けたまま、ジエネヴァに返す。律義なのはそちらだ。

ふと、もう一つ気になる事項が思い浮かんだのでついでに聞いてみる。

「そう言えば、ずっと疑問だったのですが……。ジエネヴァ、彼といつの間に関わり合ったのですか？」

「は？・松田さん？・今日初対面の筈だけど？」

きよとん、と無表情で瞬きを繰り返すジェネヴァは本当に思い当たらないようだ。

「そうですか……」

それにしても、とバーボンは先程届いたメールを脳裏に思い浮かべた。腑に落ちない。あの松田がメールなんて回りくどい事をするくらいだ。絶対面識はある筈なんだが。否、面識があるのは松田というよりは、その相方の萩原の方、か？

「何かあったの？」

「……彼は学生時代の知人なのですが、先程メールで不思議な事をきかれました」

話を聞いてくれる姿勢のジェネヴァに甘えて、バーボンは話を続けた。

「ふーん？」

ジェネヴァは相槌を打ちながら、飲み終えたペットボトルを投げようと振りかぶった。ごみを入れる鉄製の籠への距離は十メートル。まあ入るだろう。

それにしても、話半分で聞いているのを隠もしないなんて。ジェネヴァの妙な正直さにバーボンは苦笑を浮かべた。

「曰く、四年前の爆破事件に関わっていないか」

かこん、とペットボトルが縁に当たって跳ね返る。おや外すのか。目を見開いたジェネヴァが、バーボンの顔を見つめてくる。バーボンにはそれが無表情の仮面に少し罅ひびが入ったように見えた。

嘘を言っていないので、ジェネヴァに真剣な顔で見つめ返す。が、すぐにジェネヴァは俯いてしまった。……もしかしなくてもこれは藪蛇だったか。

「……………」

「まあ、彼には人違いと言っておきましたが。——もし本人なら、変化した悪意の忠告、ありがとう」と伝えてくれと言っていましたよ」
黙ってしまったジェネヴァに松田からメールで頼まれた伝言を伝えておく。これくらいならばダメージは受けないだろう。アイツから珍しい感謝の言葉なのだから。

「……知らないね」

「そうですか」

ジエネヴァの素っ気ない返事も想定内だった。ここで関わりを認められたら、またこの子どもへの警戒心を強めなくてはならない。

そろそろ、次の仕事への仕込みもしてはいけけない。では、またとジエネヴァに告げて去ることにする。

俯いたままのジエネヴァの様子が引っ掛からなかった訳ではなかったけれど。

今度会う時は一人の人間として、ジエネヴァと話そうと決めた。

今までは何処か「哀れな子ども」と勝手に憐れむか、脅威を感じていた。言い方は悪いが見下していた。無意識な人間のエゴと驕りおごりの常識という色眼鏡を通した見え方しかしていなかった。

けれど、それはもうやめよう。

敵か味方か。どちらであったとしてもバーボンに、降谷 零に後悔はない。

きつとどちらでも躊躇わないのだろうかという確信だけがあった。